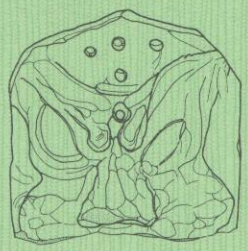
大宰府史跡

平成９年度発掘調査概報



平成10年３月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成9年度発掘調査概報

平成10年3月

九州歴史資料館

序

特別史跡水城跡の諸施設解明を目的とした大宰府史跡発掘調査第５次５ケ年計画は平成８年度で終了し、平成９年度は第６次５ケ年計画の第１年次にはいる。平成９年５月に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会で了承された第６次調査計画は、平成10年度に大宰府史跡発掘調査開始30周年をむかえ、その記念事業として政庁の正殿跡の調査を行うこと、また継続して水城跡の調査に力点をおいて実施すること、さらに政庁前面の官衙域の調査についても逐次対処することであった。

本年度計画の主たるものは正殿跡の調査を実施することであり、先に実施していた来木地区の調査が予想以上に延びたものの、12月３日には正殿跡発掘の鍬入れ式を挙行することが出来た。また、大宰府史跡発掘調査30周年記念展示の為に平成８年度から製作を行っていた大宰府政庁南門の復元模型（縮尺10分1）も完成をみることが出来たのは、ひとえに指導委員の先生方のご指導によるものと感謝している。

本書では、この数年継続的に実施している来木地区の調査を中心に報告し、併せて学校院地区・月山地区・不丁地区の官衙跡の調査結果について報告する。また、平成10年２月初旬、水城西門跡近くの側溝工事の立会調査で木樋抜き取りの跡を確認した。速報であるが簡単に報告した。

発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁、大宰府市教育委員会、大野城市教育委員会、地元関係者各位に多大なるご指導とご協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。

平成10年３月31日

九州歴史資料館長　光安　常喜

例　言

1．本書は平成９年度に福岡県が国庫補助を受けて、九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府史跡発掘調査の概要報告であり、大宰府史跡第169-2次・176次・177次・178次調査と水城跡を含む２件の立会調査について掲載した。

2．遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3．検出遺構及び出土遺物については、大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。

4．本文中の挿図は、土器・陶磁器類を３分の１、瓦塼類は４分の１縮尺を原則としている。

5．本書掲載の写真は、当館学芸第二課石丸洋の撮影による。

6．金属製品の保存修復作業は当館学芸第二課横田義章による。

7．遺構・遺物の実測・製図作業は、調査課員の他に小田美和・今井涼子・久野隆志の助力を得た。

8．遺物の復元整理作業は、大宰府史跡坂本発掘調査事務所において行い、大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。

9．本書の執筆・編集は、栗原和彦・調査課横田賢次郎・赤司善彦・齋部麻矢・杉原敏之が行った。

本　文　目　次

I　はじめに
　1．調査計画……1
　2．調査経過……1
II　立会調査
　1．水城の調査……4
　2．観世音寺住ヶ元地区の調査……5
III　発掘調査
　1．第169-2次調査
　　検出遺構……7
　　出土遺物……15
　　小　　結……39
　2．第176次調査
　　検出遺構……41
　　出土遺物……46
　　小　　結……65
　2．第177次調査
　　検出遺構……66
　　出土遺物……68
　　小　　結……71
　2．第178次調査
　　検出遺構……73
　　出土遺物……78
　　小　　結……84

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込み
第２図　水城立会調査位置図……4
第３図　住ヶ元地区位置図（1/6000）……6
第４図　住ヶ元地区出土瓦拓影・実測図（1/4）……6

第５図　第169-2次調査遺構配置図（1/200）……折込み
第６図　３トレンチ土層図（1/60）……8
第７図　南北壁面土層図（1/60）……9
第８図　掘立柱建物SB4410柱掘形断面図（1/50）……10
第９図　竪穴住居跡SI4411・4412実測図（1/60）……12
第10図　竪穴住居跡SI4411カマド実測図（1/30）……13
第11図　土壙SK4404実測図（1/40）……14
第12図　土壙SK4405実測図（1/40）……14
第13図　遺構出土土器実測図（1）（1/3　1・5・6は1/4）……16
第14図　遺構出土土器実測図（2）（1/3）……17
第15図　上層整地層出土土器実測図（1）（1/3）……19
第16図　上層整地層出土土器・陶磁器実測図（2）（1/3）……21
第17図　下層整地層出土土器実測図（1）（1/3）……23
第18図　下層整地層出土土器実測図（2）（1/3）……24
第19図　下層整地層下部出土土器実測図（1/3）……25
第20図　軒先瓦拓影・実測図（1/4）……27
第21図　文字瓦拓影（1/4）……30
第22図　鬼瓦実測図（1/6）……32
第23図　鉄製品実測図（1/3）……33
第24図　鋳造関係遺物実測図（1/3）……34
第25図　土製品実測図（1/3）……35
第26図　石器・石製品実測図（1）（1/2）……36
第27図　石器・石製品実測図（2）（1/2　23～29は1/3）……37
第28図　来木地区主要遺構配置図……折込み
第29図　第176次調査区配置図（1/1,000）……41
第30図　第１・２調査区遺構配置図（1/100）……42
第31図　第３・４調査区遺構配置図（1/100）……43
第32図　第５・６・７調査区遺構配置図（1/100）……折込み
第33図　掘立柱建物SB760・765柱掘形断面図（1/50）……45
第34図　第２調査区SD4380、SK4377、表土層出土土器・陶磁器実測図（1/3）……46
第35図　第３調査区SX4375・4376、黒褐色土層出土土器実測図（1/3）……47
第36図　第５調査区SB760出土土器実測図（1/3）……48
第37図　第５調査区SK4370上層出土土器・陶磁器実測図（1/3）……49

第38図　第５調査区SK4370出土土器実測図（1/3）……50
第39図　第５調査区SK4370出土陶磁器・土製品実測図（1/3）……51
第40図　第５調査区SK4362･4364、SX4363･4367･4373出土土器･陶磁器･石製品実測図（1/3）……52
第41図　第５調査区包含層・茶褐色包含層出土土器・陶磁器・土製品実測図（1/3）……55
第42図　第６調査区SD4360、SK4358出土土器・石製品実測図（1/3）……56
第43図　第６調査区表土層出土土器実測図（1/3）……58
第44図　第７調査区SD4350、SK4351･4355、SX4354出土土器･陶磁器･鉄製品実測図（1/3）　59
第45図　軒先瓦・文字瓦拓影・実測図（1/4）……61
第46図　文様塼拓影（1/6）……63
第47図　学校院地区主要遺構配置図（1/500）……64
第48図　第177次調査遺構配置図（1/150）……67
第49図　溝SD3930土層断面図（1/50）……68
第50図　SD3930A～C、SK4386出土土器・陶磁器実測図（1/3）……69
第51図　軒先瓦拓影・実測図（1/4）……70
第52図　第178次調査区配置図（1/1,000）……73
第53図　A・B調査区遺構配置図（1/100）……74
第54図　C・D調査区遺構配置図（1/100）……75
第55図　E調査区遺構配置図（1/100）……76
第56図　掘立柱建物SB4390・4395柱掘形断面図（1/50）……77
第57図　井戸SE4400実測図（1/50）……78
第58図　C調査区、D調査区茶色土層、茶灰色土層、SD4398、SK4399出土土器・陶磁器実測図(1/3)……79
第59図　D調査区茶灰色土層出土竈実測図（1/3）……80
第60図　D調査区SE4400出土土器・陶磁器実測図（1/3）……82
第61図　文字瓦拓影・実測図（1/4）……83
第62図　月山地区官衙主要遺構配置図……85

表　目　次

第１表　調査計画表……1
第２表　平成９年度史跡地内現状変更申請等対応状況表……折込み
第３表　調査実施表……3
第４表　第169-2次調査出土石器・石製品観察表……38

図　版　目　次

図版１　（上）　第169-1･2次調査地遠景（背後は四王寺山）
　　（下）　第169-2次調査区全景（東から）
図版２　（上）　第169-2次調査区全景（北から）
　　（下）　谷部SX4420（北から）
図版３　（上）　第169-2次調査区南半部（東から）
　　（下）　第3トレンチ（東から）
図版４　（上）　掘立柱建物SB4410（南東から）
　　（下）　掘立柱建物SB4410（北から）
図版５　　掘立柱建物SB4410柱掘形
図版６　（上）　竪穴住居SI4411・4412（北から）
　　（下）　竪穴住居SI4411カマド（北から）
図版７　（上）　第176次調査　第１調査区全景（東から）
　　（中）　第176次調査　第２調査区全景（東から）
　　（下）　第176次調査　第４調査区全景（南から）
図版８　（上左）第176次調査　第５調査区全景（南から）
　　（上右）掘立柱建物SB760・765（南から）
　　（下）　第176次調査　第７調査区全景（北から）
図版９　（上）　掘立柱建物SB765(A)柱掘形
　　（中）　同　上　完掘状況
　　（下）　掘立柱建物SB760(D)柱掘形
図版10　（上）　第177次調査区全景（南から）
　　（下）　溝SD3930（東から）
図版11　（上）　第178次調査　Ａ調査区全景（北から）
　　（中）　第178次調査　Ｂ調査区全景（南から）
　　（下）　掘立柱建物SB4390柱掘形
図版12　（上）　第178次調査　Ｃ調査区全景（北から）
　　（中）　第178次調査　Ｄ調査区全景（南から）
　　（下）　井戸SE4400（南から）
図版13　　第169-2次調査　SB4410、SD4416、ＳＩ4411、SX4421出土土器
図版14　　第169-2次調査　上層整地層出土土器・陶磁器

図版15　第169-2次調査　上層整地層、下層整地層出土土器・陶磁器
図版16　第169-2次調査　下層整地層出土土器
図版17　第169-2次調査　下層整地層出土土器・鉄製品
図版18　第169-2次調査　出土鉄製品・鞴羽口
図版19　第169-2次調査　出土土製品・石製品、第176次調査　SD4380、SK4377、表土層出土土器・陶磁器
図版20　第176次調査　SX4375・4376、黒褐色土層出土土器
図版21　第176次調査　SB760、SK4370上層、SK4370出土土器・陶磁器
図版22　第176次調査　SK4370出土土器
図版23　第176次調査　SK4364・4370、SX4363・4367、包含層出土土器・陶磁器・土製品・石製品
図版24　第176次調査　SX4363・4367・4373、包含層出土土器・陶磁器
図版25　第176次調査　包含層、茶褐色包含層、SD4360、SK4358出土土器・石製品
図版26　第176次調査　SK4358、表土層、SD4350、SK4355出土土器・陶磁器
図版27　第176次調査　SK4351・4355、SX4354出土土器・陶磁器・鉄製品、
　　第177次調査　SD3930出土陶磁器
図版28　第177次調査　SD3930、SK4386出土土器・鉄滓
図版29　第178次調査　C調査区、D調査区茶色土層、茶灰色土層出土土器・陶磁器
図版30　第178次調査　D調査区SK4399、SE4400出土土器・陶磁器・竈
図版31　住ヶ元地区　出土丸・平瓦、第169-2次調査　出土軒瓦
図版32　第169-2次調査　出土文字瓦
図版33　第169-2次調査　出土鬼瓦
図版34　第176次調査　出土瓦
図版35　第176次調査　出土文様塼、第177次調査　出土軒瓦
図版36　第178次調査　出土文字瓦

Ⅰ　はじめに

1．調査計画

発掘調査第５次５ヶ年計画は平成８年度で終了し、平成９年度は第６次５ヶ年計画の第１年次となる。本年度の計画では第５次５ヶ年計画の最終年次（平成８年度）に着手する予定にしていた政庁正殿跡の発掘調査を先ず実施すること、さらには前年度から予定していた緊急調査を実施することであった。下表はこの段階での発掘調査予定地区である。そして、これまで福岡県文化課が実施していた特別史跡大野城跡太宰府口城門の環境整備事業に伴う発掘調査を昨年度から調査課が主体となって実施することとなった。また、平成６年度から太宰府市工務課が史跡地内で実施してきた上・下水道管埋設工事が政庁東側の月山官衙地区で計画されるのを受けて、本年度も工事と並行しながら発掘調査を実施した。また、学校院地区において住宅建設のための遺構確認、さらには観世音寺、学校院地区における住宅から本線への下水道の引き込みの支線の工事立会等を実施した。

平成９年度の大宰府史跡調査研究指導委員会は５月28・29日に開催した。この席では第６次５ヶ年計画案を提出し、第６次５ヶ年計画も継続して水城跡を調査することで了承されたが、初年度の平成10年度には大宰府史跡発掘調査開始30周年を迎えるため、その記念行事のひとつとして政庁正殿跡の発掘調査を９・10年度に実施すること、さらに南門の10分の１模型を製作すること、記念展示を行うことで了承された。

2．調査経過

平成９年３月20日に調査を開始していた個人の住宅建設に起因する発掘調査を第169-２次として継続的に実施した。既に平成８年度の調査として終了していた第169-1次のすぐ西側に隣接した地域であり、当初の計画ではこの調査の終了後すぐにこの部分を調査することにしていたが、水城西門跡の調査を優先したため、ほぼ１年近く遅延することとなった。この地域一帯では、今回の第169-２次調査をもってほぼ調査が終了したことになる。この地区では過去に太宰

第１表　調査計画表

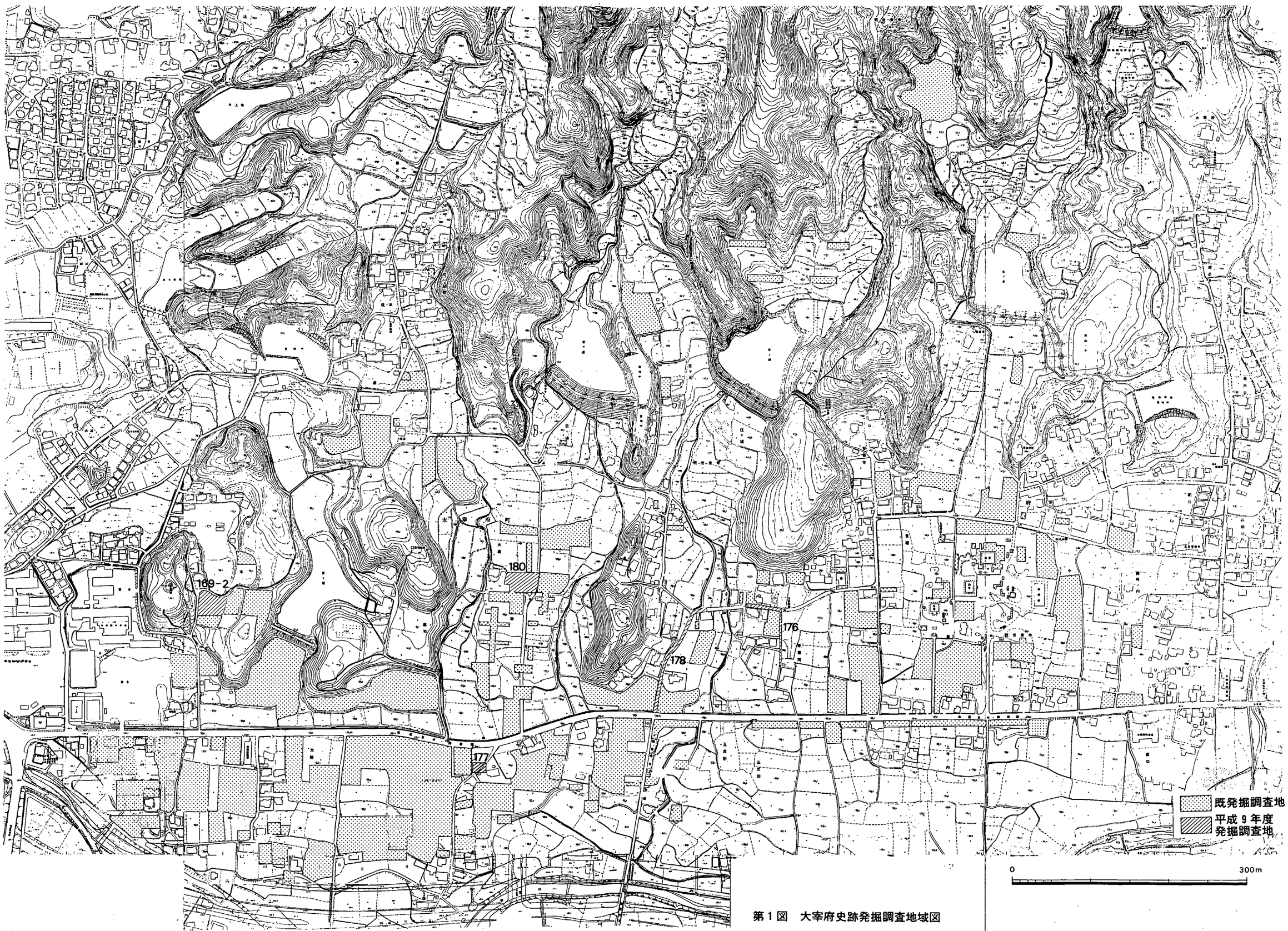
	区　分	場　所	面積(㎡)	地　番	備　考
1	大宰府跡	政庁正殿	1,000	太宰府市観世音寺4丁目1553-2他	現状変更
2	学校院跡	月山地区官衙	600	太宰府市観世音寺4丁目1100・1158他	現状変更（下水道工事）
3	政庁前面官衙域他	蔵司地区	1,000	太宰府市大字観世音寺字蔵司431-1他	緊急調査（個人）
		不丁地区	1,100	〃　〃　字不丁301-2	〃　（個人）
		不丁地区	360	〃　〃　〃　286-8	〃　（個人）
		不丁地区	264	〃　〃　〃　287	〃　（保留地）
		大楠地区	183	〃　〃　字大楠329	〃　（保留地）
		広丸地区	658	〃　〃　字広丸	〃　（保留地）
		大楠地区		〃　〃　字大楠330-1他	〃　（個人）
4	大野城跡	太宰府口城門跡			現状変更（環境整備事業）

府市調査分をいれて、計４ヶ所の調査を実施している。西側の来木丘陵の斜面に点在する瓦窯跡の調査（昭和34・52年）、第19次調査（住宅建設に伴う事前調査、昭和47年）、第160次調査（住宅建設に伴う事前の調査、平成６年度）、第170次調査（学業院中学校テニスコート造成に伴う調査、平成７年度）を実施している。これらの調査結果をみると、特徴としてあげられるのは、出土遺物として鋳造関連のものがどの調査地からも普遍的にみられることである。大宰府の役所として記録に登場する「匠司」「修理器仗所」等の工房をもったものがあり、その所在については未だ明らかとはなっていない。これまでの大宰府史跡調査のなかで、集中的かつ広範囲にこのような状況が特徴的にみられるのはこの地域を除いて他にはみられない。このことを勘案すると、現段階ではこの地域がその比定地として、もっとも妥当な地域にあてられるのである。

今回の調査で検出した主たる遺構として「コ」字形になる柱列を検出したが、通常の建物とは異なり、やや特異な性格を有するものと考えられること、例えば傾斜地に設けられた工房を覆う建物が想定される。また、大宰府創設期以前の遺構として６世紀中頃の竪穴住居を検出した。しかしながら、瓦窯についてはすでに後世の撹乱により削平されており、調査区のほぼ全域にわたって壊された窯体片等が整地された状況で確認できるのみであった。また、鋳造に関する工房についても痕跡は残っておらず、鞴の羽口や坩堝片が堆積層中から出土したのみである。本次調査は下水道関係の調査等の関連で、度々中断したこともあり、埋め戻しが終了したのは12月末日であった。

８月25日から９月27日の期間、住宅建設に伴う事前の発掘調査として、不丁官衙地区の調査を第177次調査として実施した。この地区の隣接地は既に第134次（平成３年度）調査として既に終了しており、ここでは14世紀代の溝が検出されているものの、建物などの遺構はなく、広場的性格を示すものとして理解されていた。今回の調査結果もそれを再確認すると伴に、中世大宰府の一端が知れる、東西を斜め方向に走る溝の延長を検出したのみである。この溝は現代にも農道として、その痕跡が認められ、区画整理以前に存在していた幾つかの道が、その時に造られた溝や道路の名残であることをあらためて確認した調査である。

９月２日から11月27日にかけて、月山地区官衙の調査を第178次調査として実施した。この調査は先述したように上・下水道工事に伴う事前調査である。本年度の対象地域は月山から北方の住ヶ元地区で、かなりの距離におよぶため、太宰府市工務課と事前に協議して、これまでの調査結果などを考慮し、立会調査と本調査区間を設定した。本調査地については、人が歩ける程度の余裕を残し、可能な限り道路面を調査することで開始した。本調査対象地はこれまで掘立柱建物が多数検出されている、いわゆる月山地区の約260m区間について実施している。調査の結果、掘立柱建物の柱掘形４個と井戸１基、溝等を検出した。現在、月山地区官衙は南北にはしる道路で分断された状況になっているが、今回の調査により西側と東側の遺構は連続するものである事が明らかとなった。工事との関係で調査が終了したのは10月末日である。



第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

第２表　平成９年度史跡地内現状変更申請等対応状況表

No.	提出月	申請者	目的	地番	申請面積	指定区分	九歴等の対応	文化庁等指示	備考
1	９年　３月	個人	地蔵堂改修	太宰府市大字坂本字引陣	2m²	観世音寺境内および子院跡	太宰府市教委指示	工事許可	
2	９年　６月	市民祭実行委員会	仮設物設置	太宰府市観世音寺4丁目	26,000	大宰府跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
3	９年　７月	宗教法人	仮設物設置	太宰府市観世音寺4丁目	1500	大宰府跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
4	９年　８月	個人	住宅造築	太宰府市観世音寺6丁目	245.9	観世音寺境内および子院跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
5	９年　９月	個人	住宅補修	太宰府市観世音寺5丁目	308	観世音寺境内および子院跡	立会	県教委許可・立会指示	平成９年10月工事
6	〃	九州歴史資料館長	発掘調査	太宰府市観世音寺4丁目	1800	大宰府跡	発掘調査	調査許可	大宰府史跡第180次調査。12月3日　鍬入れ式実施
7	〃	市民祭実行委員会	仮設物設置	太宰府市観世音寺		観世音寺境内および子院跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
8	９年　10月	太宰府市長	側溝設置	太宰府市大字吉松	13	水城跡	立会	県教委許可　立会指示	平成10年２月２・３日工事
9	〃	九州電力株式会社	電柱移設	大野城市下大利3丁目		水城跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
10	９年　11月	太宰府市長	法面防護工事	太宰府市大字太宰府	43.303	大野城跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
11	〃	大野城市長	側溝整備	大野城市下大利3丁目		水城跡	太宰府市教委指示	県教委許可	
12	９年　12月	個人	住宅増築	太宰府市観世音寺4丁目		学校院跡	立会	県教委許可・立会指示	平成10年１月20日遺構確認、１月20日～27日工事
13	〃	宗教法人	寺院増築	太宰府市観世音寺4丁目	584.91	大宰府跡			
14	９年　12月	(株)日本電信電話	電柱移設	太宰府市国分4丁目	6.08	筑前国分寺跡	太宰府市教委・九歴指示	県教委許可	
15	10年　１月	太宰府市教育長	法面防護工事	太宰府市観世音寺4丁目	52	観世音寺境内および子院跡	立会	工事許可	
16	〃	宇美町長	法面復旧工事	糟谷郡宇美町大字四王寺字前田		大野城跡	宇美町教委・九歴指示	県教委許可	
17	〃	個人	住宅建替	太宰府市坂本3丁目	255.82	観世音寺境内および子院跡	発掘調査	工事許可	
18	〃	財団法人	水路護岸等	太宰府市観世音寺・大字坂本他	171.5	大宰府跡	許可・九歴指導	県教委指示	
19	〃	太宰府市教育長	橋梁架換工事	太宰府市観世音寺4丁目	9.5	大宰府跡	許可・九歴指導	県教委指示	

本年度の計画として挙げていた政庁正殿跡の調査については、12月３日に光安教育長、西谷・坂上両指導委員等をはじめとして関係者約50名の出席のもとに「鍬入れ式」を行った。実際に発掘作業に着手したのは年が明けた平成10年1月9日である。1月末に表土（芝生）の除去作業をほぼ終了し、現在は整備時の盛土除去作業を継続中である。この調査については平成10年度も継続して実施する。

水城跡

水城跡については、西門跡の埋め戻し作業を、5月に開催した指導委員会終了後に実施した。平面の遺構については６月中に一応埋め戻しが終了していたが、土塁本体の断面（高さ４m、幅14m）についてはビニールシートで保護する処置をとっていた。しかしながら、乾燥による崩落が出始め、早急な保護策が必要となった。そのため、植生土嚢積みによる壁面の擁護の方法を採り、９月18日～10月１日から約２週間の工程で作業を実施した。終了後、植生も順調に進み、安定したかに見えたが、平成10年１月中旬の時期外れの長雨により、積み上げた土嚢がずれ、災害の危険性が考えられた為、その修復作業を３月中旬に実施した。

また、２月２・３日に太宰府市吉松地区で太宰府市の工務課による側溝工事に伴う現状変更の立会調査を行った。工事はＵ字溝を埋設するために、幅１m、深さ１m、総距離94mを掘削、掘削された断面を観察した結果、路面から約0.4mの深さで基底部の積み土が確認され、基底部が道路下にも拡がる事が判明した。現在、指定地となっている基底部の高まりは、本来は道路部分まであったと考えられる。今回、特にこの積み土を切る掘り込みが観察された。この掘り込みは、上端で幅8.5m、深さ約1.5mまでを確認した。掘り込みの状況から、木樋の抜き取りの可能性が強く、土塁本体の木樋埋設の推定位置が凹んでいることからみて、平成２年にマンション建設に伴って検出された、木樋の抜き取りの状況に類似していることからみても、今回確認の掘り込みはほぼ間違いないものと考えられる。木樋の埋設位置については平成７年度に九州大学工学部の牛島恵輔教授に依頼して実施した電気探査法によって、これまで確認していた他に４箇所の位置が特定されていた。今回確認した位置と、探査による位置が合致した点は注目される。

本書では、今年度調査分の第169-２・177・178次調査の他、昨年度調査した176次調査の概要報告を行う。なお、政庁正殿跡の調査については、来年度継続して行うので報告については次年度にゆずることにした。

第３表　調査実施表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	備　　考	※
大宰府跡	6AYT-B-F	1.800㎡	971203～継続中	大宰府政庁、正殿跡の調査	6
大野城跡	太宰府口城門	90㎡	970924～971114	太宰府口城門跡、環境整備事業	
169-2	6AYL-A-R	600㎡	970320～971219	来木瓦窯跡周辺	
177次	6AYM-A-V	160㎡	970825～970927	不丁地区官衙域	
178次	6ZGK	260㎡	970902～971114	月山東地区官衙域	

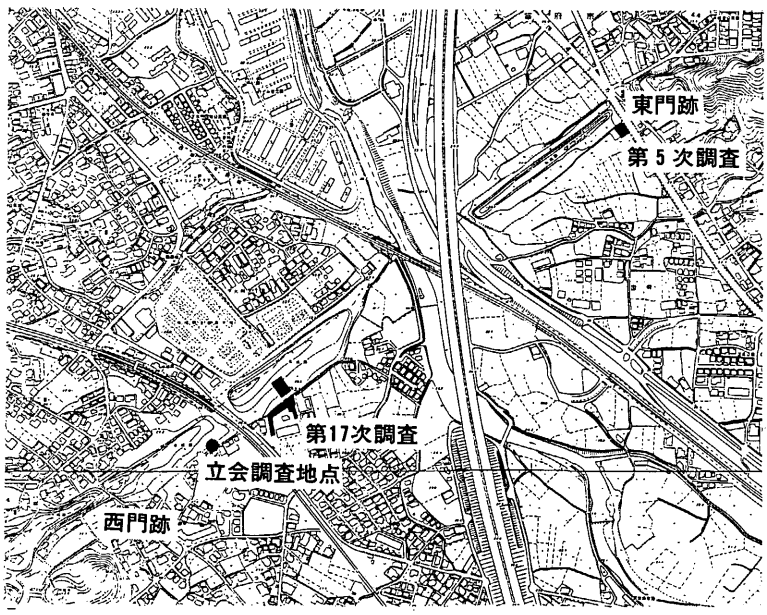
※は前掲第2表調査計画表の番号に対応する。

II　立会調査

1．水城の調査

水城基底部南側に沿った市道で側溝設置工事が計画された。指定地に隣接した地点であったが工事の影響が懸念されたので立会調査を実施することになった。調査地はJR鹿児島本線の西側に位置する地点で、東西方向の約65mを対象とした。調査の手順は掘削位置を確認した後に小型のバックフォーで工事の施工深まで掘削した段階で、側溝壁面と底面を精査した。側溝は現況の水城テラス下部から0.5～１mほどはなれた南側に設置される。幅約１m、深さ約0.9mの規模で、工程に合わせて２回に分けて掘削した。調査の結果、基底部の盛土とさらに木樋抜取りの掘形を検出することができた。確認できた層序は上面のアスファルトの下部に路盤が認められ、その下面に旧路面のアスファルトと路盤が存在していた。この間の深さは現地表から0.35m前後である。この下部から水城基底部を構成する版築状の盛土層が検出できた。版築層は場所によってその厚さに違いがあるが平均0.4mの厚さが認められた。主に５～15cmの厚さの黄灰～青灰色砂質土からなる盛土層であった。また、下部の地山は青灰色～黄褐色砂質土あるいは粘質土層の不安定な層であった。

また、調査地の西寄りで基底部の盛土層に切込んだ掘形を検出した。これが水城木樋の抜取りによるものである。現状では幾段かに分けて掘り下げられており、上端の東西幅は約8.5m、下部の幅は約４mを測る。内部には粘質土層が埋積していた。深さは上面より1.5mまで確認した。確認面の最下部では木質もわずかに出土し針葉樹の柾目材の細片であることから、木樋本体と関係するものであった可能性が高い。なお、壁面崩落の危険性があったことからこれ以上の追及は行っていない。この抜取りの位置は西門から約



第２図　水城立会調査位置図

180m程東側に位置し、平成２年に太宰府市教育委員会が水城跡第17次調査で確認した木樋抜取り及び取水口遺構とは約150mの間隔が認められる。

水城立会調査状況

ところで今回新たに確認したこの木樋抜取り痕の位置する地点は、平成７年度に木樋存在個所の検出を目的とした電気探査（ウエンナー法による水平探査）で検出した低比抵抗の異常部と合致していることが判明。また、地形図ではこの北側延長線上は水城北側の延長線上は段落ち部分となり、さらに、水城本体の土塁上面も幅２m程の落込みが現状で確認できる。

来年度以降に予定している水城跡の発掘調査でその詳細を明らかにしたいと考えている。

『水城跡』太宰府市の文化財　第24集　太宰府市教育委員会　1994
城戸康利　「水城跡調査の現状と課題」『牟田裕二君追悼論集』　同君追悼論集刊行会　1994
牛島恵輔「水城土塁中の木樋の電気探査」『大宰府史跡－平成７年度発掘調査概報－』　九州歴史資料館1996

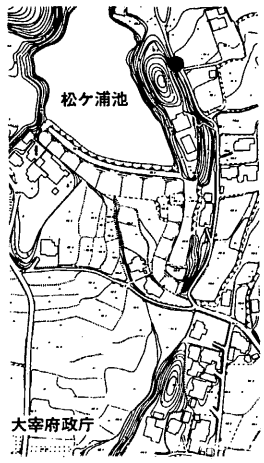
２．観世音寺住ヶ元の調査

太宰府市工務課による上・下水道工事に伴う調査である。平成９年度の事業として、大字観世音寺の月山地区と住ヶ元地区が実施された。工事区を大きく３工区に分け、工区毎に３業者が請け負う形で工事は実施された。事前の協議で、３工区のうち、過去の調査により遺構の存在が確実に予測される部分については全面調査を実施することにし、他は立会調査で対応することにしていた。本年度、第178次調査として実施した範囲は前者にあたるが、大部分はこれまで顕著な遺構が確認されていなかったため立会調査であった。

今回、報告する地点は、月山地区官衙の北方約400mの所である。この工区の立会は第178次調査と同じく平成９年９月から11月初めである。過去に第７次調査（昭和45年度）として実施している西側に隣接する道路部分である。第７次調査では、トレンチによる遺構確認調査であったが、顕著な遺構は確認されなかったものの、軒瓦・文字瓦片や須恵器の硯・壺片等の遺物が

出土している。このようなことから、この地点の立会については特に注意していた。

下水道管埋設壙は幅約0.8mで、深さは1.5m程度が重機により掘削される。住ヶ元地区の約300m区間は丘陵部であり、掘削部分は花崗岩バイラン土の地山層であり、遺構に伴う整地層等は確認されなかった。瓦が出土したのは区間のほぼ中央付近で、地山に切り込む落ち込みがあり、その落ち込みの上部から瓦片は出土した。落ち込みの底は路面から約1.2mである。道路は丘陵の東斜面を削り造られており、西側は丘陵の斜面が迫っている。瓦が出土した地点の丘陵部をみると、斜面に細長い窪みが観察できる。この状況は瓦窯跡にみられる地形の変化に類似している。確定は出来ないが、その可能性は充分考えられ、今後注意すべきであろう。



第3図　住ヶ元地区位置図 (1/6,000)

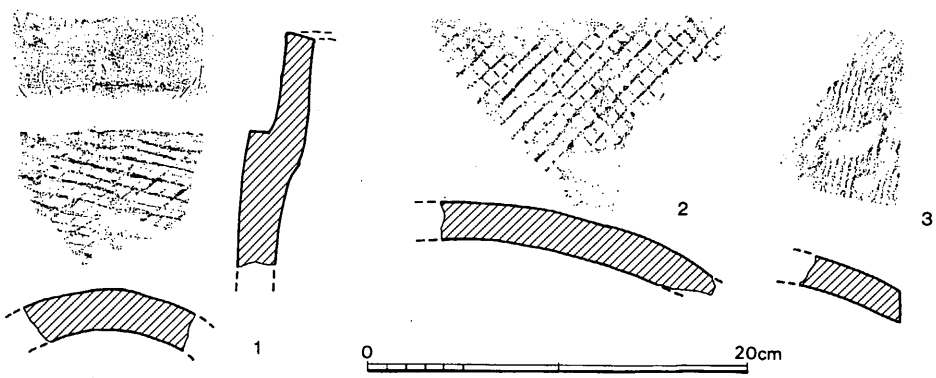
太宰府市の実施した下水道工事（住ヶ元地区）立会の結果、丸・平瓦が採集された。採集地点は、第3図黒丸の場所である。瓦片採集時の土層観察では遺構に伴なったものではない。

採集場所は、西に高く、東に低い丘陵地から平地に変化する部分である。この丘陵裾部を削って市道を造り出している。

出土瓦（第3図、図版31）は、二つに分けられる。一つは、丸瓦は凸面をすり消しの仕上げ調整を行い、平瓦は凸面縄目叩打されたものである。石灰粒を含む胎土で、やや軟質に焼き上がっている。鴻臚館式軒瓦に伴う可能性が高い。

他の一つは、丸瓦・平瓦とも斜格子目の叩打痕を残すもので、格子目には第3図1・2のものがある。前者は、丸・平瓦片合わせて4点、後者は12点ほどが採集された。縄目叩打された瓦は、ややローリングを受けた感じがあり、他の場所から運ばれた可能性が高い。

斜格子目の瓦は、採集地点の西に瓦窯跡と思われる場所があり、これに伴う可能性がある。



第4図　住ヶ元地区出土瓦拓影・実測図 (1/4)

青…第Ⅰ期　古墳時代
黒…第Ⅱ期　奈良時代
赤…第Ⅲ期　平安以降

第５図　第169-2次調査遺構配置図（1/200）

III　発掘調査

1．第169－2次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査として実施した。当調査区は大宰府政庁跡の西方約400mの所に位置し、四王寺山より舌状に派生する低丘陵間の斜面から谷部にかけて立地している。前年度調査の第169-1次調査区は、東側低丘陵の斜面部に隣接しており、今回はその第2次調査の報告である。

169-1次調査では、8世紀前半～中頃と推定された掘立柱建物2棟と総柱礎石建物1棟をはじめ、弥生時代前期末～中期の貯蔵穴や6世紀中～後半の竪穴住居2軒を検出している。また、鞴羽口・トリベ・銅滓等鋳造関連の遺物が多量に出土している。周辺ではこれまでも第19次調査、第160次調査、第170次調査を実施してきた。第19次調査では炉跡が、第160次調査では竪穴状遺構とそれに伴う炉跡が、第170次調査では8世紀代を中心とした掘立柱建物が検出され、鋳造関連遺物が出土している。これら一連の調査成果により同地域に工房が存在したことは確かであり、これまで推定されてきた大宰府の官営工房“匠司（たくみのつかさ）”はかなりの範囲に及んでいたと考えられる。一方、調査区の西側の丘陵斜面部では、来木瓦窯・来木北瓦窯と呼ばれる瓦窯群がある。昭和34年には来木瓦窯跡が大川清・山中英彦氏によって、昭和48年には来木北瓦窯跡がそれぞれ調査されており、大宰府政庁第III期の瓦生産地の1つとして知られている。それらの大半は道路拡張時に削平されているが、斜面切り通し部分には現在も窯跡の断面を確認することができる。

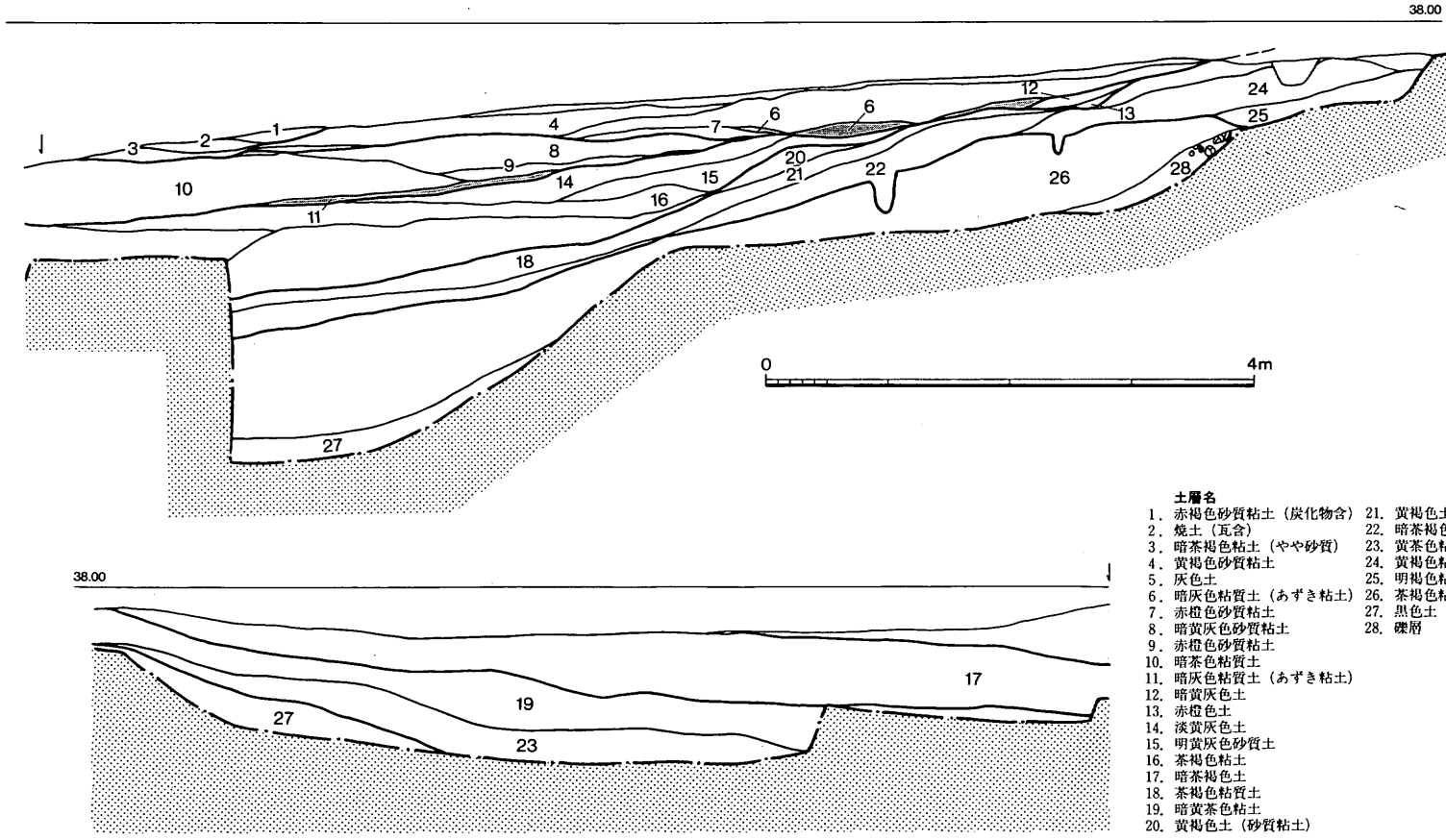
調査地番は太宰府市大字観世音寺431-1・2、433番地で対象面積は3,300㎡で、その内の600㎡を今年度は調査した。平成9年3月20日より調査を開始し12月19日に終了した。

検出遺構

本次調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、古墳時代竪穴住居2軒、土壙、溝等である。

調査区内の層序の観察については、遺跡中央部北付近において設定した3トレンチと北壁及び南壁において行った。遺構確認時、遺跡内には崩落し散乱していた瓦と共に赤褐色砂質粘土（1層）、黄褐色砂質粘土（4層）の整地層が広がっていた。当初はこれらの整地層を来木瓦窯操業時の生活面と想定していたが、調査が進行するにつれ、道路拡張時に瓦窯の一部が破壊され整地されたことが判った。

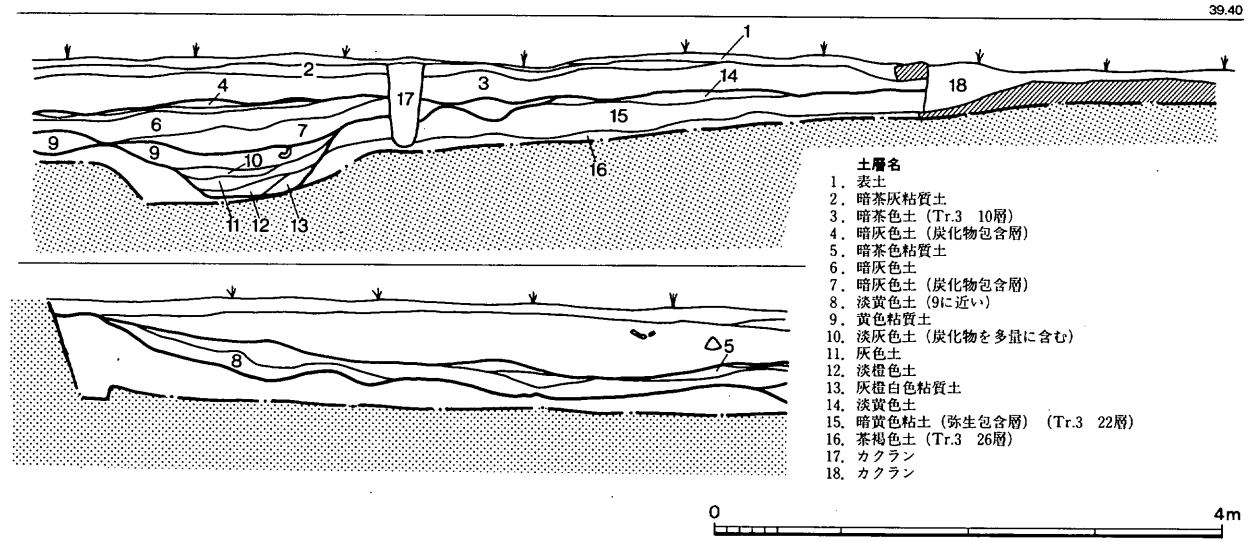
3トレンチ5層・灰色土層下位には、6層・暗灰色粘質土層（通称“あずき粘土”）や面的に広がる7層・赤橙色砂質粘土層がある。これらの下層に位置づけられ、ある程度、面的に広がる8層上面で一時期の生活面がまず想定される。一方、10層の暗茶色粘質土層は東丘陵部より



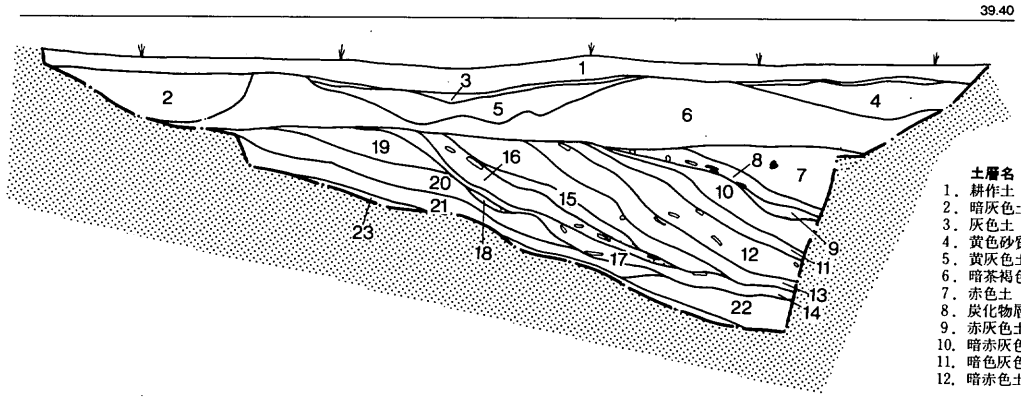
土層名

1. 赤褐色砂質粘土（炭化物含）
2. 焼土（瓦含）
3. 暗茶褐色粘土（やや砂質）
4. 黄褐色砂質粘土
5. 灰色土
6. 暗灰色粘質土（あずき粘土）
7. 赤橙色砂質粘土
8. 暗黄灰色砂質粘土
9. 赤橙色砂質粘土
10. 暗茶色粘質土
11. 暗灰色粘質土（あずき粘土）
12. 暗黄灰色土
13. 赤橙色土
14. 淡黄灰色土
15. 明黄灰色砂質土
16. 茶褐色粘土
17. 暗茶褐色土
18. 茶褐色粘質土
19. 暗黄茶色粘土
20. 黄褐色土（砂質粘土）
21. 黄褐色土（やや軟）
22. 暗茶褐色粘土
23. 黄茶色粘土
24. 黄褐色粘質土
25. 明褐色粘質土
26. 茶褐色粘土（自然堆積）
27. 黒色土
28. 礫層

第6図　3トレンチ土層図（1/60）



土層名
1．表土
2．暗茶灰粘質土
3．暗茶色土（Tr.3　10層）
4．暗灰色土（炭化物包含層）
5．暗茶色粘質土
6．暗灰色土
7．暗灰色土（炭化物包含層）
8．淡黄色土（9に近い）
9．黄色粘質土
10．淡灰色土（炭化物を多量に含む）
11．灰色土
12．淡橙色土
13．灰橙白色粘質土
14．淡黄色土
15．暗黄色粘土（弥生包含層）（Tr.3　22層）
16．茶褐色土（Tr.3　26層）
17．カクラン
18．カクラン



土層名
1．耕作土
2．暗灰色土（撹乱土）
3．灰色土
4．黄色砂質土
5．黄灰色土（灰色土混）
6．暗茶褐色土
7．赤色土
8．炭化物層（瓦包含層）
9．赤灰色土
10．暗赤灰色土
11．暗色灰色土
12．暗赤色土
13．赤橙色土
14．赤橙褐色土（炭化物含）
15．淡赤灰色土
16．炭化物層（瓦包含層）
17．暗赤灰色土
18．炭化物層
19．赤褐色土
20．暗赤褐色土
21．赤橙褐色土
22．淡赤橙色土
23．淡黄灰色土

第７図　南北壁面土層図（1/60）

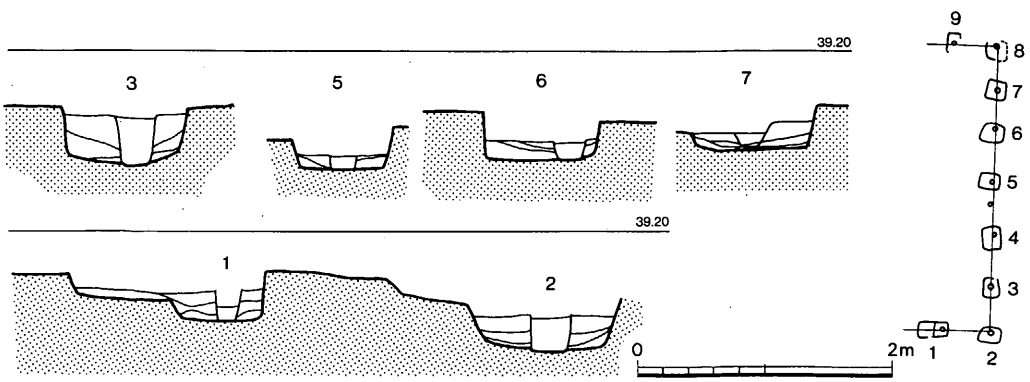
流れて落ちたものであり、調査区東側の南北にわたり厚く堆積し、南壁土層の3層にも対応する。このことから、この10層に包含されている遺物等は本来的には東側の丘陵上にかけて存在した遺構に伴うものと考えられる。この10層下位に堆積する11層の暗灰色粘質土層（“あずき粘土”）や13層の赤橙色土層の堆積は薄いが、調査区北側ではある程度面的に広がっている。また3トレンチ東側では、この10層下面で焼けて硬化した面があることから、14、16、17層上面でもう一時期の生活面が想定される。6層や11層の暗灰色粘質土層は、明らかに違う場所より持ってきた客土であり、現時点では瓦生産時に使用された可能性が考えられる。この面を境に上層と下層に大きく分けられ、10層堆積以前を上層下部、以後を上層上部として考えられる。

14層～18層は全体にやや砂質を帯びる8世紀代の遺物包含層（下層上部）で、19層･21層は6世紀代を中心とした遺物包含層である。さらに下層の22～24層は弥生時代の遺物包含層で、その下層の茶褐色粘土層で無遺物層となる。この19層以下を下層下部として捉えられる。

掘立柱建物（第8図、図版4・5）

SB4410　調査区北西隅で南北方向の掘立の掘立柱建物を検出した。梁行1間×桁行6間であり、西側斜面に取りつく形で配されている。梁行については南側で道路側に大きくトレンチを拡張したが、もう1間伸びる柱穴は確認できなかった。また、1の柱穴は長軸1.6mを測り斜面下側半分がさらに15cm深く階段状に段掘りされていた。このことは、傾斜地において柱を据える際、斜面上側に一段設けることによって、斜面上と斜面下の掘形上縁のレベル差を無くし、積土を一定に積んでいくことに有効であったと考えられる。いずれにせよ、この柱列は傾斜地に取りつく形で設けられた特異な構造を持つ建物である。

柱列の規模は桁行（南北距離）が15.2mで柱間寸法は2.36m、2.72m、2.74m、2.74m、2.42mとなり、等間にはならない。梁行（東西距離）については北側2.25m、南側2.42mである。最も残りの良い柱掘形の深さは0.5m程度である。建物の方位は座標北より8°西偏する。



第8図　掘立柱建物SB4410柱掘形断面図（1/50）

柵列

SA4425　調査区北西隅で検出した。SB4410を切る柱列で東西に伸びている。柱間寸法は1.5mである。柱掘形は一辺0.6mのほぼ正方形である。周辺を精査したが、ほかに対応すると考えられる柱穴はなかった。

溝

SD4414　調査区北側で検出した。SX4419と同一面上にあり、周囲を巡っている。溝幅は約40～60cmで深さ20cm程度である。南側への拡がりについては、３トレンチによってその一部を壊してしまった可能性も考えられるが、精査した限りでははっきり確認できなかった。

SD4415　調査区南側で検出した。北西から南東方向に伸びる溝で約14m分を調査した。最も広いところで溝幅1.5m、深さ20cm程度である。埋土は、淡橙色土層や灰橙白色粘質土層と炭化物層が互層となっており、東斜面より流れ落ちた状況である。鞴羽口・銅滓等鋳造関連の遺物が出土している。調査区東斜面部に大きく堆積する、暗茶色土層（３トレンチ10層）がこれらの層の上に堆積している。

SD4416　調査区中央東寄りで検出した。南北に走っており、約35m分を調査した。溝幅約1.2～1.5m、深さ20cm程度である。埋土は赤褐色砂質粘土層（１層）や焼土、炭化物が入っている。床面は中央部が盛り上がって左右が窪んだ轍状で、水が流れた跡が確認できないことから“畔道”的な道路の可能性が高い。黄褐色砂質粘土層を切っており、それ以後の時期が与えられる。

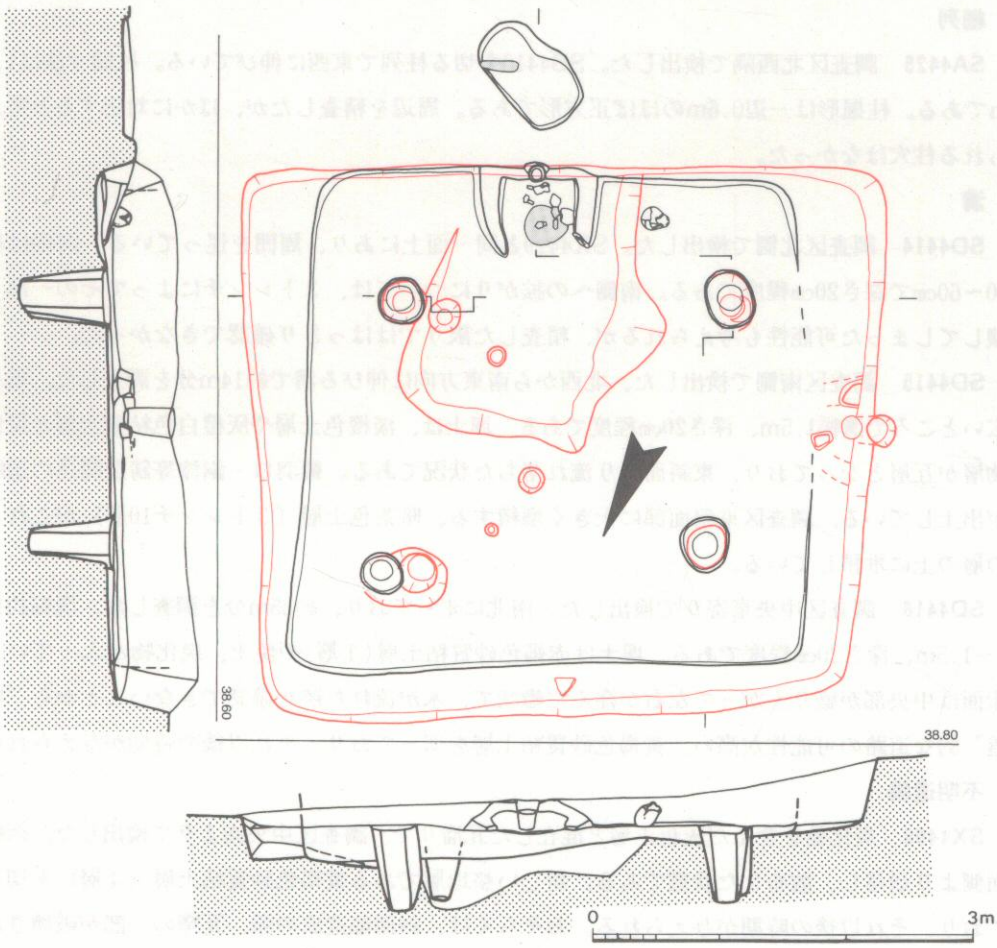
不明遺構

SX4406　炭化物を含んだ灰色土層と混在した瓦溜りで、調査区中央南よりで検出した。西斜面側より崩落し、散布した状態である。新しい整地層である黄褐色砂質粘土層（４層）を切っており、それ以後の時期が与えられる。おそらくは、斜面部造成の際、瓦窯の一部が破壊され散乱したためと考えられる。ただ斜面の落ち際については、黄褐色砂質粘土層下に遺物が堆積しており一部は原位置を保っている可能性がある。

SX4407　調査区北側で検出した。赤褐色砂質土層（１層）中や炭化物を含んだ灰色土中に主に含まれる形で出土した瓦溜りで黄褐色砂質土層（４層）上面に乗っている。SX4406と同じく斜面部造成の際、瓦窯の一部が破壊され散乱した状態と考えられる。

SX4408　調査区北側の西側斜面落ち際で検出した。幅0.6m、長さ2.5m程度の細く南北方向に連なる瓦溜りで、暗灰色粘質土層上に乗っている。瓦は人為的に敷き並べた状況ではなく、特に規則性はない。このSX4408が乗る暗灰色粘質土層については、中央部の斜面落ち際では黄褐色砂質粘土層より下層で確認している。このことから、本遺構は新しい整地層である黄褐色砂質土層に乗るSX4406、SX4407よりも時期的に古く瓦窯操業期に並行する可能性も残している。

SX4409　調査区中央で検出した暗灰色粘質土層の一辺約４mの正方形プランで、斜面に対してほぼ平行である。また、SX4406が遺構の中央を流れて大きく破壊している。そのため、東半

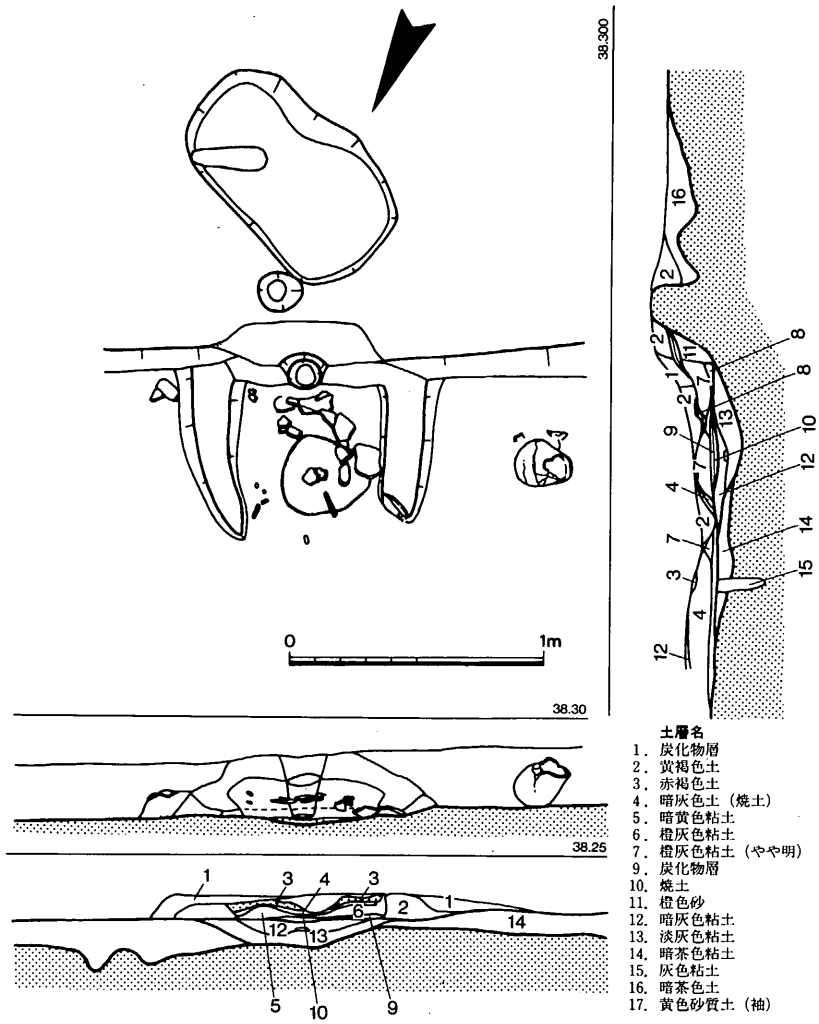


第9図　竪穴住居跡SI4411・4412実測図（1/60）

部は流れた状況でプランは不明瞭である。本遺構は暗黄灰色粘質土層（8層）を切り込んでいる。

SX4419　調査区中央北よりで検出した。面的に広がる不定形の暗灰色粘質土層で、暗茶色粘質土層（10層）に面的に乗っており、東西×南北は約5×3m程度である。プランがはっきりと確認できるわけではなく、全体に流れてきたような状況である。北側では、SD4414が巡っている。

SX4420　本調査区は、1次調査区が立地する東側丘陵と来木瓦窯が残されている西丘陵とが形成する谷状の地形に立地している。調査区中央部より始まり、北半から調査区外に向かってひろがる大きな谷部である。また、中央から南側へ向かうにつれ谷部は浅くなっている。本調査区内ではその端付近が引っかかる形であり、斜面部より流れてきた各時代の遺物が層位的に堆積している。



第10図　竪穴住居SI4411カマド実測図（1/30）

竪穴住居（第９・10図、図版６）

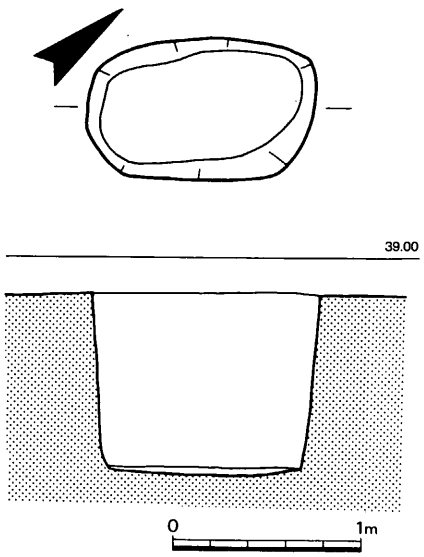
SI4411　調査区中央西側で検出した。主軸方位はN27°Wで、東西辺と南北辺の一辺の長さは3.5×3.8mを測る。検出面から床面まで壁高は残りの良いところで約50cm程度である。主柱穴は４本柱であり、最も残りの良い斜面側南で柱痕跡の径23cm、掘形直径45cm、深さ72cmを測る。SI4412の東西プランを縮小し建て替えている。このため、西斜面側の柱穴２つについてはそのまま利用し、東側の２本については掘り替えを行っている。遺物は右袖付近で土師器壺や杯、須恵器片が炭化物に被われて床面上より出土している。

カマドは住居南壁に付設されており、中央に煙道が取りつく。天井部はすでに落ちており、

検出時にはカマド周辺に炭化物や焼土が散乱した状況であった。左袖の残存長65cm、基底部幅20cm、先端部の残存高3cm、右袖の残存長55cm、基底部幅20cm、残存高2cmを測る。燃焼室は約50×50cmを測り、火床面は焼けて硬化している。

SI4412　SI4411に切られている。東西辺と南北辺の一辺の長さは5.0×4.3mを測る。検出面から床面までの高さは60cm程度である。主柱穴は4本柱で、SI4411と共有する斜面側南の柱が最も残りが良く、東側の2本についてはSI4411の床面下より検出した。住居は再利用されており、遺物は北壁そばで出土しているだけである。

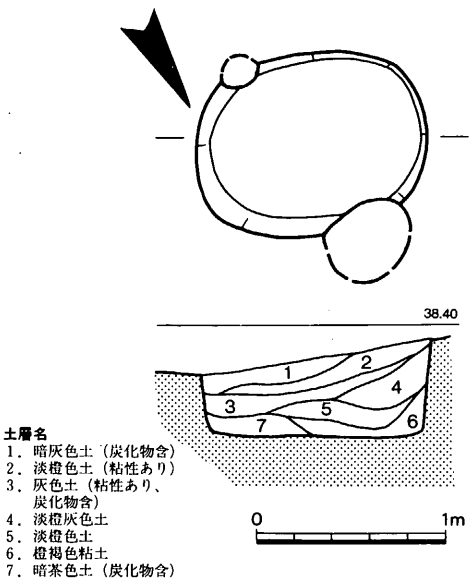
カマドは西斜面側に付設されており、中央に煙道が取りついている。しかし、住居の建て替え時に破壊され焼土が散らばっており、わずかに右袖を残す程度である。



第11図　土壙SK4404実測図（1/40）

土壙（第11・12図）

SK4404　調査区南側西よりで検出した。プランは隅丸長方形であり、上縁長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.95mを測り、主軸方位をN40°Eにとる。礫層を掘り抜いているが、壁面は垂直で丁寧に掘られている。また、埋土は一律で明茶褐色土で分層できる状況ではない。遺物の出土も全くないことから一気に埋め戻されたと考えられる。本来の床面は底から10cm程度の埋土が硬くしまった部分と考えられるが、その下の掘形底面より、同じ埋土の入る不規則に配置されたピットを確認した。



第12図　土壙SK4405実測図（1/40）

SK4405　調査区中央西側で検出した。西斜面の落ち際に掘り込まれた土壙であるが、その上面は後の開発により大きく削平されている。埋土は炭化物を含む層が互層に堆積している。弥生土器や石器が出土している。上部がかなり削平を受けているため確実なことは判らないが、埋土をみるかぎりでは、袋状を呈した土壙ではない。上面長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.4mを測り、主軸方位N65°Wをとる。

SK4418　調査区中央やや南よりの西端において検出した。西斜面を掘り込んで造られており、SI4411・4412の上部を破壊している。また、斜面に残されていることと、その上を崩落土

と共に散布している瓦溜りSX4406が大きく覆っていることから、東側の壁の立ち上がりは不明瞭であった。本遺構の堆積については、残りが悪く土層を見るかぎりでは自然堆積かは判断できない。ただ下層には暗橙褐色粘質土層が面的に広がっており、人為的に埋められた可能性もある。埋土中より須恵器片が出土している。

出土遺物

SB4410出土土器（第13図，図版13）

弥生土器

甕（1）　平底の底部をなすもので、胴部との境は丸みを帯びる。底径11.4cm。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。柱穴5が切る整地層・黄褐色土層中より出土。

SD4416出土土器・陶磁器（第12図，図版13）

須恵器

蓋（2）　天井部・体部が丸みを帯びるもので、口端部は僅かに窄めただけで収める。復元口径13.6cm。天井部にかけてヘラケズリを施す。

杯（3）　蓋受けの返りを有すものである。復元口径12.6cm、器高3.8cm。口縁部は内湾しながら立上がる。外底部は回転ヘラケズリを施し、内底部にはナデ、それ以外ヨコナデを施す。

中国陶磁器

越州窯系青磁

椀（4）　茶灰色の胎土に淡黄緑色の釉を全面に施す。輪状高台をなし、畳付と内底部に重ね焼きの目跡が残る。復元底径8.8cm。

SI4411出土土器（第12図，図版13）

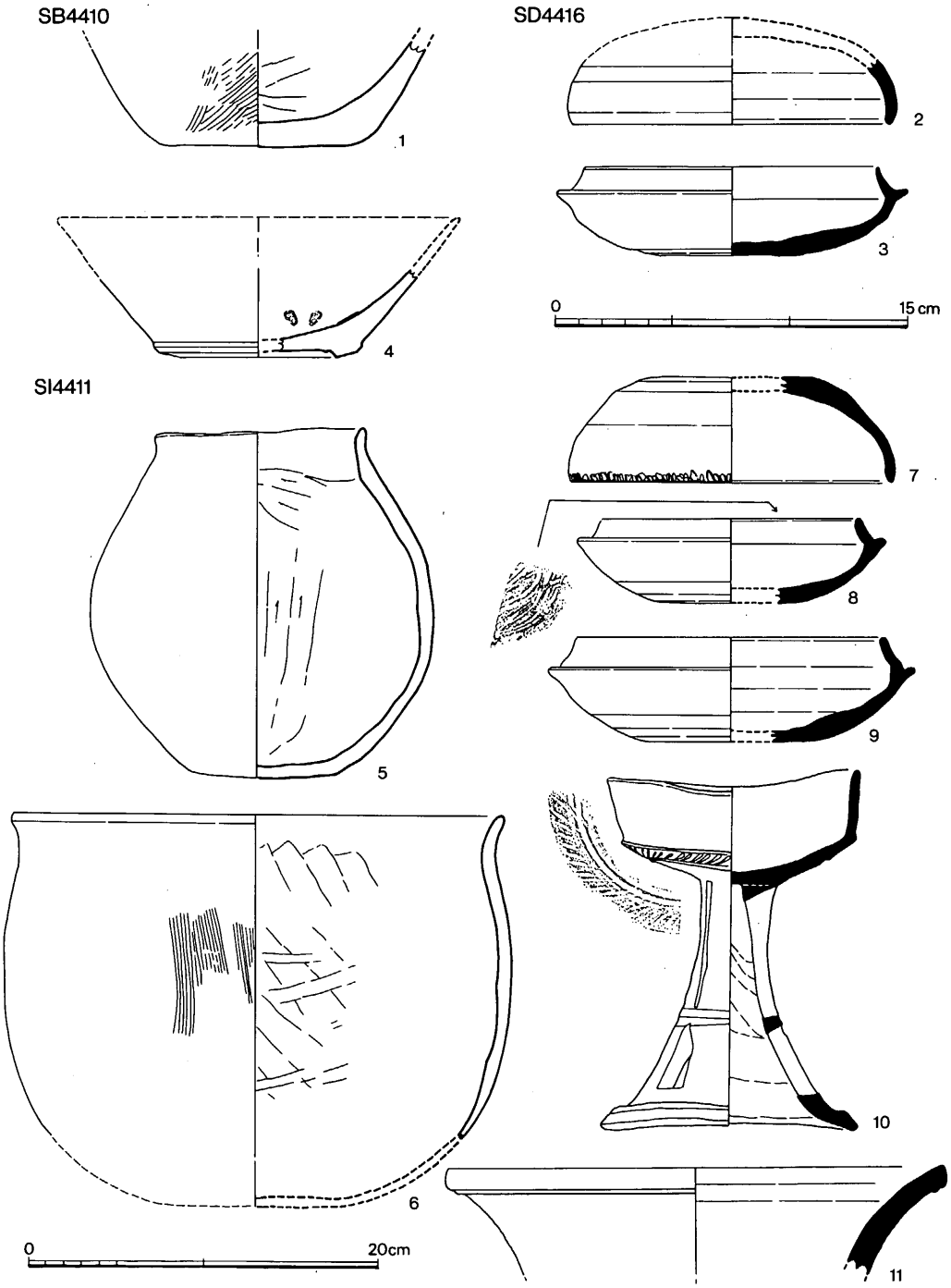
土師器

甕（5・6）　5は口径12.1cm、器高20.0cm、底径8～8.5cm。下膨れの胴部に短い口縁部が備わったもの。底部は平底気味である。胴部内面に粗いヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデ、外面は磨滅し不明である。胴部の中位から下部は火熱を受け赤変し器表も荒れている。また外底部が輪状に黒変している。6は復元口径28.4cm。口径に比べて底の浅い鍋形である。胴部は張りがなく、口縁部も緩く反転して短く立ち上がる。調整は胴部内面が粗いヘラケズリで、口縁部にまで達している。外面は口縁部がヨコナデ、胴部にはタテハケメを施す。器表の磨滅が著しい。

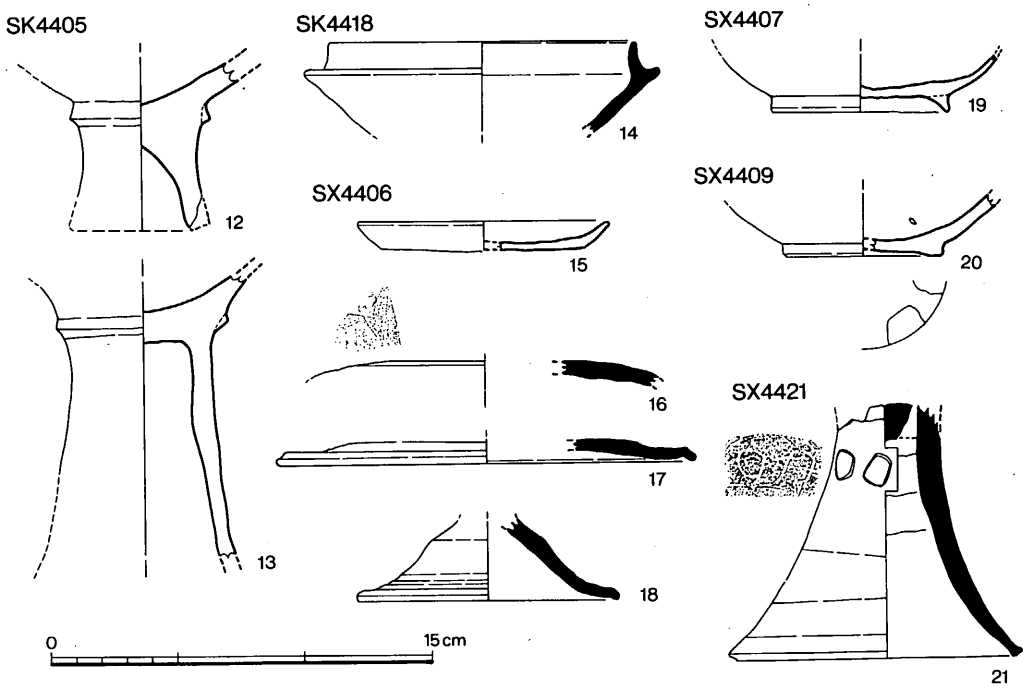
須恵器

蓋（7）　口径13.8cm、器高4.5cm。天井部は平坦で、体部・口縁部が丸みを帯びる。外底部は回転ヘラケズリ調整。体部・口縁部はヨコナデ、内底部は同心円の当て具痕が認められる。

杯（8・9）　ともに蓋受けの返りを有す。8は口径11.2cm、器高3.6cm。9は復元口径13.



第13図　遺構出土土器実測図（1）（1/3　1・5・6は1/4）



第14図　遺構出土土器実測図（2）（1/3）

0cm、器高4.5cm。口縁部・体部をヨコナデ、外底部に回転ヘラケズリを施す。8の内底部には青海波の当て具痕が認められる。

高杯（10）　口径10.7～12.7cm、器高15cm前後、底径11.0cm。返りを有さない深めの杯部に長い脚部を備える。歪みが著しい。杯部の外底には沈線と板状小口を押しつけた刻み目文を巡らす。杯部には相対する位置に2段の透かしを施す。上段は幅の狭い長方形で、下段は三角形に切り取る。杯部の口縁部と体部はヨコナデ、内底部にナデ、脚部はヨコナデ、内面に接合時の絞り痕が認められる。

甕（11）　復元口径21.6cm。口端部が肥厚し、下面に凹線状の段を巡らす。内外面にヨコナデを施す。

SK4405出土土器（第14図）

弥生土器

甕（12）　脚台付甕の底部付近を残したもの。脚台部と底部の境には断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面は磨滅し不明。

高杯（13）　杯部と脚部の一部である。境目には三角突帯を巡らす。内面はナデ、外面は磨滅が著しい。

SK4418出土土器（第13図）

須恵器

杯（14）　復元口径12.0cm。蓋受けの返りを有すタイプ。口縁部は短く立ち上がる。内外面

ともヨコナデ。

SX4406出土土器（第14図）

土師器

小皿（15）　口径10.0cm、器高1.0cm。外底部はヘラ切り離し。

須恵器

蓋（16・17）　16は外天井部回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号が認められる。17は復元口径16.6cm。外天井部は回転ヘラケズリ、口縁部をヨコナデ、内天井部をナデる。内天井部は良く摺れているので、転用硯の可能性が高い。

高杯（18）　脚裾部を残すのみである。裾部径10.2cm。裾端部が大きく広がり、端部は僅かに肥厚する。内外面はヨコナデする。

SX4407出土土器（第13図）

土師器

椀（19）　高台径7.0cm。丸みを帯びた杯部に低い高台を貼付する。内外面はヨコナデ、内底部はナデ。外底部はヘラ切りされ板状圧痕を伴う。精製された胎土を用いる。

SX4409出土陶磁器（第14図）

中国陶磁器

越州窯系青磁

椀（20）　高台径6.4cm。体部下位を露胎とし、釉の下には白色の化粧土を施す。露胎部分では赤褐色に発色する。釉はオリーブ色の薄いものである。高台には目跡を残す。

SX4421出土土器（第14図、図版13）

須恵器

高杯（21）　杯部を欠損する。脚部はラッパ状に開き端部を肥厚して収める。内外面にヨコナデを施す。脚の上部に１対の円状をなすヘラ描き文様を施す。

整地層

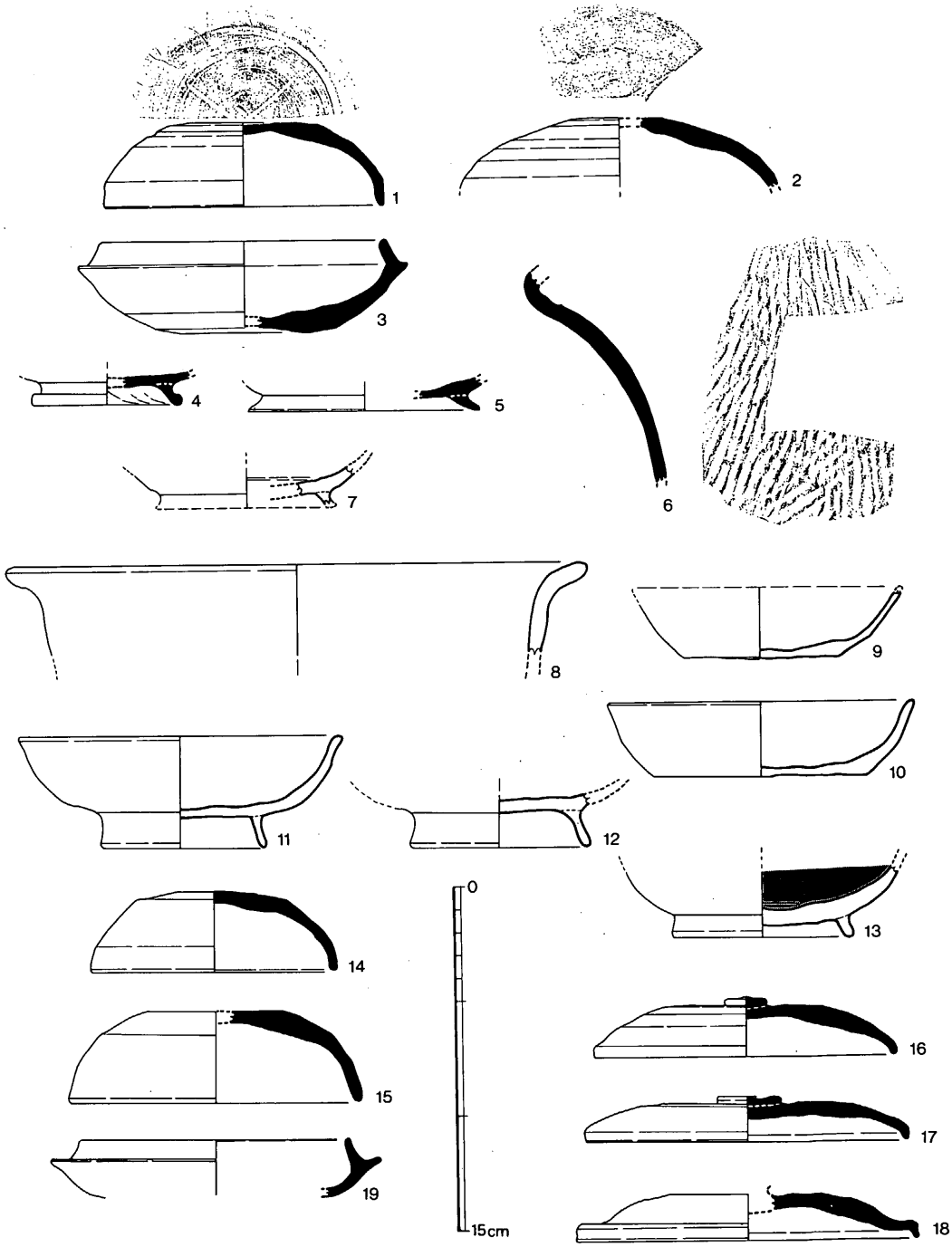
谷状地形は徐々に埋められている。これらは瓦窯操業以前の下層と操業以降の上層に大きく分けることが可能である。また、さらに幾つかの層位に分けることができた。ここでは上下層をそれぞれ上部と下部に分類することにする。

上層上部出土土器・陶磁器（第15図、図版14）

須恵器

蓋（１・２）　ともに体部に丸みを持ち天井部が平坦なものである。外天井部は回転ヘラケズリ、体部･口縁部はヨコナデ、内底部はナデを施す。ともに外天井部にはX字形のヘラ記号が認められる。１は口径12.2cm、器高3.7cm。

杯（３・４）　３は復元口径12.8cm、器高4.0cm。蓋受けの返りを有すもので、口縁部は内傾



第15図　上層整地層出土土器実測図（1）（1/3）

して短く立ち上がる。体部・口縁部はヨコナデ、内底部はナデ、外底部に回転ヘラケズリを施す。4は高台部分を残すもの。復元高台径6.6cm。高台は外底部の内側に貼付され、「ハ」字状に開くものである。内底と外面に研磨を施す。外底部にもナデを施す。

壺（5）　高台部分を残すもので器肉が薄い。短頸壺と考えられる。外底部の周縁に低く開いた高台を貼付する。内底部にナデ、外面はヨコナデを施す。復元高台径10.2cm。

甕（6）　胴部上半の破片である。外面は縦位の平行叩き、内面は不定方向のナデを施す。

緑釉陶器

椀（7）　体部下半に丸みを有し、短い高台を有すもの。内面見込みに段を巡らせる。土師質の胎土に光沢のある淡緑色の釉を掛ける。釉の下には灰白色の化粧土を施す。

上層下部出土土器（第15図，図版14）

弥生土器

甕（8）　復元口径23.6cm。胴部に張りがなく口縁部が如意形に短く反転する。内外面の器表は磨滅が著しく調整不明。

土師器

杯（9・10）　9は平底の底部にほぼ直線的に開く口縁部・体部が備わる。外底部はヘラ切り未調整、その他の調整は磨滅し不明である。8世紀後半～末頃か。10は復元口径13.4cm、器高3.3cm、底径9.4cm。平底の底部から体部・口縁部が僅かに丸みを持って立上がる。外底部はヘラ切り、板状圧痕を伴う。口縁部・体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。

椀（11・12）　11は口径14.1cm、器高4.9cm、高台径7.5cm。ともに底の浅い杯部に、比較的小径の高台を貼付したもの。調整は磨滅し不明である。橙褐色を呈する。

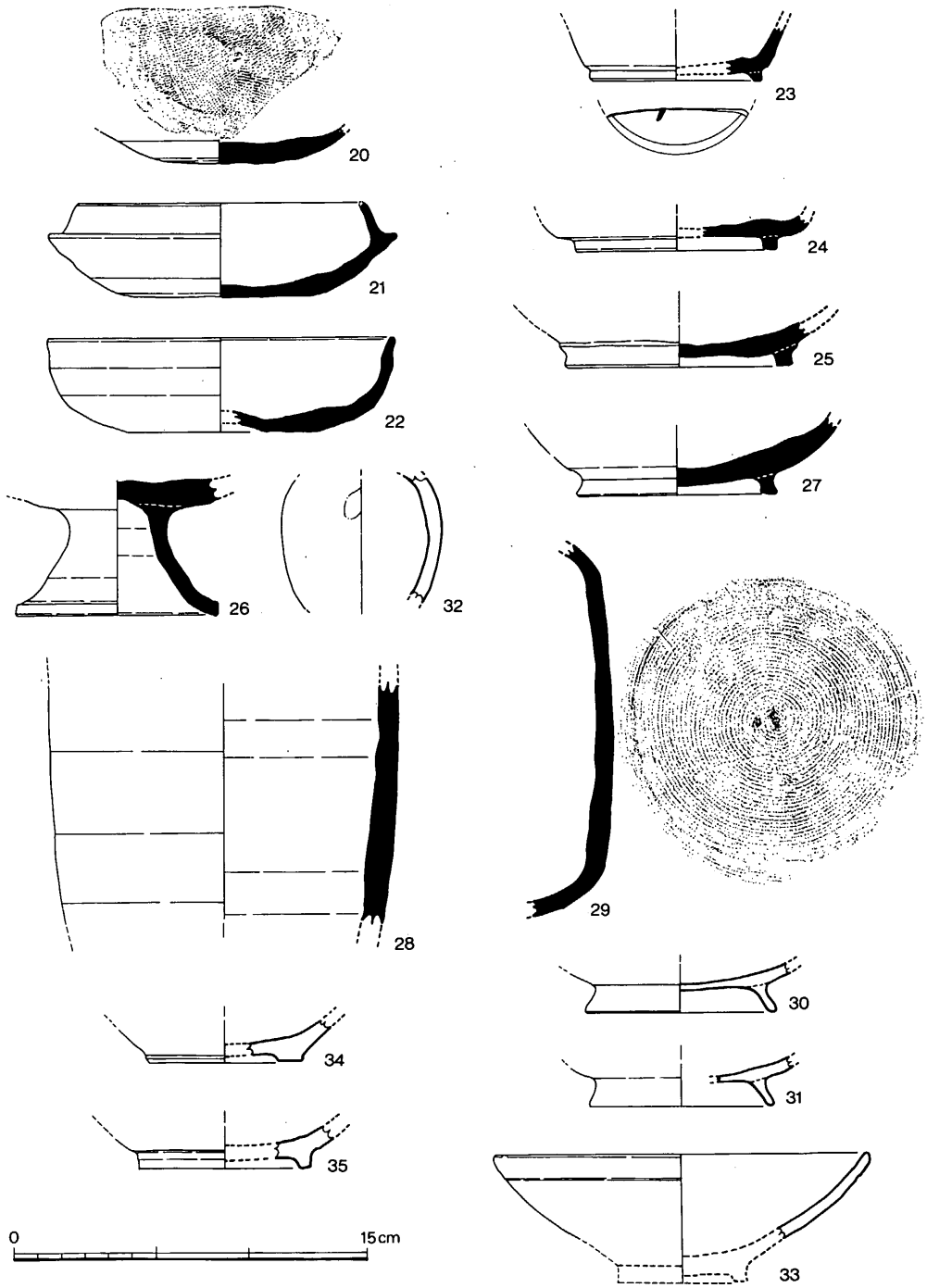
黒色土器

椀（13）　丸みを有す杯部に短い高台を備えたもの。内面のみ燻して黒色化する。器面の磨滅が著しく調整不明。

須恵器

蓋（14～18）　14・15は体部が丸く天井部が平坦なもので、口縁部は僅かに外傾して端部を収める。外天井部に回転ヘラケズリ、体部から口縁部の内外面はヨコナデ、内底部にナデを施す。14は口径10.8cm、器高3.5cm。15は口径12.7cm、4.0cm。16～18は低平な天井部の中央に摘みを貼付したもの。16は天井部と体部の境が明瞭で、口端部を僅かに下方へ曲げる。17の口端部はやや長めに垂下する。18は口縁部が一度反転し、端部を嘴状に肥厚させる。16・17は外天井部に回転ヘラケズリ、18はヨコナデを施す。体部・口縁部は全てヨコナデ、内底部も全てナデる。16は復元口径13.3cm、器高2.6cm。17は復元口径14.2cm、器高1.9cm。18は復元口径15.0cm。

杯（19～25）　19～21は蓋受けの返りを有し、体部に丸みを帯びて口縁部が内傾して立ち上がるもの。口縁部は内外面をヨコナデ、21は外底部を回転ヘラケズリする。内底部はともにナ



第16図　上層整地層出土土器・陶磁器実測図（2）（1/3）

デを施す。20の内底部には細かな平行条線が不定方向に走る。整形時の当て具痕である。19は復元口径11.6cm、21は口径12.7cm、器高4.0cm。22は体部・口縁部が丸みを帯びたもので、外底部はヘラ切り離しのままで凹凸が著しい。口縁部・体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。口径14.8cm、器高4.0cm。23～25は高台を備えたもの。23は低い高台を外底部の周縁に貼付する。口縁部を欠損し全形は不明。内底部にナデを施す以外はヨコナデ。外底部に墨書が認められる。高台径7.4cm。24は平坦な底部をなし、体部との境が丸みを持つ。外底部の内側に低い高台を貼付する。外底部はヘラ切りを施す。25は体部下半から底部が丸みを持つもの。断面四角形のしっかりした高台を貼付する。外底部はヘラケズリ。復元高台径は24が8.6cm。25が9.6cm。

高杯（26）　低脚タイプで裾部までラッパ状に開く。裾部径8.6cm。脚部はヨコナデを施す。

壺（27・28）　27は短頸壺の底部資料である。底部の内側よりに低い高台を貼付する。外底部は回転ヘラケズリ、体部はヨコナデし、内底部にナデを施す。高台径8.6cm。28は長胴のものであるが、口縁部と底部を欠損し全形を知り得ない。外面は回転ヘラケズリ、内面はロクロ目の著しいヨコナデである。

提瓶（29）　一方の面を残したもの。外面は同心円にカキメを施す。内面は中央付近がナデ、両端はヨコナデを施す。

灰釉陶器

椀（30・31）　ともに灰白色須恵質の胎土を用いたもの。灰釉はすでに剝落している。外底部には高めの高台を貼付する。復元高台径は30が8.2cm、31が7.8cm。

緑釉緑彩陶器

壺（32）　小型の壺で体部が卵形に近く膨らむ。内外面にヨコナデを施す。体部最大径7.0cm。土師質の硬い胎土に淡黄緑色の釉を施し、さらに濃緑色釉を部分的に施す。破片からの復元にあたっては、通常頸部の屈曲が緩やかなので、その点に留意して破片の上下を決めた。

中国陶磁器

白磁

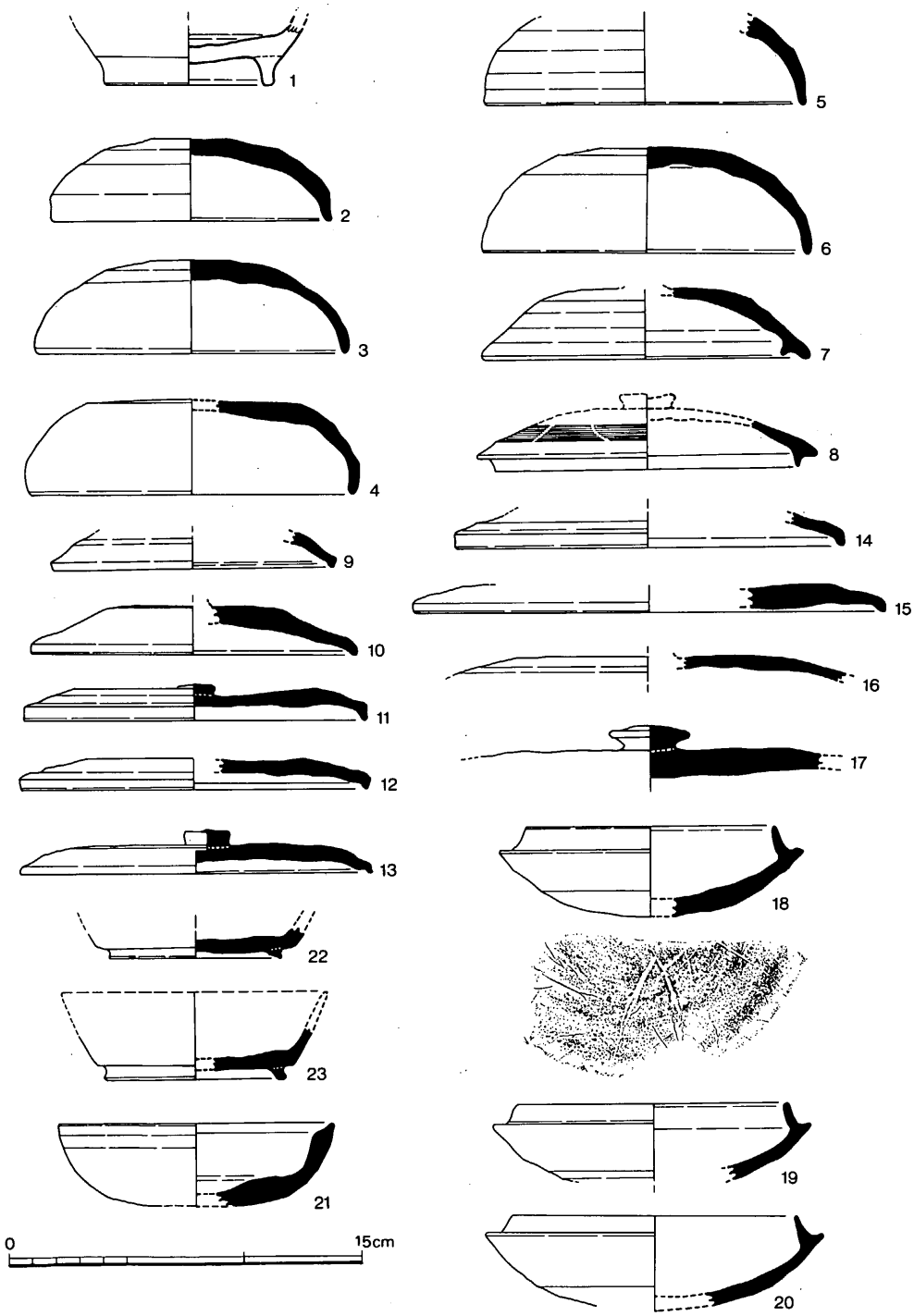
椀（33）　口端部を折返して幅広で薄い玉縁をつくるもの。底部は比較的浅めに復元できる。白色の胎土に光沢のある灰白色の釉を施す。白磁II類。（以下、陶磁器の分類は『九州歴史資料館研究論集』4集の分類に準拠する。）

越州窯系青磁

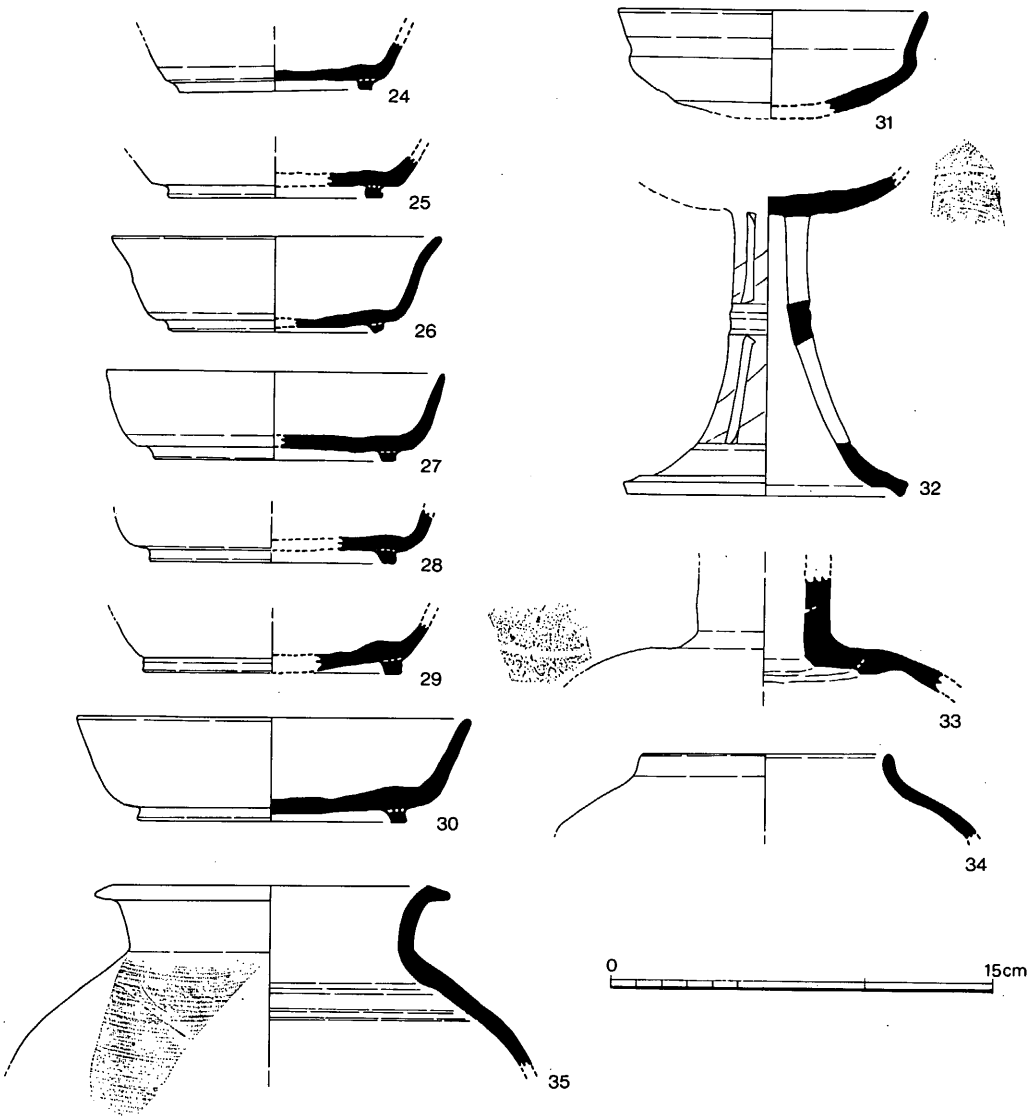
椀（34・35）　34は復元底径6.6cm。低い高台を有し、赤褐色の胎土に粗い淡黄褐色釉が掛る。外底部は露胎とする。35は復元底径7.4cm、輪状高台をなし、淡緑色釉を全面に施す。高台畳付と内底部には目跡の痕跡が認められる。

下層上部出土土器・陶器（第17図，図版15～18）

土師器



第17図　下層整地層出土土器実測図（1）（1/3）

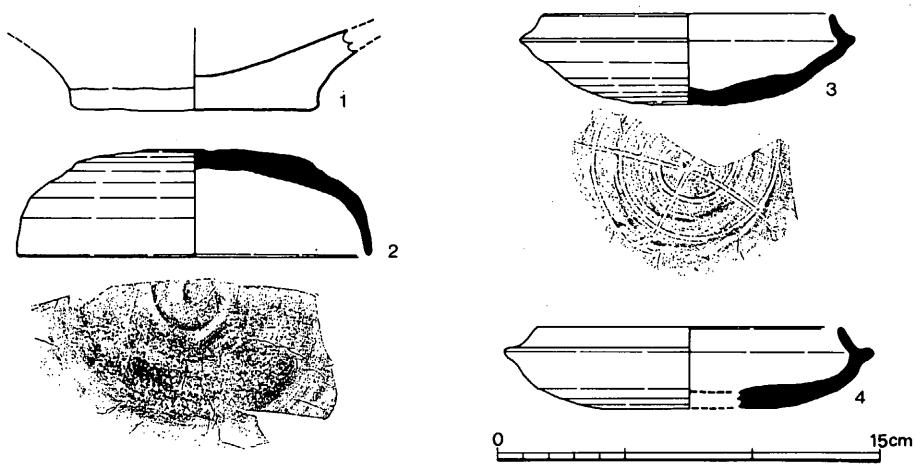


第18図　下層整地層出土土器実測図（2）（1/3）

椀（1）　外底部に高い高台を備えたもの。体部はヨコナデ、外底部はヘラ切り離しのままか。復元高台径7.2cm。

須恵器

蓋（2～17）　2～6は体部が丸みを帯びた直口縁タイプのもの。こののうち4は天井部を平坦につくる。調整は全て天井部は回転ヘラケズリ、体部・口縁部はヨコナデ、内天井部をナデる。3の天井部にはヘラ記号が認められる。口径と器高を列挙すると、それぞれ2は復元口



第19図　下層整地層下部出土土器実測図（1/3）

径12.0cm、器高3.5cm。3は13.0cm・4.0cm。4は14.0cm・4.0cm。5は13.8cm、器高は不明。6は14.0cm・4.5cm。

7・8は口縁部の内側に返りを有すもの。ともに口縁部をヨコナデし、7は内天井部をナデ、天井部を回転ヘラケズリする。8は体部上位の外面にカキメを施す。7は口径14.0cm、器高3.0cm。8は復元口径14.6cm。

9～17は低平な天井部に返りを有さないタイプ。口端部の形状からは11・14がやや長めに折り曲げ、9・12・15は断面三角形に肥厚する。10・13は僅かに肥厚して収め、13は端部付近を屈曲させて段をつくる。外天井部は13がヘラ切り後にヨコナデを加え、それ以外は全て回転ヘラケズリ調整を施す。残りの良いものでは全て体部・口縁部をヨコナデ、内天井部をナデる。11・12・14・16は内面に墨が付着し、良く摺れており硯に転用されている。17は摘みの大きさからして壺蓋と考えられる。

杯（18～30）　18～20は蓋受けの返りを有す。口径10.8～12.2cm、器高は4cm前後。口縁部から体部にかけてヨコナデ、外面の体部下位を回転ヘラケズリする。18の外底部にはヘラ記号を有す。21は復元口径11.8cm、器高3.5cm。口縁部が端部に向って肥厚し、口端部は内側に凹状の窪みを巡らせる。こうした特徴ある口縁部はあまり例を見ない。蓋の可能性も考えられる。調整は外面と内面の屈曲部までをヨコナデ、内底部をナデる。

22～30は高台を有すもの。高台は底部外縁のやや内側に貼付され低い輪高台をなす。口縁部・体部はヨコナデ、内底部は基本的にナデを部分的にも施すが、体部から内底部までヨコナデが及んでいるものに22・23がある。外底部は22～25がヘラ切り未調整、それ以外は回転ヘラケズリを施す。22の復元高台径は7.2cm、23は7.8cm、24は7.7cm、25は8.6cm。28は9.8cm、29は10.2cm。26は口径13.0cm、器高3.8cm、高台径8.6cm。27は口径13.4cm、器高3.5cm、高台径9.6cm。30は復元口径15.5cm、器高4.1cm、高台径10.6cm。このうち28の内底部は良く摺れている。

高杯（31・32）　31は体部が屈曲して口縁部が開くもので、脚部は欠損する。口縁部と体部はヨコナデ、内底部はナデ、外底部は回転ヘラケズリ調整する。復元口径12.2cm。あまり類例のない器形である。朝鮮半島製の可能性も考えられる。32は長脚の高杯で、杯部を欠損する。脚部には２段の透かしが３方に施される。上下の透かしに挟まれて凹線を巡らせる。裾端部は下方へ断面三角形状に垂下する。また、杯部外底部に櫛目を施す。杯部の内底部はナデ、それ以外はヨコナデを施す。裾部径11.2cm。

壺（33・34）　33は長頸壺の頸部付近である。肩部にヘラ描き波状文を巡らせる。内外面はヨコナデ、口縁部を接合した内面は指押えとナデ調整を施す。34は短頸壺。口径9.6cm。口縁部と肩部の境は緩やかに反転する。内外面ともヨコナデ。

朝鮮製陶器

壺（35）　口径14.0cm、口端部は外側に肥厚する。肩部はなで肩をなし、カキメを入れる。口縁部はヨコナデ、体部の内面は強いヨコナデを施しロクロ目が顕著である。朝鮮半島製のもので統一新羅末頃のものか。

下層下部出土土器（第19図，図版17）

弥生土器

壺（１）　弥生前期の特徴を有す器形をなす。底径9.8cm。外底部に粗いナデを施し、外面もナデ、内面は磨滅し不明である。

須恵器

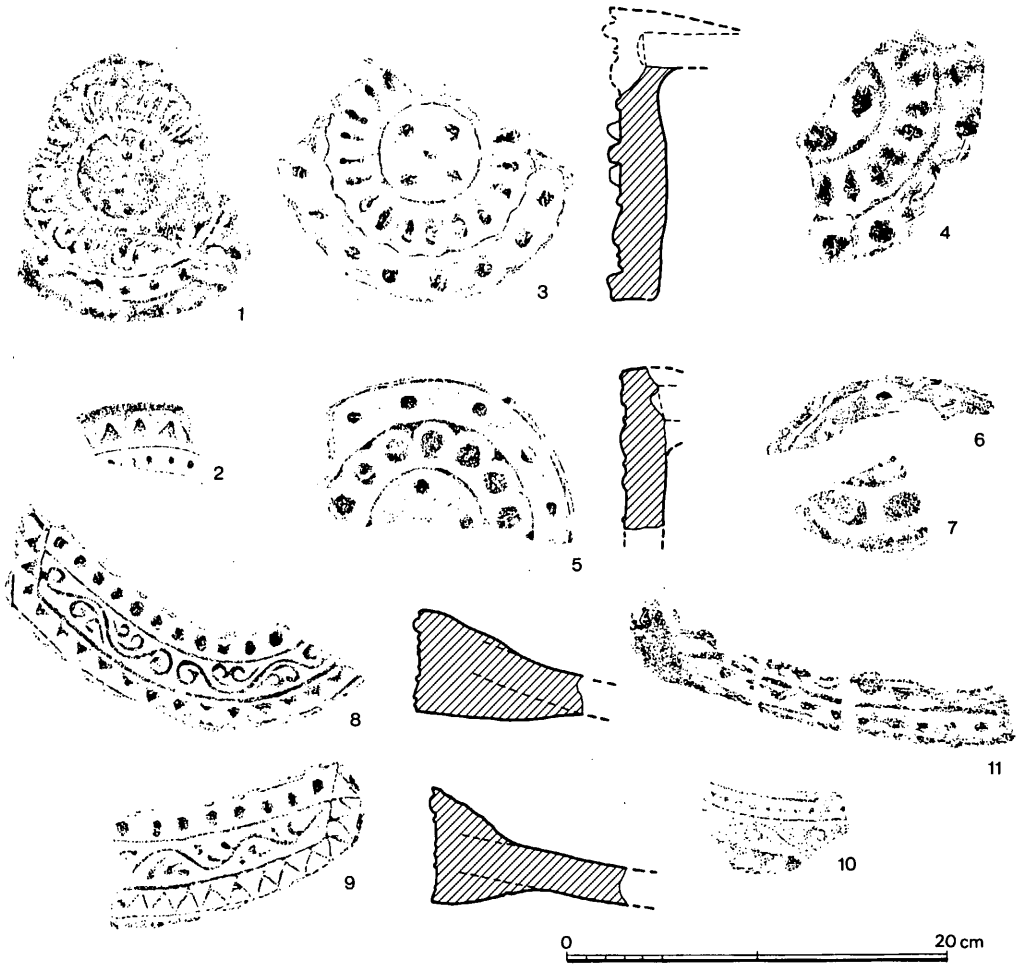
蓋（２）　口径14.0cm、器高4.2cm。天井部が僅かに平坦気味につくられ体部は丸味を帯びる。体部から口端部にかけて細くつくり、口唇部は丸く収める。外天井部に回転ヘラケズリ、体部から口縁部はヨコナデを施し、内底部にタタキの当て具痕が残される。

杯（３・４）　２のような形態の蓋とセットになり、蓋受けの返りを有すもの。２は口径11.4cm、器高3.6cm。蓋受け部の突出が弱く明瞭な段を有しない。３は口径12.2cm、器高3.2cm。ともに口縁部と体部はヨコナデ、外底部は回転ヘラケズリである。３の外底部にはヘラ記号を有す。

瓦類

軒丸瓦７種13点、軒平瓦４種以上16点、鬼瓦５点、文字瓦５種以上14点、丸・平瓦片土嚢袋50袋ほどの出土があった。

出土瓦の中には、数少ないものの外から運ばれてきたもの、発掘区の西側に遺存している来木瓦窯で製作されたであろうと考えられるものの二とおりある。来木瓦窯は、２つの大戦によって戦死された水城村出身の兵士の慰霊碑が立つ丘陵の東裾部に10基近くが認められている。昭和34年（1959）にその一部が大川清氏によって調査されている。その調査結果の一部は大川清・高橋章両氏によって紹介されている。すべての瓦窯が発掘調査されているわけではないが、



第20図　軒先瓦拓影・実測図（1/4）

今回の出土瓦のなかには明らかに来木瓦窯産のものが認められる。来木瓦窯で製作されたものかどうかの判別は、かなり大胆に行う他なく、可能性の範囲に留まるものであるが、一応個々の出土瓦について試みてみたい。

軒丸瓦（第20図、図版31）

1は鴻臚館式軒丸瓦である。瓦当面だけの破片でかなり破損が進んでいる。瓦当の厚さは3.2cm程であるが、丸瓦は弁区の背後で瓦当の厚さの2分の1ほどくい込んだ痕を残している。砂粒を含まない良質の粘土が用いられている。瓦当表面は黒く燻されているが、表面が剝げている部分では黄白色を呈している。包含層から1点だけ出土している。来木瓦窯は10世紀代の操

業と考えられるから発掘区外から搬入されたものである。

2は、小破片2点が出土した。連珠文の粒が小さいことから老司式ではないが、不丁官衙域で「天平」の木簡と共に出土した軒瓦の一種であろう。1つは砂量の少ない粘土が用いられ灰褐色で焼上がりも硬い。1つは一定量の砂粒を含んでいて、黒褐色で焼きあがりも悪く、珠文帯・鋸歯文帯の文様がナデ消されている。両者とも包含層からの出土である。発掘区外からの搬入であろう。

3は、来木瓦窯の発掘調査に同笵例がある。円圏によって囲まれた一段低い中房には1＋4の蓮子を配置する。蓮弁は複弁10弁で中房から派生する間弁が蓮弁の外側で連続している。外区には大粒で高い珠文16個ほどを配置する。瓦笵は側縁の状況から連珠文帯外側の界線までと思われる。瓦笵には横方向に木目と思われる笵傷が10数ヶ所にある。側縁および瓦当裏面はナデ仕上げ。灰色で少量の砂粒を含むが良質の粘土が選ばれている。焼きあがりは須恵器のように硬いものと、表面の土が手につくほどやわらかいものとがある。3点とも瓦窯崩落土中からの出土である。

4も3に近い瓦当文様の軒丸瓦であるが、蓮子の粒が大きいことや、間弁の表現が省略されている点が異なる。また、用いられた粘土にも多量の砂粒が混ぜられているのも大きな相違である。側縁・裏面はナデ仕上げ。2点出土した。黒茶褐色のもの1点、茶褐色のもの1点で、焼きあがりは2点とも悪い。2点とも包含層からの出土である。

5は、来木瓦窯に調査例がある。幅広く大きい中房に1＋4の蓮子を配置する。蓮弁は単弁14弁、外区内側の界線から弁間に間弁状の突起が延びる。外区には、間隔を広くとる珠文が13個ほど配置されている。外区珠文の外には明瞭な界線があり、界線の外は段状になる。側縁・背面はナデ仕上げ。丸瓦は珠文帯の背後に接合痕が残るが、その痕跡からは丸瓦の凹面先端が削られていたと想定される。2点が出土しているが、灰白色で砂粒の少ない良質の粘土が用いられている。焼き上がりは良くない。包含層からの出土である。

6は、珠文の間隔を広くとる外区部分の破片である。5に比較して珠文の大きさが異なること、外区外界線の外側が界線よりも高く盛り上がっている。粘土に砂粒を多く混じている点、4に近い。暗茶褐色で焼きあがりも良くない。SD4416から1点が出土した。

7は、長楕円の蓮弁の軒丸瓦である。他出土例から文様を記してみよう。円圏にかこまれた中房は一段低くつくられ、中央の蓮子は方形に近く、4つの角から放射状に分割線が円圏を分ける。4分割された各々の中に長円形の珠文が配置されている。蓮弁は10弁、外区には、大粒の珠文が配置されている。2点が出土し、1点がSX4406から、1点は包含層からである。砂粒を含む粘土が用いられ、茶褐色で比較的硬く焼きあがっている。

軒丸瓦4・6・7は来木瓦窯で製作されたかどうかは不明であるが、時期的には、3・5と並行する時期の軒丸瓦である。

軒平瓦（第20図、図版31）

8は、焼き歪みにより通常の軒平瓦より曲率が大きい。来木瓦窯からの出土は報告されていないが、ここで製作された可能性は高い。瓦当文様は偏行唐草文様の唐草が3単位並列されたものが内区に配置される。上外区は連珠文、下外区・脇区は凸鋸歯文が配置されている。平瓦は、いわゆる「包み込み」技法によって接合されている。この方法のためか側面にも布目が残る。顎は意識されたものと思われ側面に近い部分には、段状にくびれが残る。他の部分は直線顎に近い。瓦当面の上面および顎部は横方向の指ナデによる整形痕を残す。砂粒を多量に含む粘土が用いられるが、暗灰色で須恵質に硬く焼きあがっている。顎部には焼き歪みによるヒビ割れが生じている。1点が包含層から出土した。

9は、内区に左行する偏行唐草文が配置されている。唐草文は一本の蔓が反転する都度、2～3の子葉が中心となる蔓から派生している。上外区は大き目の連珠文が、下外区・脇区には線鋸歯文が配置されている。平瓦は「包み込み」技法によって接合されている。平瓦の先端が内区文様帯の背後に位置するため瓦当面の背後の支持土は平瓦の上面と下面で同じくらいの厚さを持っている。顎は曲線状に作られるが、断面に見るかぎり顎は明瞭でない。砂粒を多く含む粘土が用いられ、茶褐色のものと暗灰色を呈するものとがある。焼き上りは比較的硬い。2点出土していて、SD4416から1点が出土している。来木瓦窯で製作された可能性がある。

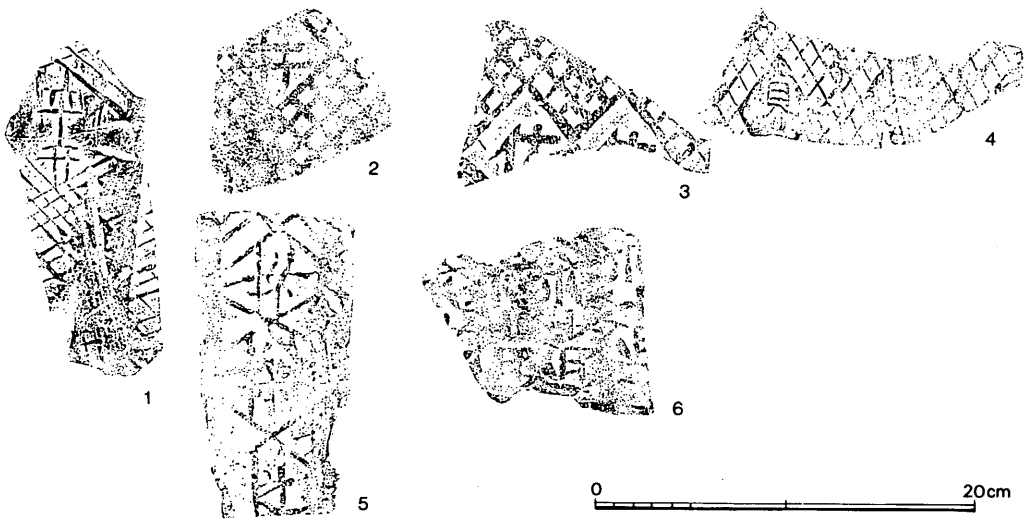
10は、左行する偏行唐草文を内区に、上外区には細かい連珠文、下外区には凸鋸歯文が配置される。「天平」の木簡の出土した不丁官衙の南北溝SD2340に同笵例がある。この軒平瓦は、粘土紐桶巻き作りされた可能性があり、破片には平瓦の挿入された痕跡が見られない。少量の砂粒を含むが良質の粘土が用いられている。黄茶褐色で焼き上りは比較的良い。包含層からの出土である。発掘区外からの搬入であろう。

11は、7点と最も多い点数が出土している。来木瓦窯には、この軒平瓦の出土は報告されていないが、未調査の瓦窯で製作された可能性が最も高い。内区の唐草文は笵型の痛みがひどく、文様の特徴すら十分にみとめがたい状況だが、これまでの出土例から、8と同笵であることがわかっている。上外区には連珠文、下外区・脇区は凸鋸歯文が配置されている。ただし、右脇区はなく、内区の脇界線に唐草がとりついた状況で終っている。平瓦は「包み込み」技法によって接合されている。この接合法によるために、側面と顎とは丸くつくられている。7点とも胎土には多量に砂粒を混じていて淡黄茶褐色から灰白色を呈している。焼き上りも悪い。SX4407から4点、SX4406・SX4407から1点ずつが出土し、他の1点は包含層からの出土である。

この他に、瓦当文様を判別出来ない小破片の軒平瓦が4点ある。胎土や色調、焼き上りは11に最も近い。SX4416・SX4407・包含層から1点ずつ出土している。

文字瓦（第21図、図版32）

文字瓦は、すでに石松・高橋両氏による分類があり（以下、文字瓦の分類は、「大宰府出土



第21図　文字瓦拓影（1/4）

の瓦について(二)」『九州歴史資料館研究論集４』1978に依る。）ここでは、両氏の分類に従って若干の解説を行うこととする。

１は平瓦の破片で、「平井」の文字銘で上記分類のⅠ類８bにあたる。「井」の字の下部の斜格子文は、追刻された部分のあることをすでに中山平次郎博士が考古学雑誌で紹介されている。「平井」は瓦屋名と推定されているが、来木瓦窯およびその他の瓦窯からも出土例は知られていない。「平井」銘のなかでは最も出土量が多い。砂粒を含む粘土が用いられ、灰白色で焼き上りも硬い。包含層からの出土である。

２も平井の破片で、「井」の字が方形の枠に配置されている。分類では、Ⅰ類7bにあたる。砂粒を多量に混じる粘土が用いられている。淡茶褐色で焼成は悪い。出土瓦窯は不明。SX4407からの出土。

３は平瓦の破片で最終画のない「佐」の字が、方形枠に記されている。文字の周囲の斜格子文は比較的太い。分類ではⅢ類３にあたる。松倉瓦窯に同じ叩打痕のものが出土している。砂粒を多量に含む粘土が用いられている。２点が出土し、茶褐色・黒色を呈している。焼き上がりは比較的硬い。SX4407・包含層から、それぞれ１点が出土した。

４も平瓦の破片で、一辺4.0cmの菱形の枠中に「賀茂」の字が記されている。分類ではⅢ類７にあたる。「賀茂」の文字瓦は、都府楼北瓦窯から出土していることが知られているが、Ⅲ類７とした叩打痕の残る瓦は、この瓦窯からは出土していない。少量の砂粒を含むが良質の粘土

が用いられて焼き上りも良い。包含層からの出土。

5は、「安楽之寺」の4字の上を縦方向の棒線を追刻して、消したものである。分類ではⅣ類Ⅰbにあたる。「安楽之寺」とは、太宰府天満宮をさし、菅公の崩去（延喜3年［903］）後、安楽寺の建物が建立された時期の瓦で延喜5年(905)以後延喜19年（919）のものと考えられている。これを、追刻により文字銘を縦方向の棒線によって消したものであるから、供給場所を安楽寺以外に想定したものである。この瓦が、大宰府政庁南門基壇下の土壙から出土したことで政庁再建時期を推定する根拠となった瓦である。今回、発掘区内からは、平瓦の破片7点が出土した。他の文字瓦に比べて最も多い点数が出土している。このことからは、この瓦が来木瓦窯で製作された可能性が高くなってきた。少量の砂粒を含むが、比較的硬く焼きあがっている。色調は、灰色のものが多く、茶褐色のものなどがある。SX4406･SX4409から1点ずつ出土し、他の4点は包含層からの出土である。

4は、「小□瓦」の左字と読まれている。「□」は、カタカナ「ト」の左字の様である。意味については不明。分類のX類とされる。出土例は丸瓦の破片であるが、平瓦にも叩打されたものがある。生産された瓦窯は不明。砂粒を含む粘土が用いられている。灰白色で焼き上がりは比較的良い。1点がSX4421から出土している。

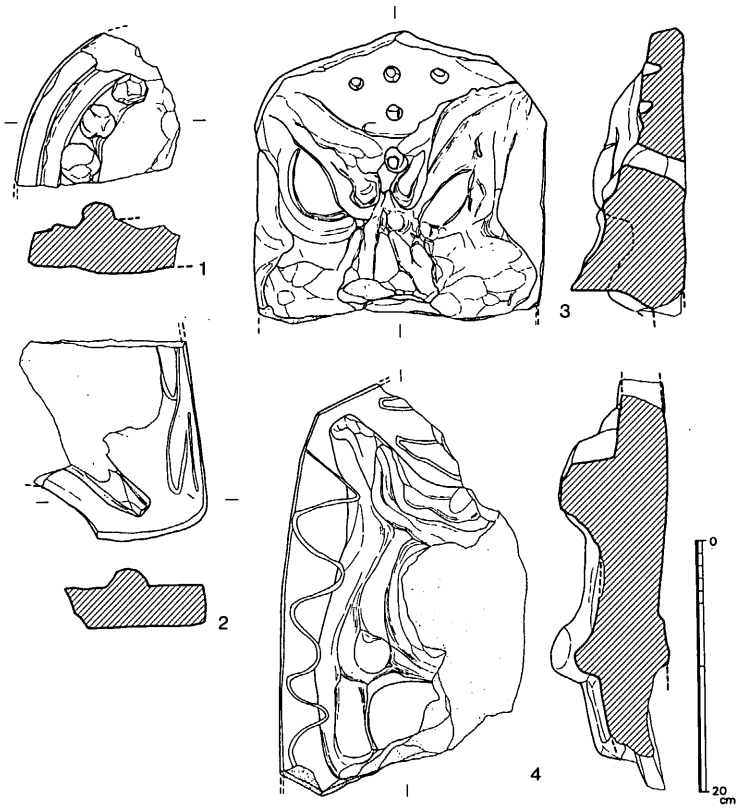
鬼瓦（第22図、図版33）

1は、左肩部の破片である。3個の大きな珠文と外区の太めの界線が残っている。文様全体を伺い知ることは出来ないが、今回出土している鬼瓦片すべてが大宰府式鬼瓦の怒り顔を瓦当全面に表現する伝統を保持しているものと思われるから、この鬼瓦の欠損部分にも怒り顔の鬼面が表現されていたものと考えている。この鬼瓦は、土台となる部分を笵型によって型抜きし、珠文から鬼面にかけての部分の文様を手作りしたものと思われる。笵型を用いたと考える根拠は、珠文の外側でやや幅広の界線の上部に型に粘土をつめたときに生じたと思われる不整形な縞が溝状に続くこと、界線および珠文の間の凹状の部分・珠文の基部までが、平滑につくられて手作りされた場合に生じる指痕などを残していないことなどを指摘出来る。大粒の珠文は、表面に指痕を残し、基部には貼り付けた痕を残しているから手作りされたものである。鬼瓦の側面はヘラケズリ仕上げ、裏面は側縁に近い部分をヘラケズリし中央部は指ナデしている。少量の石英粒を含むが良質の粘土が用いられ、灰白色で焼き上がりも良い。出土場所不明。

2は、3つの破片が接合された。鬼瓦の右下半部の破片で、棟をまたぐ刳り込みの1部が残っている。鬼面右頬の部分は、剝げ落ちて失われている。この剝げた痕には指ナデの痕が残っている。破片には牙のみが残っていて、その基部には指おさえで貼りつけた痕がある。側縁に近い部分には縦方向にヘラによってつけられた波状の文様が描かれている。この鬼瓦の場合、1とは異なって土台となる部分から手作りされたと思われる。まず、鬼瓦の平面の形状を3.0cmほどの厚さの粘土板で作り、この土台に鬼面を手作りしたと考えられる。土台となる部分の側

縁は直角に近く整形されているが、脚の部分では丸味をおびている。側面はヘラケズリされたあとをナデ仕上げし、裏面には板の木目の痕跡を残している。細かい石英粒を混じた胎土であるが良質の粘土が選ばれている。灰青色で須恵質に硬く焼き上がっている。第3トレンチの黄褐色土層から2片、灰色土から1片が出土している。

3は、今回出土の鬼瓦では手作りされた鬼面が最も良く残っている。鬼瓦の幅22.7cm・残存高23.0cm、鼻の最も高い部分までの厚さ9.1cm・側縁部の厚さは一定ではないが2.0～2.5cm程が計測できる。鼻の下には、口唇や牙が表現されていたはずであるが刳り込みの部分も残さず欠損している。横幅との対比を考えれば、左右の脚端まではさらに6～7センチ程あったであろう。大宰府式鬼瓦と比較すると次のような相違点を認める。大宰府式鬼瓦（以後、前者）では上辺が弧状に作られているがこの鬼瓦では中央頂部が尖って作られている。前者では頂部に鳥衾の懸りとなる下向の半円形の刳り込みがあるが、この鬼瓦では4つの穴が下向につけられている。この穴は裏面までは通じていない。この穴は、どのような目的でつけられたかもわからない。前者では、明確に額・眉・目と分けて表現されているが、この鬼瓦の場合、目の表現だけに留まり、額・眉は省略している。目は鼻柱の両側で斜め上に粘土を高く盛り上げて、その頂部に目の輪郭をヘラで描く。前者では鼻柱は、三段の瘤に表現されているものと縦に2分するような線があるものとがある。この鬼瓦では指で二段におさえた鼻柱が作られている。鼻柱の上には釘穴が焼成前に全面と背面の両側から穿たれている。前者では鼻は丸く作られ鼻腔も丸くすわっている。この鬼では鼻は尖りぎみの先端となっていて鼻腔の部分は鼻の幅を広げることで表現されている。鼻の下面は平に作るが、おもしろいことにはこの部分にヘラで刺突し



第22図　鬼瓦実測図（1/6）

て鼻孔を表現している。頬は大宰府式鬼瓦と同様、高く粘土を盛り上げて作っている。

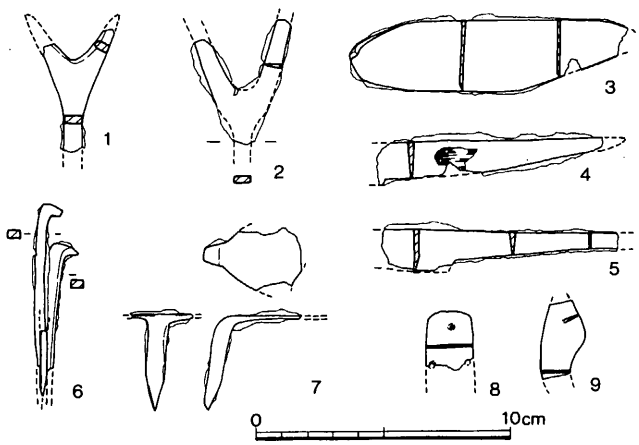
また、前者に見られる毛髪の表現や外区の連珠文帯はない。全体的に見て文様の省略が目立っているが、製作者には大宰府式鬼瓦の怒り顔が頭に入っており、それに似せて作ったであろうと思われる。

側縁の整形は明瞭ではないがヘラケズリで整えたものであろう。上辺では指痕が目立つ。裏面には、製作台の板の木目痕跡を残している。石英粒を多量に含む粘土を用いている。淡茶褐色で焼き上がりは悪い。SX4406から出土している。

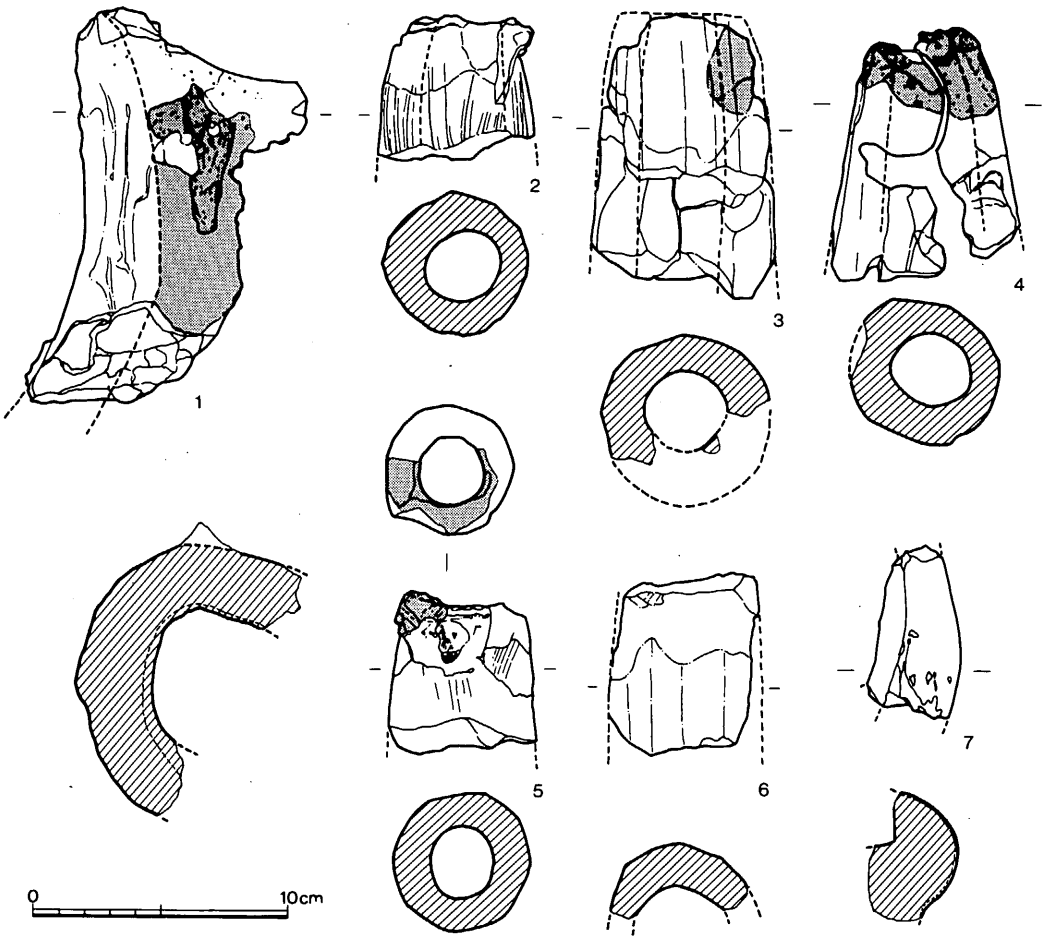
4は、出土鬼瓦のなかでは最も大きなものである。残存高32.2cm・残存幅3.2cmほどが計測される。顔面左半部の破片で眉・頬・口の部分が残る。高さは、上辺と脚部を見込んで35.0cm前後、幅は左眉がほゞ完全に残っていることを参考にして37.0cm前後と推定される。鬼瓦は土台となる粘土板をまず作り、頬などの各部分に必要な粘土を盛りつけて製作されている。眉は細く高く指でつまみあげるように作られ、先端は二段になり鬼瓦の左肩近くまでのびている。頬は眉の下で、眉から連なって作られ、口と思われる部分の斜め上で最も高くなる。口は、高く作られた頬から下に続く高まりと、頬から下顎に連なる高まりとに囲まれて丸く凹んだ状況に表現されている。眼球・鼻・口の部分半分以上が欠損しているため、顔全体の様子は想像しにくい。眉の上部には鳥衾瓦を懸ける余地が認められる。眉の上にはヘラにより横向の波状文が描かれている。頬の左にも同様の波状文が配置されている。側辺・上辺はヘラケズリ仕上げ、背面には横方向に木目痕が写しとられている。石英粒を含むが良質の粘土が用いられている。灰白色で焼き上りは硬い。来木瓦窯の崩落土中からの出土である。

鬼瓦では、この他に図版33-5に示した左目の破片が出土している。鼻柱と思われる部分が残ることと、ヘラ描きされた眼球がやや下を向いているものとして左目と考えた。用いられた粘土や、焼き上りの感じは、2の鬼瓦に近い。SD4416出土。

今回、出土した鬼瓦片5点は、一部笵型を用いた痕跡を残しているが、鬼瓦の平面形状の粘土板をまず作った上に鬼面の各部を粘土を盛って作る方法をとっている。総じて手作りされた鬼瓦と考えて良い。これらの鬼瓦は来木瓦窯で製作されたものと考えられる。同じ発掘区からは、文字瓦「安楽之寺」の文字が縦棒



第23図　鉄製品実測図（1/3）



第24図　鋳造関係遺物実測図（1/3）

で消された平瓦片が出土している。この瓦が来木瓦窯で同時に製作されたとすれば、この鬼瓦の年代も10世紀の前半におかれることになる。ただ、今回、同窯で製作されたと思われる軒瓦の中には、これよりやや遡って考えたい瓦当文様の軒瓦がある。また、大分廃寺で発掘調査された土壙（SK025）出土の鬼瓦も同様な製作手法によって製作されていて、９世紀前半に推定出来ている。この鬼瓦と共伴している軒瓦の瓦当文様との比較から考えると、これ等の鬼瓦の年代をやゝ遡らせて考えるべきものかもしれない。現状では、９世紀前半頃から10世紀前半頃としておくべきものと思う。瓦窯の使用された年代幅と確実な共伴資料が、今後にこの問題解決の手懸りとなる。なお、来木瓦窯のさらに西、松倉瓦窯から出土した鬼瓦は型づくりされていて、斜格子文の叩打痕を残す「佐」などの文字銘を残す丸・平瓦と共に出土している。

鉄製品（第23図、図版17・18）

鉄鏃（1・2）　1は雁股で両先端部へは直線的に至るが、端部を欠損しその形状は不明。箆被部の厚さは3㎜程度である。SD4416埋土中出土。2も比較的大型の雁股である。鏃身部の関で厚さ6㎜程度である。SX4406より出土。

鉄鎌（3）　装着部上縁は折り曲げられている。身部は研ぎ直され極端に細くなっており、柄付近も研がれている。9と同地点で出土した。

刀子（4・5）　4は刀先端部へは刃部は直線的に至る。胴部には木質が残る。上層上部暗茶褐色土層（3層）中より出土。5は刀部を大きく欠損する。柄部についても研がれている。3トレンチ上層下部暗茶色粘質土（10層）より出土。

釘（6）　3本が張り付いており、いずれも角柱である。頭部は折り曲げられて打ち広げられている。3トレンチ赤橙色砂質粘土層（7層）より出土。

鋲（7）　頭部を折り曲げ打ち伸ばしているが端部を欠損しており形状は不明である。SX4409暗灰色粘質土上層より出土。

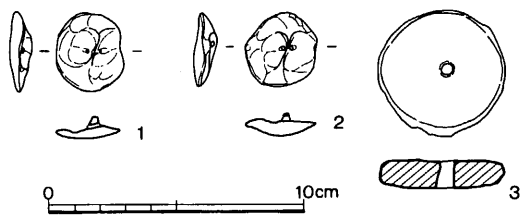
小札（8）　端部に1つと、中間部に穿孔が2つある。SD4416下層より出土した。

不明鉄製品（9）　両端部を欠損している。右側縁は研がれているようでもある。上層上部・黄褐色砂質粘土層より出土。

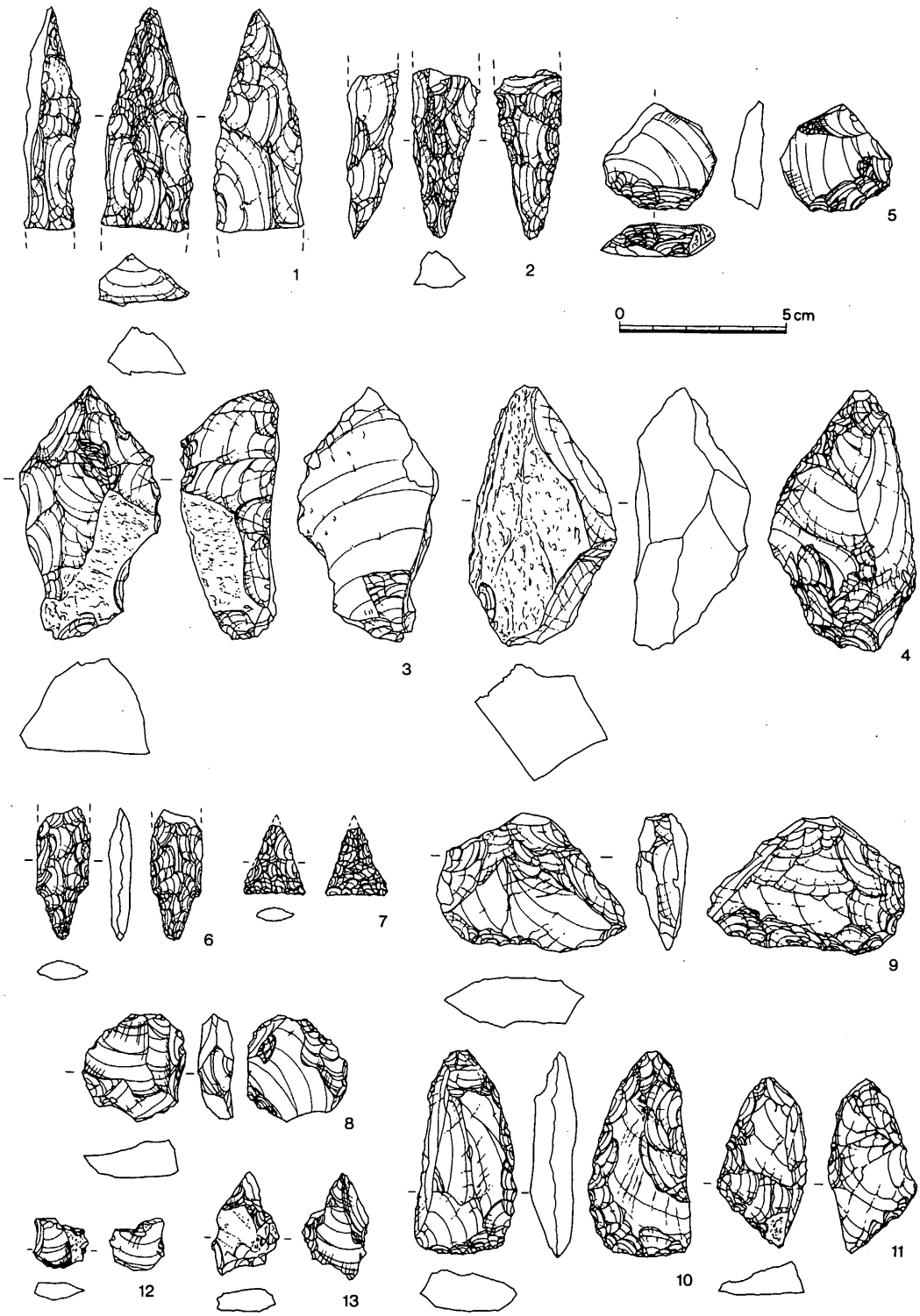
鋳造関連遺物（第24図、図版18）

鞴羽口（1～6）　1は大型の湾曲羽口で外面には溶解物が付着している。割れ口にも広く認められることから使用時に破砕し、廃棄されたと考えられる。胎土には1～2㎜大の砂粒をかなり含んでいる。元口外径約10.0cm、孔径5.0cmを測る。SD4415南壁黄色粘質土層（9層）より出土。2～6は小型品である。2は元口に溶解物が付着してすぼまっており、孔内にも溶解物が付着している。3は割れ口付近に溶解物が付着し一部孔内にも及ぶ。4も端部付近にのみ溶解物が集中し、一部ガラス質化している部分がある。5は割れ口端部に溶解物が集中する。外面は丁寧なナデにより仕上げられている。6は胴部片であり溶解物の付着は認められない。2の端部径3.0cm、最大外径6.5cm。3の孔径3.2cm、最大外径6.5cm。4の端部孔径3.0cm、最大外径6.5cm。5の孔径2.8cm、最大外径は5.8cm。いずれもSD4415黄色粘質土層（9層）出土で、1・2は南壁中より一括採取した。

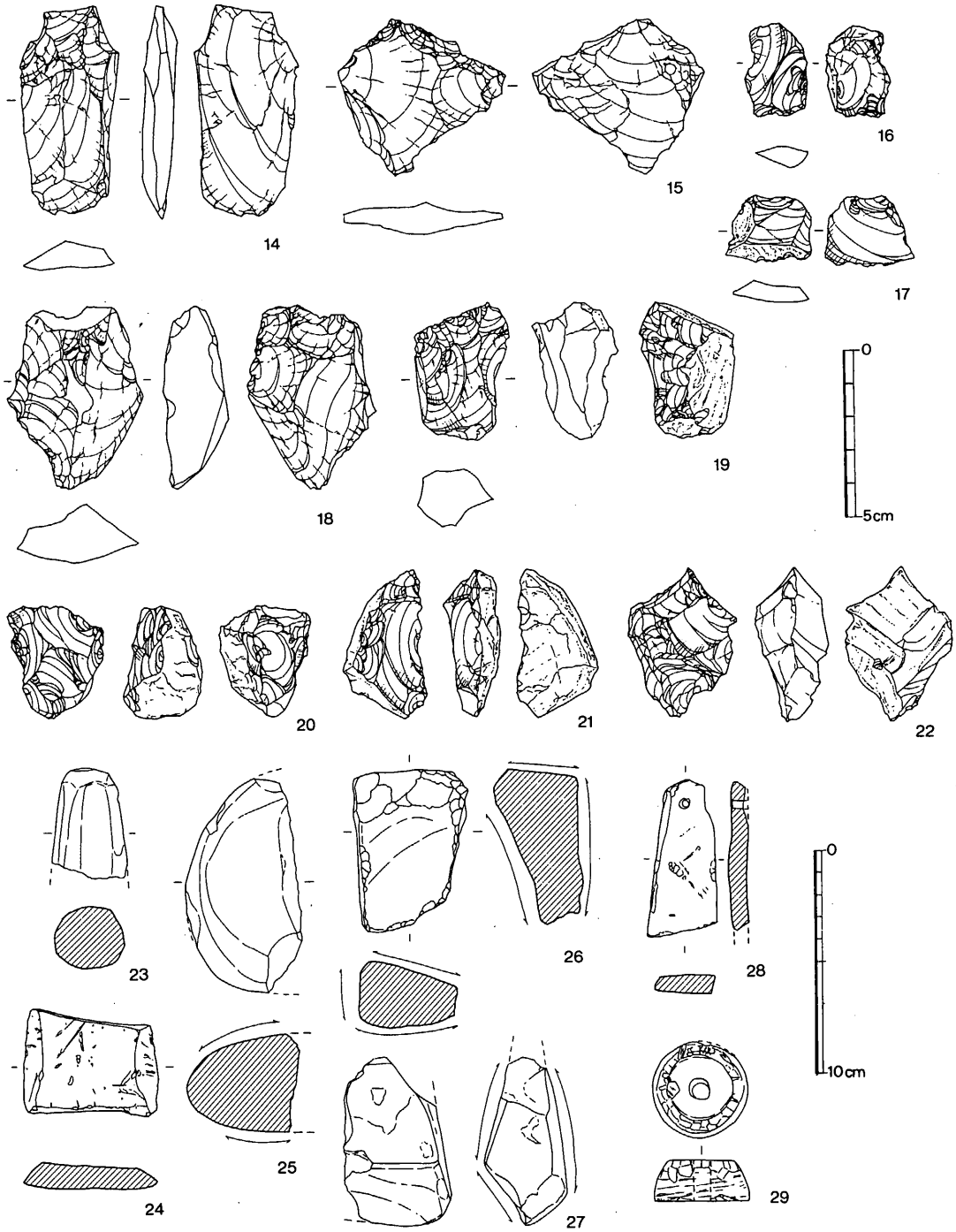
鋳型（7）　鋳型面は4.5cm幅程度の丸みを持つ部分がさらに外湾する。両端部は欠損している。鋳型面にはタール状のものが付着しており、断面にも及んでいる。このことから、型取り中に破損したと考えられる。いずれにせよ、大型で



第25図　土製品実測図（1/3）



第26図　石器・石製品実測図（1）（1/2）



第27図　石器・石製品実測図（2）（1/2　23～29は1/3）

円形の鋳造物が想定される。花崗岩質砂岩性で調査区北側表土中より出土した。

土製品（第25図、図版19）

模造鏡（1・2）　1・2の鏡面は凸面で、鈕部は摘み出されており、細い棒状の工具で穿孔されている。どちらもSI4411カマド右袖付近より出土した。

紡錘車（3）　器面はほとんど剥離している。穿孔は丁寧であり、径は4㎜強である。3トレンチ下層下部暗茶色粘土層（22層）より出土した。

石器・石製品（第26・27図、図版19）

石器（1～28）　1・2は角錐状石器でいずれも欠損している。1は背腹両面の調整は大きな平坦剥離が中心である。背面には稜上調整が行われており、全体に器厚は薄い。2はやや細身で、腹面には丁寧な平坦剥離が行われている。3はぶ厚い分割片に急角度剥離が行われ、背面に稜上調整が行われていることから角錐状石器の未製品と考えられる。4も塊状のサヌカイト片の稜上加撃や急角度剥離の調整が行われていることから同じく未製品と考えられる。5は厚手幅広剥片の打面部を除去する形で刃部加工が行われているスクレイパーである。6の茎部は両面より丁寧に調整され、胴部も薄く仕上げられている。7は先端部と左側縁部を欠損する。8～11はスクレイパーである。8は剥片に荒く刃部加工し、円形状に成形されている。9は厚

第4表　第169-2次調査出土石器・石製品観察表

No	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考	出土地点・層位
1	角錐状石器	サヌカイト	(6.80)	2.70	1.65	26.70	胴部以下欠損,169-1次出土	RN27住居跡埋土
2	〃	〃	(5.10)	1.95	1.55	13.2	先端～胴部欠損,169-1次出土	RL25暗褐土
3	〃	〃	7.65	5.15	2.95	89.4	未製品,169-1次出土	RO26段落暗褐土
4	〃	〃	7.90	4.50	3.50	100.5	未製品	SF29茶褐色土
5	スクレイパー	黒　曜　石	3.25	3.35	0.9	10.6		SE30暗茶色土遺構確認
6	石　鏃	サヌカイト	4.00	1.60	5.05	3.80		SG30,31暗茶褐色土
7	〃	黒　曜　石	(2.05)	1.90	0.40	1.00	先端欠,169-1次出土	RO27住居跡埋土
8	スクレイパー	〃	3.30	3.15	1.15	9.80	169-1次出土	RN27段落暗褐土
9	〃	サヌカイト	4.15	5.75	1.55	34.90	〃	RK～RL28拡張部表土
10	〃	〃	6.20	3.05	1.25	25.10	〃	RO28斜面埋土
11	〃	〃	5.30	2.65	1.00	13.20		SG30,31暗茶褐色土
12	微細剥離を有する剥片	黒　曜　石	1.55	1.70	0.55	1.20		SF29茶褐色土
13	〃	〃	3.20	2.00	0.70	3.80		SF31暗茶色土
14	剥　片	サヌカイト	6.40	3.00	0.85	17.50		tr3灰茶褐色土
15	〃	〃	4.70	5.00	9.50	14.00		SD30暗茶色土
16	〃	黒　曜　石	2.80	1.90	0.65	3.30		SG32暗茶褐色土
17	〃	〃	2.00	2.60	0.65	3.20		SF29暗茶褐色土
18	〃	サヌカイト	5.50	4.05	1.75	32.40		SG30,31暗茶褐色土
19	〃	黒　曜　石	4.15	2.90	1.75	21.60	169-1次出土	RO27住居跡埋土
20	〃	〃	3.45	2.80	1.75	16.50	〃	段落暗褐土
21	〃	〃	4.50	2.50	1.45	12.80		SF29茶褐色土
22	〃	〃	4.50	3.30	2.40	19.30	169-1次出土	RO27住居跡埋土
23	石　斧	硬質砂岩	(5.00)	3.35	2.80	57.30	〃	RO28斜面埋土
24	不明石製品		(6.00)	4.80	1.10	61.50		SJ34拡張区表土
25	磨　石	花　崗　岩	(9.60)	(5.20)	4.40	288.30	169-1次出土	RN26段落暗褐土
26	砥　石	砂　岩	7.25	5.20	3.75	15.76		tr3暗灰色土
27	〃	〃	(7.55)	4.80	3.65	137.70	169-1次出土	RQ22中～下層
28	滑石製品	滑　石	(7.00)	3.15	0.85	26.90		SE33黄色崩落土
29	滑石製紡錘車	〃	4.30	4.25	1.90	54.10		RP26S-58掘形

手幅広の不定形剝片の端部が刃部加工されている。10は不定形剝片の端部と側縁部に加工を行い、「へら」状に仕上げている。11の端部は薄く「へら」状である。12は剝片端部に13は側縁部に微細剝離が認められる。14～18は不定形剝片類で、17以外は背面と腹面の剝離方向は異なる。18～23は石核で18は剝離面の平坦面を、その他は礫面を加撃し剝片剝離を行っている。また、19・21は打面を1箇所に固定している。23は硬質砂岩を丁寧に研磨しており、磨製石斧の基部と考えられる。24は腹面と両側縁部背面を面的に磨いている。側縁端部には刃こぼれのような剝離も認められる。25は破損面にも磨面がある。26は砥面は3面で、27は4面ある。いずれも砂岩製。28は穿孔のある砥石で表裏面と両側面に砥面がある。わずかに紐ずれがある。

紡錘車（29）　滑石製で最終的には両面を磨いて仕上げられている。

小　結

今回の2次調査では、弥生・古墳・奈良・平安時代の各時代にわたる遺構を検出した。これら検出遺構の各時期は、前年度実施した東丘陵頂部～斜面部において検出したそれぞれ各時代の遺構群と大きな差はない。

弥生時代では、調査区西側斜面落ち際で土壙SK4405を検出した。出土土器片からは、前期末～中期の時期が与えられる。またそれ以外にも、東西丘陵の谷部SX4420では弥生時代の遺物包含層を確認したが、これも時期的には大きな差はない。東丘陵部での調査成果と併せて考えると、以前より指摘されてきたことだが、この北へ伸びるSX4420周辺の台地～斜面部にかけては弥生時代の遺構がかなり広範囲にわたり点在するものと考えられる。一方、古墳時代では、竪穴住居2棟を検出した。同一場所で建て替えが行われている。出土遺物により6世紀中～後半の時期が与えられ、1次調査区検出住居と同時期である。これらの住居がSX4420を挟んで存在していたのであろう。また模造鏡、滑石製紡錘車など特殊遺物等は、これらの住居群の性格が一般的なものとは異なる性格を持つものであったことを暗示する。いずれにせよ、同地区は大宰府設置以前も積極的に利用された場所であり、設置後も政庁やその前面域とは異なり大きく地形を改変することなく利用され続けた場所である。

7世紀後半から8世紀代にかけての遺構については、およその時期については推定できるが遺物との関係によって明確に語ることはできない。この時期にかかわる遺構としては、SB4410、SD4415があげられる。掘立柱建物SB4410は、調査において確認した限りでは、1間×6間の南北棟である。西側には斜面がせまっており、旧地形を考慮すれば本格的に斜面に取りつく構造を持つものであったと考えられる。また、その位置づけについても推定せざるをえないが、現時点では東斜面部で検出したSB4245等の建物群と谷部を挟んで並存した可能性が高い。一方、SB4415埋土中からは鋳造関連遺物が多量に出土した。このことと第19次調査で検出した炉跡や、第169-1次調査の成果をあわせて考えると、金属生産工房の中心は調査区南東側に

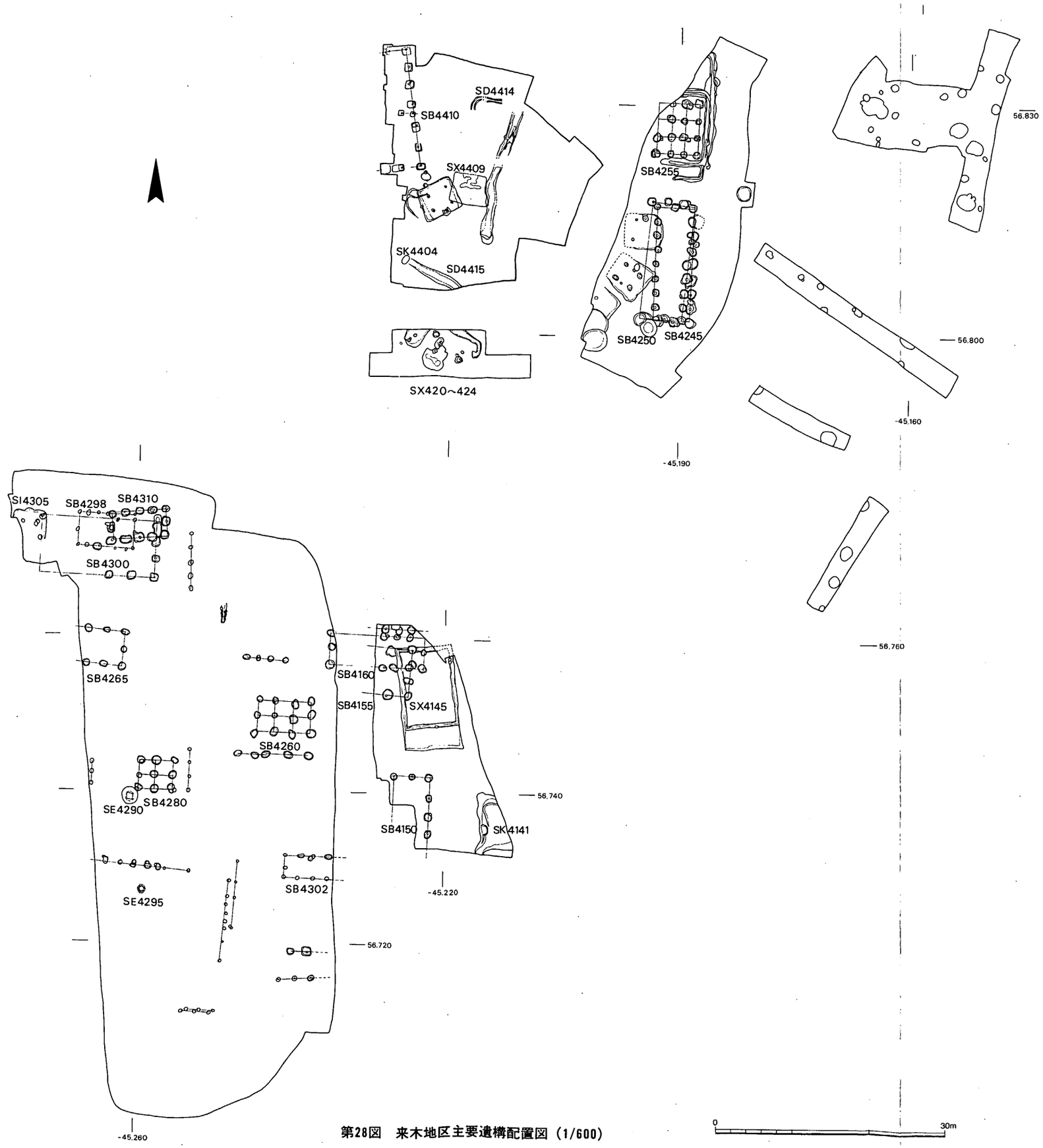
存在したと考えられる。

来木瓦窯群は、来木西丘陵斜面部の広範囲にわたって構築されている。調査区西側の道路切り通し部分には、現在もその断面が何ヵ所か確認できる。また、その上の斜面部には天井部が陥没した跡と見られる窪みがある。現在この斜面部には、8基の窯が確認されているが、そのうちの2基については1959年に大川清・山中英彦氏らによって調査が行われており、構造が明らかにされている。構造の詳しい説明については省略するが、花崗岩の岩盤を掘り抜いた、全長4.5m、燃成室長3.5m、幅1.7m程度の規模である。この規模を斜面から調査区へ当てはめてみると、すでに5mを超えており本調査区内では瓦窯本体については、検出し得ない状況である。このことから、道路拡張時、その本体については破壊されたと考えられる。

調査当初、北と南にそれぞれ大きく2ヵ所の瓦溜まりを検出した。そしてこの瓦溜まりSX4406やSX4407は瓦の“灰原”ではないかと考えた。しかし、赤褐色や黄褐色土らが混在し、純粋な灰や炭化物の堆積が認められないことから、道路拡張や畑の耕作によって破壊されたものであることは間違いないであろう。一方、調査区南側で検出したSX4409は暗灰色粘質土が方形プラン中に埋っている。この暗灰色粘質土は、この来木丘陵には堆積しない土であり、別の場所より採取された客土であることは間違いない。また、この粘土はかなり良質であり、瓦の生地にも十分に利用できる。これらのことから、SX4409は来木瓦窯に伴う粘土置き場などの施設の可能性も考えられる。

ところで、この来木瓦窯群にかかわると考えられる整地面は大きく2期ある。1つは14層や16・17層上面である。これらの上層には、先の暗灰色粘質土（11層）が乗っており、17層上面では焼けて硬化した面があることからここで一時期おいてその上層の堆積があったことが判る。そして、14層や16・17層は8世紀代の遺物包含層でもある。もう一時期は、東斜面からの堆積である暗茶色粘土（10層）や暗黄灰色砂質粘土（8層）上面である。これらの上面にも6層暗灰色粘質土やSX4419が乗っている。また、SX4409もこの整地面に伴う可能性が高い。

最後にこの来木瓦窯と金属生産工房との時間的関係であるが、東斜面部堆積層である10層中には、10世紀前半や8世紀代の土器と共に鋳造関連遺物が多量に出土している。このことから、この10層堆積後に整地される2期目の整地層の時期（10世紀以降）には、金属生産工房はすでにこの場所からは失われていたと見てよいであろう。問題となるのは、瓦窯創業期と考えた1期目の整地時期（8世紀後半～9世紀前半）での金属生産工房と瓦窯との関係であるが、この点について言及するには現段階では資料不足である。ただこの金属生産から瓦生産への変化は、大宰府における官営工房の質的変化にかかわる問題であり、今後検討しなければならない重要な課題である。この来木地区についての調査は今次調査でほぼ主要な地域を終了したことになる。検出した建物は10数棟にのぼるが、工房諸施設としての建物群の検討とその変遷については、ここでは言及し得ない。この問題については、稿を改めて検討したい。

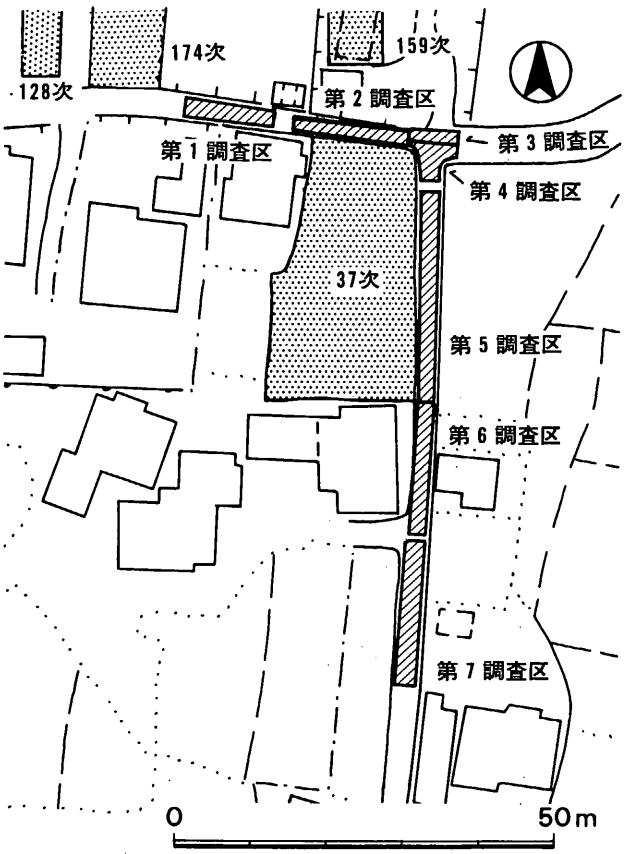


第28図　来木地区主要遺構配置図（1/600）

2．第176次調査

本次調査は太宰府市工務課による、上・下水道工事に伴う事前の発掘調査である。昨年度の事業であるが、調査が延びたため、報告を本年度に譲ることにしていた。調査は平成８年９月24日から開始し、同年12月２日の期間実施した。調査は工事の進行に合わせて逐次対応する事で進めていった。調査対象の区間(延長107m道路面)を北から１～７区に分けて、調査を行った。路面のアスファルトと道路地盤の盛土を重機により除去した後、その下層は作業員の手により掘り進めた。調査地番は太宰府市観世音寺６丁目896・132他で、調査面積は延べ260㎡である。

調査対象地が市道であり、また住宅が隣接しているため、通行の確保をしなければならず、調査期間と範囲に制約された。概ね、幅2.5mで、長さは工事区間にあわせて設定した。調査の結果、掘立柱建物の柱穴・溝・土壙などを検出し、道路下にも遺構が残存していることが確認された。全体に中・近世の溝等により古代の遺構は削平されて、やや明瞭さを欠いているが、第37次調査の東側に隣接する第５調査区では掘立柱建物の柱穴を良好な状況で検出することが出来た。



第29図　第176次調査調査区配置図（1/1,000）

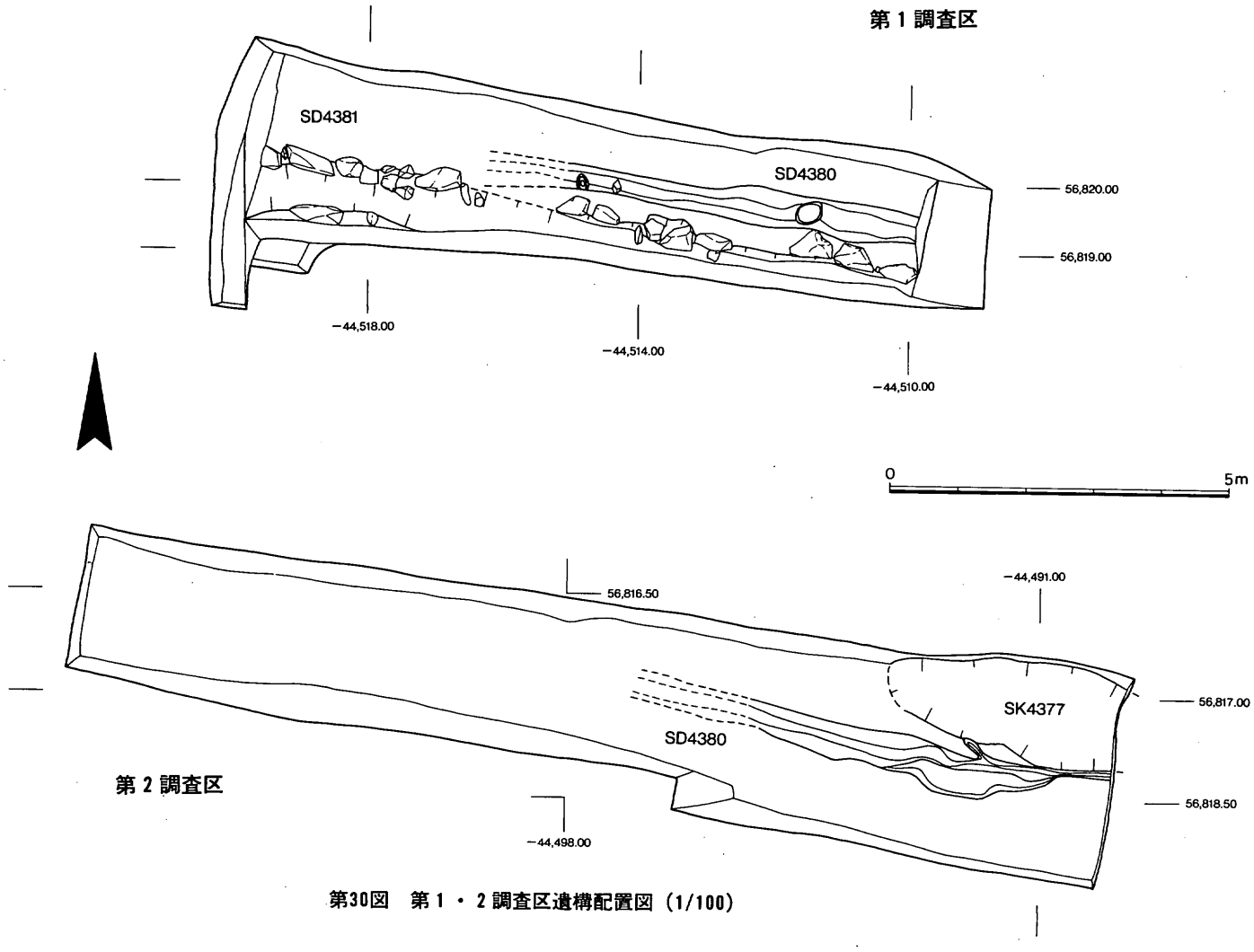
検出遺構

第１調査区　（第30図、図版７）

第37次調査の北辺にあたり、最西端の調査区である。幅2.5m、長さ11.5mについて調査した。調査の結果、古代の遺構として東西方向の溝SD4380を検出した。この溝も近・現代の溝により削平を受け、残存状況は良好でない。

溝

SD4380　調査区のほぼ中央にある幅0.35m、深さ0.2mの東西方向の溝である。後世に削平されているためか、残りは良くない。南側には学校院に関する建物が存在し、37次では発掘区の北端部で柱穴が断面に確認されていることから、直接にはそれと関連するものではない。むしろ、それ以降のものと



第30図　第 1 ・ 2 調査区遺構配置図（1/100）

考えられる。

第 2 調査区（第30図、図版 7）

第 1 調査区の東側に接して幅2.5m、長さ15.0mの調査区を設定調査した。調査区の西半分は撹乱によって遺構は失われている。調査の結果、第 1 調査区で検出したSD4380の延長を検出し、またその北側で土壙SK4377を検出した。

溝

SD4380　第 1 調査区と同じく、後世の削平が著しくその痕跡が僅かに残存しているだけである。東端部付近ではその痕跡は殆どなくなり、幅0.15mの溝として確認できるのみである。

土壙

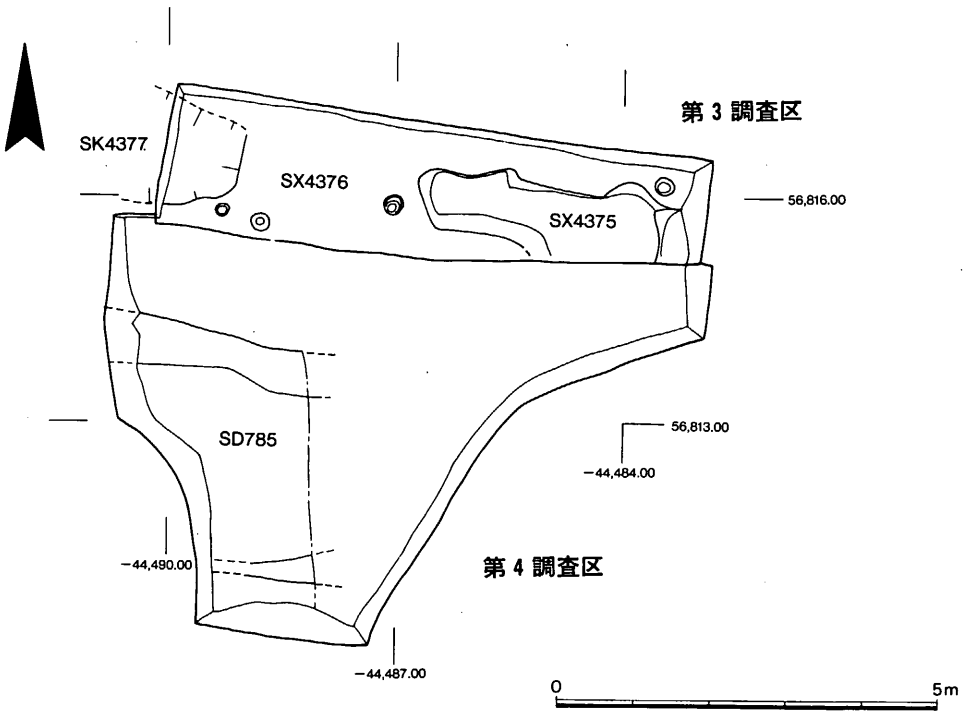
SK4377　調査区の東端部で検出した浅い落ち込み状のものである。若干の土器が出土している。

第 3 調査区（第31図）

幅2.0m、長さ7.0mを調査した。幅が狭く充分な遺構の解明にはならなかったが、土壙・ピット・落ち込みを検出した。

土壙

SK4377　調査区の西端で検出した土壙で、第 2 調査区検出のものと一連のものである。この



第31図　第 3 ・ 4 調査区遺構配置図（1/100）

他に、径0.15～0.25m前後のピット４個SX4376と深さ0.5m前後の浅い落ち込みSX4375を検出した。

第４調査区（第31図、図版７）

第３調査区同様、水道管の埋設等があり、僅かの範囲に限って調査できただけである。東西方向の溝を検出した。

溝

SD785　第37次調査でその一部を検出していたもので、その延長の溝である。37次では溝の幅や深さについては不明であったが、今回の調査である程度の規模を明らかにすることが出来た。幅3.0m、深さ0.6mで、さらに東方に延びている。出土した遺物から13世紀代のものと考えられる。第１・２調査区で近世～現代に至る東西方向の溝を検出しているが、遡るとこの溝が初源となると考えられる。

第５調査区（第32図、図版8）

第４調査区から南に幅2.2m、長さ22.0mの調査区を設定し調査した。調査の結果、掘立柱建物の柱穴・土壙・ピット群等を検出した。

掘立柱建物（第33図、図版８・９）

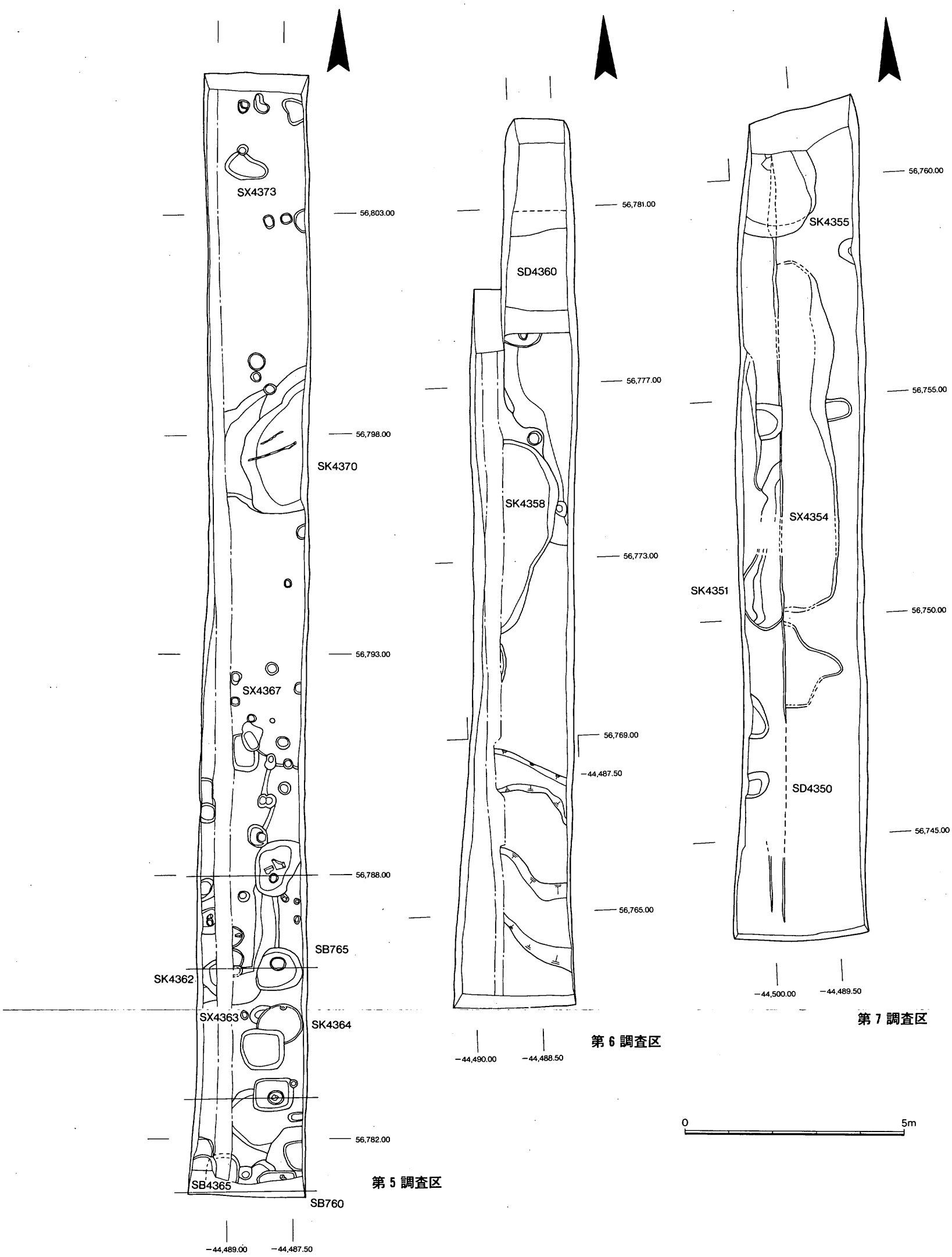
SB760　SB765と重複する建物で、SB765に先行する。37次調査時には同じ性格を有する建物との解釈がなされていたが、その規模が明らかではなかった。今回の調査で、その規模がある程度明らかになったのは大きな成果であろう。規模は２間以上×７間以上で、柱間は桁行が2.1m等間。梁行は一間分が2.1mである。

SB765　第37次調査で検出した掘立柱建物の延長部である。桁行の柱間は2.1mで、それを延長すると、今回検出した柱穴に柱間距離･方向が一致することからSB765の延長と判断した。また、南北に並ぶ柱穴があり、その柱間距離を測るとSB765の西側の梁行の柱間に一致するものの、柱筋にのらない。そのため今回の調査の結果では、この建物はさらに東側に延びる桁行７間以上の規模をもったものであることが明らかとなり、過去の調査の所見による中心的建物との意見をさらに補強することになった。柱掘形の埋土中には文様塼の破片が入っていた。この状況は37次調査でもみられ、この建物の特徴でもある。柱掘形の深さは0.4～0.5mで、柱の径は柱痕跡から25cm前後が推定される。

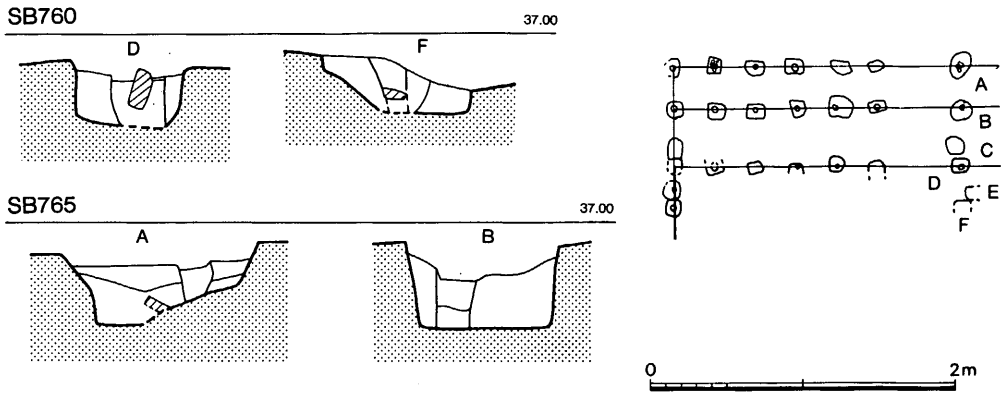
この他に幾つかの柱穴がみられるが調査区内ではまとまらない。

土壙

SK4370　調査区のほぼ中央で検出した径約3m、深さ0.4mの土壙である。半分は調査区外であるため未検出である。埋土のなかには炉壁片がかなりはいっており、鋳造に関連するものかもしれない。底部には自然木の木片もみられ、また埋土中からは土器片も出土した。



第32図　第 5 ・ 6 ・ 7 調査区遺構配置図（1/100）



第33図　掘立柱建物SB760・765柱掘形断面図（1/50）

不明遺構

SX4363・4367・4373　調査区の全面にあるピット群である。13世紀以降のものであるが、建物などにはまとまらない。

第6調査区　（第32図）

第5調査区に接して幅2.5m、長さ2.0mの調査区を設定し調査した。調査の結果、検出した遺構は浅い土壙状の落ち込みだけで、その他は顕著な遺構はみられない。第5調査区と比べ、遺構の密度や堆積土の状況が異なっているのが特徴としてみられる。

土壙

SK4358　調査区の北辺部で検出した深さ0.2～0.4mの浅い土壙である。今回はその一部を検出しただけで、大部分は調査区の西側に広がり未調査である。埋土中には土器片が若干みられるだけである。

第7調査区（第32図、図版8）

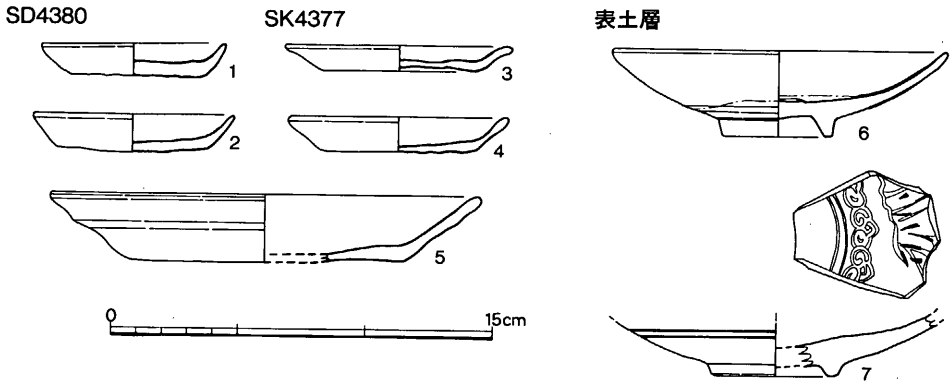
第6調査区から約2.5mの間隔をおいて幅0.6m、長さ19.0mの調査区を設定し調査した。調査の結果、第6調査区と同様に顕著な遺構は見られず、北端部で土壙を検出したのみである。

溝

SD4350　発掘区の南辺部で検出した幅0.6m、深さ0.2mの浅い溝である。

土壙

SK4355　調査区の北端部で検出した径が2.5m前後の土壙で、約3分の1を検出したが大部分は調査区外のため未調査である。ほぼ円形状を呈し、深さ0.6mで、埋土中より出土した遺物から13世紀代のものと考えられる。



第34図　第２調査区SD4380、SK4377、表土層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

出土遺物

第２調査区出土土器

SD4380出土土器（第34図、図版19）

土師器

小皿（１・２）　ともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径7.3・8.0cm、器高1.0・1.4cm。

SK4377出土土器（第34図、図版19）

土師器

小皿（３・４）　ともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径9.0・8.7cm、器高1.0・1.4cm。

杯（５）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径17.0cm、器高2.7cm。

表土層出土陶磁器（第34図、図版19）

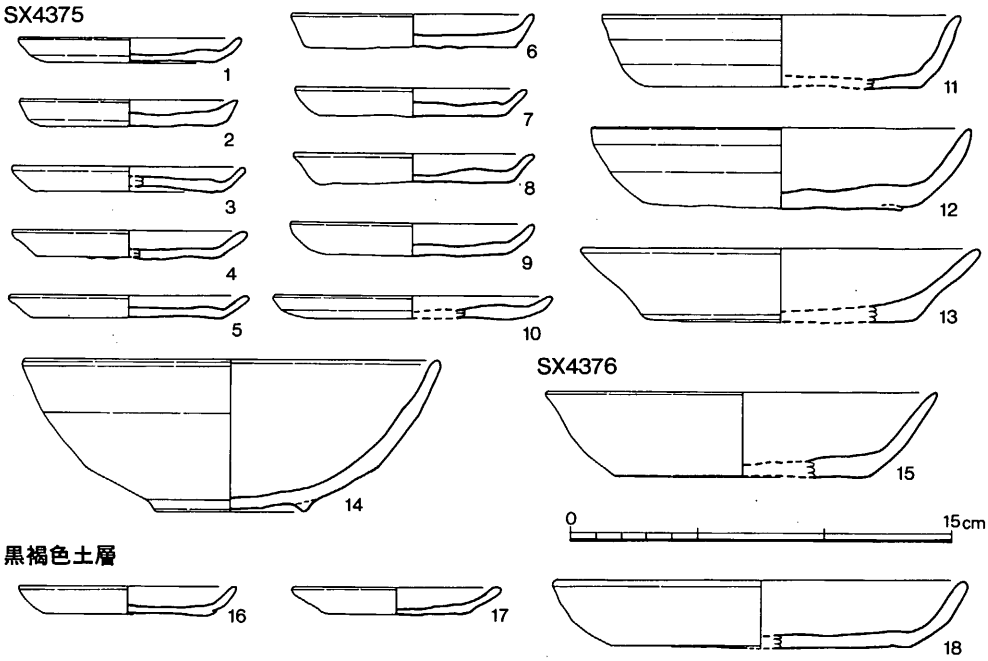
朝鮮陶磁器

皿（７）　小片であるが、高台径5.0cmに復元できる。胎土は暗灰色でやや粗い。灰色味のある緑色の釉を、高台畳付きを除く全面に施す。体部外面に２条の圏線を白象嵌し、内面にも圏線、雲文、花文風の文様を象嵌する。

日本製陶磁器

青白磁

皿（６）　胎土は明るい灰白色で精良、黒色粒を含む。釉の色はやや黄味をおびた水色。体部下半までやや厚めに施釉し、内底部の釉を輪状にカキ取る。露胎部分には、はなれ砂が残る。釉調と施釉方法から有田産の可能性がある。復元口径13.2cm、器高3.4cm。



第35図　第３調査区SX4375・4376、黒褐色土層出土土器実測図（1/3）

第３調査区出土土器

SX4375出土土器（第35図、図版20）

土師器

小皿（１～10）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径8.6～11.1cm、器高0.9～1.4cm。

杯（11～13）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復原口径14.2～15.8cm、器高2.9～3.2cm。

瓦器

椀（14）　径の小さな三角高台が外底部に貼付される。口縁部付近はヨコナデ調整、内底部はナデ調整、その後内外面にミガキを施す。ただし、磨滅のためその単位は不明瞭である。外底部には板状圧痕が残る。胎土は精良。復元口径16.4cm、器高6.0cm。

SX4376出土土器（第35図、図版20）

土師器

杯（15）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径15.2cm、器高6.0cm。

黒褐色土層出土土器（第35図、図版20）

土師器

小皿（16・17）　ともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径8.3・8.6cm、器高1.0・1.1cm。

杯（18）　体部外面ヨコナデ調整、体部内面および内底部は磨滅のため調整不明。外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径16.0cm、器高2.7cm。

第5調査区出土土器

SB760出土土器（第36図、図版21）

土師器

杯（1）体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部はヘラ切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径16.0cm、器高3.0cm。

甕（2）　口縁部から胴部上半を残す小片である。口径27.5cmに復元できる。胴部内面はヘラケズリを行い、口縁部屈曲部にはするどい稜がめぐる。体部外面はハケメ調整。

SK4370上層出土土器（第37図、図版21）

土師器

小皿（1～11）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整。外底部は6のみヘラ切り離しで、他は糸切り離しである。すべて板状圧痕がみとめられる。口径は7.9～10.5cm、器高0.7～1.2cm。

杯（12）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径15.2cm、器高3.0cm。

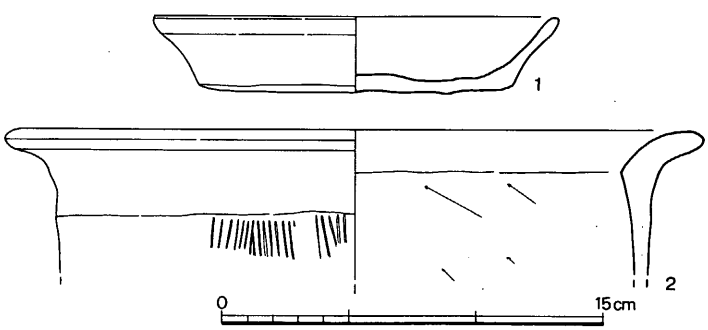
土師質土器

鍋（13）　口縁部は逆「L」字形につくり、接合部を上端からヘラ状工具で押し引きし、縄目状にする。体部内外面はヨコ方向のナデ調整。内面はヨコ方向のナデ調整。外面には煤が付着する。御笠川南条坊遺跡、前田遺跡から類例が出土している。それらの類例から、体部は緩やかなカーブを描いて丸底になるとおもわれる。

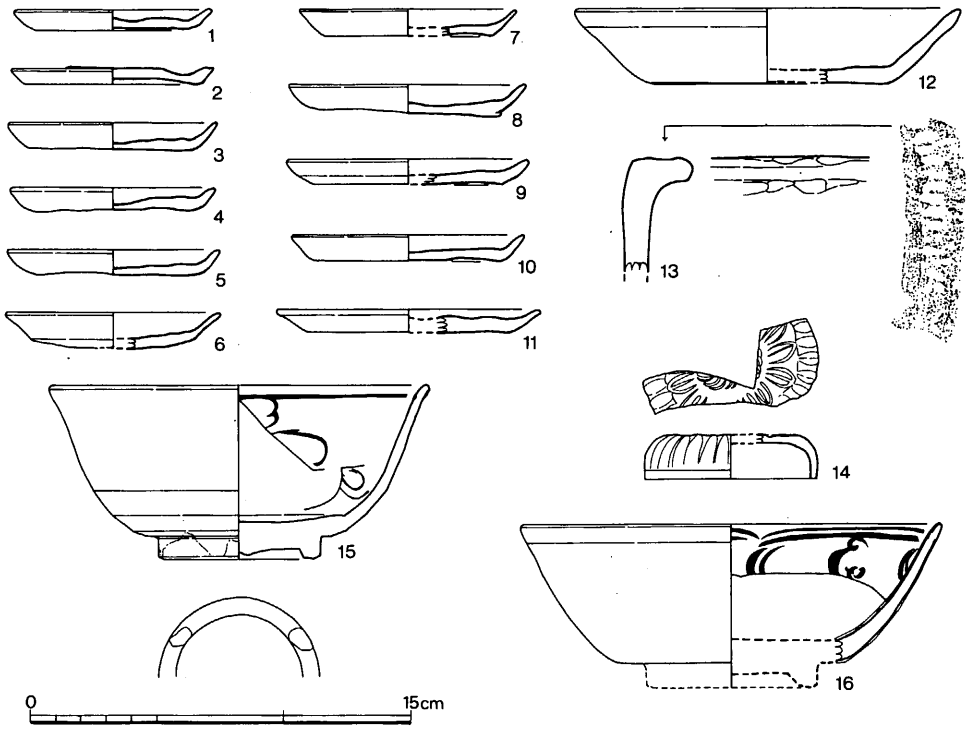
中国陶磁器

龍泉窯系青磁

椀（15・16）　15の胎土は灰色でやや粗い。釉



第36図　第5調査区SB760出土土器実測図（1/3）



第37図　第5調査区SK4370上層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

の色は青味をおびた灰白色である。体部と高台部の境目まで施釉し、口縁部外面に釉だまりがみられる。口縁部内面に1条の沈線、体部内面に線彫りの曲線文を施す。高台畳付きに目跡が残る。目跡の周囲はあずき色に発色。16の胎土は濃い灰色でやや粗い。釉の色は褐色味をおびた緑色である。体部外面は風化がすすみ、光沢を失っている。

青白磁

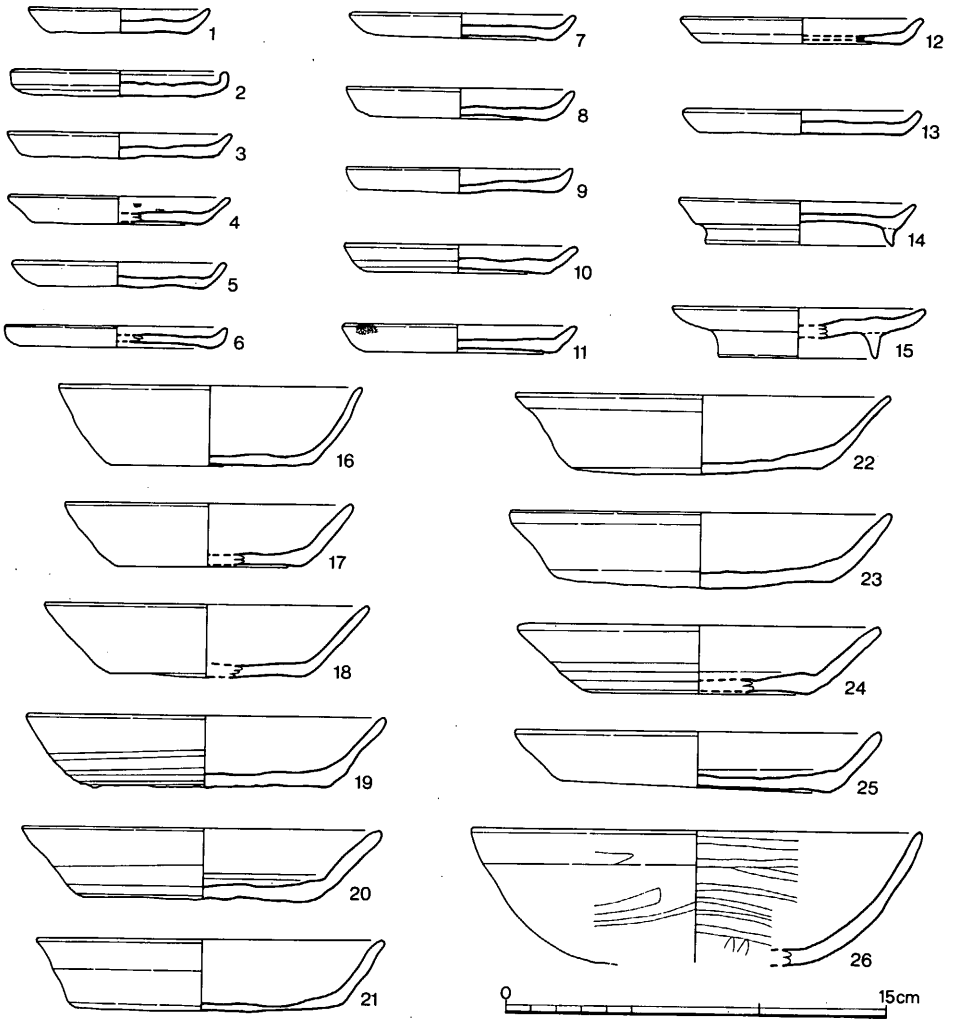
合子（14）　型押しによる花文をあしらっている。外面全面と天井部内面にうすく淡青色の釉をかける。胎土は淡灰色で黒色粒を含む。復元口径6.6cm、器高1.8cm。

SK4370出土土器・陶磁器・土製品（第38・39図、図版21～23）

土師器

小皿のうち、平底から体部が直線的に立ち上がり、器高が低いものを小皿a、小皿aに高台がつくものを小皿cとする。

小皿a（1・3～13）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径は7.15～9.6cm。器高0.8～1.2cm。4は体部内面と内底部に、8は体部外面に、11は口縁部内外面に油煙の付着がわずかにみられる。

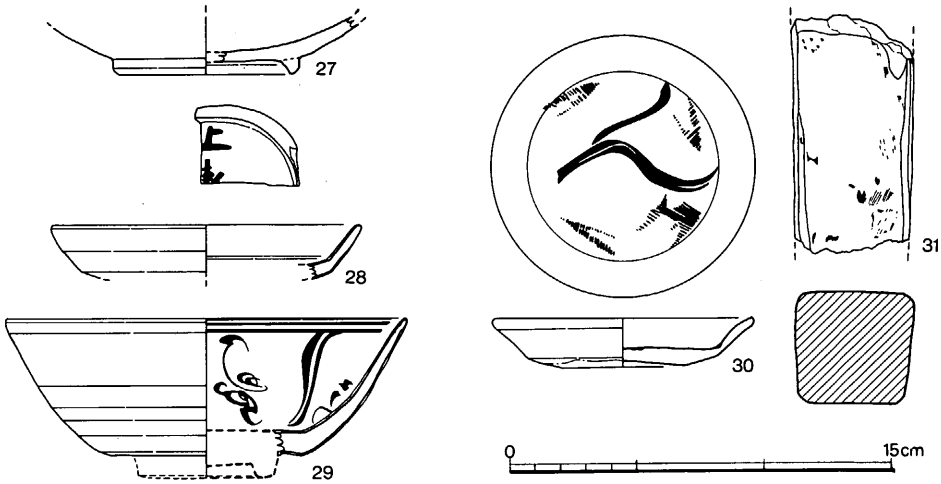


第38図　第５調査区SK4370出土土器実測図（1/3）

小皿（２）　内底部、体部内外面ヨコナデ調整。外底部はヘラ切り離し後ナデ調整。体部を直立させる蓋的な形態である。胎土は精良で焼成も良い。復元口径8.6cm、器高1.0cm。大宰府史跡第46次調査でも出土している。

小皿c（14･15）　14は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り離し後ナデ調整。口径9.6cm、器高1.9cm。15は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、底部はヘラ切り離し後ナデ調整。胎土は精製されており、2の皿と似る。復元口径10.0cm、器高2.0cm。

杯（16～25）　16は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部はヘラ切り離し後、



第39図　第5調査区SK4370出土陶磁器・土製品実測図（1/3）

未調整。復原口径12.0cm、器高3.0cm。他はいずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径により大きく二つに分けられる。17・18は小型で、口径11.4・12.8cm、器高2.5・2.9cm。19～25は口径13.8～15.1cm。器高2.9～3.2cm。20は体部内面の一部に油煙が付着する。22は底部から体部にかけての約1/3の範囲で、内外面に黒斑がみとめられる。

瓦器

椀（26）　体部内面はヨコ方向、内底部はジグザグに粗いミガキを施す。体部外面もミガキを施すが、内面よりもさらに粗い。体部外面中位にコテあて痕が残る。復元口径19.8cm。

灰釉陶器

皿（27）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部に粗いミガキを施す。外底部は糸切り離し後、未調整。また、「上□」の墨書がみとめられる。高台は三日月高台であるが、内側下半の内湾や外側下方の稜は弱い。残存部には施釉されていない。高台径6.8cmに復元できる。

中国陶磁器

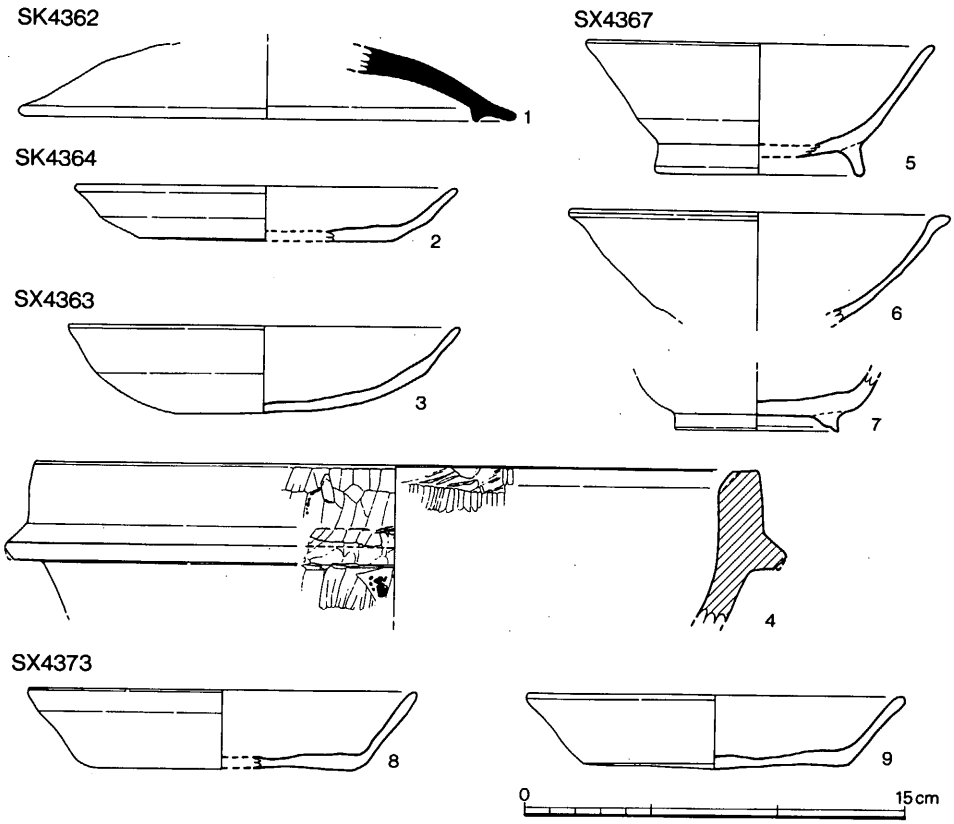
龍泉窯系青磁

皿（28）　胎土は濃灰色で精良である。釉の色は褐色味をおびた緑色である。口径12.2cmに復元できる。

椀（29）　胎土は灰色でやや粗く、釉の色は灰色味をおびた緑色である。内底部に片彫り文様が施されているが、ごく一部しか残存していない。復元口径15.8cm。

同安窯系青磁

皿（30）　胎土は灰色でやや粗く、釉の色は水色である。体部外面下半と底部には施釉しな



第40図　第5調査区SK4362・4364、SX4363・4367・4373出土土器・陶磁器・石製品実測図（1/3）

い。内底部にヘラによる片彫り文様と櫛によるジグザグ文様を施す。口径10.3cm、器高2.0cm。

土製品

棒状土製品（31）　両端を欠損しているが、おそらく一方の端を細くする棒状になるであろう。胎土は粗く、石英粒を多く含むのを特徴とする。これは後で述べるが火熱を受けることを想定して、このような粗い胎土を用いたと考えられる。用途としては容器を支えるための支脚の可能性が高い。側面は平滑に仕上げる。大宰府史跡周辺では、水城跡、御笠川南条坊遺跡に類例がみられる。

SK4362出土土器（第40図）

須恵器

蓋（1）　全体に焼きゆがんでいるが口径19.6cmに復元できる。天井部内面をナデ調整、他は内外面ともヨコナデ調整する。

SK4364出土土器（第40図、図版23）

土師器

杯（2）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部は磨滅により調整不明、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径15.1cm、器高2.2cm。

SX4363出土土器・石製品（第40図、図版23）

土師器

丸底杯（3）　体部内面の上半から体部外面はヨコナデ調整、体部内面の下半および内底部はミガキ調整、外底部はヘラ切り離しのままである。内底部にはコテあて痕が残る。口径15.5cm、器高3.5cm。

石製品

石鍋（4）　褐色を呈する滑石製。小片だが、口径28.6cmに復原できる。鍔は先端を欠失しているが、断面は正台形で垂下している。口縁は直立し、底径が口径の約1/2になるタイプである。外面はタテ方向に幅5.0～7.0mmのノミ痕が明瞭に残る。内面はなめらかに仕上げる。口縁部平坦面に再加工の痕がみとめられる。鍔下半部から胴部に煤が付着する。

SX4367出土土器・陶磁器（第40図、図版23・24）

土師器

椀（5）　内外面とも磨滅著しく調整は不明である。復元口径13.8cm、器高5.2cm。

灰釉陶器

椀（6）　口径15.0cmに復元できる小片である。内外面ともヨコナデ調整で、残存部には施釉されていない。胎土は大粒の砂粒を多く含む。

緑釉陶器

椀（7）　高台径6.6cmに復元できる底部片である。外底部は糸切り離し後未調整で、低い有段の輪高台をもつ。胎土は精良で土師質に焼成されている。釉は濃緑色で、高台内部をのぞく全面に施釉される。内底部に重ね焼きの痕跡がある。

SX4373出土土器（第40図、図版24）

土師器

杯（8・9）　ともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。9は内面に油煙の付着がみられる。口径15.4・15.0cm、器高3.2・2.9cm。

包含層出土土器（第41図、図版24・25）

土師器

小皿（1～5）　1・3は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部はヘラ切り痕と板状圧痕がみとめられる。1はスリップを施す。口径9.0・8.5cm、器高1.1・1.8cm。2・4・5は体部内外面ともヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径9.2～9.4cm、器高1.2～1.5cm。

杯（6～9）　6・7は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部はヘラ切り痕と板状圧痕がみとめられる。7はスリップをほどこす。復原口径11.0・12.8cm、器高3.0・2.8cm。8・9はともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復原口径14.6・15.4cm、器高3.3・2.6cm。

椀（10・11）　10は全体に器面の磨滅が著しく調整不明。高台径8.6cm。11は体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部はヘラ切り離しで板状圧痕がみとめられる。胎土は精良で、橙褐色を呈する。高台径8.4cm。

甕（12）　口頸部外面はヨコナデ調整、肩付近は指ナデ調整。内面は磨滅が著しく調整不明。外面には部分的に煤が付着する。

小壺（13）　体部外面の上半はヨコナデ調整、下半および底部は指ナデ調整。内面は磨滅が著しく調整不明。口縁部内面と外底部の一部に煤が付着する。胎土は精良。口径14.8cm、器高10.1cm。

篠窯産須恵器

鉢（14）　口縁端部を内側に折り曲げ、全体を丸く肥厚させる。口縁部直下でわずかに反転し屈曲する。内外面ヨコナデ調整。復元口径20.0cm。胎土はよく精製されており、砂粒をほとんど含まない。

灰釉陶器

皿（15・16）　ともに体部内外面ヨコナデ調整、内底部は粗いミガキ、外底部は回転ヘラケズリを行う。体部内面および口縁部外面に褐色を呈するなまこ状の釉をかける。胎土は精良で黒色粒を含む。15は体部外面下半の一部にもミガキをかけている。また、外底部に墨書があるが、判読できない。復原高台径9.0cm。16は口径15.6cm、器高3.2cm。

緑釉陶器

椀（17）　体部内面から外面の上半はヨコナデ調整、下半は回転ヘラケズリ。輪高台もケズリ出しである。胎土は精良で須恵質に焼成されている。高台畳付きと外底部をのぞく全面に淡緑色の釉を薄く施釉する。内底部に重ね焼きの痕跡が残る。復元口径14.0cm、器高4.4cm。

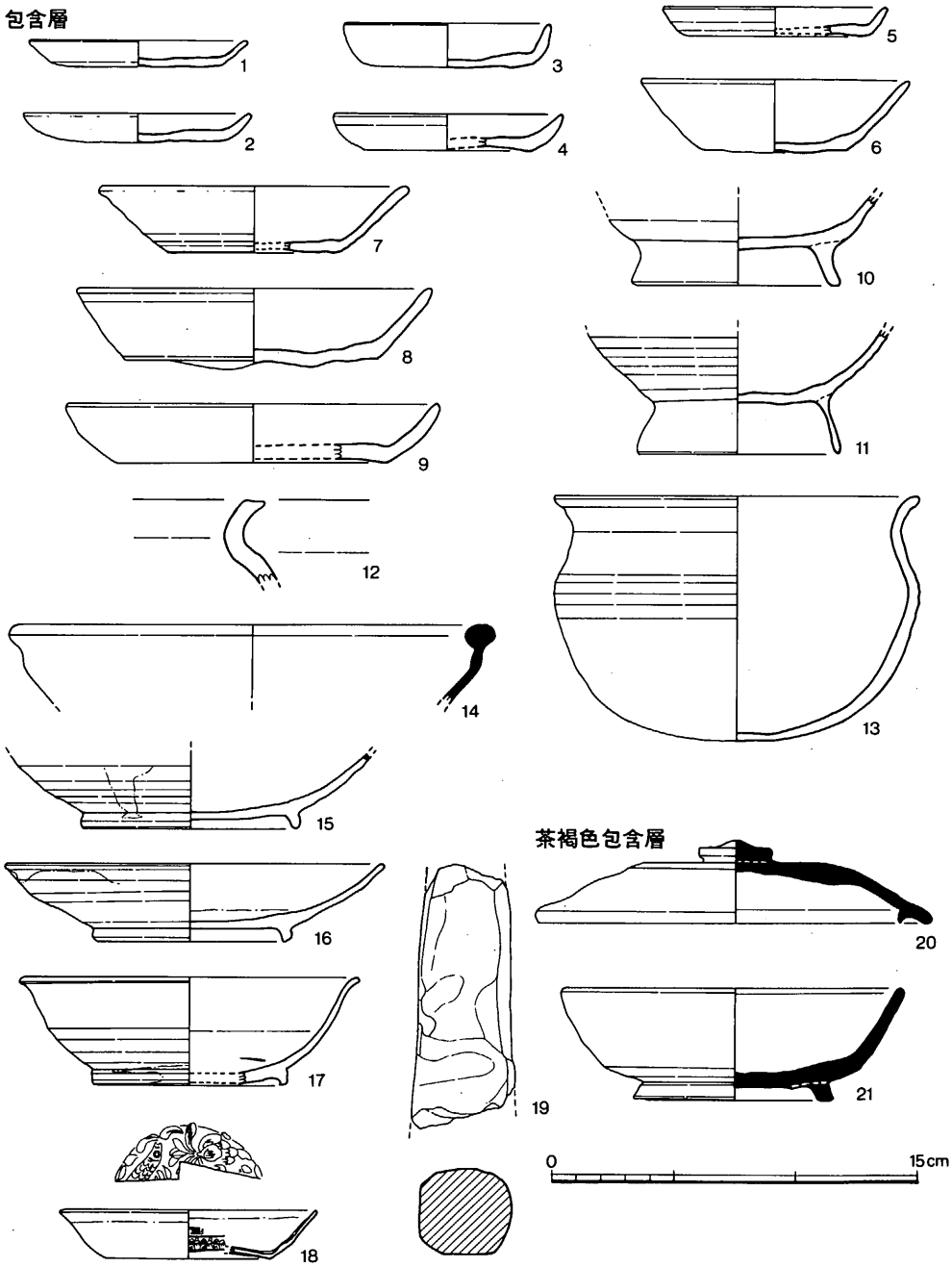
中国陶磁器

青白磁

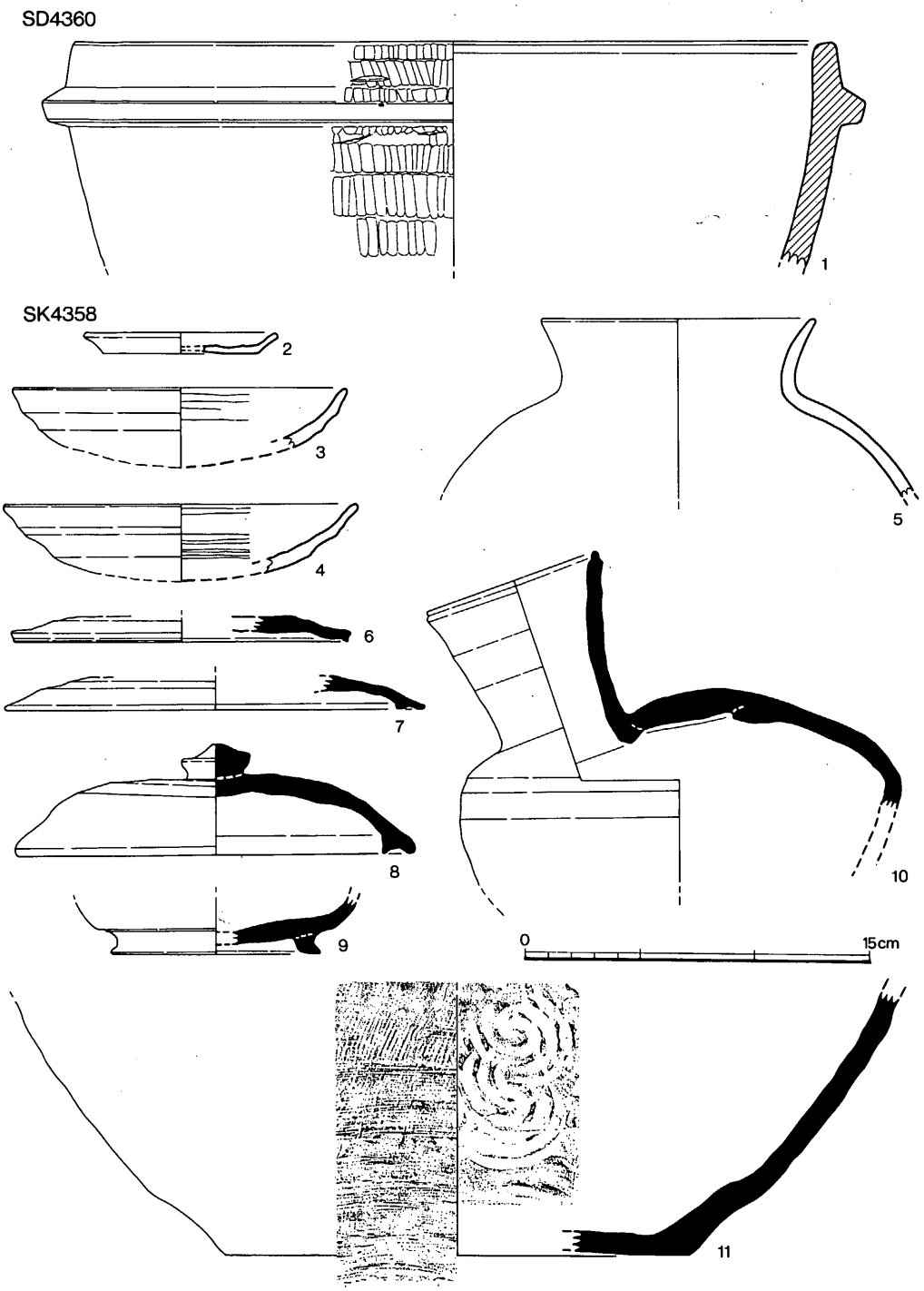
皿（18）　体部内面と見込み部に型押しによる文様をあしらう。口縁部内面から体部外面はヨコナデ調整、外底部は回転ヘラケズリを行う。胎土は白色で緻密。釉の色は淡い水色で、口縁部を除いてやや厚めに施釉する。復元口径10.4cm、器高2.0cm。

土製品

棒状土製品（19）　両端を欠失しているが、一方は先細りになるようである。全面に指ナデの痕が残る。胎土は粗く、石英粒を多く含む。火熱を受けることを想定していたとおもわれる。



第41図　第５調査区包含層・茶褐色包含層出土土器・陶磁器・土製品実測図（1/3）



第42図　第6調査区SD4360、SK4358出土土器・石製品実測図（1/3）

支脚として使用された可能性が高い。

茶褐色包含層出土土器（第41図、図版25）

須恵器

蓋（20）　天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整する。口径16.3cm、器高3.4cm。

杯（21）　内底部から体部外面ヨコナデ調整、外面下半に回転ヘラケズリを行う。外底部はヘラ切り離しのままである。口径14.1cm、器高4.7cm。

第6調査区出土土器

SD4360出土石製品（第42図、図版25）

石鍋（1）　銀灰色を呈する滑石製。小片であるが口径33.4cmに復元できる。鍔は断面正台形で垂下している。外面は幅2.0～5.0mmのノミ痕が残る。内面はなめらかに仕上げる。口縁部の一部に煤が付着する。

SK4358出土土器（第42図、図版25・26）

土師器

小皿（2）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部は一定方向のナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。復元口径8.5cm、器高0.9cm。

丸底杯（3・4）　3は体部内面下半には密にミガキを施すが、上半は粗いミガキである。口縁部から体部外面はヨコナデ調整。復元口径14.6cm。4は体部内面の下半と内面の口縁部直下に粗いミガキを施す。ほかはヨコナデ調整。復元口径15.5cm。

壺（5）　全体に器面の磨滅が著しく、調整は不明である。スリップが施されている。復元口径12.0cm。

須恵器

蓋（6～8）　6は天井部内面と口縁部内面に近い部分がよく擦れており、転用硯の可能性がある。外面はヨコナデ調整。復元口径14.8cm。7は天井部内面をナデ調整。ほかはヨコナデ調整。復元口径18.3cm。8は天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整、ほかはヨコナデ調整。口径17.4cm、器高4.8cm。

杯（9）　体部外面下半は回転ヘラケズリ、底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整か。体部内面はヨコナデ調整、底部内面は一定方向のナデ調整。復元高台径8.8cm。

平瓶（10）　肩部から胴部は粗いナデ調整。頸部はヨコナデ調整。口唇部を一段細くつくりだす。口径8.0cm。

甕（11）　体部外面下半は櫛状工具によるヨコ方向の調整。上半は直線タタキ。体部内面は同心円の当て具痕の上からごく粗いナデ。外底部は糸切り離しか。内底部は一定方向のナデ調整。復元底径20.2cm。

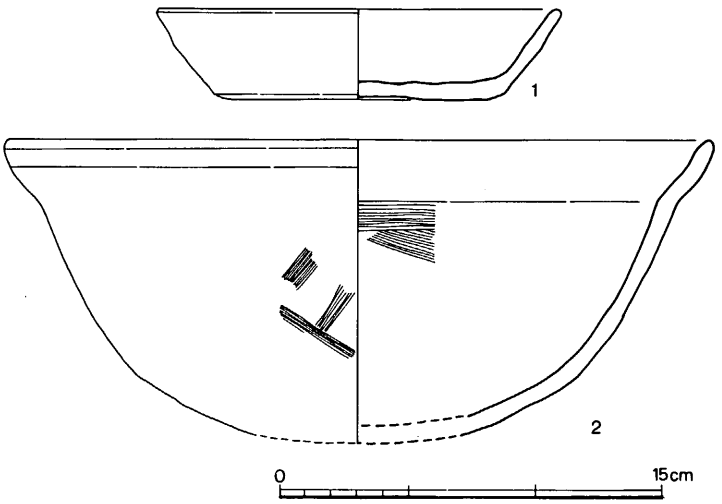
表土層出土土器（第43図、図版26）

土師器

杯（1）　体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り未調整。板状圧痕がみとめられる。復元口径16.0cm、器高3.7cm。

土師質土器

鍋（2）　全体に器面の磨滅が著しく、調整痕は不明瞭であるが、口縁部以外は内外面ともハケメ調整を行っている。煤の付着はないが、体部外面は橙色になっている。復原口径28.0cm。



第43図　第6調査区表土層出土土器実測図（1/3）

第7調査区出土土器

SD4350出土陶磁器（第44図、図版26）

中国陶磁器

白磁

椀（1）　体部内面上位に一条の沈線をめぐらす。体部外面は口縁部付近までヘラケズリし、口縁部直下に一条の沈線をめぐらす。胎土は灰色でやや粗く、釉の色は黄味をおびた灰色である。復元口径15.8cm。

SK4355出土土器・陶磁器（第44図、図版26・27）

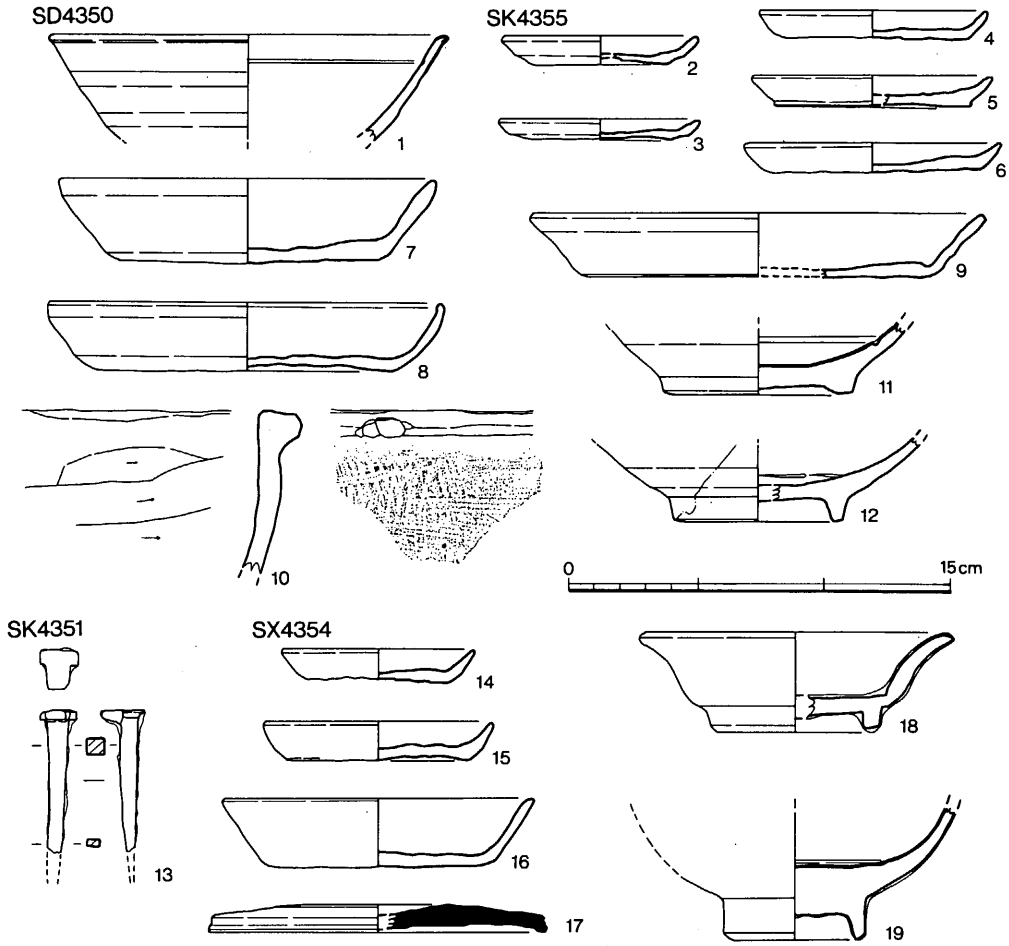
土師器

小皿（2～6）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。また、4は内底部と体部外面の一部に、6は体部内面および内底部の一部に油煙が付着する。口径7.8～10.3cm、器高0.8～1.2cm。

杯（7～9）　いずれも体部内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径15.0～20.0cm、器高2.5～3.3cm。

土師質土器

鍋（10）　口縁部は逆「L」字型につくり、ユビナデ調整している。内面ヘラケズリ調整、外面は粗いハケメ調整。口縁端部から外面に煤が付着する。



第44図　第7調査区SD4350、SK4351・4355、SX4354出土土器・陶磁器・鉄製品実測図（1/3）

中国陶磁器

白磁

椀（11）　胎土は明灰色で粗く、釉の色はやや黄味をおびた灰色である。体部内面下位に沈線状の段を持つ。残存する範囲では外面は露胎、内面は施釉。復元高台径7.5cm。

越州窯系青磁

椀（12）　胎土は明茶色でやや粗く、釉の色は黄味をおびた灰褐色である。高台畳付きから外底部は露胎。内底部および高台畳付きに目跡がある。

SK4351出土鉄製品（第44図、図版27）

釘（13）　現存長5.6cm。先端部欠損。頭部を「T」字状に薄く広げる。頭部直下から残存部先端まで木質が残る。

SX4354出土土器・陶磁器（第44図、図版27）

土師器

小皿（14・15）　ともに内外面ヨコナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り痕と板状圧痕がみとめられる。口径7.7・9.2cm、器高1.2・1.5cm。

杯（16）　体部内外面ナデ調整、内底部ナデ調整、外底部は糸切り離しのままである。復元口径12.3cm、器高2.7cm。

須恵器

蓋（17）　天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整。天井部内面はよく擦れている。転用硯の可能性がある。復元口径13.2cm。

中国陶磁器

龍泉窯系青磁

杯（18）　胎土は灰白色で緻密。釉の色は灰色味をおびた緑色である。内外面に厚く施釉し、高台内部の釉を輪状にカキ取る。復元口径12.4cm、器高4.0cm。

椀（19）　胎土は淡茶褐色で、釉は緑色をおびた褐色である。内外面に施釉し、高台内面の釉を輪状にカキ取る。内底部に浅い沈線状の段がある。高台径5.6cm。

瓦類

軒瓦・文字瓦・文様塼・丸平瓦片などが出土した。

軒瓦では、古代から近世のものまでが見られた。古代では軒丸瓦片３種７点が、中・近世では、それぞれ軒丸瓦・軒平瓦１点ずつが出土した。また、文字瓦は４種17点・文様塼３種８点の出土があった。なお、近世の軒瓦については、小破片であり、報告を省略した。

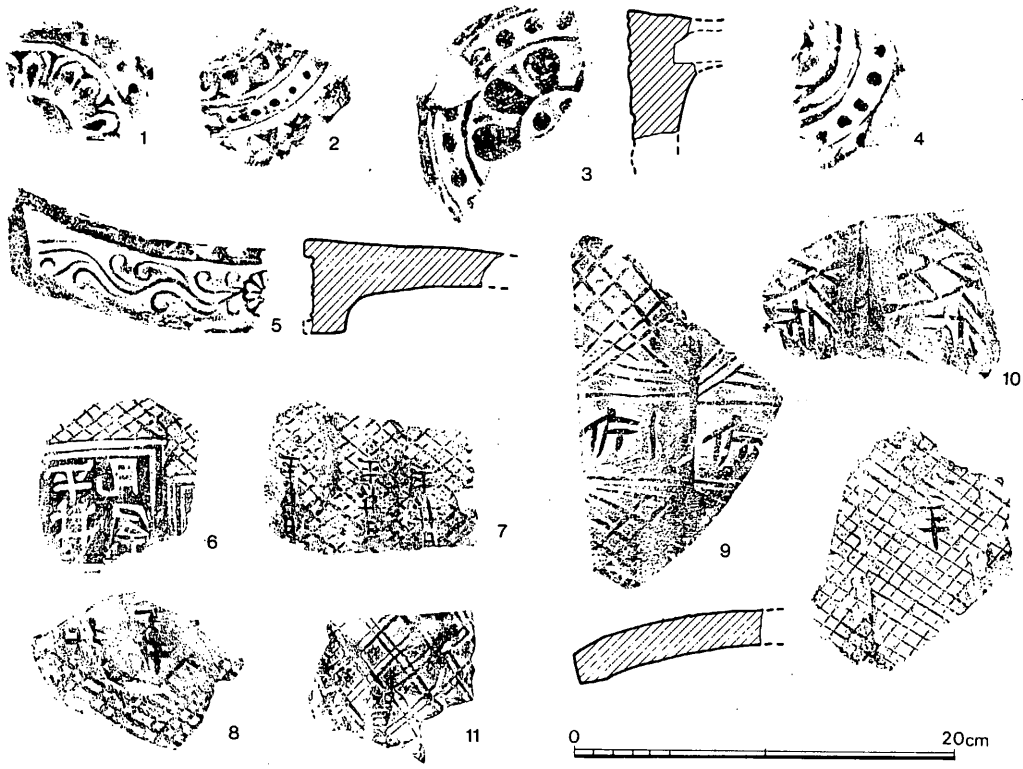
以下、順に報告する。

軒丸瓦（第45図、図版34）

１は、鴻臚館式軒丸瓦で４点の出土があった。４点とも瓦当文様の残りが悪く、鴻臚館式系と判定できるものの瓦笵の相違までは決定出来ない。共通して、石英粒を混じた粘土を用い、黒灰色のもの３点、灰白色のもの１点がある。焼き上がりは悪い。第７調査区SX4354・SK4355から１点ずつの出土があり、第５調査区包含層から２点が出土している。

２は、他の出土例から補足すれば、円圏をめぐらせた１段高く大きな中房に１＋６＋10の蓮子が配置される複弁８弁蓮華文で、間弁となる部分が弁を囲む線と連続する。蓮弁は短く、子葉は丸く高い。外区は内縁に珠文32個、外縁に凸鋸歯文33個を配置する。不丁官衙域南北溝SD2340に同笵例が出土している。従って奈良時代前半における。石英粒を一定量含む粘土が用いられ、暗青灰色で須恵質に硬く焼き上がっている。第５調査区包含層からの出土。

３は、中房が蓮弁よりも１段低く１＋５の蓮子を配置する。単弁９弁の蓮弁は平坦に表現されている。外区には珠文20個がある。瓦笵は外区外界線までのもので、界線の外側の高まりは



第45図　軒先瓦・文字瓦拓影・実測図（1/4）

瓦笵の底面を写しとったものと考えられる。瓦当裏面には、丸瓦の接合痕跡が残り、これを見るかぎりは丸瓦凸面端をヘラケズリして瓦当に差し込むように接合したものと思われる。平安時代のもの。非常に良質の粘土が選ばれ、灰色で焼き上がりも硬い。第２調査区SD4380からの出土。

４は、左巻の巴文軒丸瓦である。巴文の尾は比較的長いものと推定される。その先端は外区界線に接して終っている。外区の連珠文は大きめで高く盛り上がる。外区外界線はなく、一段高い素文縁が周る。丸瓦の剝離痕が瓦当裏面に残るが、丸瓦は比較的浅く挿入されている。観世音寺の出土例などと対比して室町時代頃の軒先瓦と考えている。石英粒を少量含むものの良質の粘土が用いられていて、灰白色で比較的硬く焼き上がっている。

軒平瓦（第45図、図版34）

軒平瓦は１点だけが出土した。中心飾に菊華を置き、菊華から脇区まで延びる蔓の上下に子葉を配置する均整唐草文軒平瓦である。蔓草は４回反転している。上・下・脇区は一段高く、素文である。平瓦凹面は瓦当先端まで布目が残り、特別な調整を行ったような痕はない。顎は短く深く作られ、瓦当裏面は横ナデ仕上げである。瓦当・平瓦部とも、共土で作られたと見ら

れ、破面に平瓦接合痕跡を認めることは出来ない。室町時代の軒平瓦であろう。砂粒を多量に含む粘土が用いられ、黒灰色で硬く焼き上がっている。第3調査区茶褐色土層からの出土。

文字瓦（第45図、図版34）

6はⅠ類1である。「平井瓦屋」の左字と読んでいる。細い斜格子文の叩打具の中央に二重の方形の枠と文字を陽刻したもので、平瓦凸面では陰刻文となり文字も左字となっている。幅広の叩打具で7.4cmを超す幅がある。この点、平瓦に限って用いられた叩打具であった可能性がある。3点出土しているが、いずれも灰白色を呈し、砂粒を多く含む粘土が用いられている。焼きは比較的良い。3点とも第5調査区の出土で、SK4370から1点、包含層から1点、SX4367から1点出土している。

7は「平井瓦」の左字。Ⅰ類3にあたる。細かい斜格子文に重ねて文字を配置している。丸瓦片1点を出土した。砂粒を含む粘土が用いられているが、灰色で焼き上がりは硬い。第5調査区SX4367から出土。

8は「平井」の左字。Ⅰ類7bにあたる。斜格子目にやや不規則な部分がある。丸瓦の破片である。胎土・色調・焼成とも7に近い。第5調査区SK4370から出土。

この他にⅠ類に属する平瓦片2点がある。第5調査区SK4370、およびSK4362から出土。

9は「佐」瓦、Ⅱ類5とされている。長方形枠に最終画のない「佐」とその右に縦棒が引かれている。斜格子目は整っていない。平瓦1点の出土。白色で砂粒の少ない粘土が用いられている。焼き上がりはやや悪い。第7調査区SX4354から出土。来木北瓦窯に同じものがある。

10も「佐」瓦で左字。Ⅱ類6にあたる。斜格子文は粗い。平瓦片で3点が出土。灰色のものとやゝ暗灰色のものとがある。少量の砂粒を含むが、硬く焼き上がっている。第7調査区SD4350、SX4354からの出土である。

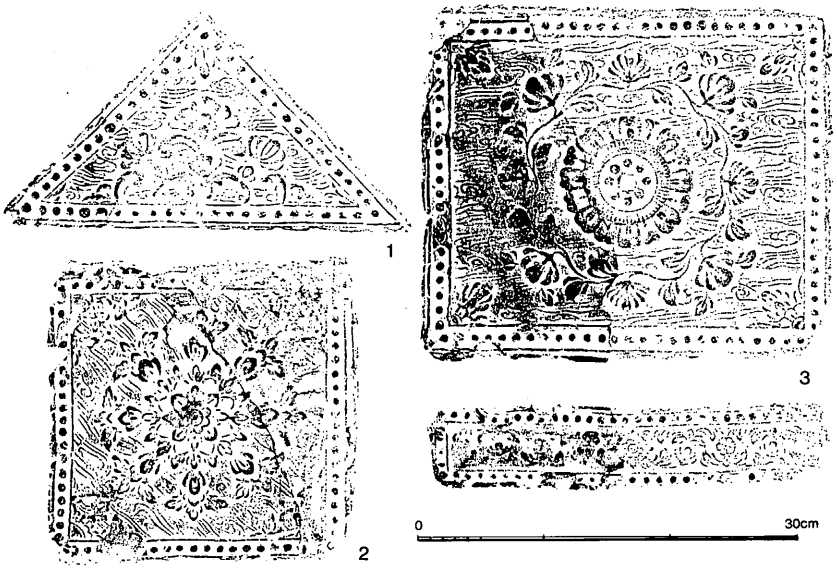
Ⅱ類では、この他に平瓦片3点の出土がある。

11は、「賀茂瓦」の正字の上1字分である。Ⅲ類2aにあたる。丸瓦片2点が出土している。二重の格子目が特徴で、都府楼北瓦窯に出土例がある。少量の砂粒を含むが、2片とも灰色で須恵質に硬く焼き上げられている。第5調査区整地層と第6調査区SK4358から1点ずつ出土。

12は、「八年」の左字。XⅦ類である。整った斜格子文の中央に文字を置く。「八」の字は後画が鮮明でないこと「年」の字が「平」に読めそうなことが気になる。平瓦片1点が出土。砂粒を一定量含む粘土が用いられている。灰色で焼き上がりは良い。第5調査区SX4367出土。

文様塼（第46図、図版35）

史跡大宰府学校院跡で出土する文様塼には三種類がある。今回の発掘調査でもこの三種が出土した。三角形塼2点、方形塼2点、長方形塼4点である。いずれも破片資料であり、長方形塼とした1点は、釘穴を残しているだけの破片資料で文様は磨滅して残っていない。厚さはほぼ一定で5.7cmほどである。



第46図　文様塼拓影（1/6）

三角形塼

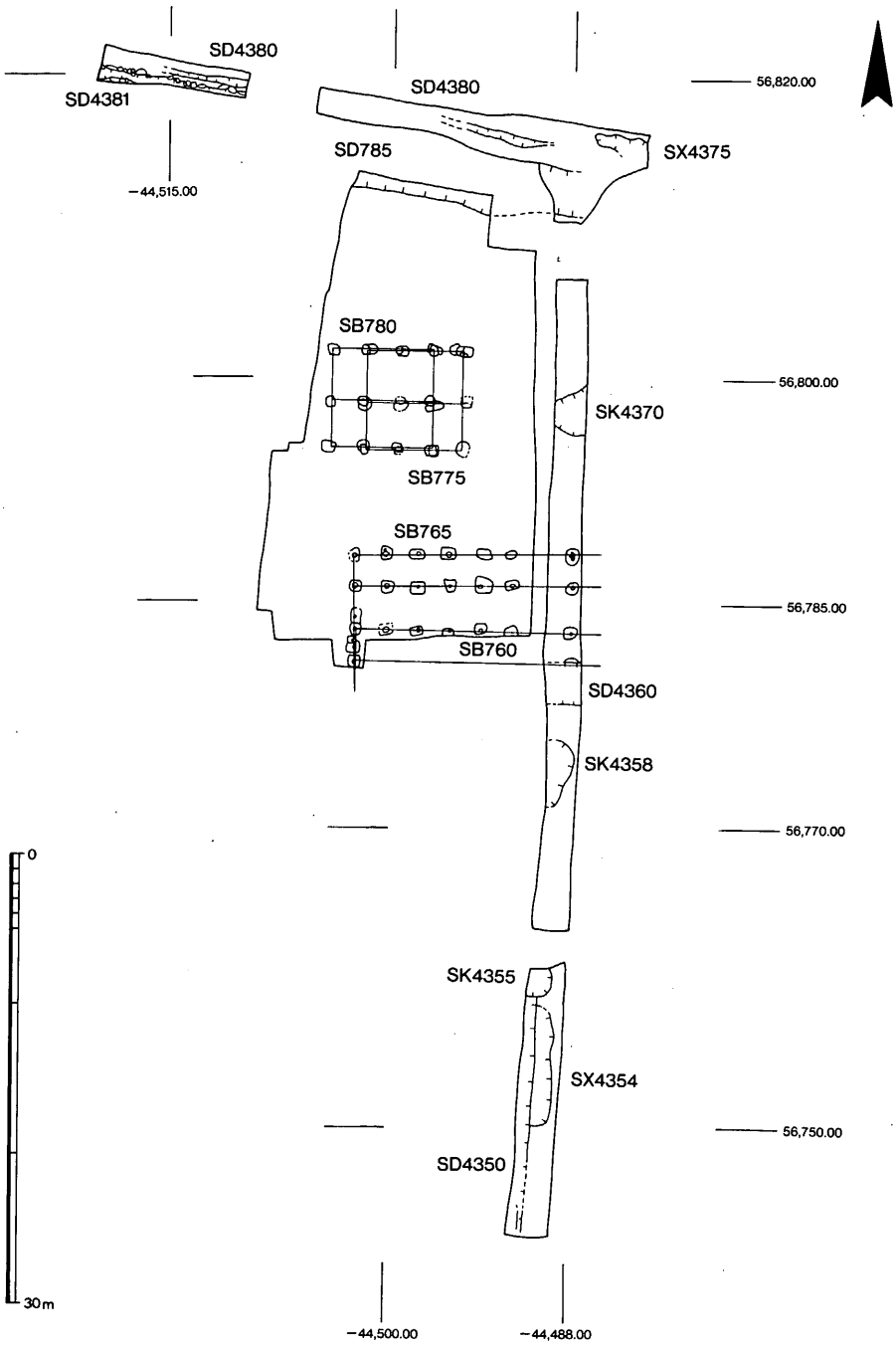
２点とも同じ部分の破片で、破片の大きさもほぼ同じである。第45図１に掲載したものは文様を鮮明に残すが、他の１点は、連珠文の痕跡が丸い輪郭で認められるだけで、拓本をとっても文様は浮き出ないまでに磨滅が進んでいる。石英粒を含む比較的良質な粘土が用いられている。現存長は、長辺で11.0cm、短辺で11.5cm程である。２点とも、表面と裏面とが黒く燻されるが側面は白い。焼き上がりは比較的硬い。第５調査区包含層から２点とも出土している。

方形塼

２点のうち１点は、第45図２に掲載した。他の１点は小破片で、図の２にあてはめれば上半部やや左よりの部分にあたる。図に掲載したものは、灰白色で肉眼で観察する限りにおいては文様は鮮明でない。また、連珠文がまわる外区部分にも型抜きした当初からの傷と思われる部分が数カ所に認められるなど良質の製品とは認めにくい。しかし拓図では宝相華文ばかりでなく、背景となっている流水文も比較的きれいに見えている。完存している一辺の長さは23.0cm、残存している長辺20.5cm、短辺8.0cm程である。２片とも一定量の石英粒を含むが良質の粘土が用いられている。焼き上がりは硬い。図示した破片は第５調査区包含層からの出土。他の１点は第５調査区SX4367から出土している。

長方形塼

破片４点のなかで文様の最も良く浮き出ているものを図示した（長方形塼１）。１点（長方形塼２）は、復原図の左上隅から右下端への対角線下半が残っている。塼上面の文様、側面の文



第47図　学校院地区主要遺構配置図（1/500）

様とも鮮明ではないが、４点のなかでは最大の破片である。他の１点は（長方形塼３）、側面の文様の一部が残る小破片で上面の文様はまったく磨滅して見えない。図示したもので完存する１辺の長さは27.2cm、残存している長辺15.5cm、短辺10.0cmほどが計測出来る。色調は、１が黒灰色である外は灰白色である。胎土や焼成は三角形塼・方形塼と変わりない。１～３は第５調査区SB4365から、４は第５調査区包含層からの出土である。

小　結

今回の調査は第37次調査地の北側と東側に接して走る道路の地下遺構の調査であった。調査の結果、北側では中世および近世の溝遺構などにより古代の遺構は大きく削平を受けその遺構を確認することが出来なかったが、東側においては建物の延長部を検出し、一定の成果を得ることができた。

第５調査区で検出した柱穴は第37次調査検出のSB765･760の延長であることが判明し、SB765については廂部で桁行７間分を確認出来たことになる。検出した柱穴６個の内のＡ・Ｂがそれにあたる（第33図参照）。そして、対応する柱穴として距離的にはＣ･Ｅが合致するものの、柱筋にのらない。とくに、37次調査では北と南に廂をもつ建物として推定復元していたが、それからするとＥの柱穴はその線上にのらなければならないことになる。検討した結果は辛うじて柱穴の端部に柱筋の線がのるものの、やや無理がある。このことから、SB765はさらに東側に延び、７間以上の建物となる可能性が強い。一方、SB760の延長部の柱穴はＤ･Ｆで、SB765と同じく７間分を確認したことになる。これが、SB765と同様に北･南に廂をもつものであるかは不明であるが、柱間等が同じであることからすると、同規模の可能性は強い。しかしながら、南側の対応する柱穴については後世の溝と撹乱により柱穴は失われ、これ以上の成果は得ることが出来なかった。

いずれにしても、調査区が狭いこともあり必ずしも明瞭な結論が得られたわけではないが、学校院地区の中心的建物とみられているSB760･765がさらに東側に延び、桁行７間以上の、規模的に当初の予想より大きな建物になることが判明したことは今回の大きな成果といえよう。また、今回も37次と同じくSB765の柱掘形から文様塼が出土したが、このことは他にはみられない特異な状況である。以前よりこの周辺部から文様塼が発見され、このことが府学校の所在を示す根拠のひとつともなっていた。すなわち、文様塼を用いた特別の建物が存在したとするものである。例えば、孔子像を安置した廟的建物の存在である。

府学校の実態については未だ不明な点が多く、その建物配置を含め残された課題も多い。

2．第177次調査

本調査地は太宰府市観世音寺２丁目11番地に所在する。調査区は大宰府政庁跡南西側前面に位置し、平成２年度に調査した第134次調査区に西接する。この地域は不丁・日吉両地区官衙域に挟まれており、官衙域に比して建物が散漫にしか存在しないことから、空閑地であったと考えられている場所である。また第81次調査で検出した四面廂を持つ掘立柱建物SB2300を朝集殿とし、空閑地を広場であるとする見方もある。第134次調査では、調査区全域に広がる黒色粘土の採取遺構と、調査区を斜め方向に走る溝を検出しており、本調査でもその連続部と採土遺構の広がる範囲を確認できるものと考えた。調査は平成９年８月25日から９月27日まで行ない、調査面積は160m²である。

検出遺構

東北から南西方向に流れる溝SD3930と黒色粘土採取遺構SX3928の連続部分、SD3930に伴う杭列、土器・瓦を廃棄した土壙等を検出した。

溝（第48図、図版10）

SD3930　調査区を二分する東北―南西方向の溝で、第134次調査でも検出している。溝は大きく３期にわかれ、古い方からＡ・Ｂ・Ｃとした。当初の溝Aは幅3.5～3.8m、深さ0.3～0.6mを測る。溝底は凹凸が多く、地山を抉っている。北辺の立ち上がりは緩やかで、南辺はやや直に立ち上がっている。出土遺物は少量であったが、溝底の抉れた部分から青磁が、上層からは染付等が出土している。次段階のＢはＡの中央付近に重なって同方向に走り、幅1.0m、深さ0.3m程の暗褐色土埋土の溝である。両岸で平行して検出した杭列SX4325、それに伴う小溝はこのＢに伴うものと考えられる。最も新しいＣはＡの南辺に重複して幅1.0m、深さ0.1m程が僅かに残るのみである。上層は表土除去時に既に検出しており、近年まで使用されていた道路に伴う側溝であることがわかっている。

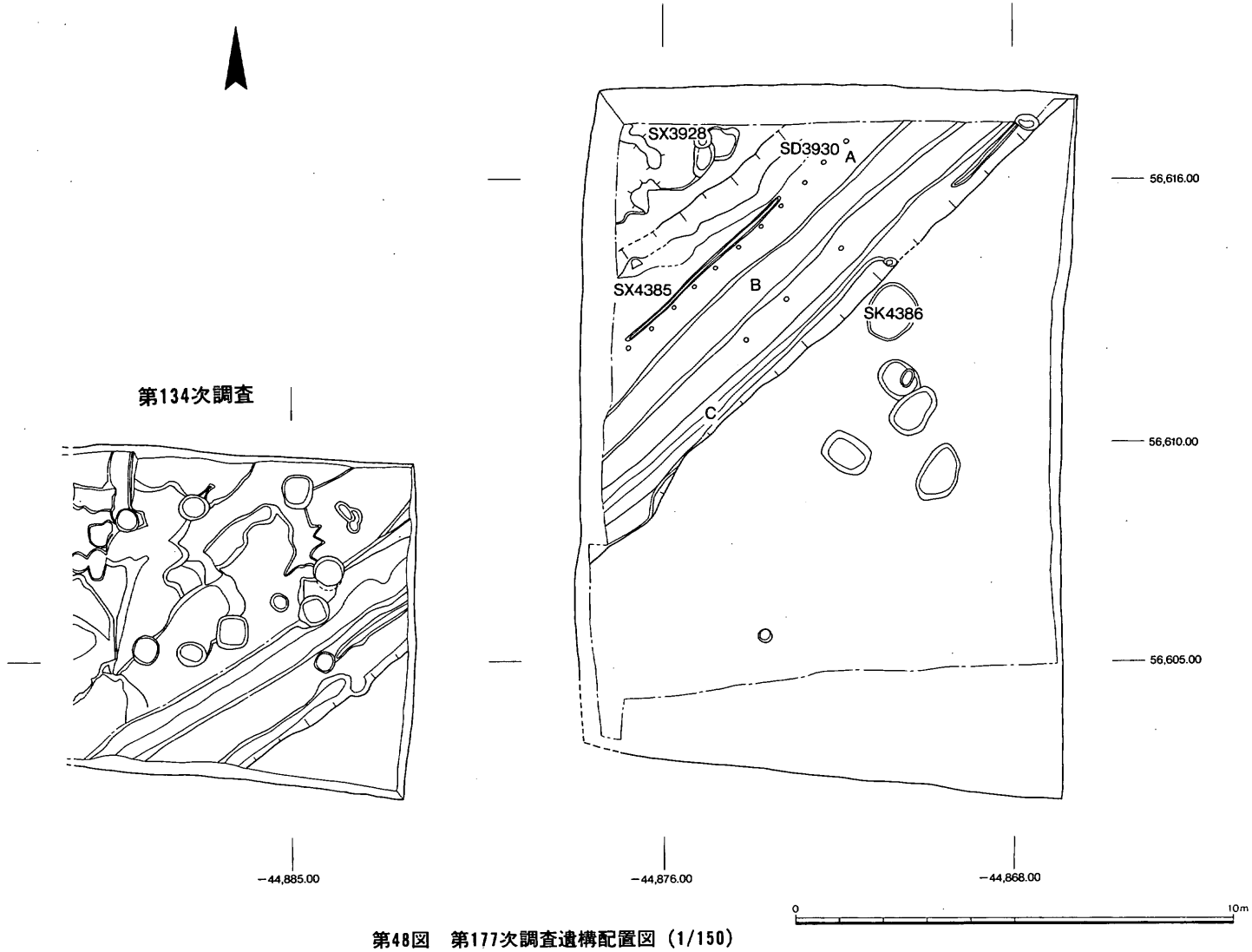
前調査でも確認されたように、Ａの時期に既に黒色粘土採取遺構SX3928を切っている。

土壙

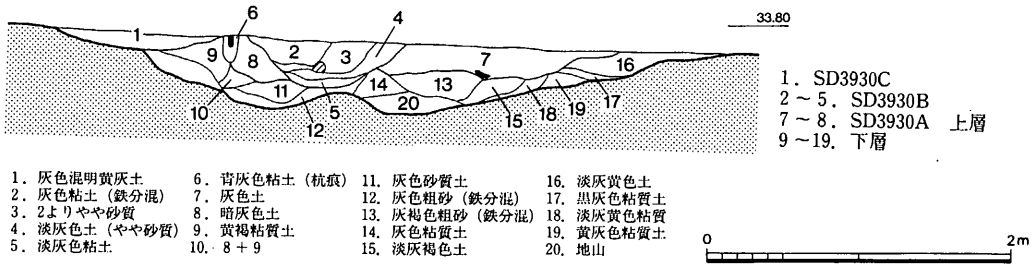
SK4386　調査区中央で検出した廃棄土壙である。径1.2m程で、上層の盛土除去中に確認された。須恵器・瓦などが多量に出土したが、図示できるものは僅かである。道路建設の掘削時に多量に出土した土器・瓦等を、穴を掘って埋めたとの話があり、その当時の廃棄土壙であると思われる。

黒色粘土採取遺構

SX3928　調査区西北部の狭い範囲で確認された。黒色粘土層を平面不定形に抉っており、特に計画的に掘削している様子は窺えない。隣接地の第134次調査ではほぼ全面で検出したため掘



第48図　第177次調査遺構配置図（1/150）



第49図　SD3930土層断面図（1/50）

削範囲が不明であったが、今回SD3930に切られながらもその南部には広がらないことを確認した。出土遺物はなく、時期は確定できなかった。

杭列

SX4385　SD3930Bに平行して検出された杭列である。杭本体は残存しておらず灰色粘土埋土の10cm程のピットが並ぶのみである。溝の南北両岸に並んでおり、北岸部分にはこれに平行する小溝を検出している。杭列に付随する護岸の堰板の痕と思われる。出土遺物はなかったが、SD3930のB期に付随するものと考えられる。

出土遺物

SD3930A出土土器・陶磁器・その他の遺物（第50図、図版27）

須恵器

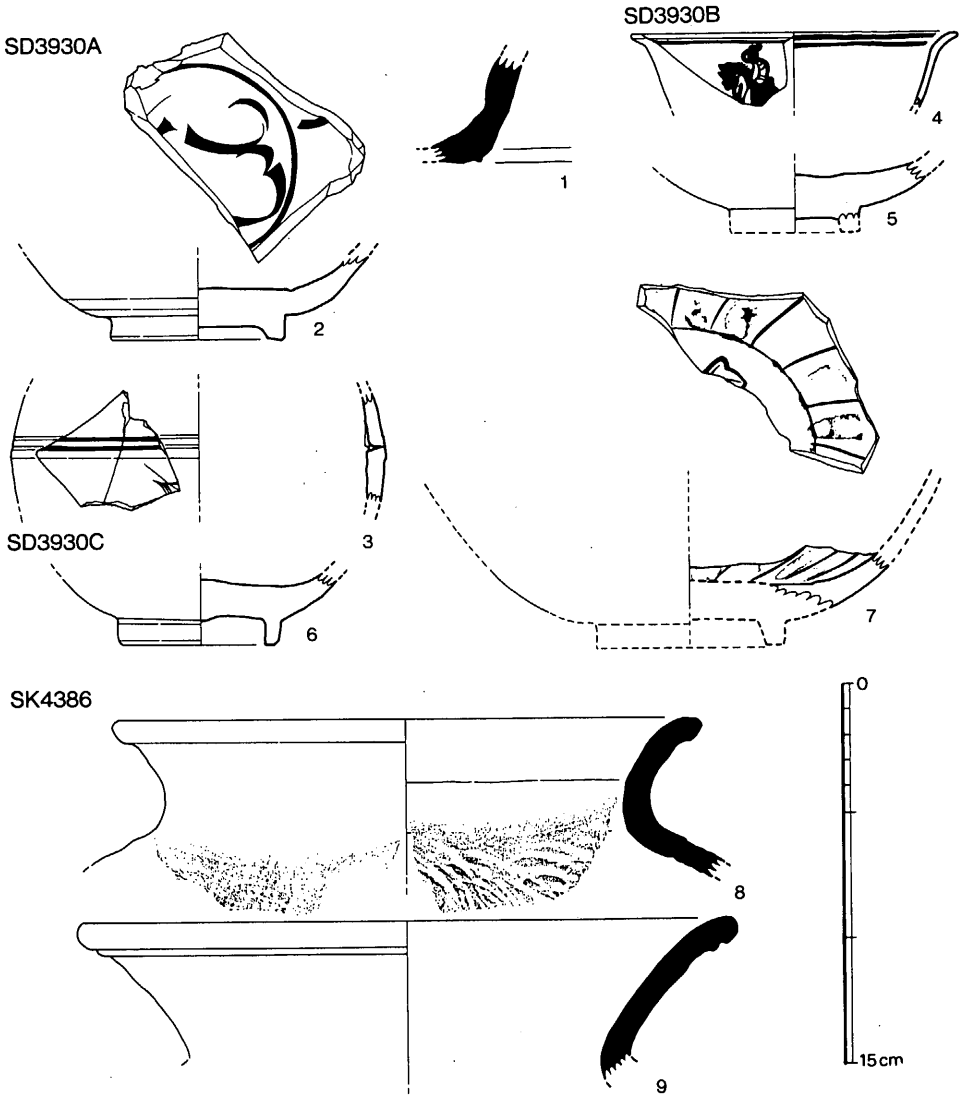
壺（1）　底部片で、小片のため底径復元は不可能。内面はナデ調整、体部外面はヘラケズリを施し、外底部には同心円文の叩きを施す。また底端部はナデによって高台状に薄くつまみ出す。赤灰色を呈し、断面は灰色になる。外底部に同心円を施す土器は大宰府近辺のものではなく、肥後地方の窯の可能性が高い。報告書で図面を見る限りでは、熊本県荒尾市の北山浦A瓦窯に同心円・底端部つまみ出しの類似品が見られる。

中国陶磁器

青磁

椀（2）　龍泉窯系で、外底部を浅く削って断面台形のやや低い高台を造り出し、底部の器肉は厚くなる。内底部に沈線状の段が付き中央に片切彫りで雲文を施す。体部内面には僅かに割花がみえる。高台径は7.0cm。胎土は精良で淡灰色を呈する。釉は灰色味を帯びた緑色で、高台部畳付および外底部は露胎であるが若干釉が付着する。

壺（3）　体部小片で、水注とも考えられる。外面には二条の沈線を施し、淡青色の釉をやや厚めにかける。沈線の上下に櫛目が若干見えるが、全体の文様は不明である。内面は露胎で、粘土の接合痕が明瞭である。体部内面にナデ調整を施した後、接合部の隙間に別の粘土を詰め



第50図　SD3930A～C、SK4386出土土器・陶磁器実測図（1/3）

て補強している。胎土は淡灰色を呈する。溝底からの出土。

その他の遺物（図版28）

鉄滓　6点が出土している。一括遺物ではなく、層位も別々であった。

SD3930B出土陶磁器（第50図、図版28）

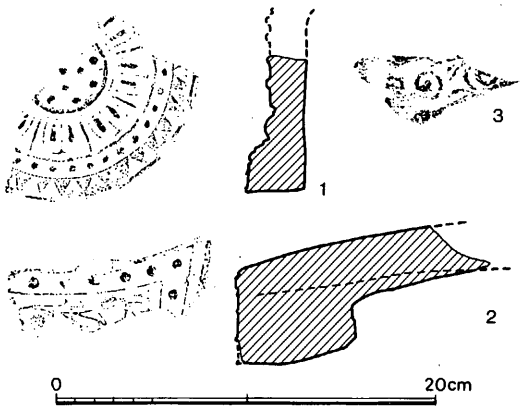
中国陶磁器

染付

椀（4）　端反りの口縁部片で復元口径13.0cmになる。口縁部内外面に二重の界線を巡らせ、体部外面には稚児か女人の騎馬像を描くが、文様は滲んだ感じをもつ。釉は全体に青味を帯びる。

青磁

椀（5）　龍泉窯系の底部片で、高台を欠く。内底部中央に型押しの浮文を施したような凹凸が見えるが、釉が厚いため明瞭ではない。釉は灰色味のある淡緑色で、高台内部は露胎となる。胎土は粗く、淡い小豆色を呈する。



第51図　軒先瓦拓影・実測図（1/4）

SD3930C出土陶磁器（第50図、図版28）

中国陶磁器

青磁

椀（6・7）　6は底部片で、やや細く高い高台を削り出し外側を面取りする。底径6.3cmを測る。外底部は回転ヘラケズリを施し、中央部には工具先端の傾きによるケズリ残しの凸部がある。釉は厚めでやや灰色味を帯びた緑色で、高台畳付から底部外面にかけては露胎になり、胎土は粗く灰色を呈する。

7は体部小片で、内面にヘラによる割花を施し、丸刃の削りによって表現された花弁を、16等分程度に配する。内底部には花文のスタンプを施す。胎土はやや灰色味を帯びる白色で、釉は外面が青味のある淡緑色、内面は灰緑色と内外面の色調に違いがある。

SK4386出土土器（第50図、図版28）

須恵器

甕（8・9）　2種類の口縁部片が出土している。8は外面格子叩き後口縁付近をナデる。内面は頸部まで同心円のあて具痕が残り、口縁部付近はナデ消すが、若干痕跡が残る。9の外面は口縁端部に断面半円形の突帯を二条貼付し、一条の沈線を入れる。内外面ともナデを施す。

瓦類

軒丸瓦2点、軒平瓦4点、土嚢袋27袋の瓦類が出土した。

軒丸瓦（第51図、図版35）

1は瓦当径13.8cm程で内区は複弁八弁蓮華文で円圏をめぐらし、1段高い中房内に1＋4＋8の蓮子を配する。内区が外区よりも一段低いため蓮弁の反転が大きい。外区が平面をなしていることが特徴で、内縁と外縁とは圏線によって区画される。内縁には珠文、外縁には凸鋸歯

文が配置されている。細かい石英粒を含むが良質の胎土で、灰青色に堅く焼き上がっている。これと同文の軒丸瓦で、瓦当面径17.0cmほどのものが発掘区の西で調査されている南北溝SD2340から出土しているから、8世紀前半代の軒瓦と考えて良い。SK4386からの出土である。

軒丸瓦では、この他に老司式軒丸瓦の外区外縁部分、凸鋸歯文2個分の破片が出土している。瓦当側縁に櫛目の整形痕が残るから老司II式と断定出来る。SD3930B出土。

軒平瓦（第51図、図版35）

2は内区に右行する彫りの浅い唐草文を配置し上外区・脇区には珠文、下外区には鋸歯文を配置している。顎部は貼り付けられた高い段顎で、縄目叩打痕が残る。桶巻き作りされた軒平瓦で瓦当の上部では平瓦凹面を削り込んで作られている。砂粒を含まない良質の胎土は老司式軒瓦に近い。SD3930A出土。

3は鴻臚館式軒平瓦である。中心飾および右側唐草文の一部の破片である。磨滅が進んでいて瓦当文様をやっと判定出来るに留まった。砂粒を含まない良質の粘土が用いられ、黒灰色で堅く焼成されている。SD3930A出土。鴻臚館式は、この他にSD3930Bから1点出土した。鴻臚館式軒平瓦も、8世紀前半の不丁官衙南北溝SD2340から出土している。

この外に、図示はしていないが、軒平瓦下外区凸鋸歯文2個分の破片が出土している。瓦当文様までは判定出来ないが、老司式軒平瓦の1部と思われる。SD3930Bから出土。

丸・平瓦片

土嚢袋27袋の瓦片を、洗浄・接合した。1個体にまとめられるような資料は出土していない。出土状況を見れば、SD3930Aが最も多く13袋ほどを占めている。

破片全体で約530片が数えられ、丸・平瓦片の比率をとったところ11：28ほどとなった。

丸瓦片についてみれば、玉縁式のものがほとんどを占めるものと思われる。凸面は、叩打具痕をすり消したもの、長手の叩打具に斜格子文を刻み叩打具痕をそのまま残しているものの二とおりが認められた。90パーセント以上は前者で後者は数パーセントにすぎなかった。

平瓦では、凸面の叩打痕跡を見ると縄目叩打痕のものと長手の叩打具で斜格子文が叩打されたもの、老司式に伴なうと見られる古式の斜格子文を残すものの3とおりが認められた。比率的には、縄目文のものが最も多く約75パーセント、斜格子文24パーセント以下であった。縄目叩打された丸・平瓦片を、老司式や鴻臚館式系に伴なう平瓦と破片資料からは確定出来ないが、大勢として大宰府政庁第II期以降の所用瓦と考えられる。

小　結

今回検出した黒色粘土採取遺構は、第17・58・73・83・84・86・87・90・131・134・153・156次調査で確認されている。現在確認されている地点をみると、政庁前面官衙域不丁・日吉地区の、北半部南北約100m幅の範囲の中で散在的に広がっているようである。採掘穴の平面的形状

は、不定形に乱雑になるものや、方形プランで垂直に掘り込んだものなど場所によって若干違いがあるようである。第156次調査では、鍬の幅分を賽の目状に区画したように採土されている状況が観察できており、鋤痕も確認している。今回の調査で検出したのは、不定形で垂直に掘削するものであったが、土取りの検出範囲が狭かったことや、SD3930に切られている状況で、細かい鋤痕などの単位は確認できなかった。

不丁地区官衙域では、採取遺構と切り合う最も新しい建物は9世紀代で、この関係から採取上限を9世紀代と考えている。日吉地区官衙域では、遺構を4期に分けており、その内の官衙的建物が存在しなくなるⅣ期11世紀後半代を、採土の時期と考えている。今回の政庁前空閑地では、他の遺構との切り合いが少なく、SD3930との切り合いで、下限を14世紀代とするに留まる。地域ごとに採土の時期差が存在するかどうかは不明であるが、政庁周辺では10世紀後半から瓦窯が築かれることや、日吉地区Ⅳ期の11世紀後半代には官衙的性格がなくなり瓦の需要が減少することから、まだ検討の必要があると思われる。

SD3930については、第134次調査の延長部分が検出され、3時期あることが再確認されたに留まる。遺物に関しては、溝底から14世紀代の青磁壺片が出土したことから、14世紀代を溝の上限とする第134次調査の結果を裏付けた。またB期に伴うと考えられる杭列と護岸遺構を検出したことから、この溝が単なる流れではなく、ある程度整備された溝であったと考えられる。A～C期の時期については、出土遺物が少量であることや遺物にほとんど時期差を認めることができなかったことから、Aの上限が14世紀代で、Cが近年まで使用されていたという他は、切り合いの上でしか検討することができなかった。

SK4386は、近隣の話では、旧道路建設時に掘削によって出土した瓦等を穴を掘って埋めたとのことであり、それに該当するものと考えられる。出土遺物はいずれも奈良・平安期のもので、図示できるものは少なかったが比較的多量であった。調査区南方の第81次調査では政庁第II期に伴う整地層が確認されており、また県道の側溝改修時にも確認されていることから、同様の整地層が道路建設の掘削時に削平された可能性がある。

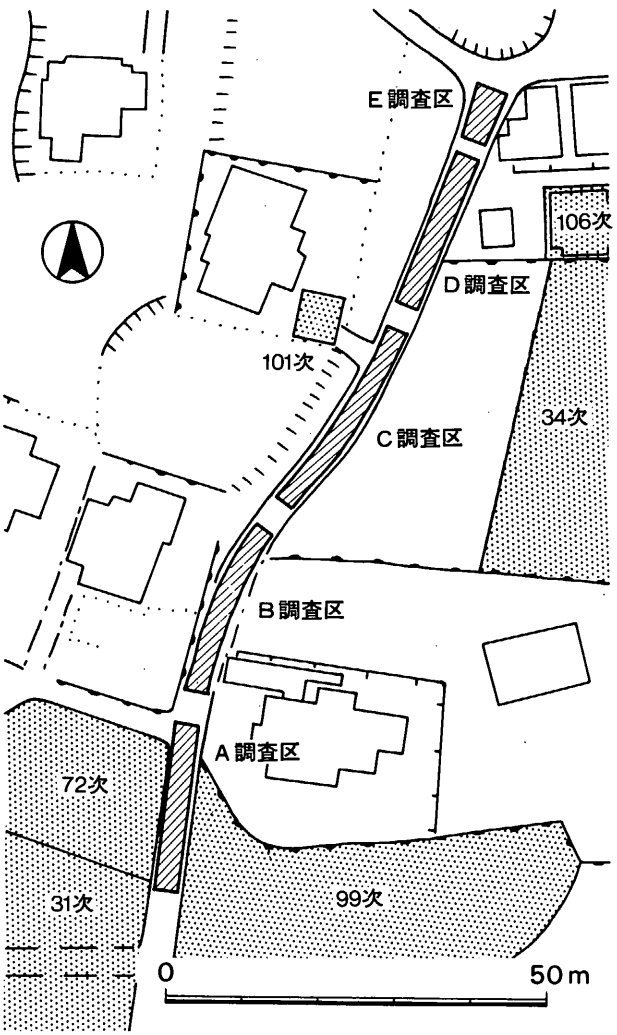
参考文献

「大宰府史跡　昭和53年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1979
「大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1981
「大宰府史跡　昭和58年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1983
「大宰府史跡　昭和59年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1984
「大宰府史跡　平成3年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1992
「大宰府史跡　平成6年度発掘調査概報」　九州歴史資料館　1995

第178次調査

本次調査は太宰府市工務課による上・下水道工事に伴う発掘調査である。調査は平成９年９月２日に開始し、11月27日に終了した。調査は工事と並行しながら行い、延長120mの道路面を南からＡ～Ｅ区の調査区に分け、工事の進行に合わせ進めていった。路面のアスファルトと道路地盤の盛土は重機により除去し、逐次作業員の手により掘り進めた。調査地番は太宰府市観世音寺４丁目1100・1158他で、調査面積は延べ260㎡である。

調査対象地が通行頻繁な市道ということもあり、調査部分は幅３m前後のトレンチ状のものとなった。調査の結果、掘立柱建物の柱穴・井戸・溝などを検出し、道路下にも遺構が残存していることが確認された。しかしながら、多くは後世の撹乱（水道・電気・側溝工事等）により削平をうけ、必ずしも良好な状況ではなかった。とくに、第35･99次調査で検出した柵SA560はＡ調査区の南端でその延長が検出出来る予定であったが、旧水道工事の撹乱により、その痕跡は確認出来なかった。

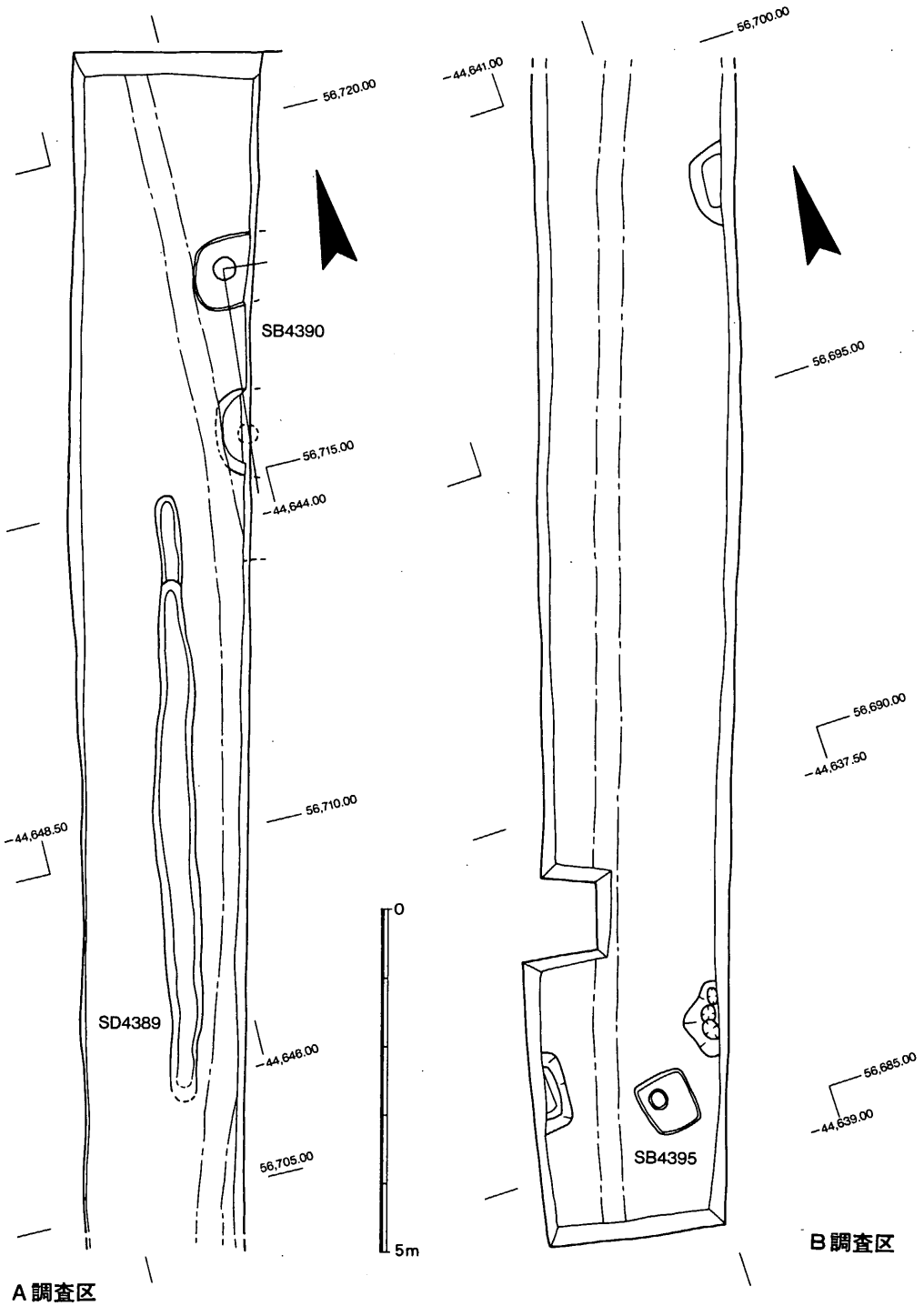


第52図　第178次調査区配置図（1/1,000）

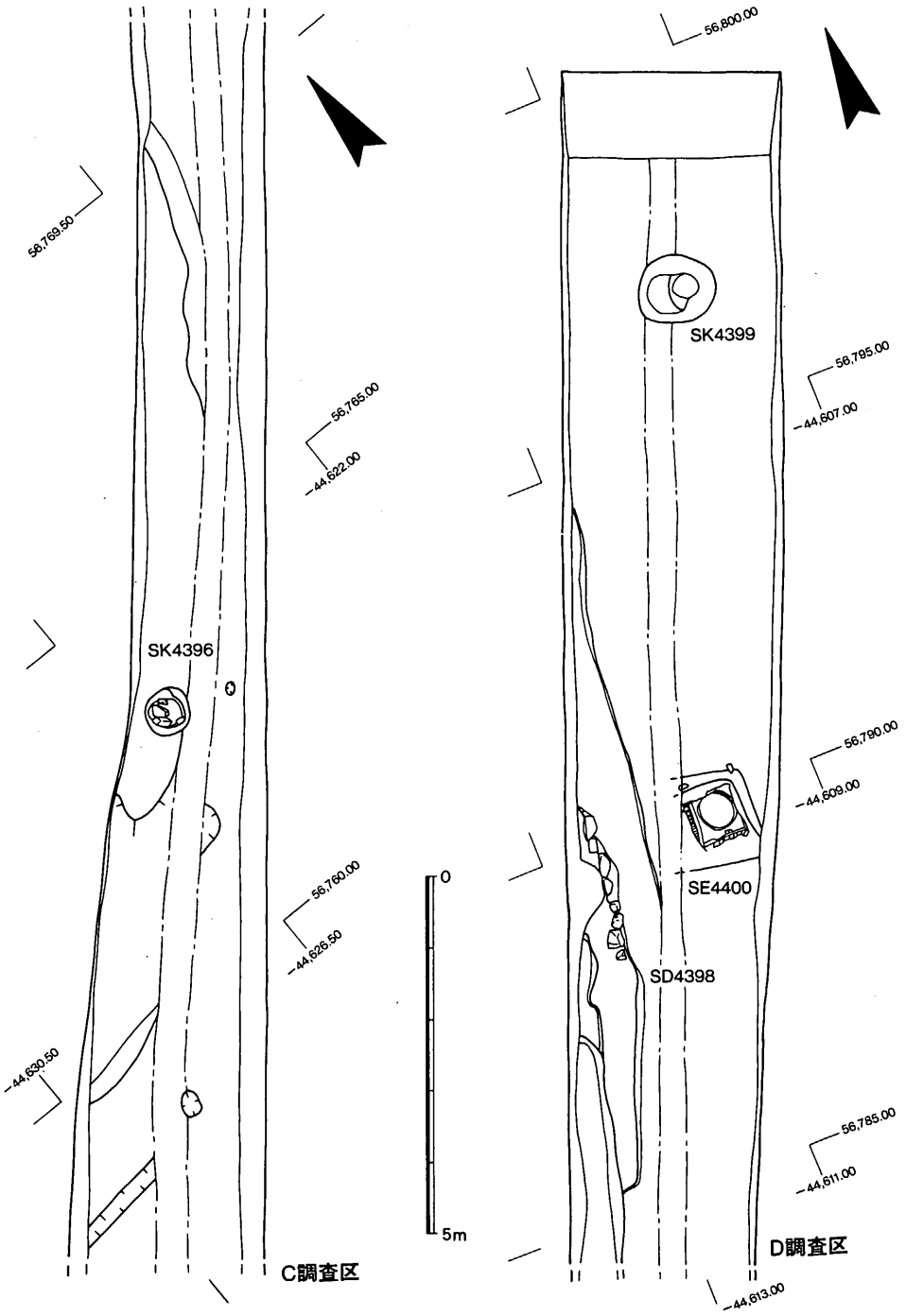
検出遺構

Ａ調査区（第53図、図版11）

最も南に位置し、幅2.5m、長さ20mの調査区である。西側は幅約１mが電気と電話の地下埋設により調査が出来ず、実際に調査出来たのは残りの約1.5mの幅である。検出した遺構は南北に並ぶ柱穴２個と南北方向の溝である。調査地は後世の撹乱が著しく、路面から約0.5mの所まで道路の基礎地業の積み土があり、その下層に約0.2mの茶灰色土と茶色土の包含層が認められる。包含層中には僅かの土器片が見られるだけである。柱穴等の遺構は黄灰色粘質土のいわゆる地山面に切り込まれて



第53図　A・B調査区遺構配置図（1/100）

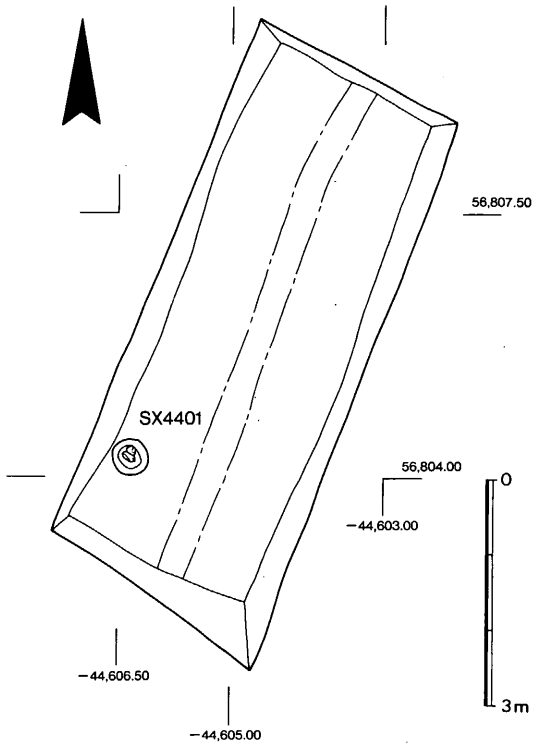


第54図　C・D調査区遺構配置図（1/100）

いるが、全体に浅いことから削平されたとみられる。

掘立柱建物（第56図、図版11）

SB4390　調査区の北端近くで検出した南北方向に並ぶ柱穴２個である。いずれも掘形の約半分を検出しただけで、全体の形状は確認していない。いずれも柱痕跡があり、北側の柱穴には柱根が残存していた。その残存柱痕から径約30cmの柱をもつ建物が想定されるが、規模については不明である。２個の柱痕跡から、距離を測ると2.4mあり、もし北方に延びるとすれば発掘区の北端で検出が可能であるが、その痕跡が発見出来なかったことは、発掘外の南へ延びる建物と考えられる。しかしながら、今回検出した柱穴２個は東側の隣接地で実施した第99次調査で検出したSB2905の西側柱の延長線近くにあるものの、東側に約1.2mずれている。このことから、柱穴は東西棟建物の北西の妻部にあたるとみられる。この柱穴の東側延長部は住宅で、未発掘地である。



第55図　E調査区遺構配置図（1/100）

溝

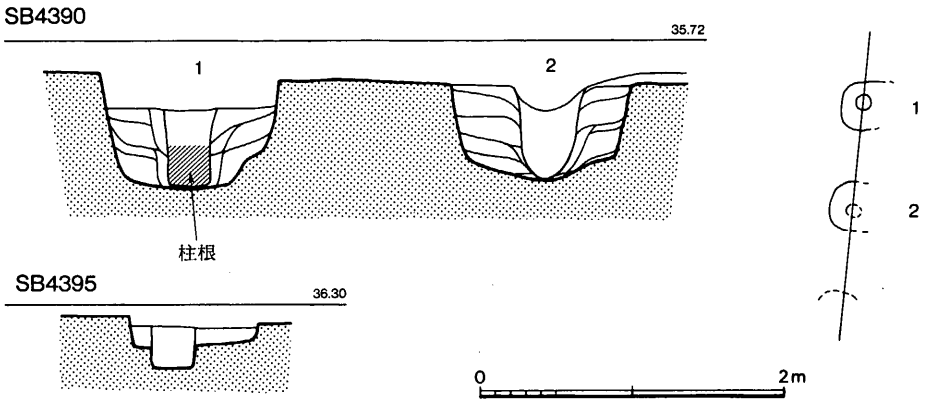
SD4389　調査区の中央で検出した南北溝である。長さ約９m分確認したが、北と南側は撹乱と削平により明確でない。最も残りの良いところで幅0.65m、深さ0.2mである。出土した遺物は僅かの土器片と瓦片である。溝の方向は東側で検出した建物群と同じであり、何らかの関係があるのかも知れない。年代としては10世紀代と考えられる。

Ｂ調査区（第52図、図版11）

Ａ調査区とは約４mの間隔をおいて幅3.0m、長さ23.0mを調査した。ここでは、昭和30年代に埋設された共同の水道管による掘削がある他は後世の撹乱はみられないものの、かなり削平されているようである。路面から約0.3mは道路の盛土でＡ調査区と同じであるが、厚さ0.15mの茶色土の遺物包含層を除去すると遺構面になる。検出した遺構は柱穴１個と土壙である。

掘立柱建物（第56図）

SB4395　調査区の南端部で検出した柱穴である。検出したのは１個のみで、調査区外の東側と南側に延びるとみられるが、隣接地が未調査であるため、その規模等については不明である。



第56図　掘立柱建物SB4390・4395柱掘形断面図（1/50）

掘形は一辺0.9m 前後の方形で、柱痕跡がある。ここでは、ほかに柱穴が存在しないことから南および東側へ延びる南北棟もしくは東西棟建物の西北入隅の柱としておく。

C調査区（第54図、図版12）

B調査区にほぼ接して、幅2.5m、長さ28.0mを調査した。調査区のほぼ中央にA・B調査区と同じく南北に走る共同水道管埋設溝がある。この調査区では、茶灰色の整地層があり、A・B区でみられた黄色粘質の地山はその下層にみられる。この整地層は部分的に厚く盛られており、第34次調査ではこの整地層上で遺構が検出される。推定では、この調査区の北辺部で第34次調査検出の柵SA670の延長が確認される予定であったが、図上で検討の結果、この調査区には位置しないことが判明。結果的に、遺構として確認できたのは調査区のほぼ中央部で検出した小土壙のみである。

土壙

SK4396　調査区のほぼ中央部で検出した土壙である。ほぼ円形で径0.7m、深さ0.4mである。土壙中には瓦片が詰まり、それを取り上げると底部には拳大の自然石がある。瓦片は無造作に投げ込まれた状況で、規則性はみられない。柱を抜き取った後になげこまれたとも考えられるが、対応するものがみられないため、今のところ性格については判然としない。

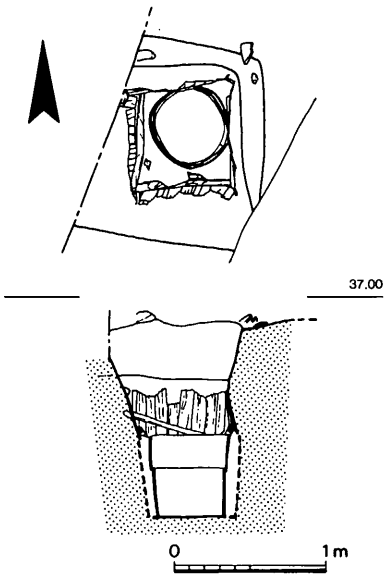
D調査区（第54図、図版12）

C調査区に接して、幅3.0m、長さ16.0mを調査した。C調査区に比較して地山面は高くなり、北端部では路面から約1mのところで地山に切り込む遺構が検出される。主要な遺構として、井戸・溝・小土壙を検出した。

井戸（第57図、図版12）

SE4400　調査区のほぼ中央部付近で検出した井戸である。この井戸は隅丸方形の掘形をもち、井戸枠は上部構造が方形縦板で下部構造が円形の曲物で組まれている。掘形上面から、井

戸底まで1.3mを測る。井戸枠は比較的残存状態が良好で、上部は一辺が0.75m、高さが0.3m残っている。枠は幅10cm、厚さ1cm前後の板材を縦に並べ、枠としている。内側には径4cmの丸材（自然木）を用いて横桟とし、縦板枠を内側から固定している。隅柱についてはその有無を確認できなかった。下部の曲物は2段に組み合わされ、上段は径0.5m、高さが0.45m前後、下段は径0.46m、高さが0.33mである。



第57図　井戸SE4400実測図（1/50）

溝

SD4398　SE4400の西側にある幅0.7m前後、深さ0.1m前後の溝である。「く」字状のプランをもち、一部西肩には小石を並べ置いている。北端部では発掘区外に延びるが南端部は明確な溝のプランとして確認できなかった。残存状況が悪くその性格、用途については明らかでない。

土壙

SK4399　調査区の北端部付近で検出したやや不整形の小土壙である。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.3mである。

E調査区（第55図）

今回の調査地の最北端の調査区になる。調査地の中央部に共同水道管の埋設がある。深さ約1.0mで地山面となる。地山面上には僅かの遺物包含層しか認められない。顕著な遺構は認められず、調査区の南端部付近で径0.5mのピットを検出したのみである。深さ0.15mで、底部には小石がある。

出土遺物

調査面積が狭かったこともあり、出土遺物は少量である。以下、調査区ごとに記すが、図化できないような小片しか出土しなかったA・B・E調査区の遺物については省略した。

C調査区出土土器・陶磁器（第58図、図版29）

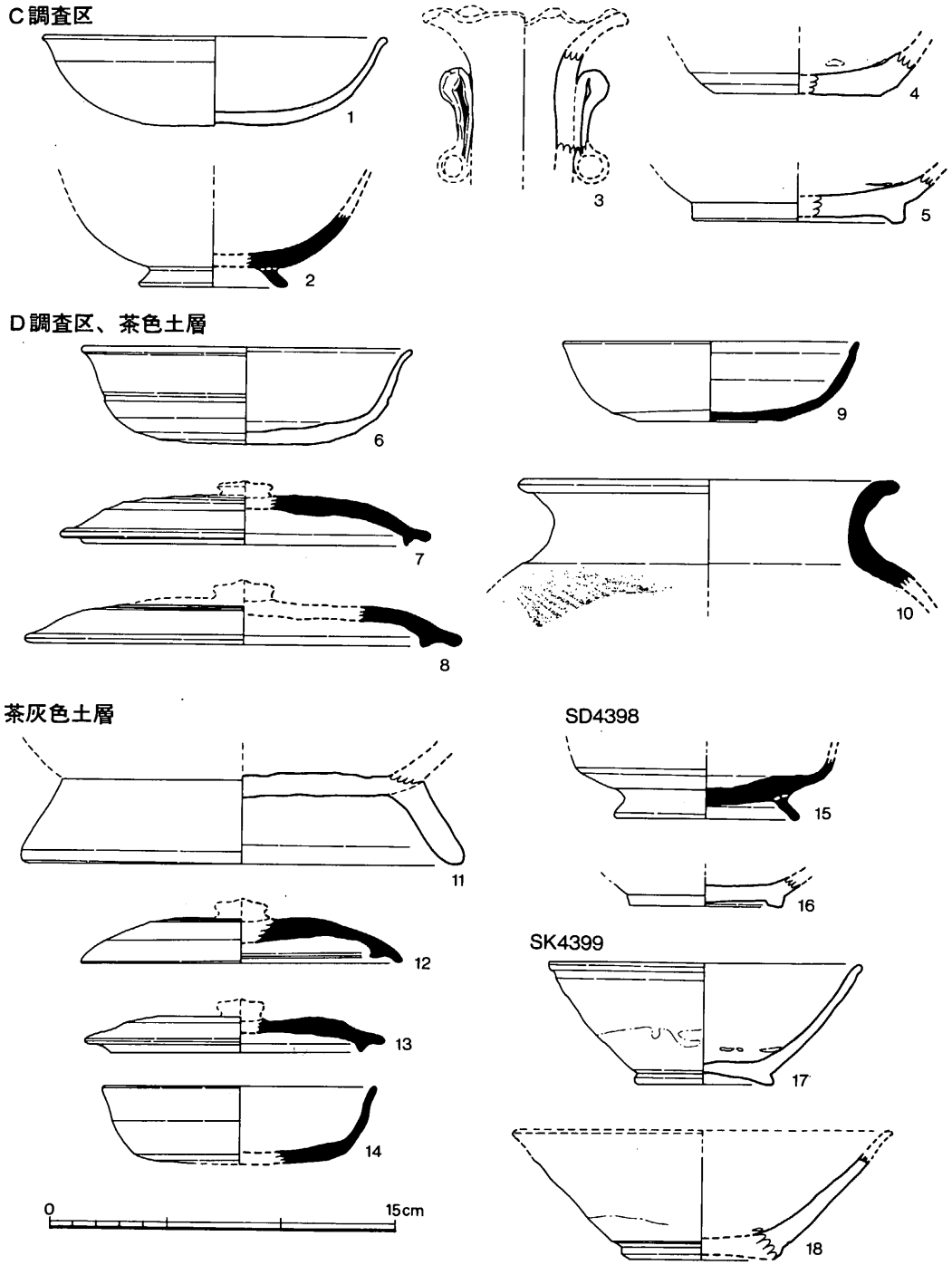
小土壙と遺物包含層から若干の土器片が出土している。

土師器

丸底杯（1）　口径15.0cm、器高3.9cm。全体に磨滅して調整は不明である。やや深く、丸みが強いのが特徴である。SK4396出土。

須恵器

椀（2）　底部の小片で全形は不明。残存する高台はやや高く広がり土師器椀の形態に類似



第58図　C調査区、D調査区茶色土層、SD4398、SK4399出土土器・陶磁器実測図（1/3）

している。外面の体部下位はヘラケズリし、上位はヘラミガキしている。内面もヘラミガキする。胎土は灰色を呈し、一見須恵器の椀風であるが、器形と調整手法は須恵器には見られないものである。

国産陶器

瀬戸焼

花瓶（3）　頸部の小片である。耳の一部が残存し、胎土と釉調から瀬戸焼の花瓶とした。胎土は濁白色でやや粗く、黄色味をおびた黒褐色を呈する釉は厚めにかかる。頸部の径は類例から3.0cmに復元した。遺構の上に堆積する遺物包含層である灰色土層の出土。

中国陶磁器

青磁

椀（4・5）　越州窯系青磁の椀である。4は底部を平底にするII類で、外面の体部以下を露胎にする。内面見込みに目跡2個が残る。5は断面四角形の低い高台をもつI類で、高台の畳付を除き全面施釉する。風化が著しく、器面が荒れ光沢が失われている。整地層である灰褐色土層出土。

D調査区出土土器・陶磁器

本次調査で、最も出土遺物が多く顕著であった調査区である。遺構を覆う茶色土層とその下層の茶灰色土層、それに井戸中から主に出土した。

茶色土層出土土器（第58図、図版29）

土師器

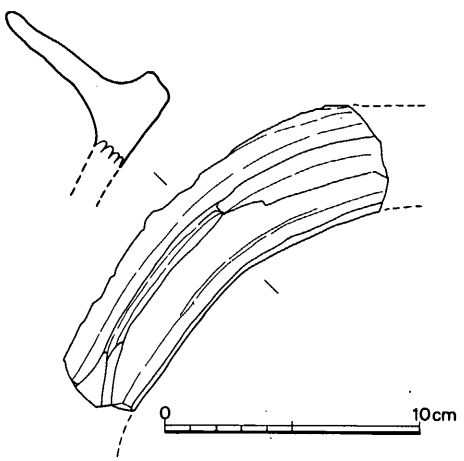
杯（6）　一見、丸底風の杯の形態を示しているが、外面の体部の中位以下を回転ヘラケズリする8世紀代のものである。外面の上位と内面はヨコナデである。口縁部を外反させ、中位に沈線を施すなどの特徴がみられる。

須恵器

蓋（7・8）　7は外面天井部をヘラケズリし、断面三角形の返りは細くシャープである。8の外面天井部にはカキ目があり、返りは7に比べて低く、明瞭さを欠く。

杯（9）　底部が明瞭な平底の杯である。体部以下底部を回転ヘラケズリし、体部中位に丸みをもつ、やや特徴のある形態をもつ。全体に薄手で、丁寧な作りである。

甕（10）　口縁部の小片である。口頸部は緩やかな屈曲で、口縁部は横にひきだす。肩部に平行



第59図　D調査区茶灰色土層出土瓦実測図（1/3）

叩きをのこす。

茶灰色土層出土土器（第58図、図版29）

土師器

鉢（11）　径19.4cmの高い高台をもつ鉢形の底部片である。上部が失われているので形状は不明であるが、ここでは高台の大きさから鉢とした。胎土は砂粒を多く含み、粗い。

須恵器

蓋（12・13）　12は外面天井部にカキ目をもつ。身受けの返りは低く、端部は嘴状に内傾する。13の天井部はヘラケズリによる調整である。

杯（14）　無高台のもので、底部をヘラケズリする。体部と口縁部はヨコナデする。

土師質竈（第59図、図版30）

移動式の竈の破片１点が出土している。炊口部の上部付近の破片で、約5.0cmの鍔と上部の口縁部が僅かに残っている。小片であるため、全形を復元出来ない。

SD4398出土土器（第58図）

須恵器

杯（15）　底部から体部への立ち上がりが直立気味で器肉が極端に薄くなる。高台は高めで開く。底部には高台貼付前のヘラケズリがみえる。

中国陶磁器

越州窯系青磁

椀（16）　低い輪高台で畳付き部を除いて、全面に施釉する。Ⅰ類。

SK4399出土陶磁器（第58図、図版30）

越州窯系青磁

椀（17・18）　平底の椀で、いずれも外面の体部中位以下は露胎である。見込みに重ねの痕跡を残す。Ⅱ類。

SE4400出土土器・陶磁器（第60図、図版30）

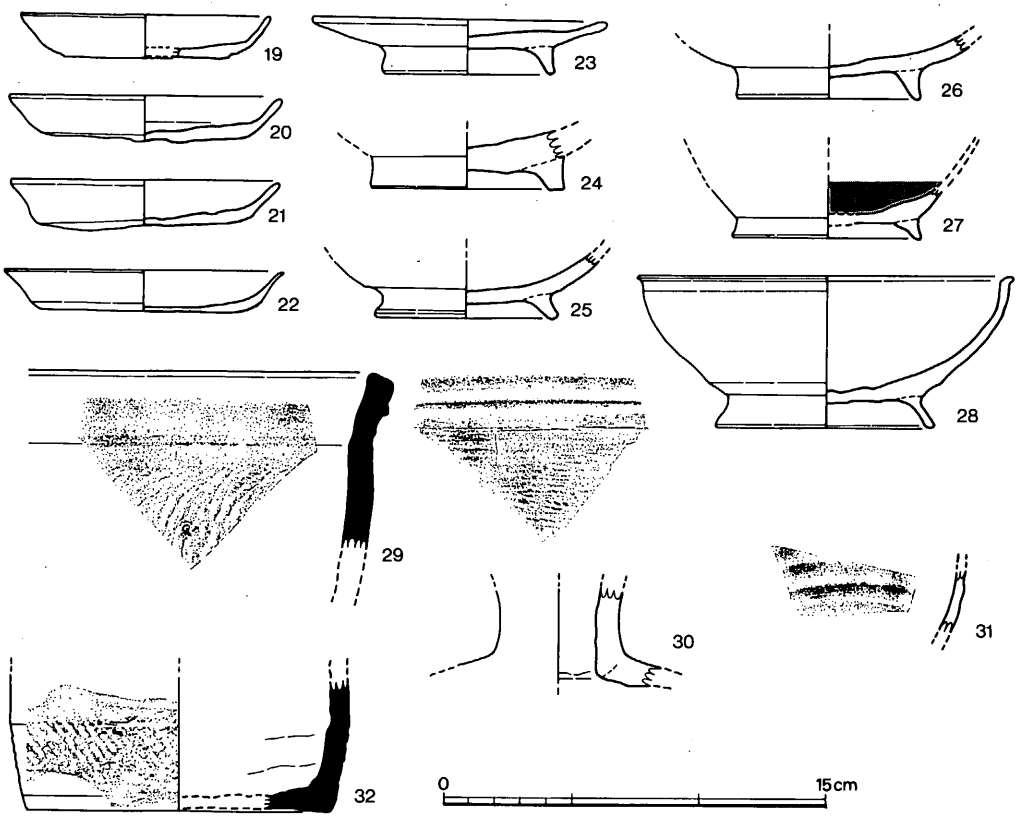
土師器

小皿a（19～22）　口径9.8 ～11.0cm。器高1.6～1.8cmである。いずれもヘラ切り離しで板状圧痕を有する。

小皿c（23）　口径11.5cmの中型の皿に高台を付ける。

椀（24～26・28）　24～26は底部片で全形を知り得ない。24の高台が断面四角形で分厚いのを除いては、やや開いた細めの高台を有する。28は完形で井戸の底に近い所から出土した。高台は細く、他のものよりやや高めで、安定感がある。直立気味の口縁は僅かに外反する。胎土は比較的精製され、焼成も良い。口径14.8cm、器高6.0cmである。

黒色土器



第60図　D調査区SE4400出土土器・陶磁器実測図（1/3）

椀（27）　小片で全形を知り得ない。内面を黒色に燻す。ミガキの単位は不明瞭である。

須恵器

鉢（29）　ほぼ直立気味の体部と口縁部は僅かに屈曲しその境となる。口縁端は断面四角形で、外側に一条の突帯を巡らす。体部外面には平行叩き、内面には同心円文の当て具痕を残す。口径30cm前後に復元できる。

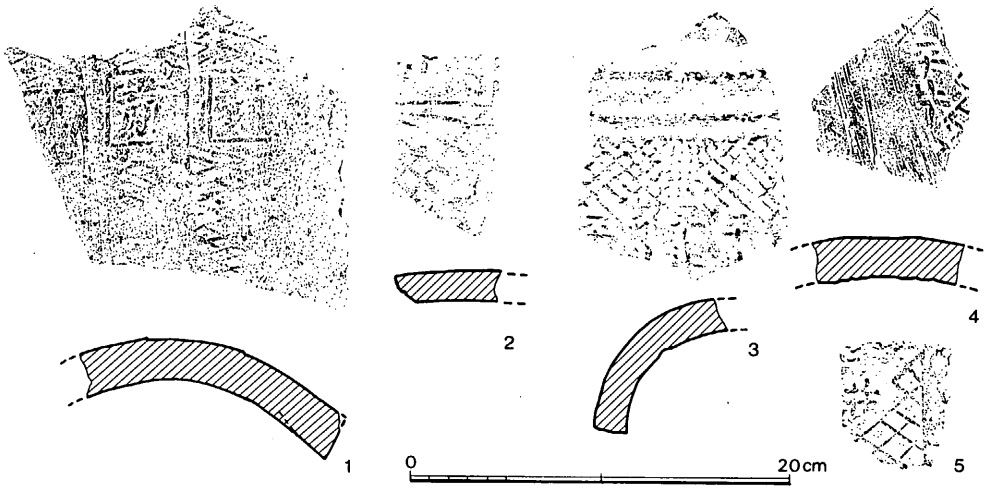
壺（32）　底径12.0cmに復元できる、平底の壺片である。二重口縁を有する肥後系の須恵器とみられる。外底に若干の凹凸がある。

灰釉陶器

壺（30）　小片である。灰釉の特徴である灰白色の胎土と若干の釉状のものから灰釉の長頸壺片とした。頸の径は4.8cm前後に復元できる。

朝鮮製陶器

壺（31）　小片であるが、壺の体部片とみられる。暗灰色の須恵器に似た胎土をもつ朝鮮製の壺片で、薄い器肉と凹凸のある調整痕はその特徴でもある。



第61図　文字瓦拓影・実測図（1/4）

瓦類

A～Dまでの4つのトレンチから土嚢袋12袋ほどの瓦片が出土した。軒瓦の出土はない。遺構では、C調査区SK4396、D調査区SD4398、SE4400などからの出土があった。

文字瓦（第61図、図版36）

丸瓦1点、平瓦4点の文字瓦の出土があった。いずれも生瓦生産段階で粘土を叩きしめるための叩打具に文字を陰刻したものである。

1はVI類に分類されたもので、4.5×4.0cmの方形枠の中に「筑」の字を書くが「几」の中には点はない。国名を示すものと考えられている。D調査区SE4400出土。2は「佐」と考えられる。II類5にあたる。書かれた文字は「佐」であって最終画がない。また、右側に棒状の1字があるが、解読されていない。製作瓦窯を示すと考えられている。D調査区出土。3は丸瓦片の玉縁に近い場所である。「平井」の2文字が読める。I類7bと思われる。丸瓦凸面に叩打した後、指によって叩打痕が押さえられたため文字は鮮明でない。瓦屋を示すものと考えられている。C調査区SK4396出土。4も「平井」でI類7aである。D調査区SE4400出土。5は4と同じものである。拓図からは「井」の字が4と異なっているように見えるが、図版36で見るように同じものである。C調査区SK4396出土。

これ等の瓦片は、いずれも一定量の石英粒を胎土に混入することを一つの特徴としている。

焼き上りが一様でなく、手につくような軟質のものから、須恵質に堅く焼き上がったものまであるが、上記5点の焼き上りは良い。

丸・平瓦

丸・平瓦片のうち、B・C調査区から縄目・斜格子目の平瓦を出土しているが、量は少ない。

C調査区SK4396は、丸瓦2点、平瓦6点、塼1点が出土している。丸瓦・平瓦とも斜格子目の瓦片で、第61図5の「平井」の文字瓦を共伴しているから、10世紀前半ころと考えられよう。

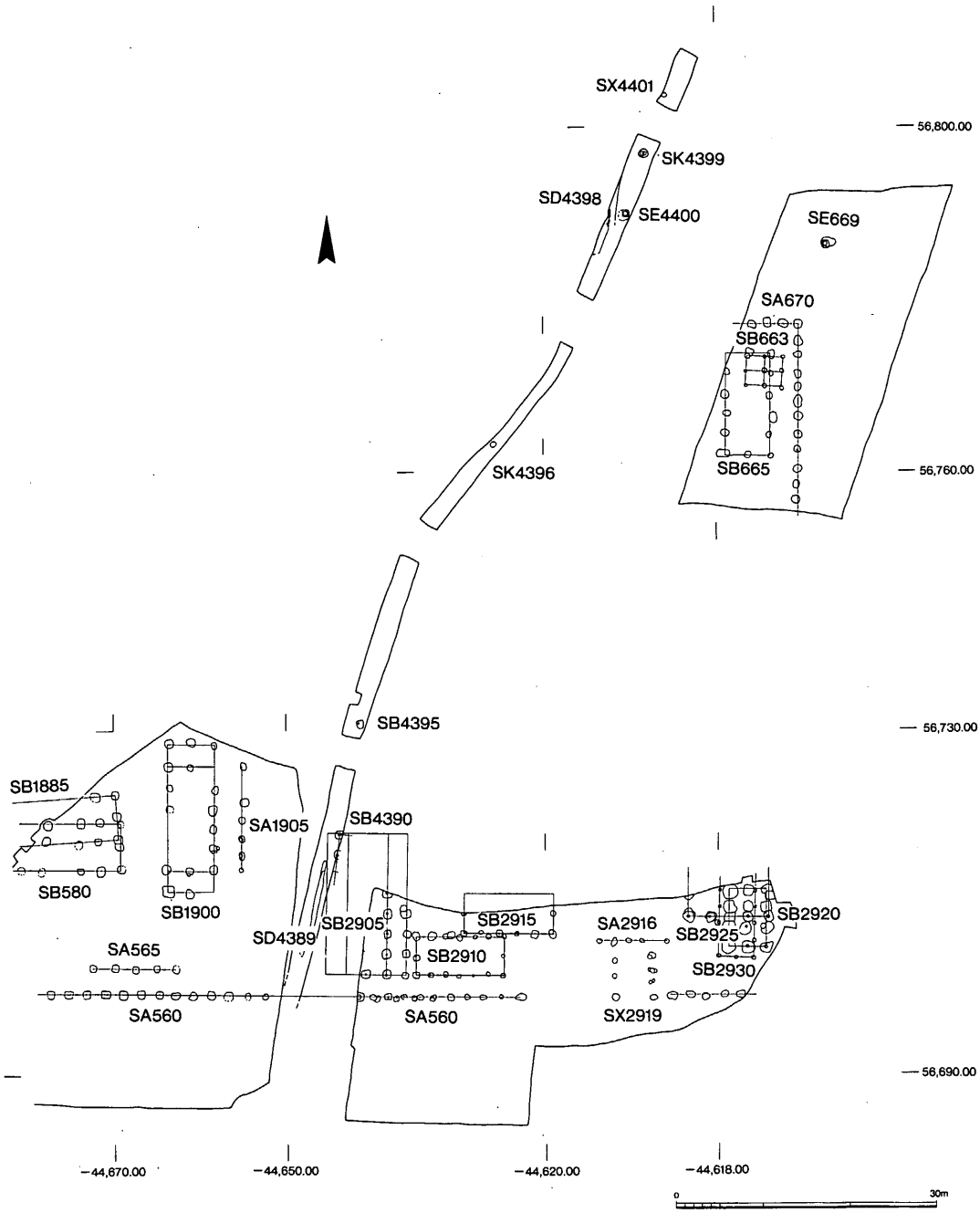
また、D調査区SE4400からは2点の縄目瓦片と、14点の斜格子目の瓦片が出土している。

小　結

今回の調査は上・下水道工事に伴う緊急調査であり、調査の範囲も狭く、遺構の把握には限界があったものの、これまで不明であった道路下の遺構の状況を知るには恰好の機会であった。本次調査の西側（第31・35・72次調査）と東側（99次調査）さらに東北部（34次調査）ではすでに9棟の掘立柱建物の存在が確認され、これらの建物を囲む柵が南北約70m、東西約112mの規模で確認されていた。この柵で囲まれた部分は一つの官衙ブロックを示しており、通称「月山東地区官衙」と呼んでいる。この官衙の性格・機能については具体的には判らないが、従来考えられていた学校院との境界は、この官衙域が存在することで必ずしも明瞭な区画は設けられていなかったとの結論を得るに至っている。鏡山案では、政庁域を方4町、学校院を方1町の範囲と推定し、現在、東西に走る道路付近を五条大路に考え、その道路に面して政庁と学校院が並び建つ姿が想定復元されていた。調査の結果は、この復元案と必ずしも合致しなかった。

この月山東地区官衙については、現在住宅がある等で未調査部分がまだかなり残されており、全体の状況把握にはまだ及ばないが、未調査部分の一部である道路部分の調査が今回出来たことは大きな成果であろう。過去の調査との関連で、道路下に延びる遺構として、第99次調査検出のSB2905と前面の柵SA560、それに後面の柵SA668の延長が検出される予定であったが、SA560については後世の撹乱により遺構は失われ、それを確定することは出来なかった。また、SB2905については、その柱筋の延長付近で柱穴2個を検出したが、検討の結果方向がやや異なり、柱筋もずれることから別の建物の柱穴であることが明らかとなった。また、SA668の延長部については工事の関係で未調査となり、結論は得られなかった。

今回、顕著な遺構として井戸跡を検出したが、年代的に10世紀の後半代で第3期政庁の終末期にあたる。周辺の官衙域建物が消滅するのは、おそくとも11世紀中頃とみられることから、月山東地区官衙も存続していた可能性は充分考えられる。この井戸は柵の外側に存在するものの近接した位置にあり、ある時期には官衙と併存していて、何らかの関連があったと推定される。これまで、官衙域内では井戸が伴った例はなく、井戸が伴う場合は官人居住地と推定されているところである。今回の場合も官衙建物を囲む柵外であり、生活に関連する遺構と考えられる。



第62図　月山地区官衙主要遺構配置図

別　表

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SD4380（第176次調査）										
土師器	小皿	34	1	7.3	5.4	1.0		○	○	○
		〃	2	(8.0)	(6.0)	1.5		○	○	○
SK4337										
土師器	小皿	34	3	9.0	5.1	1.0		○	○	○
		〃	4	(8.7)	(6.2)	1.4		○	○	○
	杯	〃	5	(17.0)	(11.0)	2.7		○	○	○
SX4375										
土師器	小皿	35	1	(8.8)	(6.6)	1.0		○	○	○
		〃	2	(8.6)	(6.7)	1.1		○	○	○
		〃	3	(9.2)	(7.2)	1.0		○	○	○
		〃	4	(9.2)	(7.1)	1.1		○	○	○
		〃	5	(9.5)	(7.3)	0.9		○	○	○
		〃	6	9.6	8.4	1.4		○	○	○
		〃	7	(9.2)	(7.2)	1.1		○	○	○
		〃	8	9.5	7.8	1.3		○	○	○
		〃	9	(9.6)	(8.1)	1.3		○	○	○
		〃	10	(11.1)	(7.6)	0.9		○	○	○
	杯	〃	11	(14.2)	(11.0)	2.9		○	○	○
		〃	12	(14.8)	(10.3)	3.2		○	○	○
		〃	13	(15.8)	(10.6)	2.9		○	○	○
SX4376										
土師器	杯	35	15	(15.5)	(9.6)	3.4		○	○	○
黒褐色土層										
土師器	小皿	35	16	8.6	6.8	1.1		○	○	○
		〃	17	(8.3)	(5.9)	1.0		○	○	○
	杯	〃	18	(16.4)	(11.8)	2.7		○	○	○
SB760										
土師器	杯	36	1	(16.0)	3.0	(12.4)	○		○	○
SK4370上層										
土師器	小皿	37	1	(7.9)	(6.0)	1.0		○	○	○
		〃	2	(8.0)	7.0	0.7		○	○	○
		〃	3	8.2	6.6	1.1		○	○	○
		〃	4	(8.2)	(6.3)	1.0		○	○	○
		〃	5	8.4	6.4	1.0		○	○	○
		〃	6	(8.5)	(6.5)	1.4	○		○	○
		〃	7	(8.6)	(6.6)	1.1		○	○	○
		〃	8	9.4	7.4	1.2		○	○	○
		〃	9	(9.6)	(7.5)	1.0		○		

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
土師器	小皿	37	10	(9.2)	(7.0)	1.1		○	○	○
		〃	11	(10.5)	(8.0)	0.9		○	○	○
	杯	〃	12	(15.2)	(9.6)	3.0		○	○	○
SK4370										
土師器	小皿a	38	1	7.2	5.6	1.0		○	○	○
		〃	3	(8.9)	(7.8)	1.0		○	○	○
		〃	4	(8.6)	(6.2)	1.1		○	○	○
		〃	5	8.3	6.6	1.1		○	○	○
		〃	6	(8.6)	(7.4)	0.8		○	○	○
		〃	7	(8.8)	6.7	1.0		○	○	○
		〃	8	(9.0)	(6.9)	1.2		○	○	○
		〃	9	9.0	8.2	1.0		○	○	○
		〃	10	9.2	7.0	1.1		○	○	○
		〃	11	9.2	7.3	1.0		○	○	○
		〃	12	(9.6)	(7.9)	1.0		○	○	○
		〃	13	(9.4)	(8.1)	1.0		○	○	○
	小皿	〃	2	(8.6)	(8.0)	1.0	○			
	小皿c	〃	14	9.6	7.4	1.6		○	○	
		〃	15	(10.0)	6.3	2.0	○		○	
	杯	〃	16	(12.0)	8.1	3.0	○		○	
		〃	17	(11.4)	(7.1)	2.5		○	○	○
		〃	18	(12.8)	(7.6)	2.9		○	○	○
		〃	19	14.2	9.8	3.0		○	○	○
		〃	20	14.2	8.6	3.1		○	○	○
		〃	21	13.8	10.5	2.9		○	○	○
		〃	22	14.8	9.8	3.2		○	○	○
		〃	23	15.1	10.8	3.1		○	○	○
		〃	24	(14.3)	(9.2)	2.7		○	○	○
		〃	25	14.5	10.4	2.5		○	○	○
SK4362										
須恵器	蓋	40	1	(19.6)						
SK4364										
土師器	杯	40	2	(15.1)	(10.0)	2.2		○	○	○
SX4363										
土師器	丸底杯	40	3	(15.5)	7.4	3.5	○			
SX4367										
土師器	椀	40	5	(13.8)	(8.3)	5.2	○			
SX4373										
土師器	杯	40	8	(15.4)	(10.2)	3.2		○	○	○
		〃	9	(15.0)	(10.5)	2.9		○	○	○

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
第5調査区包含層										
土師器	小皿	41	1	(9.0)	(7.2)	1.1	○		○	○
		〃	2	9.4	6.8	1.2		○	○	○
		〃	3	(8.5)	(7.0)	1.8	○		○	
		〃	4	(9.4)	(6.9)	1.5		○	○	○
		〃	5	(9.2)	(7.3)	1.2		○	○	○
	杯	〃	6	(11.0)	(6.0)	3.0	○		○	○
		〃	7	(12.8)	(7.2)	2.8	○			
		〃	8	14.6	10.5	3.3		○	○	○
		〃	9	(15.4)	(11.1)	2.6		○	○	
	椀	〃	10		8.6		○			
		〃	11		8.4				○	○
第5調査区茶褐色包含層										
須恵器	蓋	41	20	16.3		3.4	○			
	杯	〃	21	14.1	8.2	4.7	○			
SK4358										
土師器	小皿	42	2	(8.5)	(6.8)	0.9		○	○	○
	丸底杯	〃	3	(14.6)			○			
		〃	4	(15.5)			○			
須恵器	蓋	〃	6	(14.8)			○			
		〃	7	(18.3)			○			
		〃	8	17.4		4.8	○			
第6調査区表土層										
土師器	杯	43	1	(16.4)	(10.4)	3.7		○	○	○
SK4355										
土師器	小皿	44	2	(7.8)	(5.0)	1.1		○	○	○
		〃	3	(8.0)	(5.6)	0.8		○	○	○
		〃	4	9.0	7.3	1.2		○	○	○
		〃	5	(9.6)	(7.8)	1.2		○	○	○
		〃	6	10.3	8.1	1.1		○	○	○
	杯	〃	7	(15.0)	(10.0)	3.3		○	○	○
		〃	8	15.7	11.5	2.7		○	○	○
		〃	9	(20.0)	(13.0)	2.5		○	○	
SX4354										
土師器	小皿	44	14	7.7	5.5	1.2		○	○	○
		〃	15	(9.2)	(7.0)	1.5		○	○	○
	杯	〃	16	(12.3)	8.5	2.7		○	○	
須恵器	蓋	〃	17	(13.2)		1.1				

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SK4396（第178次調査）										
土師器	丸底杯	58	1	15.0		3.9	○			
須恵器	椀	〃	2		6.5		○			
茶色土層										
土師器	杯	58	6	(14.4)		(4.2)	○			
須恵器	蓋	〃	7	(16.0)			○			
		〃	8	(19.0)			○			
	杯	〃	9	(13.0)	(6.4)	(3.5)	○		○	
茶灰色土層										
須恵器	蓋	58	12	(14.0)			○			
		〃	13	(13.0)			○			
	杯	〃	14	(12.0)			○		○	
SD4398										
須恵器	椀	58	15		8.1		○		○	
SE4400										
土師器	小皿	60	19	(9.8)	(6.4)	1.7	○		○	
		〃	20	10.6	8.0	1.8	○		○	○
		〃	21	10.6	8.6	1.8	○		○	○
		〃	22	(11.0)	(8.2)	1.6	○			
		〃	23	11.4	6.8	2.2			○	
	椀	〃	24		(7.6)		○		○	
		〃	25		(7.4)		○			
		〃	26		(7.3)		○		○	
		〃	28	14.8	8.7	6.0	○			
黒色土器	椀	〃	27		(7.5)			○		

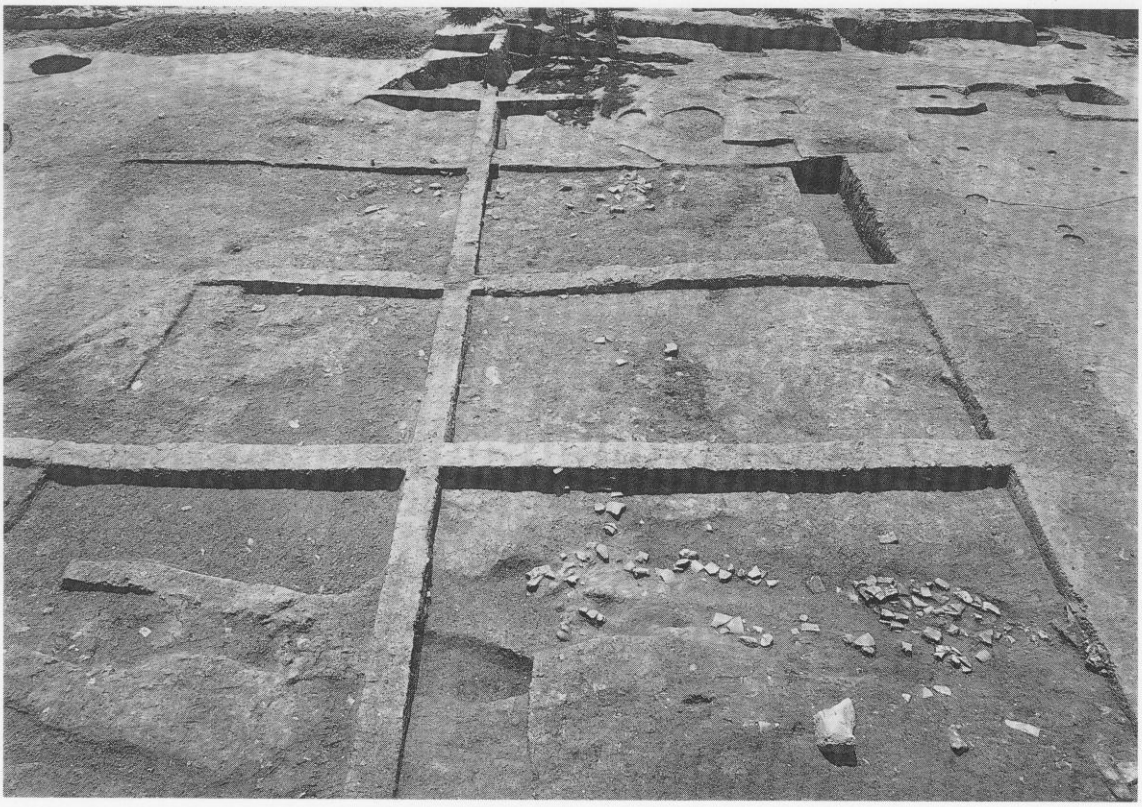
図　　版

第169-1・2次調査地遠景（背後は四王寺山）

第169-2次調査区全景（東から）

第169-2次調査区全景（北から）

谷部SX4420（北から）

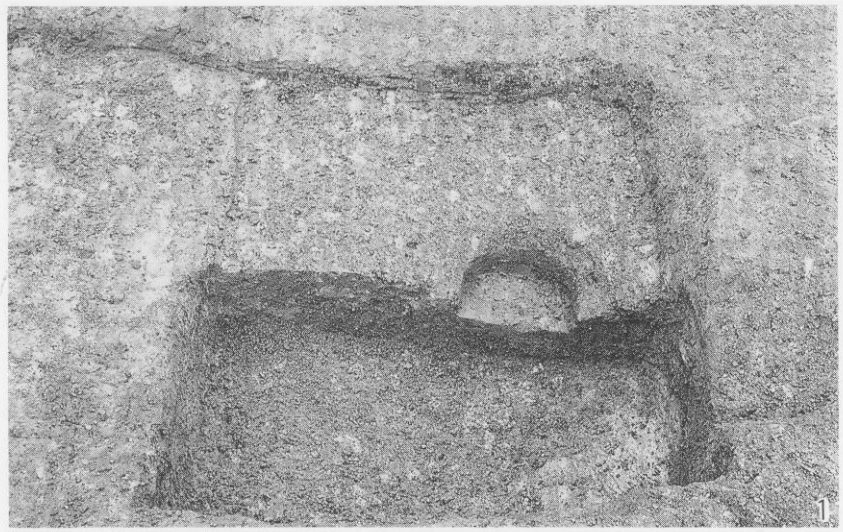


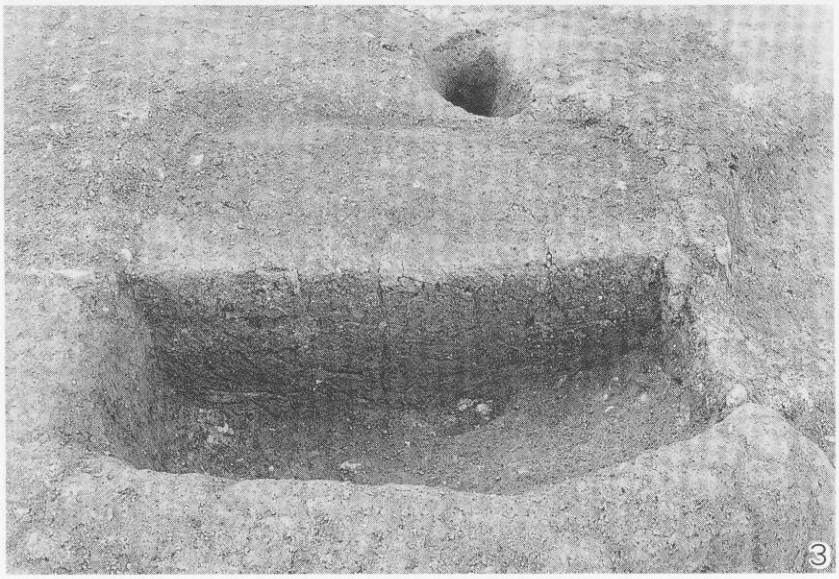
第169-2次調査区南半部（東から）

第3トレンチ（東から）

掘立柱建物SB4410（南東から）

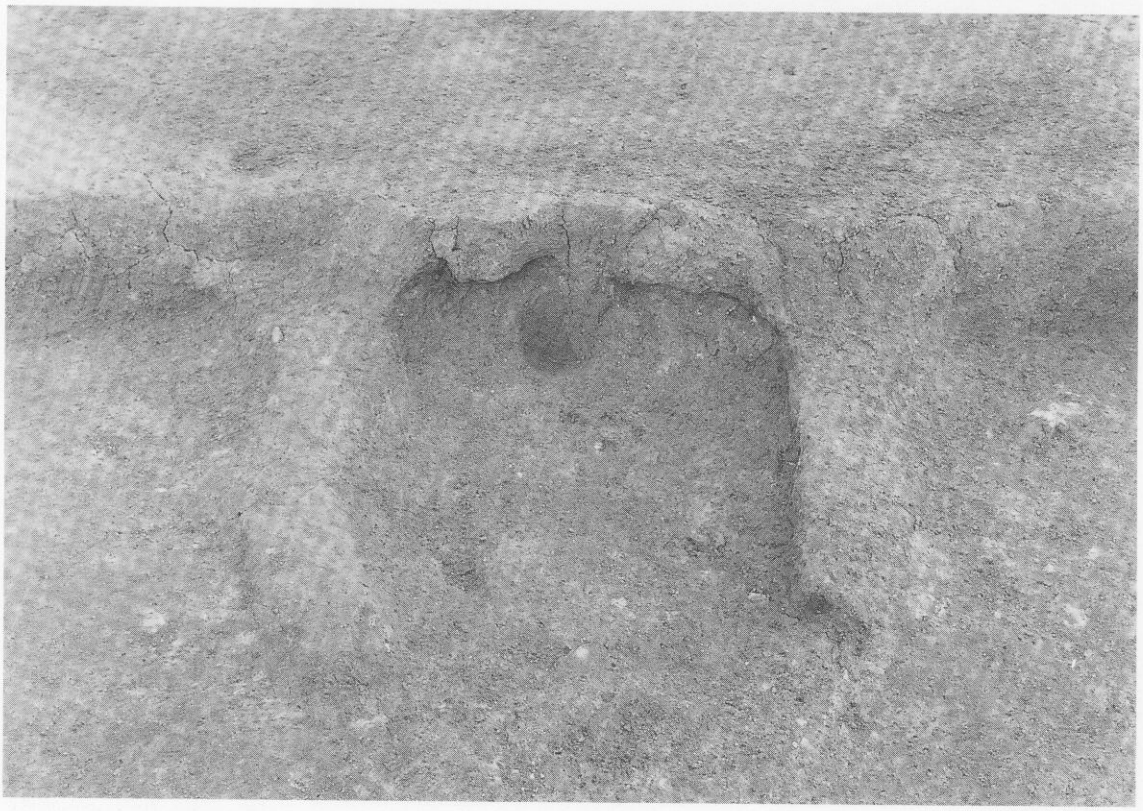
掘立柱建物SB4410（北から）





掘立柱建物SB4410柱掘形

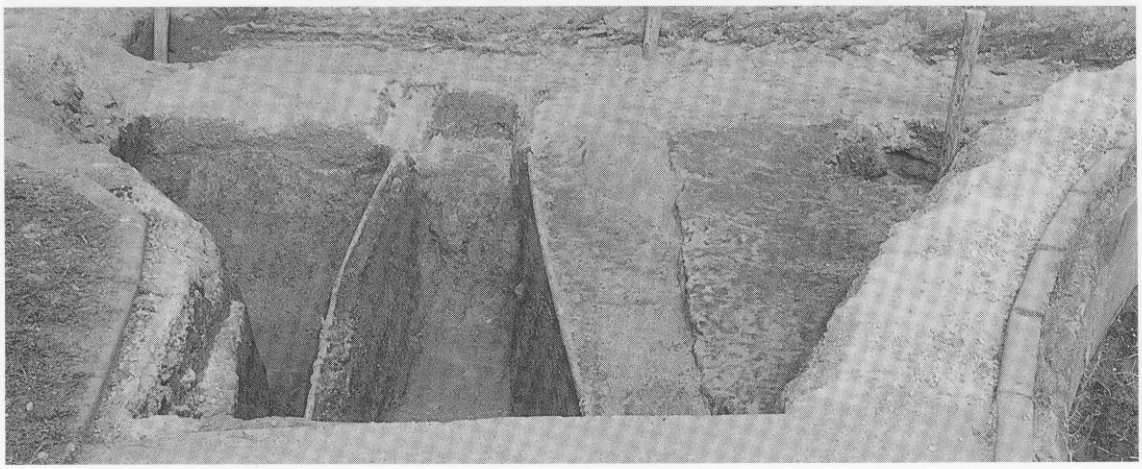
竪穴住居SI4411・4412（北から）



竪穴住居SI4411カマド（北から）

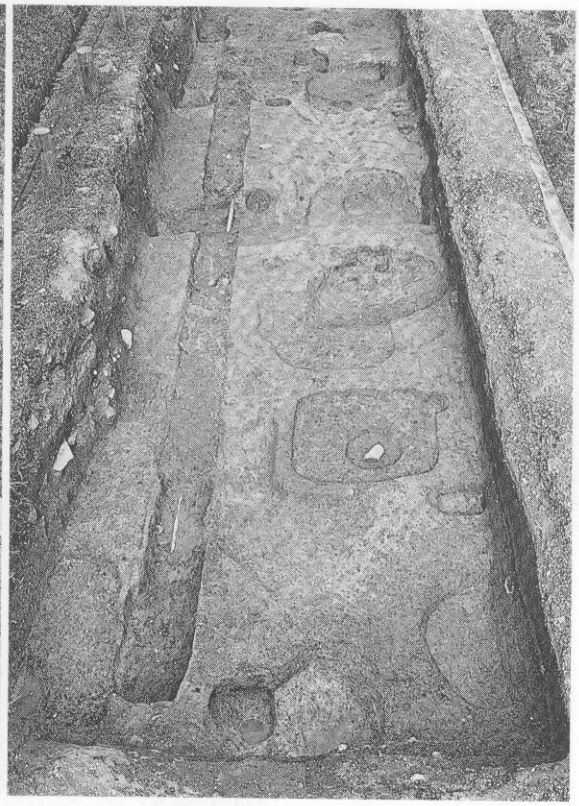
第176次調査
第１調査区全景
（東から）

第176次調査
第２調査区全景
（東から）

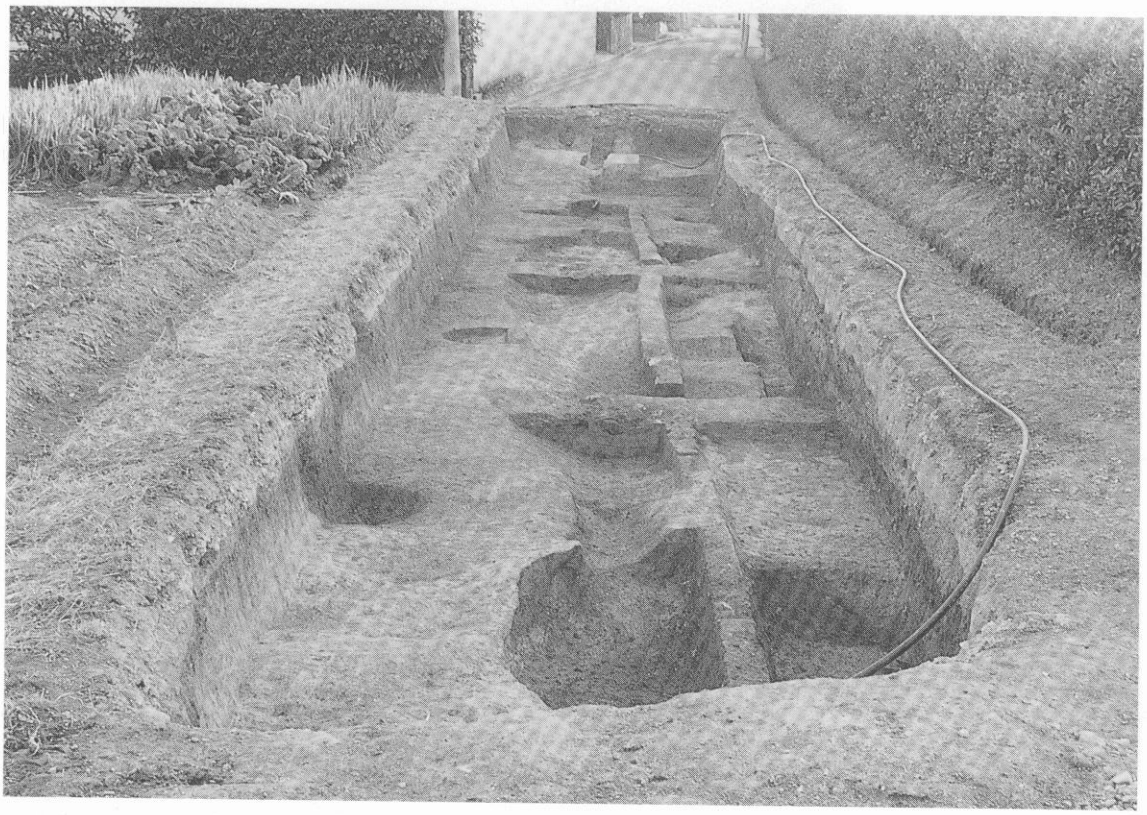


第176次調査　第４調査区全景（南から）

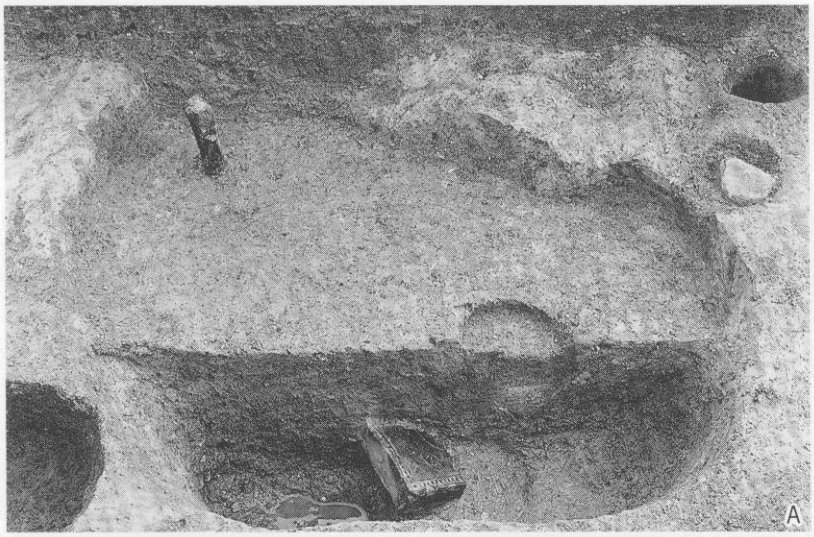
第176次調査　第５調査区全景（南から）



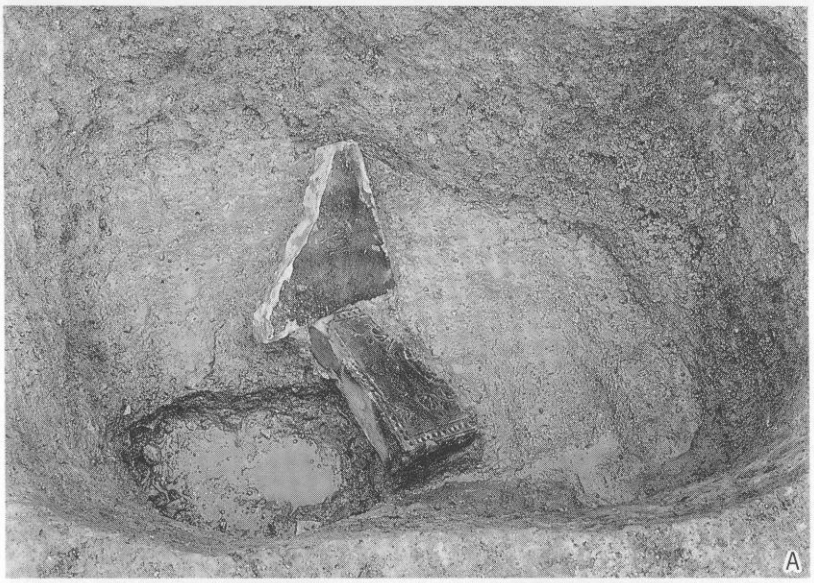
掘立柱建物SB760・765（南から）



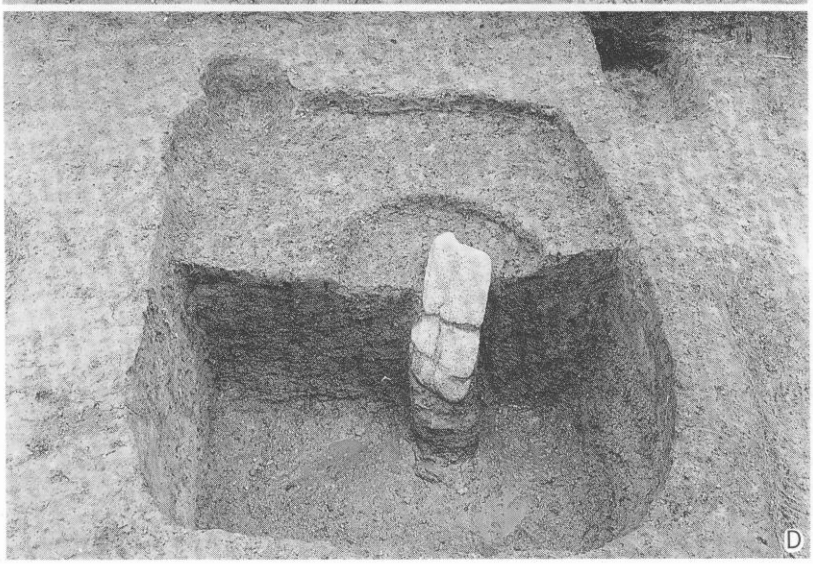
第176次調査　第７調査区全景（北から）



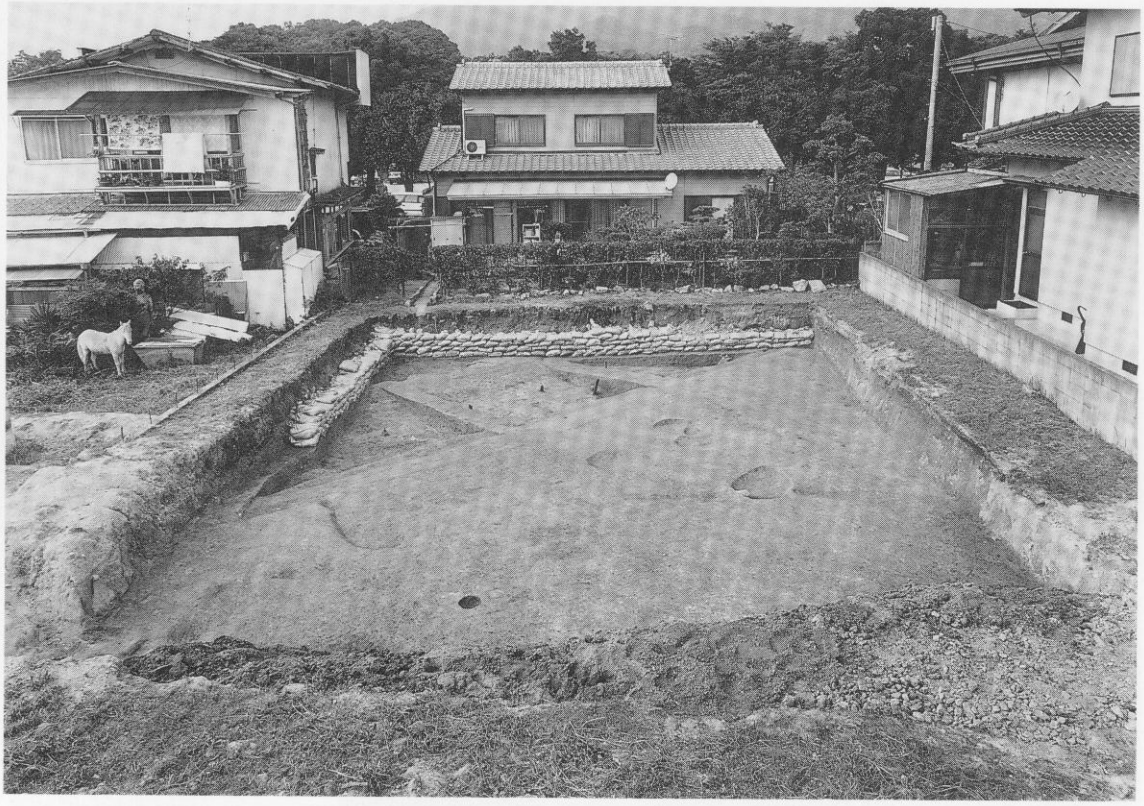
掘立柱建物
SB765(A)柱掘形
断面



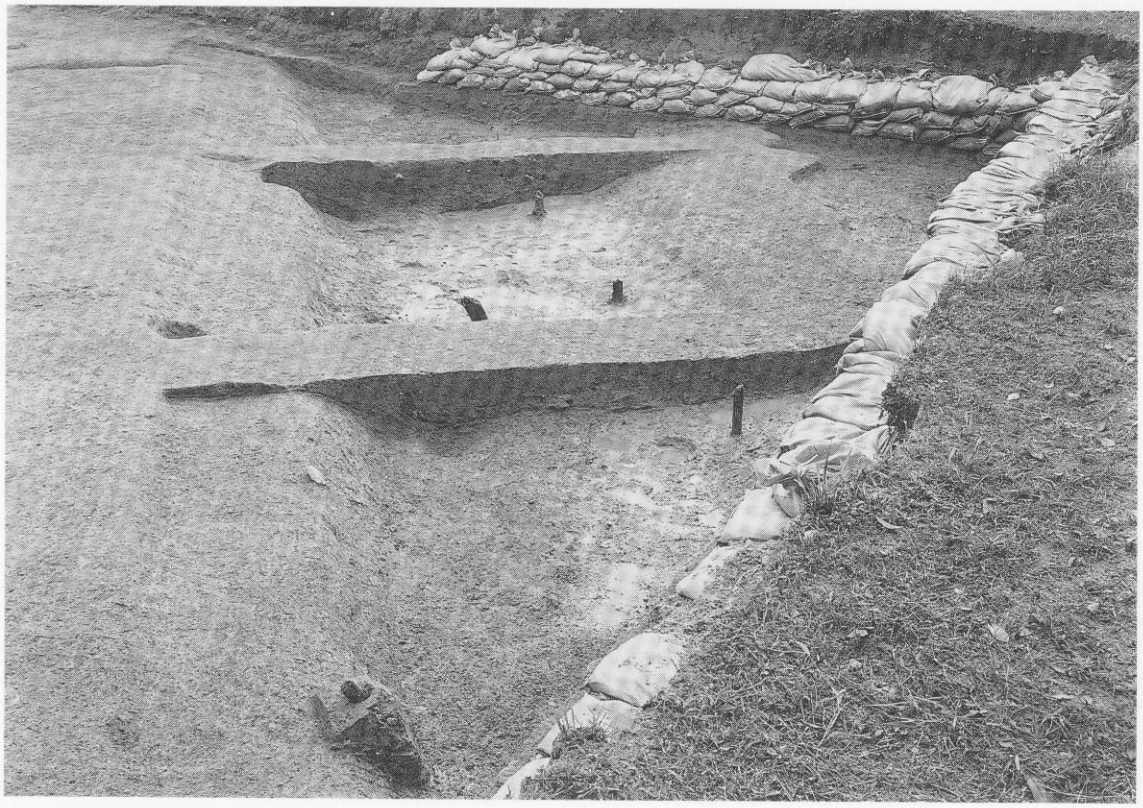
同上完掘状況



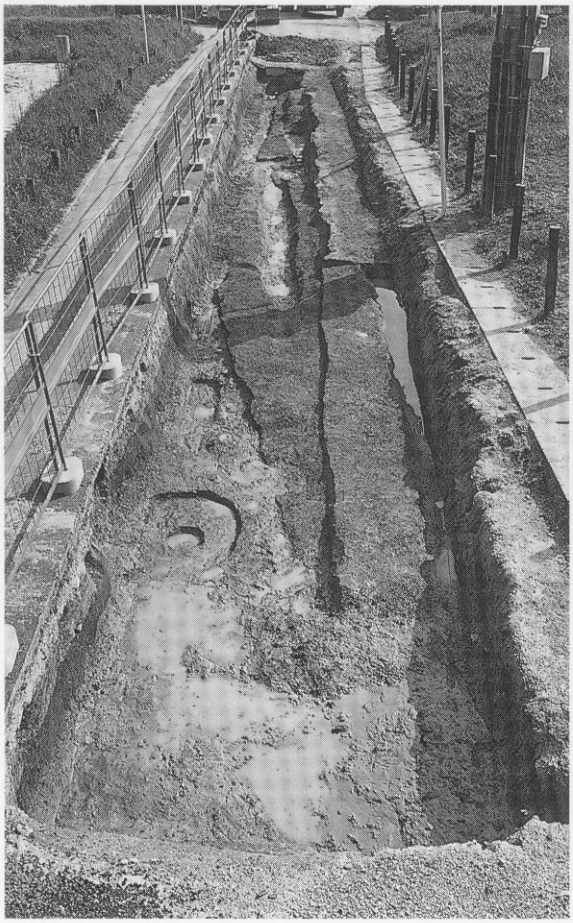
掘立柱建物
SB760(D)柱掘形



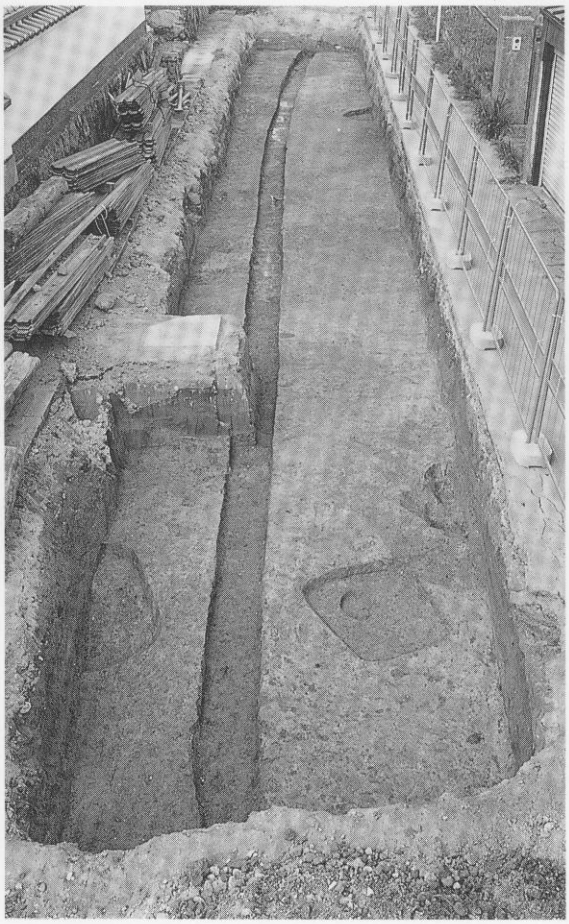
第177次調査区全景（南から）



溝SD3930（東から）

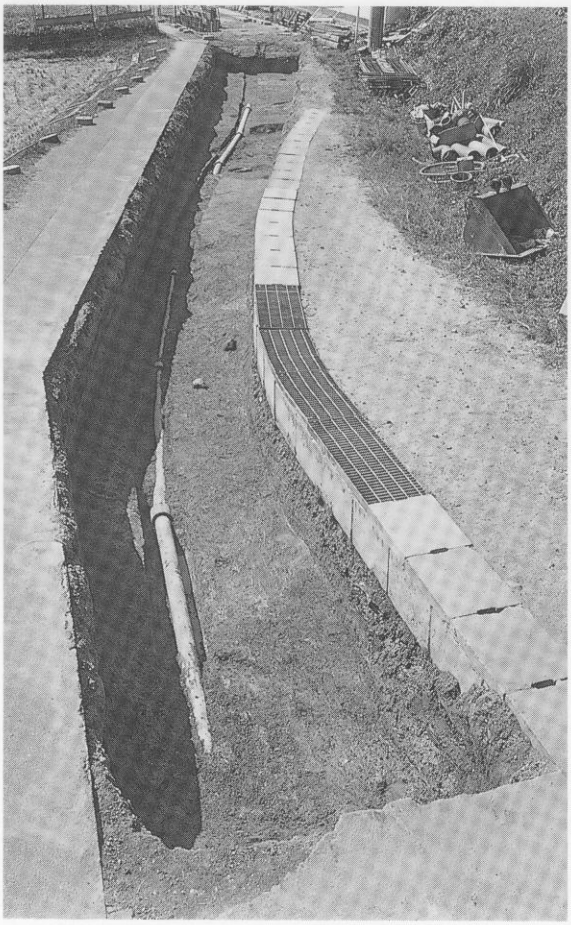


第178次調査　A調査区全景（北から）

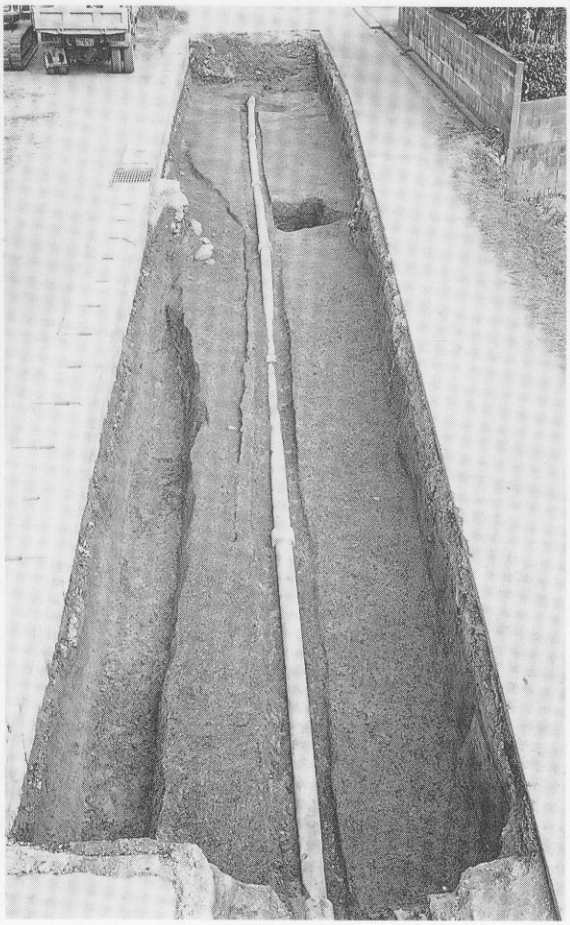


第178次調査　B調査区全景（南から）

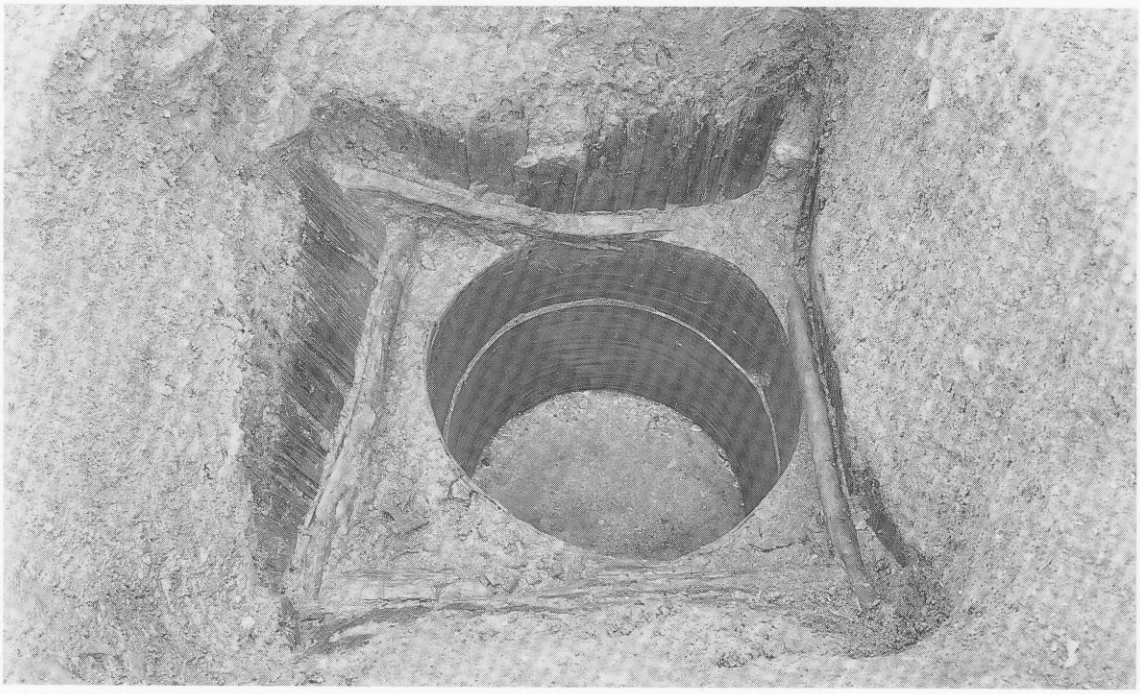
掘立柱建物SB4390柱掘形



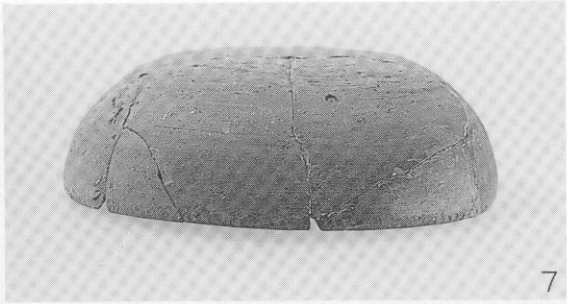
第178次調査　C調査区全景（北から）

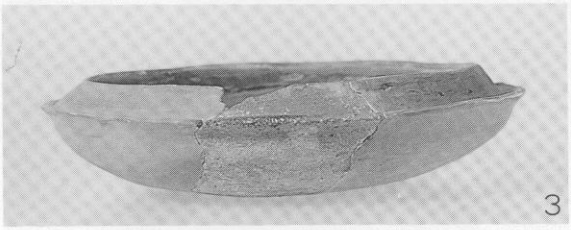


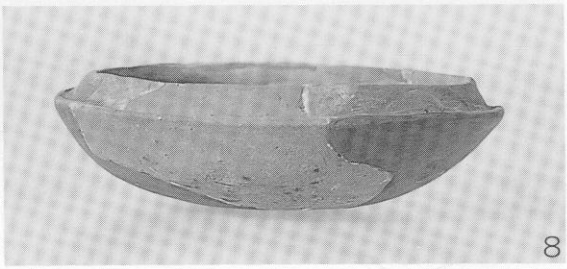
第178次調査　D調査区全景（南から）

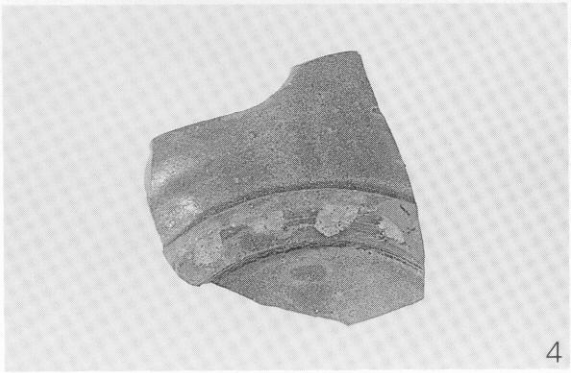


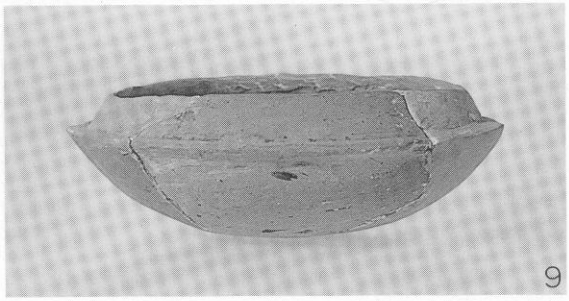
井戸SE4400（南から）

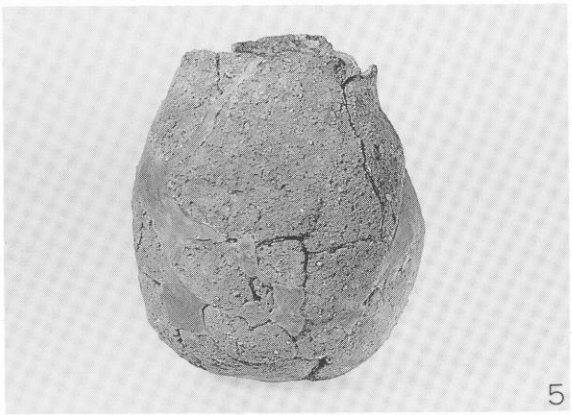


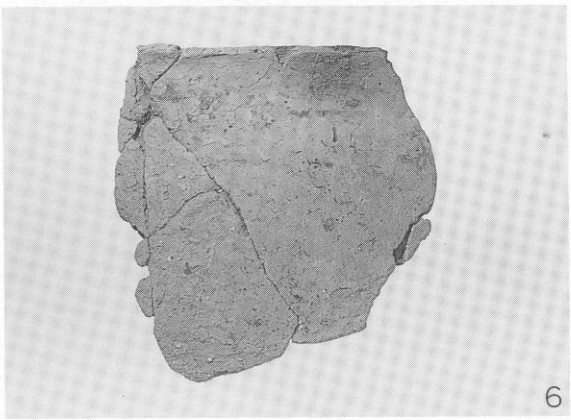


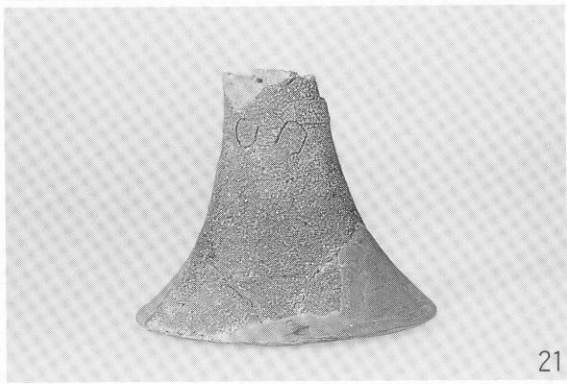




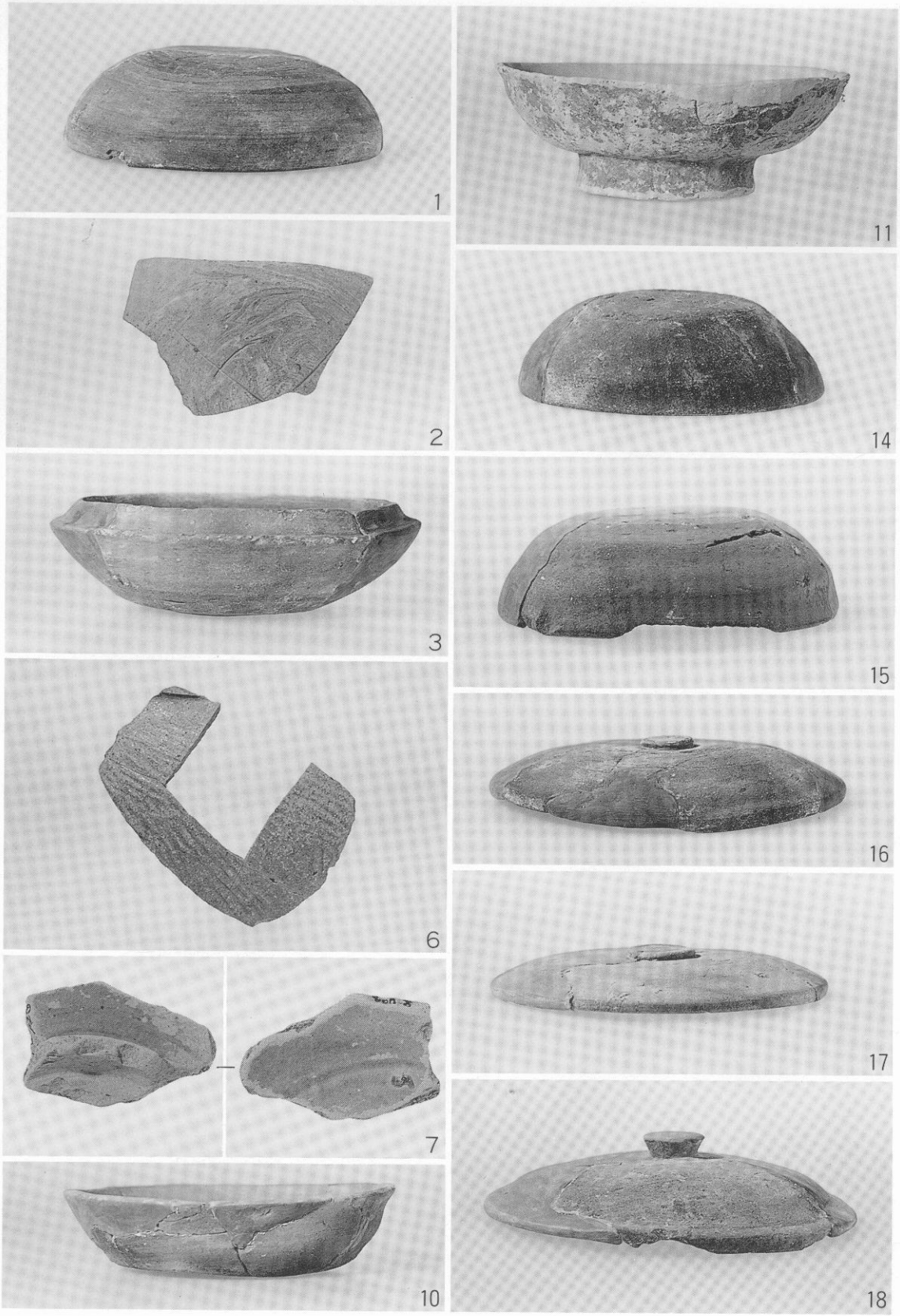




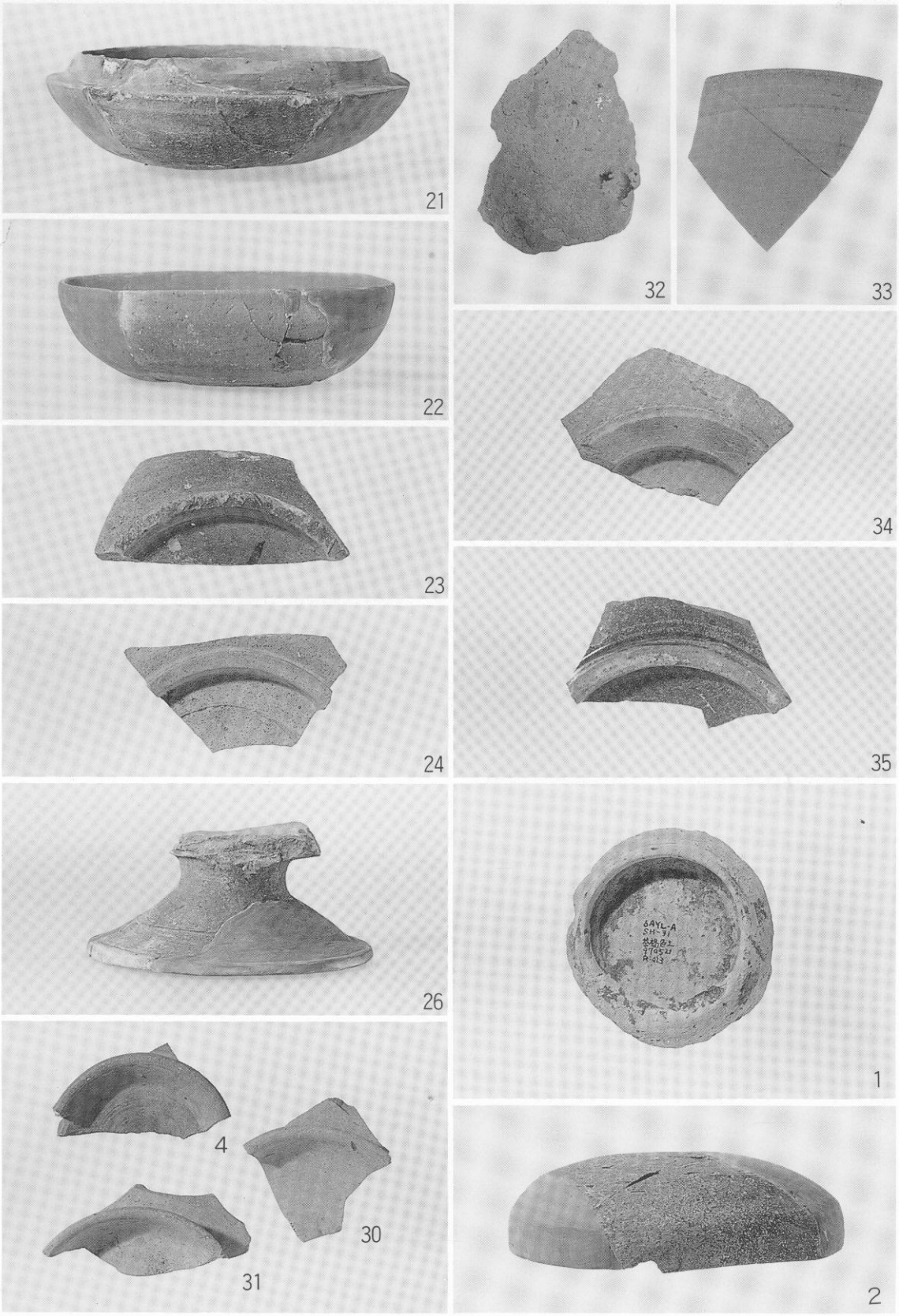




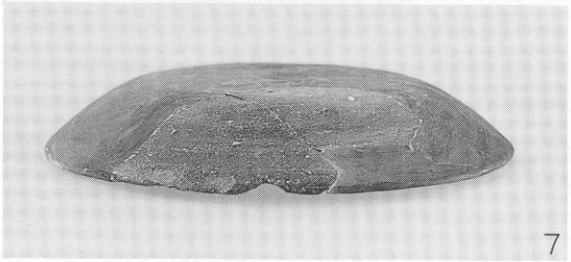
第169-2次調査　SB4410、SD4416、SI4411、SX4421出土土器

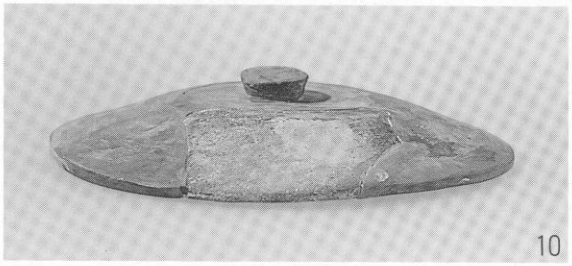


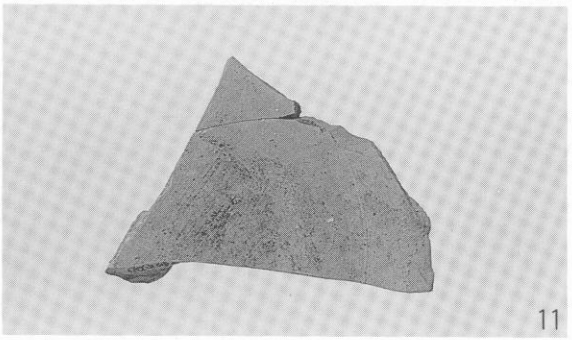
第169-2次調査　上層整地層出土土器・陶磁器

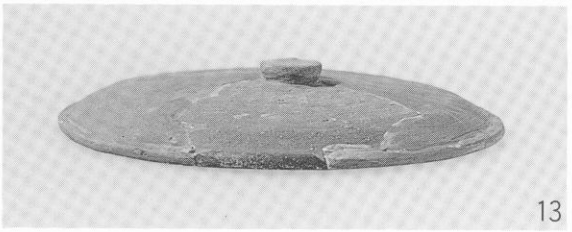


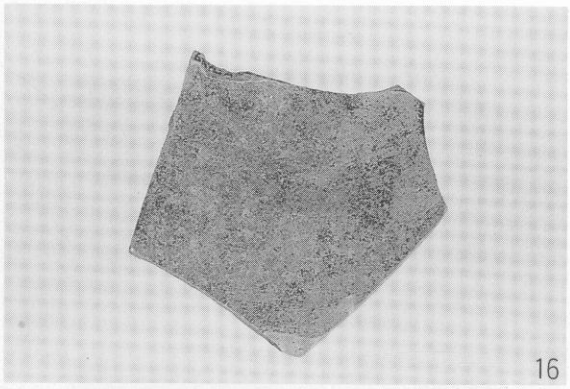
第169-2次調査　上層整地層、下層整地層出土土器・陶磁器

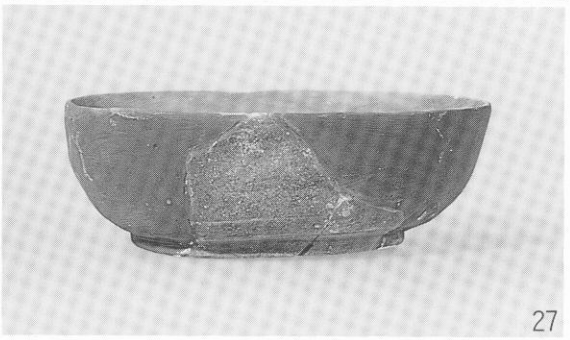


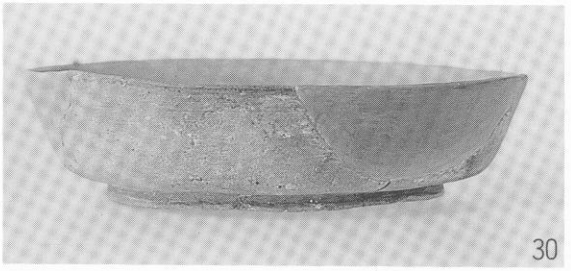




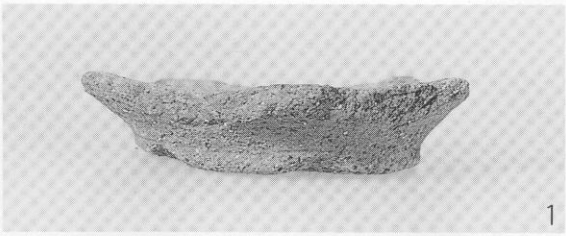


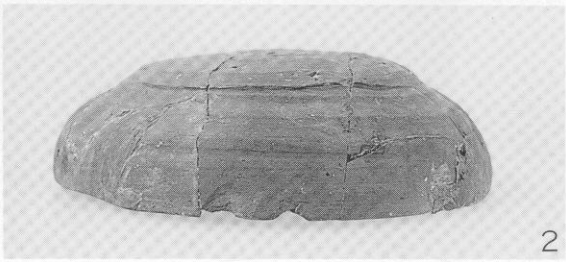


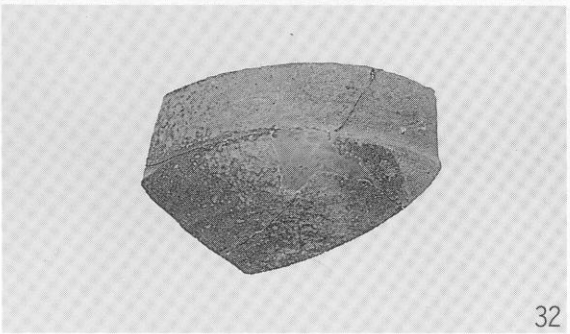


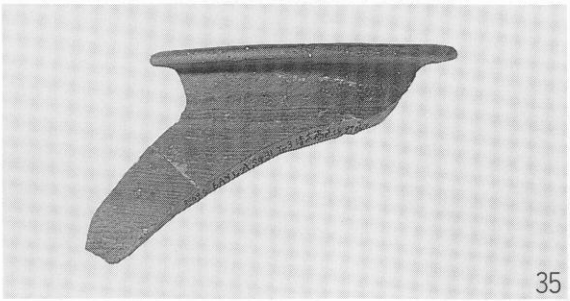


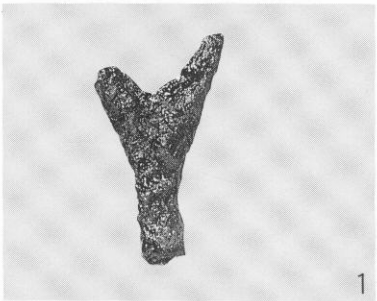
第169-2次調査　下層整地層出土土器

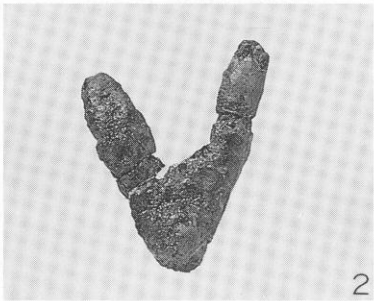


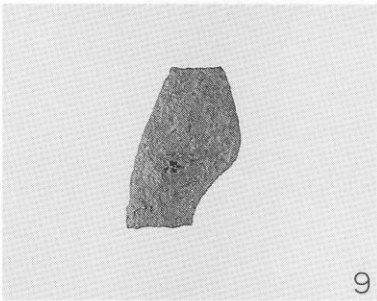


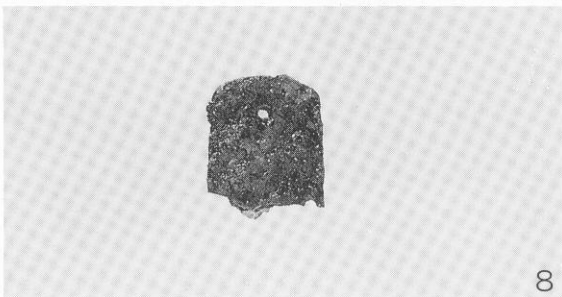




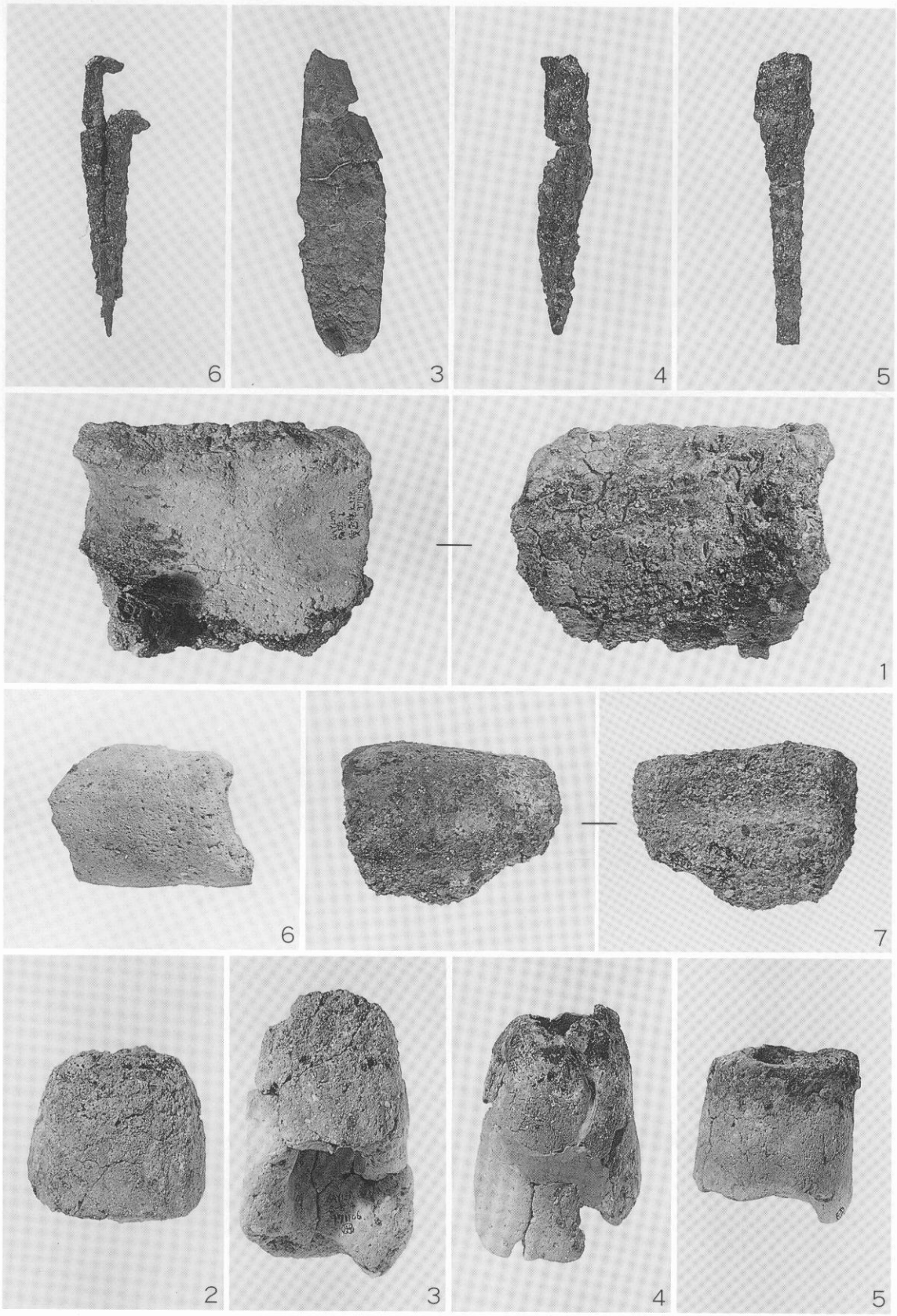




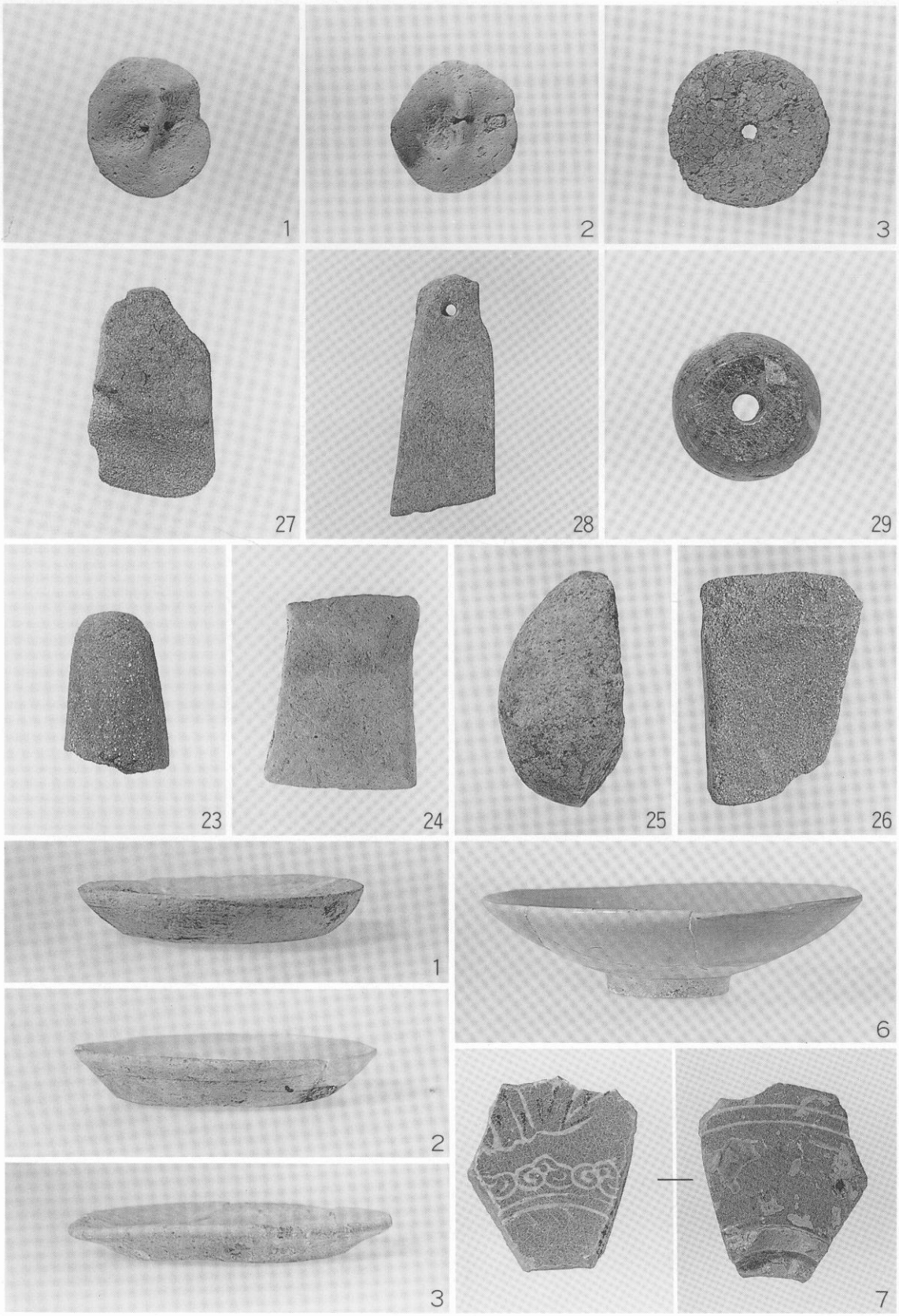




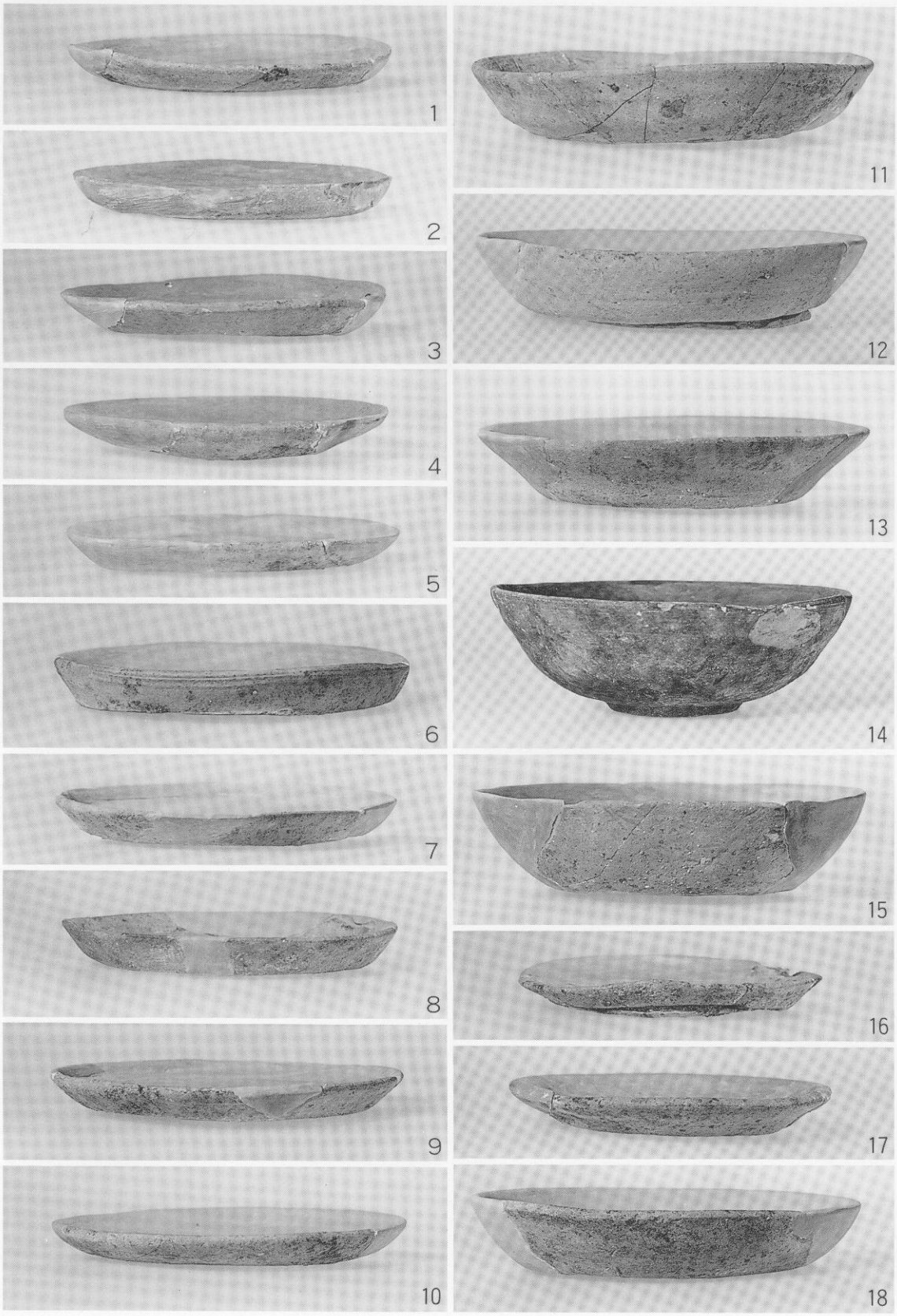
第169-2次調査　下層整地層出土土器・鉄製品



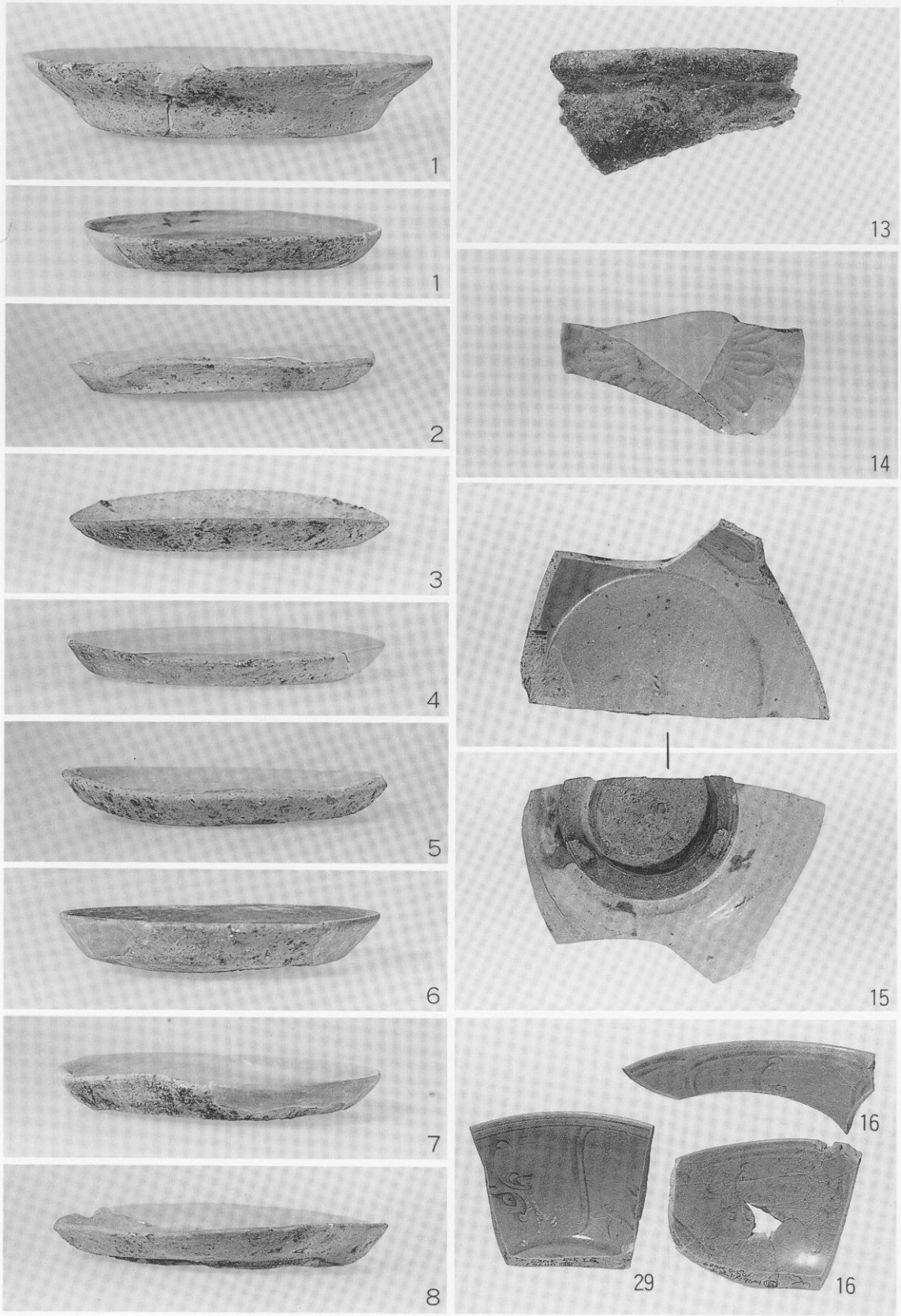
第169-2次調査　出土鉄製品・鞴羽口



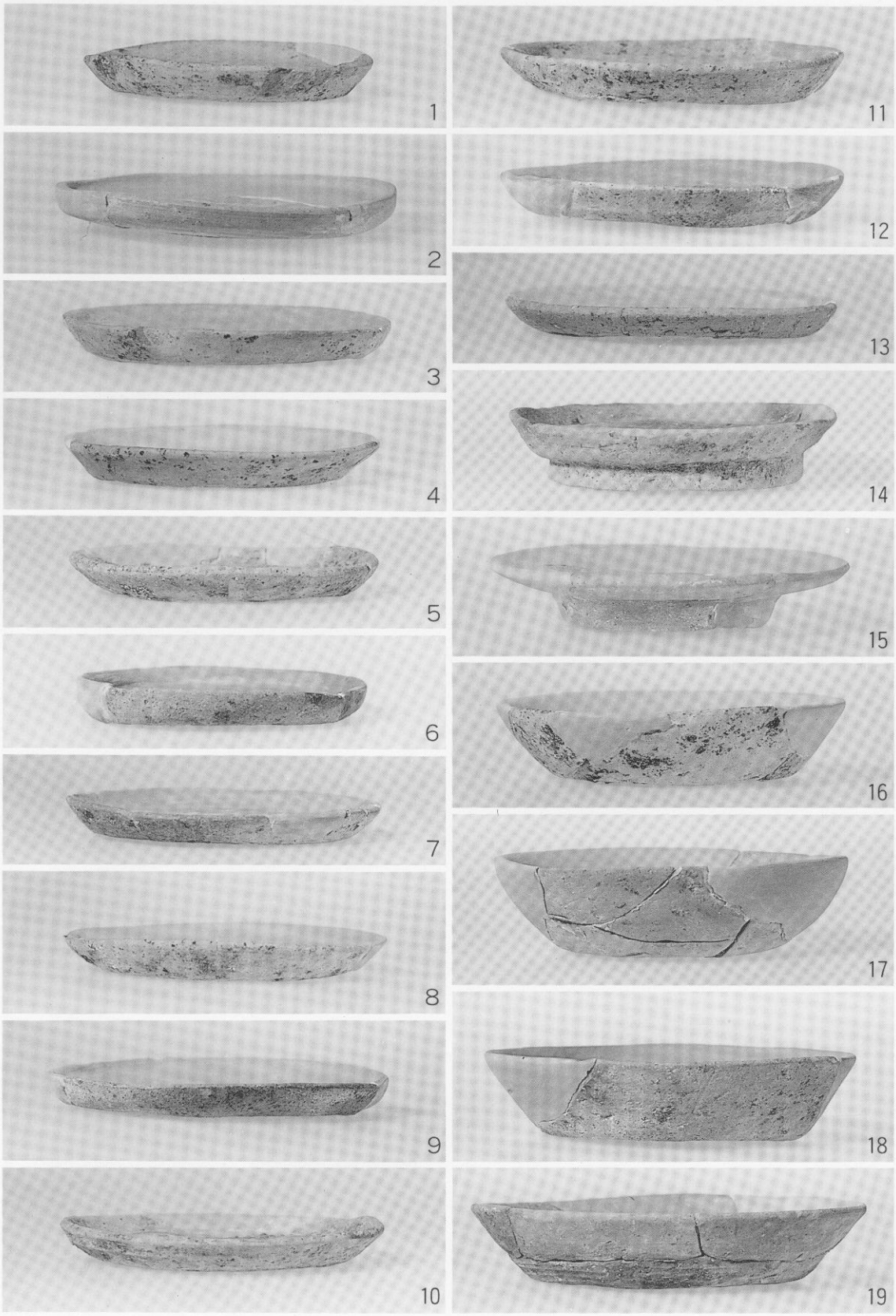
第169-2次調査　出土土製品・石製品、第176次調査　SD4380、SK4377、表土層出土土器・陶磁器



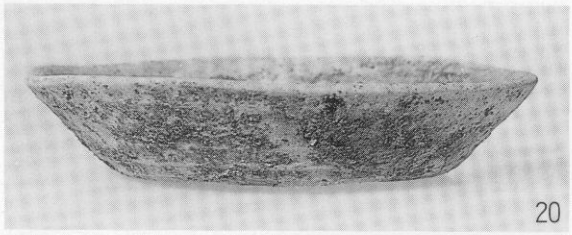
第176次調査　SX4375・4376、黒褐色土層、出土土器

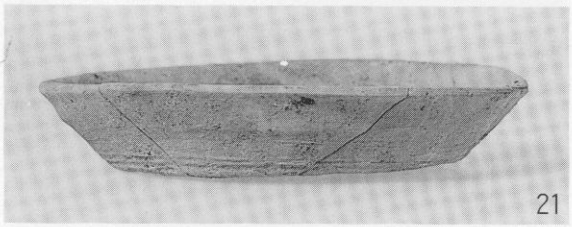


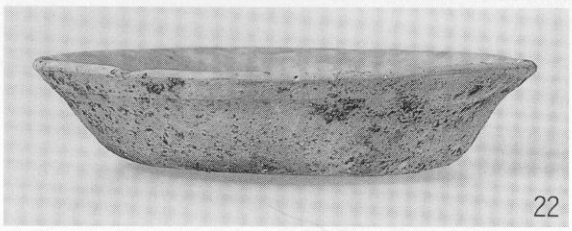
第176次調査　SB760、SK4370上層、SK4370出土土器・陶磁器

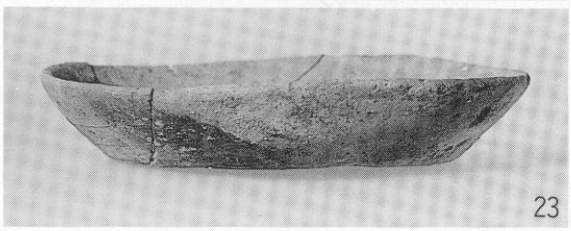


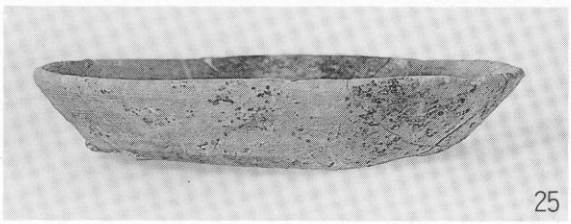
第176次調査　SK4370出土土器

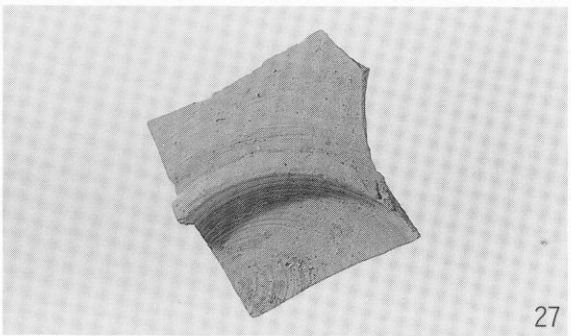


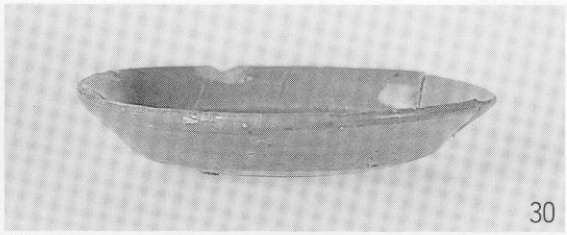


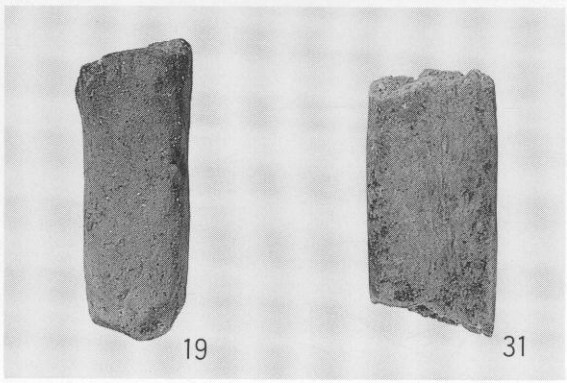


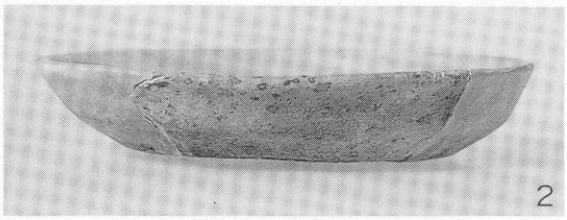


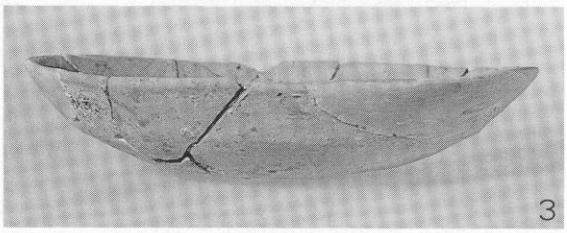


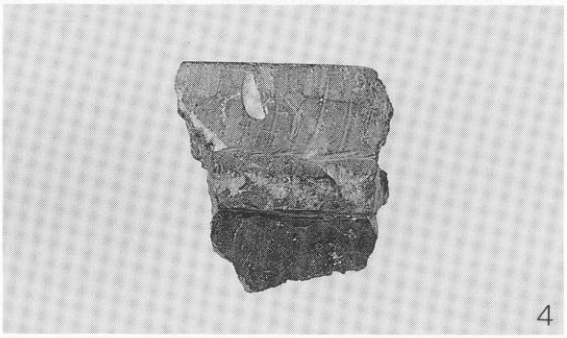


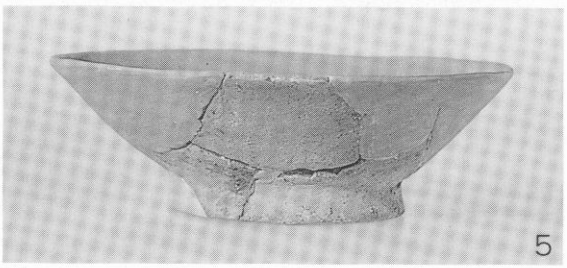




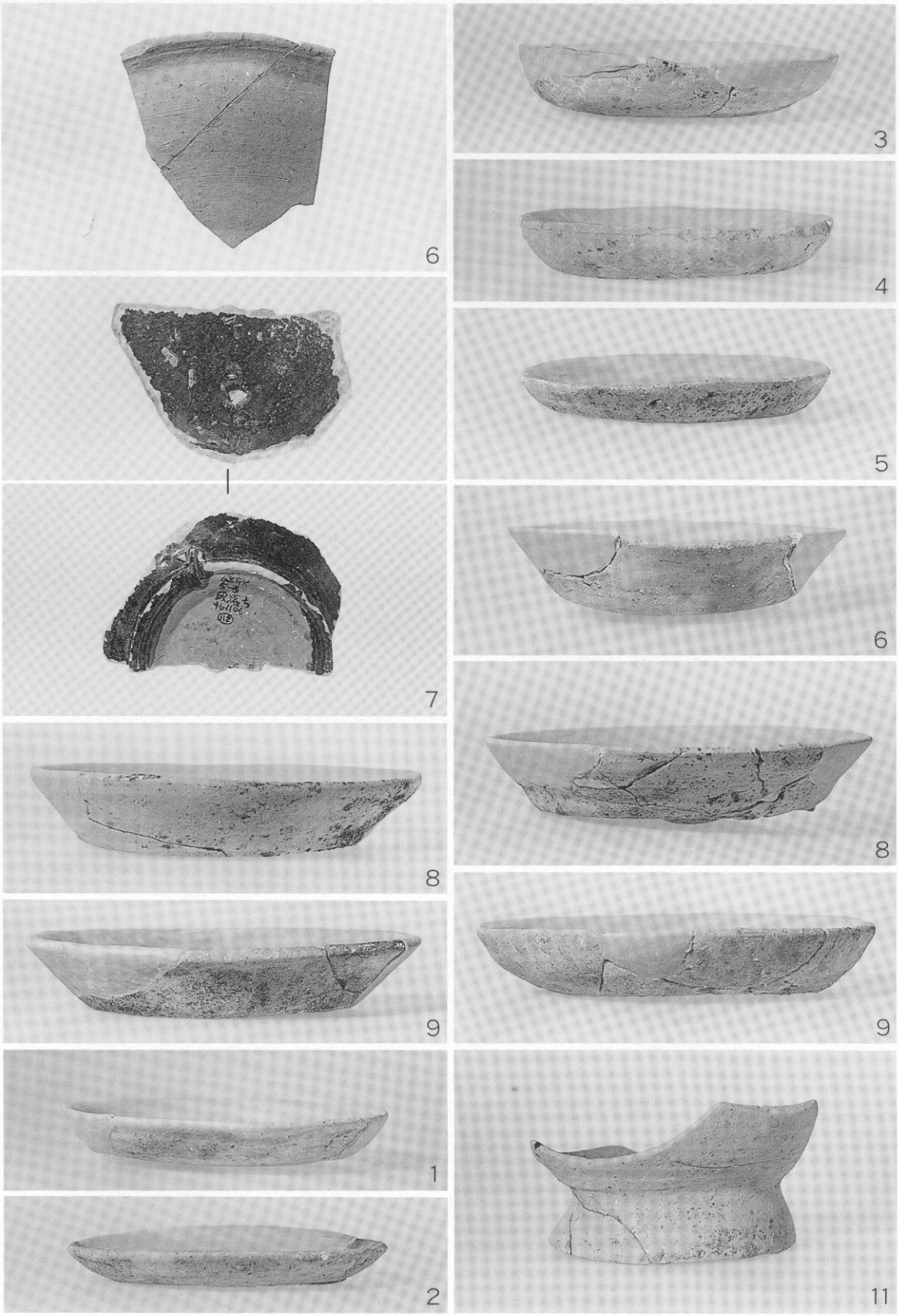




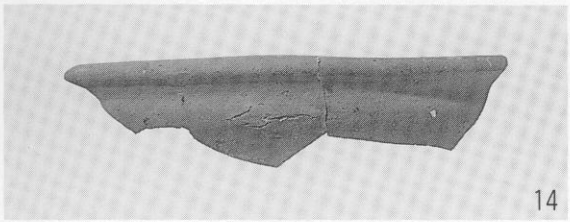


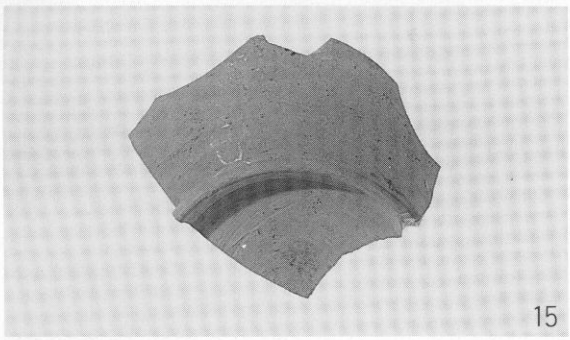


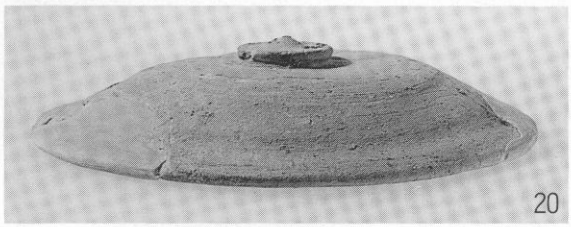
第176次調査　SK4364・4370、SX4363・4367、包含層出土土器・陶磁器・土製品・石製品

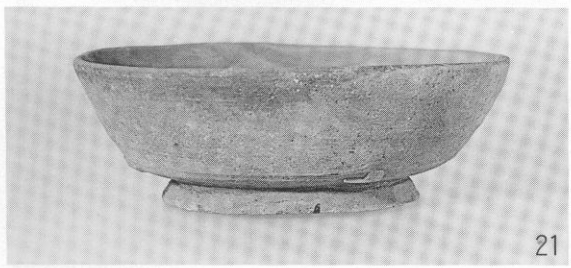


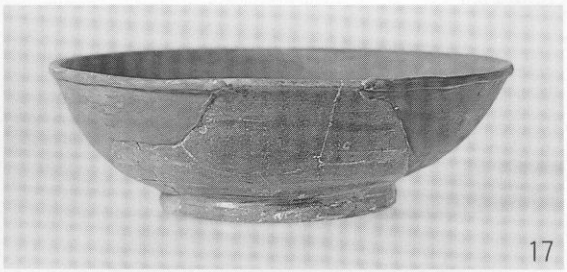
第176次調査　SX4363・4367・4373、包含層出土土器・陶磁器

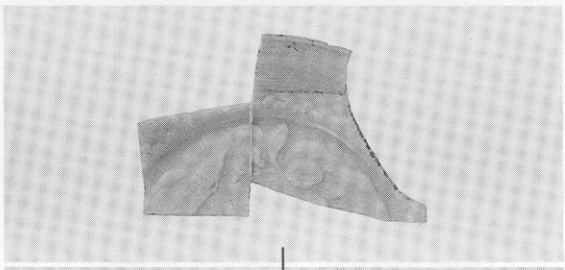


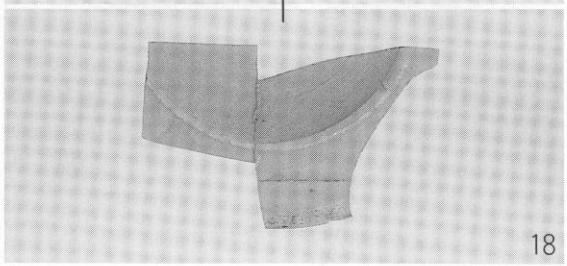


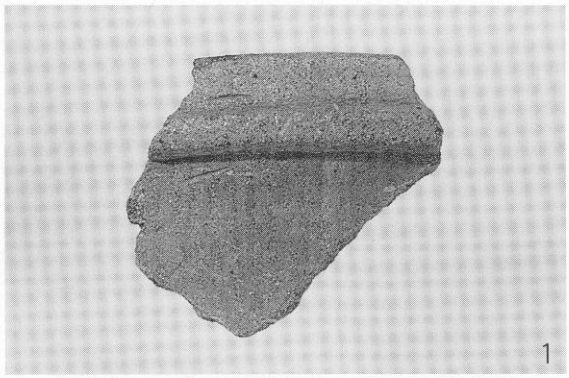


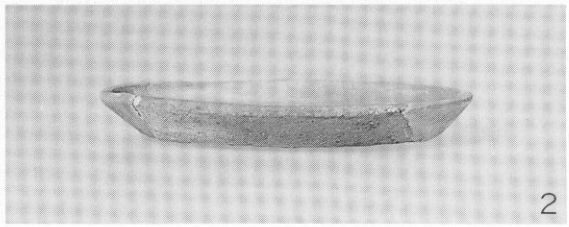


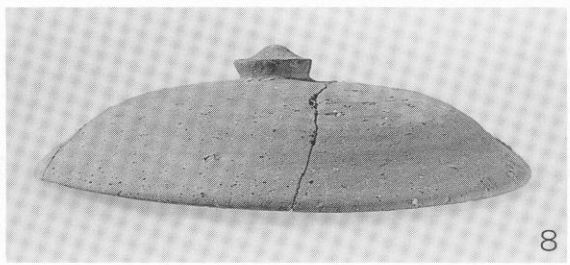




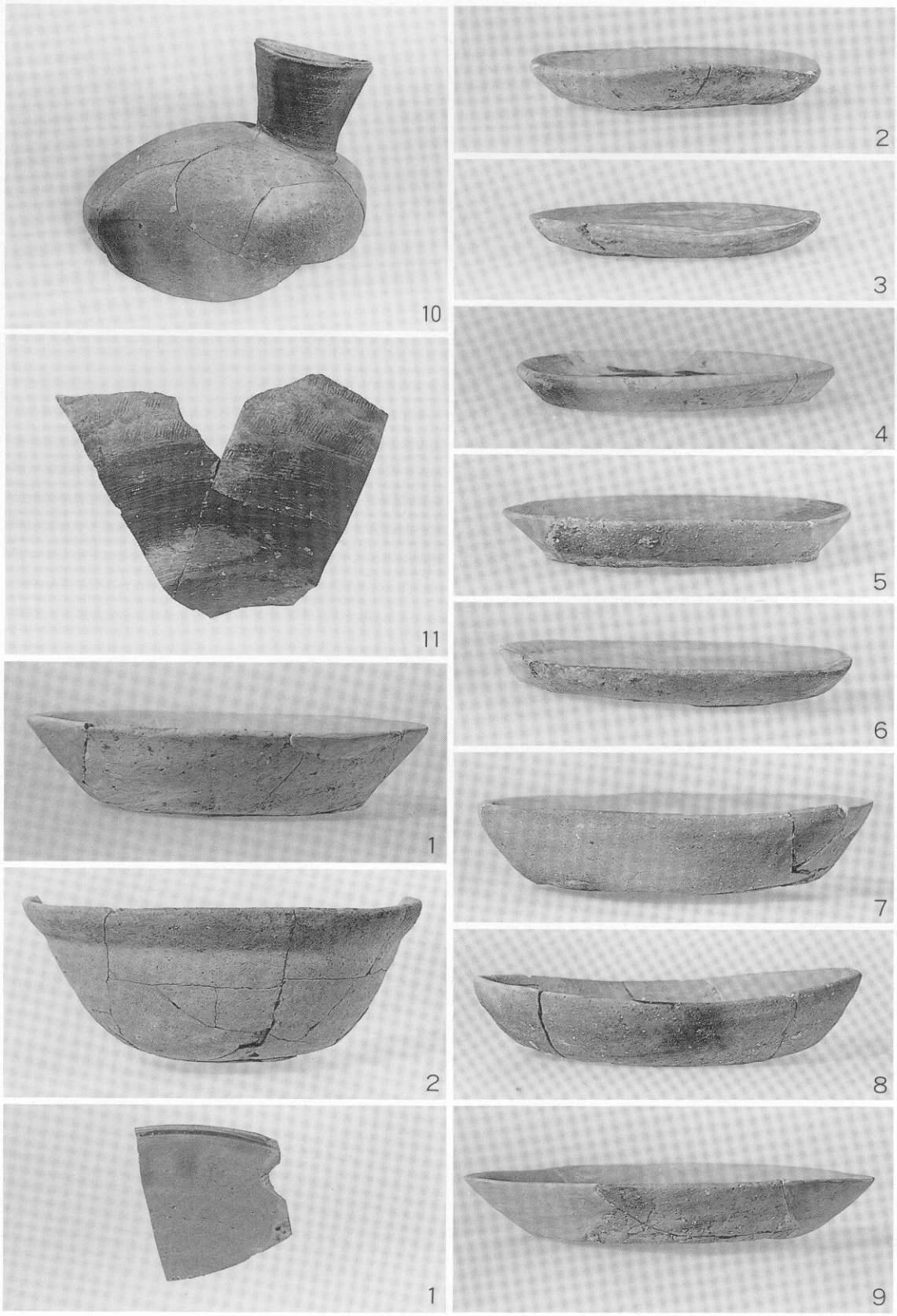




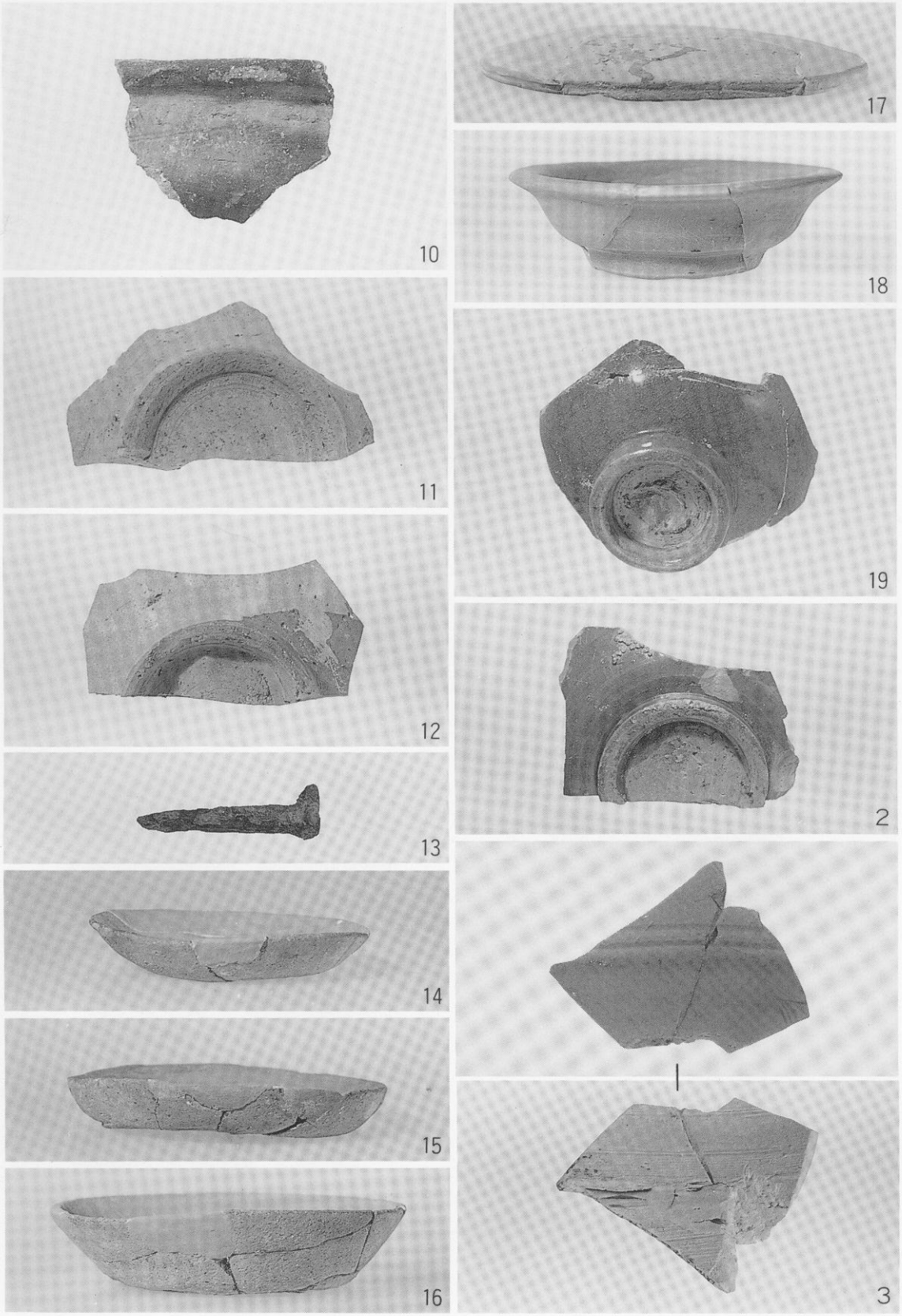




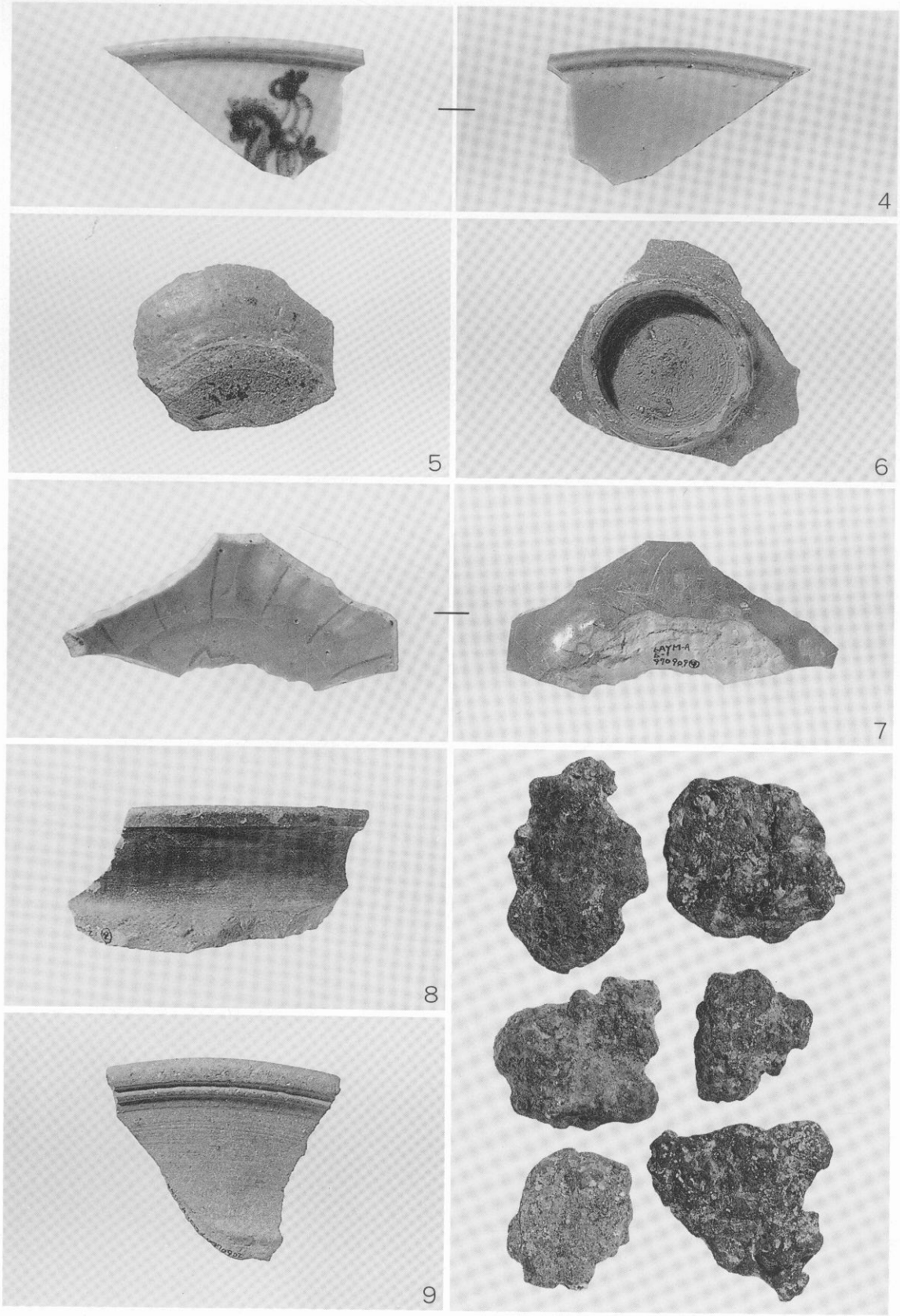
第176次調査　包含層、茶褐色包含層、SD4360、SK4358出土土器・陶磁器・石製品



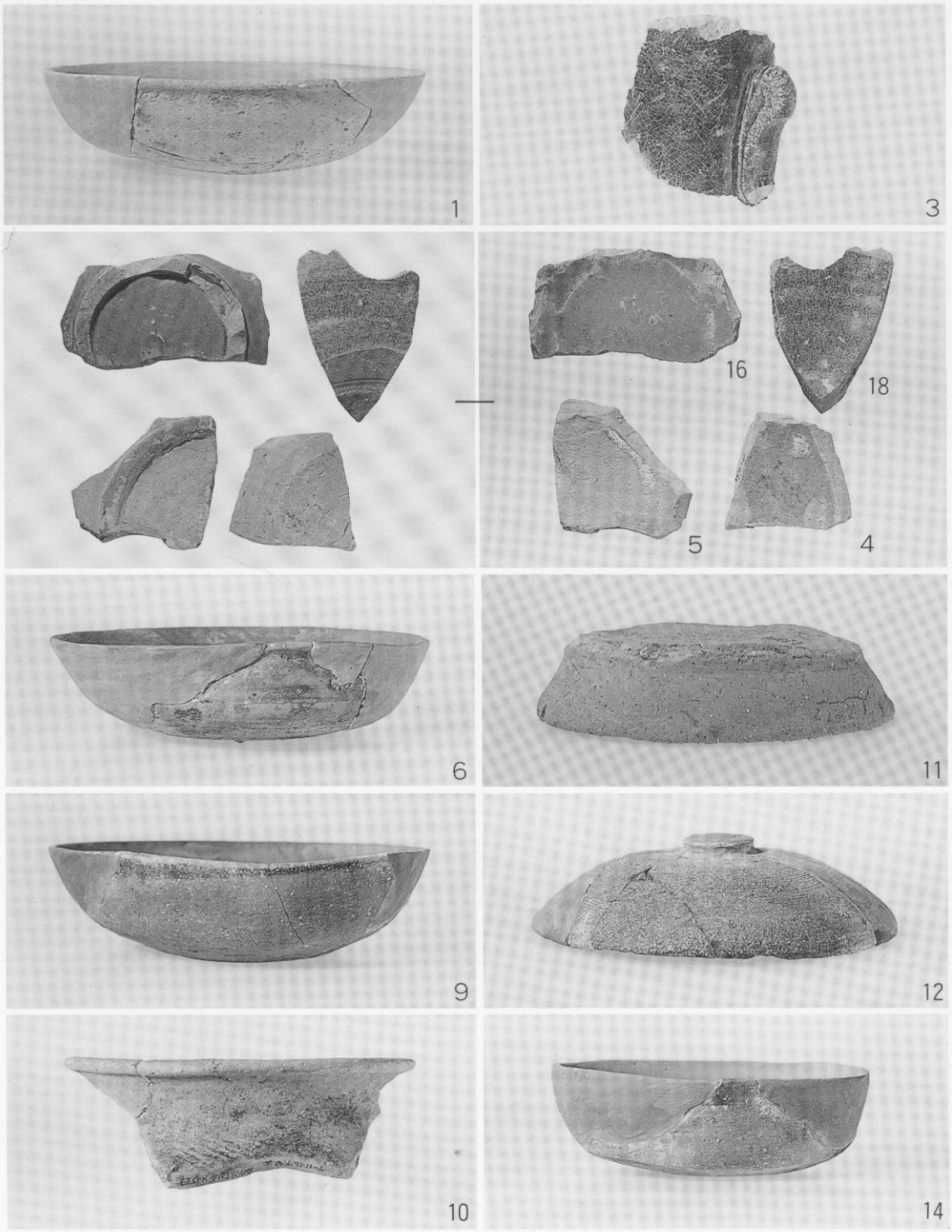
第176次調査　SK4358、表土層、SD4350、SK4355出土土器・陶磁器



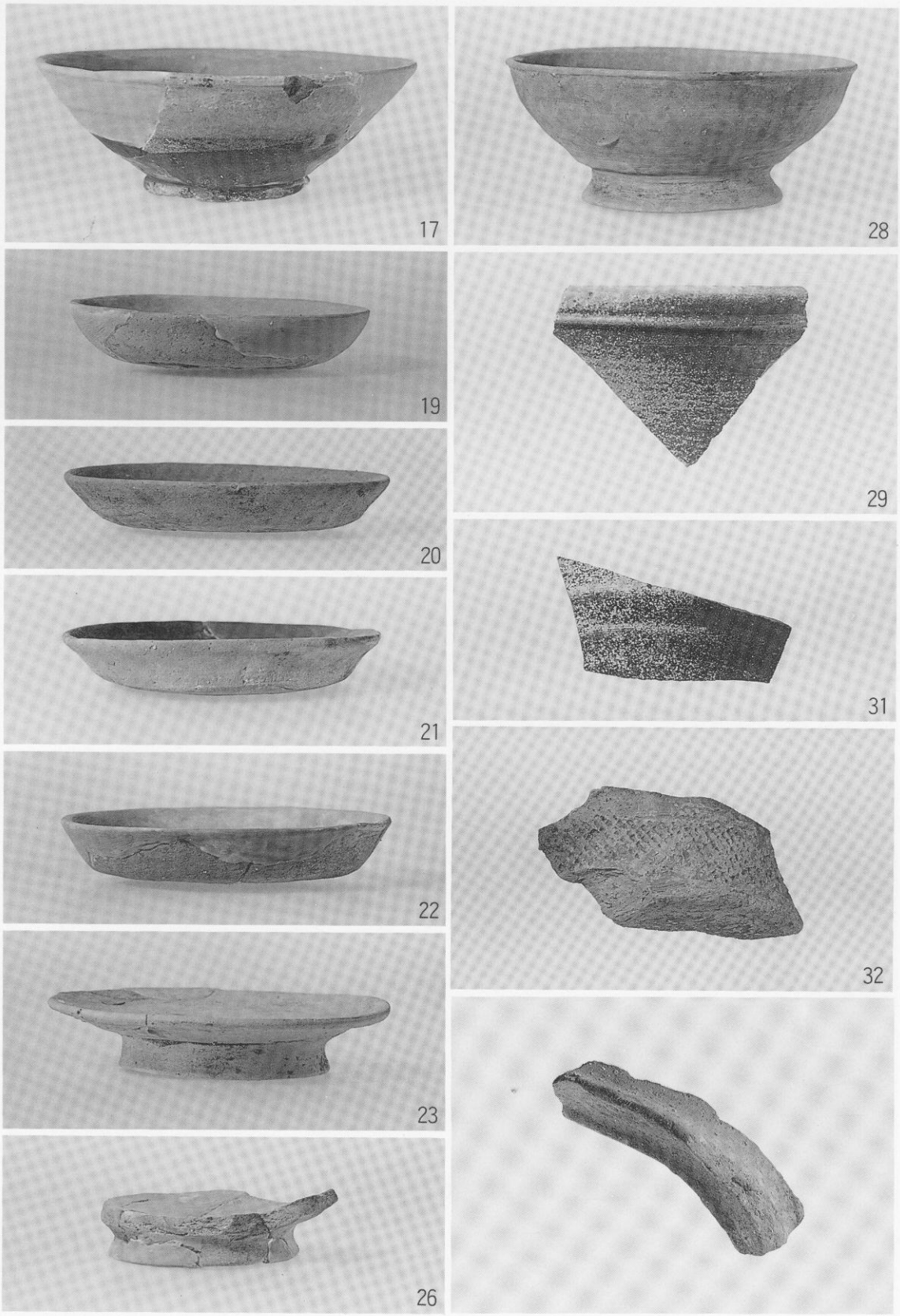
第176次調査　SK4351・4355、SX4354出土土器・陶磁器・鉄製品、第177次調査　SD3930出土陶磁器



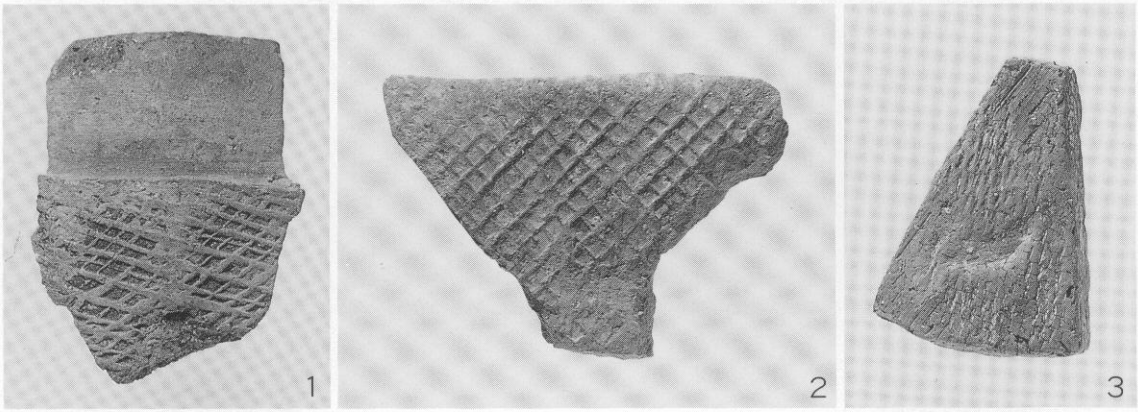
第177次調査　SD3930、SK4386出土土器・鉄鏃



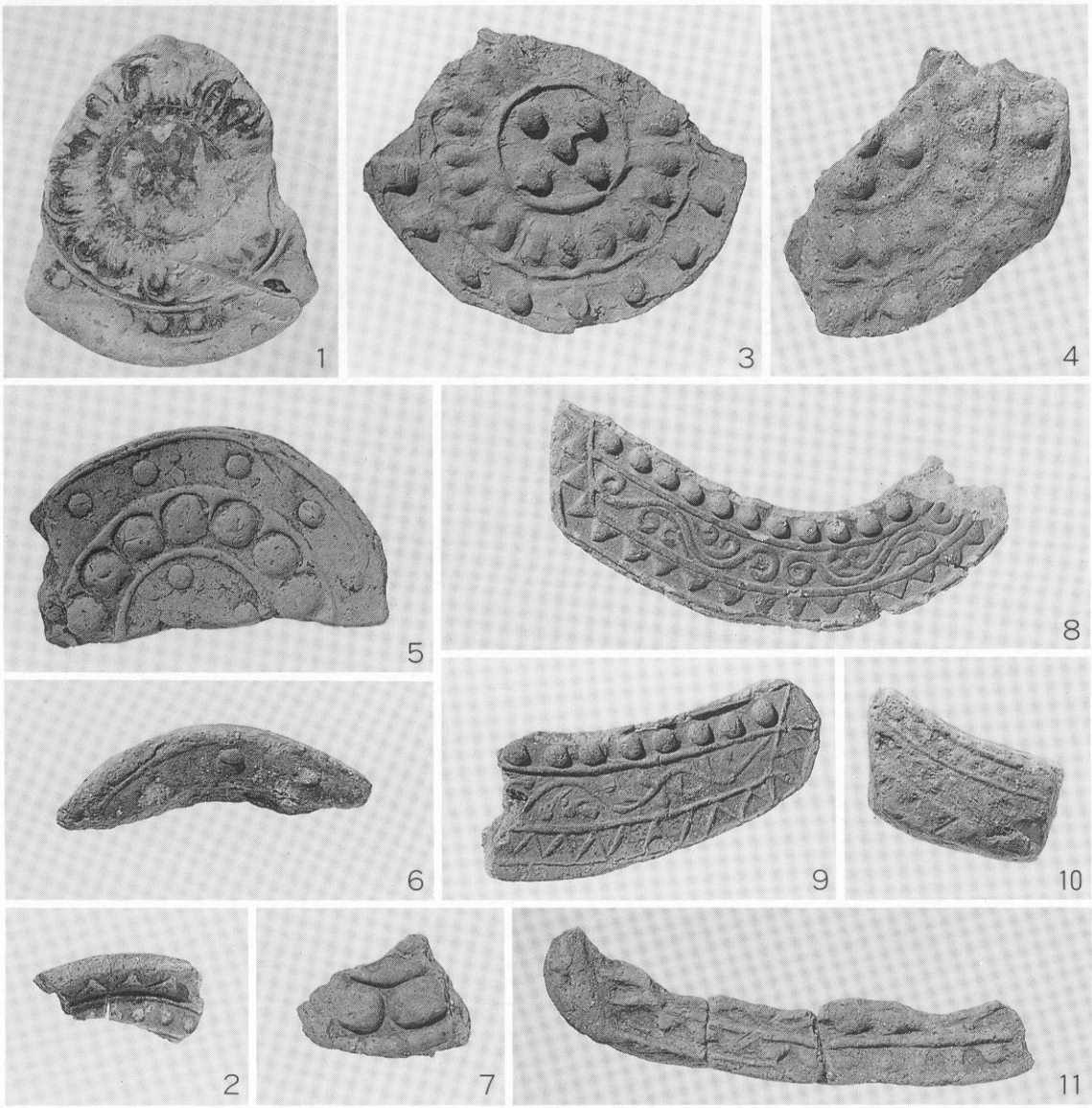
第178次調査　C調査区、D調査区茶色土層、茶灰色土層出土土器・陶磁器



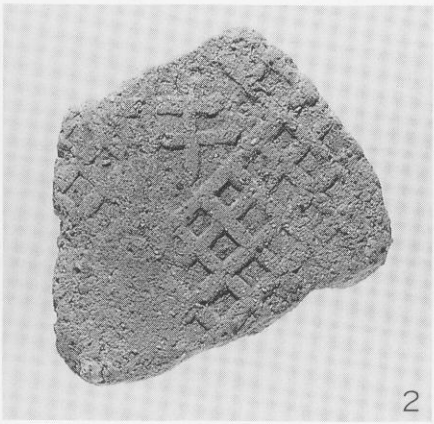
第178次調査　D調査区SK4399、SE4400出土土器・陶磁器・竈

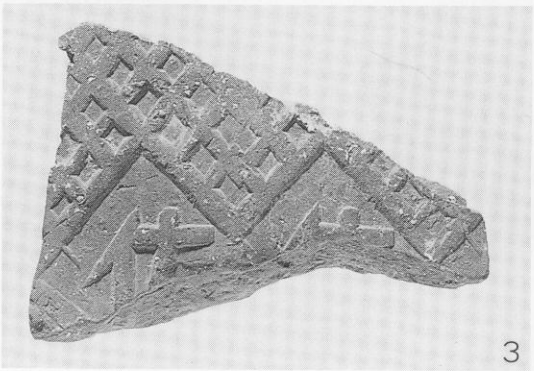


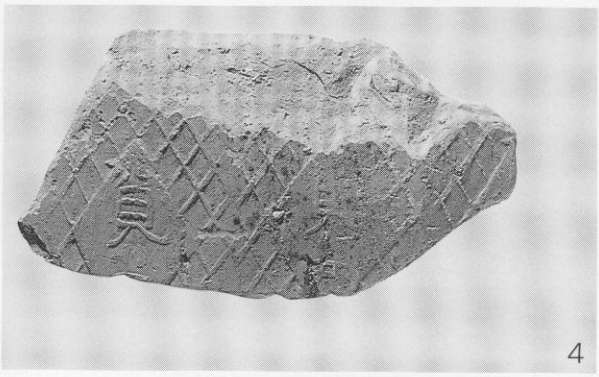
住ヶ元地区　出土丸・平瓦



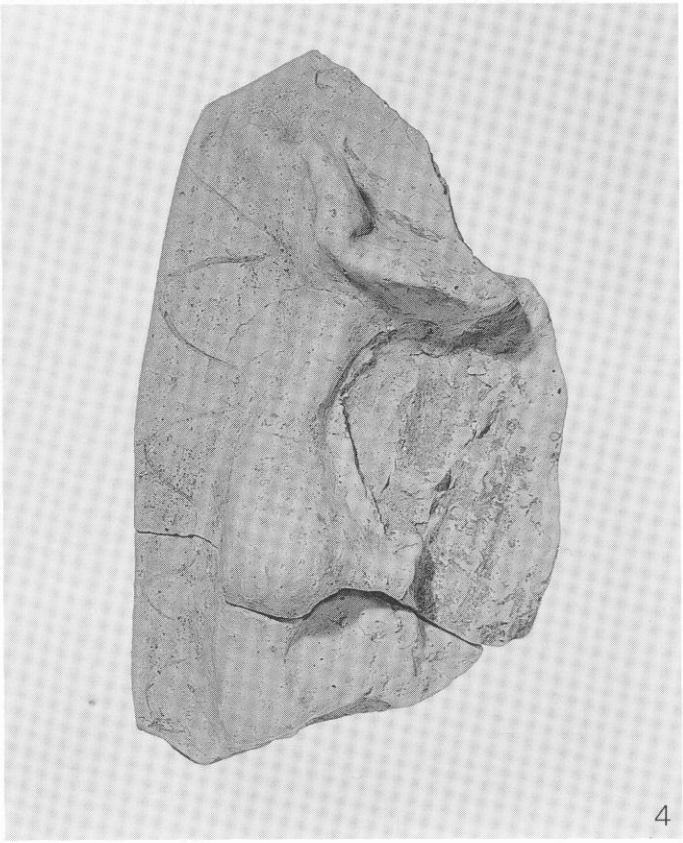
第169-2次調査　出土軒瓦

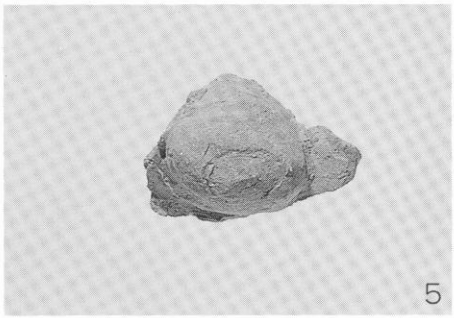




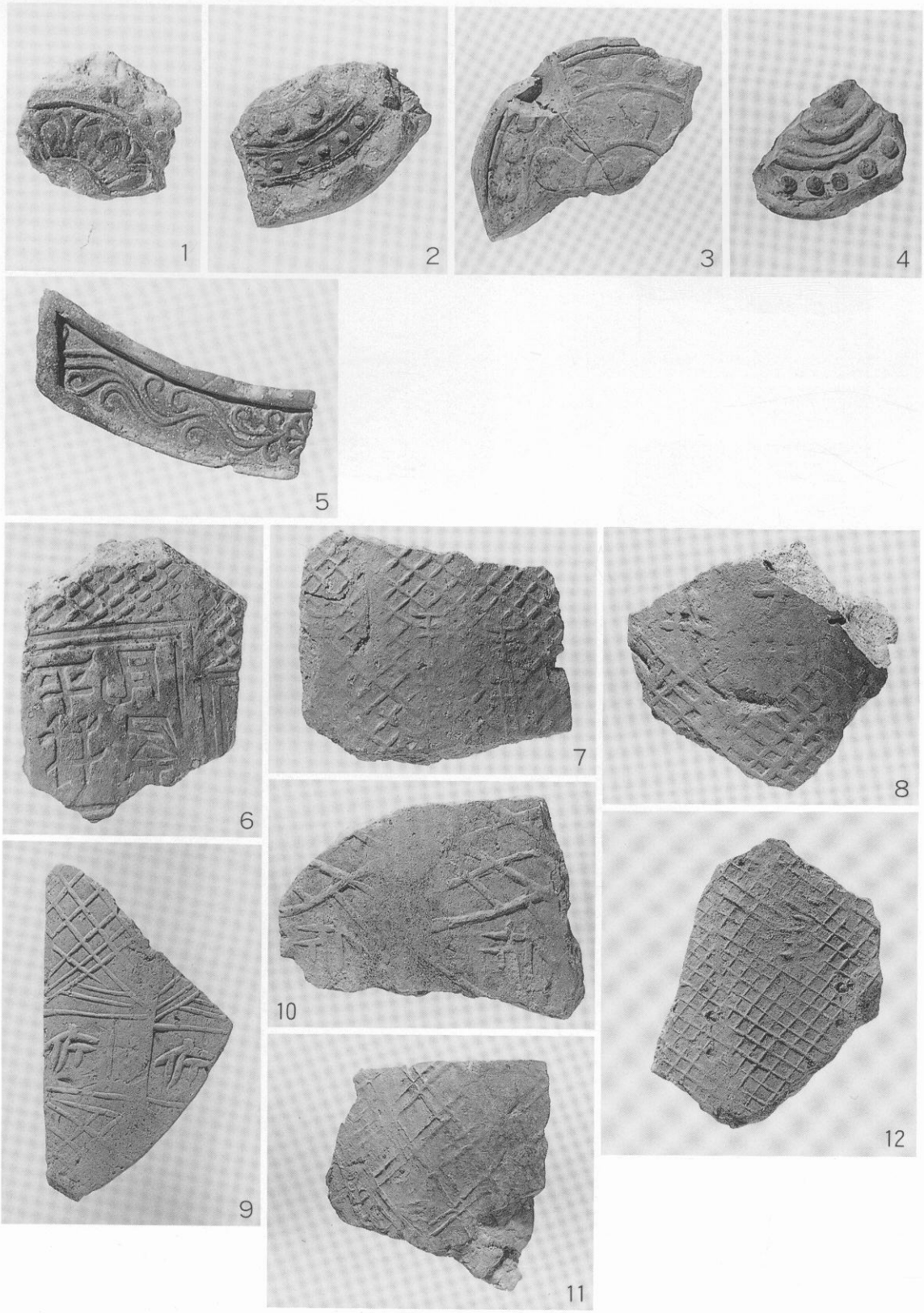


第169-2次調査　出土文字瓦

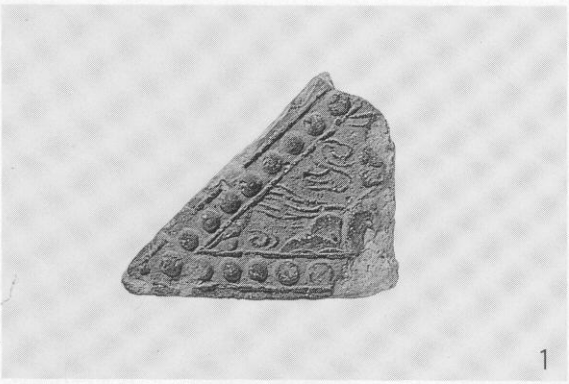


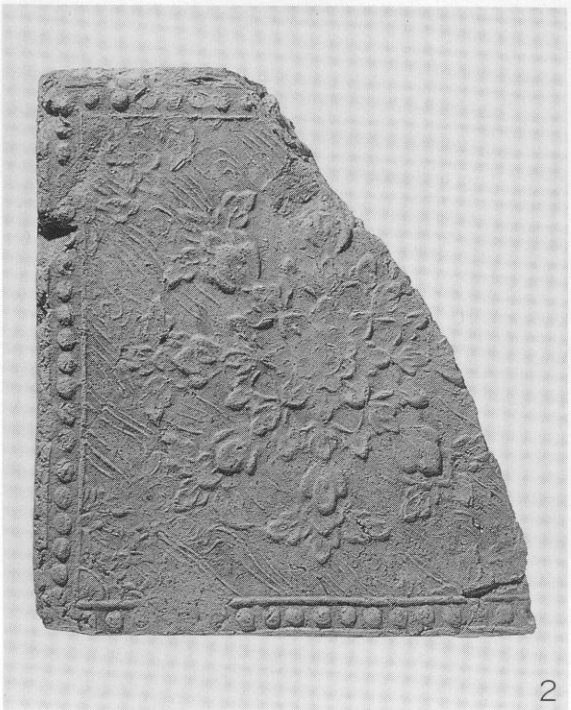


第169-2次調査　出土鬼瓦

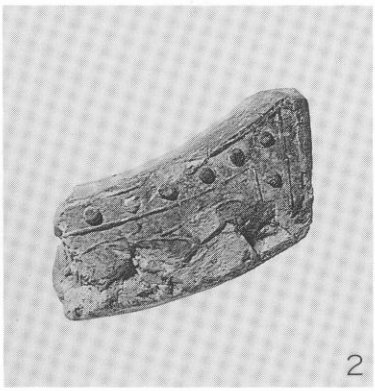


第176次調査　出土瓦

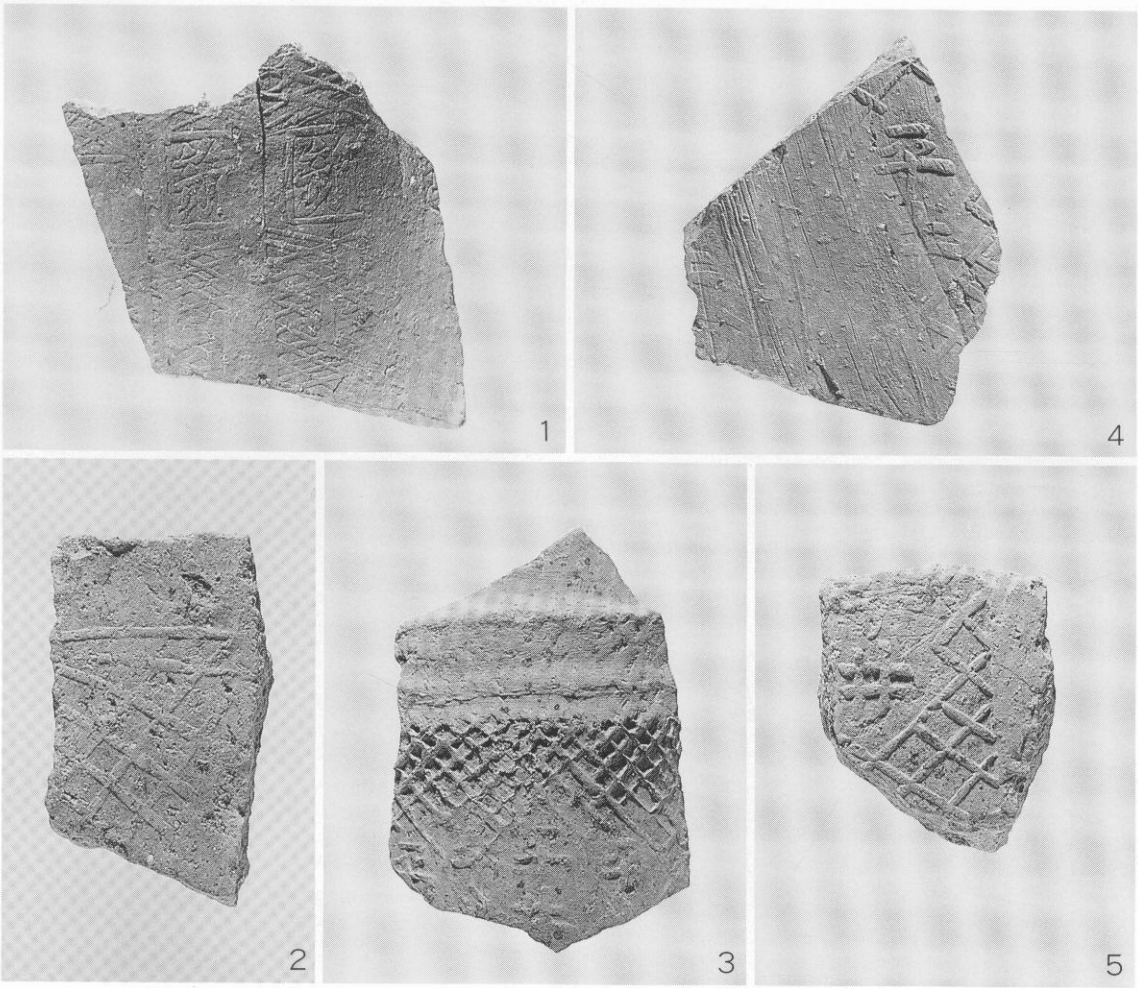




第176次調査　出土文様塼



第177次調査　出土軒瓦



第178次調査　出土文字瓦

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせき
書名	大宰府史跡
副書名	平成9年度　発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	栗原和彦、横田賢次郎、赤司善彦、齋部麻矢、杉原敏之
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第169-2次調査	太宰府市観世音寺431-1・2他	40221		33°30′42″	130°30′45″	970320～971219	600m²	住宅建設
大宰府史跡 第176次調査	太宰府市観世音寺6丁目896・132他	40221		33°30′40″	130°31′14″	960924～961202	260m²	下水道工事
大宰府史跡 第177次調査	太宰府市観世音寺2丁目11番	40221		33°30′32″	130°31′00″	970825～970927	160m²	住宅建設
大宰府史跡 第178次調査	太宰府市観世音寺4丁目1100・1158他	40221		33°30′30″	130°31′09″	970902～971114	260m²	下水道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡 第169-2次調査	生産	弥生時代～平安時代	掘立柱建物　1棟 竪穴住居　1軒 土壙　1基	須恵器・土師器・陶磁器・瓦・鞴羽口・鋳型等	鋳造・瓦窯関連遺跡
大宰府史跡 第176次調査	官衙	奈良時代～平安時代	掘立柱建物　2棟	須恵器、土師器、陶磁器、文様塼	学校院関連遺跡
大宰府史跡 第177次調査	官衙	室町時代	溝　1条 粘土採取遺構 土壙　5基	須恵器・陶磁器・瓦・鉄器	政庁前面広場
大宰府史跡 第178次調査	官衙	奈良時代～平安時代	掘立柱建物　2棟 井戸　1基	須恵器、土師器、陶磁器、瓦	月山地区官衙関連遺構

大　宰　府　史　跡
平成９年度発掘調査概報
平成10年３月発行

編　集　九　州　歴　史　資　料　館
太宰府市石坂４丁目７番１号

発　行　(財) 西　日　本　文　化　協　会
福岡市中央区渡辺通２丁目１－82
電気ビル第一別館
電話 (092) 713－6451

印　刷　赤　坂　印　刷　株　式　会　社
福岡市中央区大手門１丁目８－34